
英雄都市のバカども
～王女と封鎖された英雄都市～
アサウラ
ILL. だぶ竜
ファンタジア文庫

## アサウラ
●アサウラ

どうも、アサウラと申します。大型犬が好きなセガ派です。
本作は面倒な設定や専門用語を多用しない、オーソドックスなファンタジーを意識して作っていたりします。そう、あえて今…この時代に！
ですので、ごゆるりと気を抜いてお読みいただければ幸いです。
皆様、どうぞ、よろしくお願いいたします。



イラスト：だぶ竜
カバーデザイン：ムシカゴグラフィクス


「ひょっとして、この街は初めてかな？
……だと思った。君の顔に書いてある。
良かったら私が軽く案内でもしよう。
ようこそ、リキュールへ」
英雄都市のバカども
～王女と封鎖された英雄都市～


「あら、デートですか。いいですね。良かったらウチのお花も覗いていかれます？」
オリービー
小さな花屋の若き店長。優しげな笑みにファンが多い。とても巨乳
「リキュールが初めて？なら、ゆっくり見て行ってくれ。隅から隅まで治安は最高だぜ」
ライ
若き自警団団長。年下ながらモルトの兄弟子でもある。シスコン
クラッツ
大衆酒場『安美亭』の看板娘
グレーン
『安美亭』店主にして、クラッツの叔父
「いらっしゃい！食事？お酒？あっ、わかった。両方ね！」
「自信作が焼き上がったトコだ。一つ喰うか？……スゲェぜ？」
ピンガ
豪腕のパン職人
「さて。あとは……ん？」
サシャ
整った顔立ちの何でも屋


「家賃滞納しまくってる分際で寝腐ってるなぁ!!」
リッツ
下宿屋の娘。色々と成長中
「ちょっ待っ……うおあああ!?」
モルト
本作の主人公。万年貧乏の何でも屋
「……気にしないでくれ。いつものことなんだ」

# 英雄都市のバカども

～王女と封鎖された英雄都市～

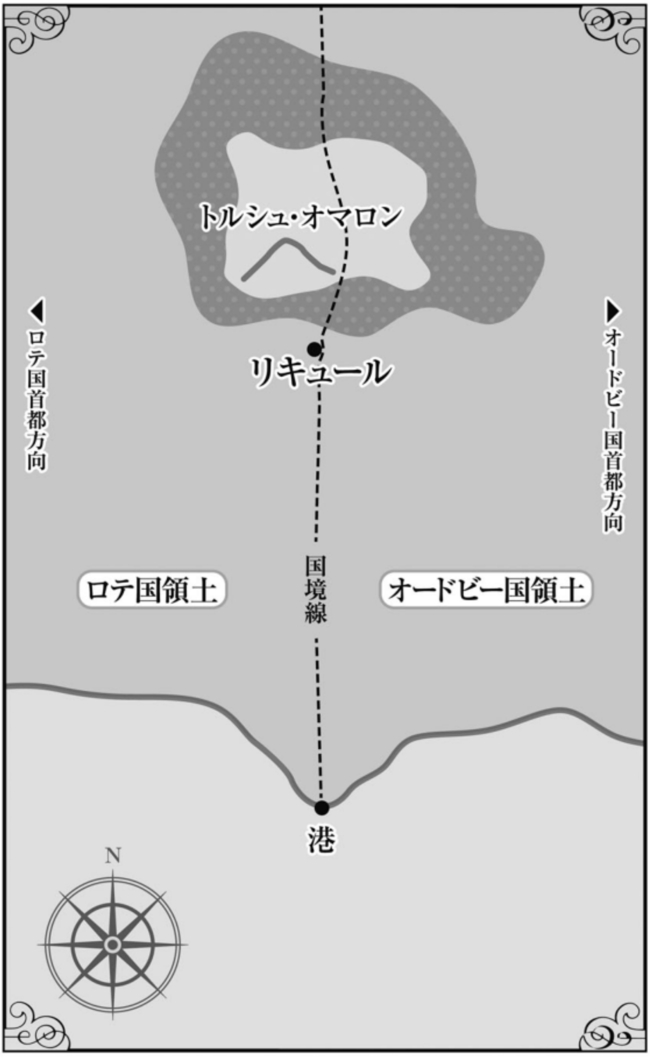
アサウラ

富士見ファンタジア文庫

口絵・本文イラスト　だぶ竜

# 目次

リキュール周辺地図



# 地名解説

## リキュール

古代の少数民族の遺跡を利用して作られた英雄都市と謳われる街。オードビー国との大戦時にロテ国の防衛拠点となり、周辺一帯が不毛の荒野に成り果ててもなお、終戦に至るまで陥落しなかった。当時の英傑達の子孫が今もなお住み続けており、二国の首都間流通の要となっている。また、『アルコ・ホール』と呼ばれる街の大通りは常に大賑わい。

## ロテ国

豊富な資源を有する広大な王国。

## オードビー国

錬金術士達が作り上げた国だという伝説を持ち、かつては魔力の研究に勤しんでいたが、現在はそれらから手を引き、様々な物品の開発・改良に力を入れる技術国である。

## トルシュ・オマロン

広大な森を引き連れた独立峰。かつては『トルシュ・オマロン火山』と呼ばれていたが、ここ数百年は噴火しておらず、火山の名は忘れ去られつつある。山や森には大量の魔獣が跋扈しているため、一般人はまず足を踏み入れない。森は年々拡がりつつある。

## 港

元々は嵐等を避けるための自然発生した船舶の避難場所であったが、漂流者などが流れ着いて住み始めたことから、現在は小さな名もなき港となっている。

●プロローグ『リキュールの日常』

　―寄っていって見ていって!!　当店こそ世界に名だたる街リキュール一番の刃物屋！　一番の売れ筋は皆みなさんご存じ、最強の無む駄だ毛げ用カミソリでさぁ!!　どんな聖せい剣けんをも上回るその無双の切れ味に、ママや娘むすめ、そして婆ばあちゃんまでが感極きわまるのは確実だ!!

　―誘ゆう惑わくダンスで彼氏を落とせ、旦だん那なを落とせ！　ついでに浮うわ気き相手も手に入れちゃいな！　さぁさぁ、ダイエットにも効果的な今期のダンススクールは本日夜から講習だよ！

　―北に聳そびえる魔ま獣じゅうの山、トルシュ・オマロンにだけ造られる巨きょ大だい蜂ばちの巣！　そこから魔獣猟師ハンターが激げき烈れつな腰よう痛つうを耐たえ凌しのいで採取した、貴重な蜂はち蜜みつで造られたのがこの蜂蜜酒ミード、飲めるのはウチだけ！　さあ一いつ杯ぱいいかが!?

　―お宅の魔光球、調子はどうですかぃ!?　そろそろ買い換かえ時じゃござぃやせんか!?　いやいや壊こわれてなくとも魔力の充じゅう塡てん、ちゃんとしてます？　このリキュールの魔導士ギルドは知っての通りのなまくらだ！　燃料なけりゃ魔光球は単なるガラス玉！　いつになるかわかりゃしない魔力充塡の順番待ちはやめて、いっそ買い換えちゃどうですかぃ!?　うちの魔光球は魔力充塡済みは当たり前、高品質でお馴な染じみの亡国、グリコゥ国製のもお値打ち価格でご提供!!　ついでにグリコゥ国産のパチ物はさらなるお値打ち価格でご提供!!

　長く続いていた嵐あらしが止やんだのは、五日目の昼だった。

雨後の森に一いつ斉せいに芽め吹ぶく草木のように、大通りには鳴りを潜ひそめていた露ろ店てんが次々に建ち並び、店では店員が表に立って負けじと声を張り上げる。そしてまた、嵐で足止めを喰くらっていた旅人達も宿を出て、明日あしたの出しゅつ立たつのための支し度たくを整えるために街を行く。

普ふ段だんであれば大通りがここまで活気に溢あふれるのは、早朝と夕飯時と決まっているのだが、さすがに今日だけは特別だ。

モルトは己おのれの身長と同じ、一八〇センチにも及およぶ長大な得え物ものを肩かたに担かつぎ、ヨレヨレのネクタイと着古した革コートを揺ゆらしながら、行き交かう人々の中をゆっくりと歩み行く。

石いし畳だたみの道と靴くつ底ぞこが奏でる雑ざつ踏とうのリズムに、商人達のかけ声と人々の話し声、笑い声が幾いく重えにも重なり合って耳を埋うめ、炭火で焼かれる肉や湯気立つスープ、そして煙草たばこに酒に香こう水すい……そんな人々と、営いとなみの匂においが鼻を占しめ、老ろう若にゃく男なん女にょの喜き怒ど哀あい楽らくの様々な表情が視界を彩いろどり、賑にぎやかさを作っている。

こういう空気の中を歩くのは、モルトは殊ことの外ほか好きだった。

歩いているだけで自分もまたこの街の、そして人々が作り出す日常という名のパズル、そのワンピースであることを感じられる……それが嬉うれしいのだ。滲にじむように笑えみが浮うかぶ。

少し早いが酒でも飲みたいところ。だが、いかんせん懐ふところは砂さ漠ばくのように潤うるおいがなかった。

だからモルトは街をブラついているのだ。どこかに儲もうけ話が転がっているかもしれない。

活気づいているその場所、その時間……モルトにとっておいしい話は必ず生まれ落ちる。

人々が集まれば必ず起こるもの──それは、トラブル。

そして、それこそが『何でも屋』であるモルトの稼かせぎの種なのだ。

　街の中央にある巨大掲けい示じ板ばんに行けばあらゆる情報──尋たずね人びと、探し物、その他諸もろ々もろが張り出されているのだが、これだけ街が活気づいていればそこに行くまでもないだろう。

　耳を澄すませば……ほら、聞こえてくる。トラブルの報しらせが──。

　爆ばく音おんにも似た音と衝しよう撃げきが大通りに響ひびき渡わたると共に、レンガ造りの家の壁かべが弾はじけ飛んだ。

「そら来た、トラブルだ！」

　モルトが人ひと混ごみをかき分け、現場に行ってみれば……全身を厚い甲冑プレートアーマーで覆おおって、なお、痩やせているとわかる男が路上に倒たおれていた。

　手にしていた剣ロングソードを杖つえとして、男が震ふるえながら立ち上がると、兜かぶとを投げ捨て、叫さけぶ。

「今日という今日は容よう赦しやしねぇぞ！　何が鋼はがねのボディだ、そんなもん本物の鋼に比べりゃ所しよ詮せんただのタンパク質だ、肉なんだよ、肉!!　価値なんざねぇんだよ!!」

　声に応じるように、壁を失った家から二メートルを優に越こえる巨大な筋肉の塊かたまりが現れた。

「クククッ……じゃ試ためしてご覧よ。この魅み惑わくのボディを傷つけられるってんならね!!」

　脂し肪ぼうという脂肪を全すべて筋肉と交こう換かんしたそのボディは男のようでもあったが、股こ間かんと胸を隠かくすビキニからするに女性だと知れた。実際、悪あく魔まのような笑みを浮かべつつも、彼女の頭からは乙女おとめの心を失わぬ三つ編みが二本揺れている。

　とはいえ、彼女の体が放つ覇は気きは、今し方野次馬ギヤラリーとして駆かけつけただけのモルトにさえ、畏い怖ふの念を抱いだかせる力強さだった。

「やってやる!!」

　叫ぶ痩せ男が剣を振ふりかぶってマッチョ女へと向かっていく。しかし剣は肉を断たつことなくつかまれ、驚きよう愕がくする痩せ男の腹には女の蹴けりが入った。

　流れるような動作から繰くり出された一いち撃げきは、痩せ男の甲冑を容易たやすく凹へつこませ、彼の体を吹ふっ飛とばす。通りを行き交う大勢の人々が巻き添ぞえの悲鳴を上げた。



―何だ何だ、いったい何が始まったんだ？　―ほら、アレだよ、そろそろストリップの一座が来るじゃねぇか。―あぁ、『大人のサーカス』な。―あれのためにって裁さい縫ほう屋の親父おやじ、コツコツへそくり貯ためてたのを奥さんが見つけて全額プロテインに使っちまったんだと。そんでブチ切れて今日という今日は容赦しねぇ、男の威い厳げんってもんを見せてやるってんで、ローン組んで甲冑と剣を……。―あぁ、いつものやつか。しかし、武具を調ととのえた辺り今回は本気だな。―あぁ、どうせ無駄なのにな。

そんな会話が聞こえる中、巻き添えでぶっ飛ばされていた連中でさえ、夫ふう婦ふ喧げん嘩かというにはあまりに派手で、あまりに激しいそれに声せい援えんを送り始める。嫁よめの大胸筋によって斬きり込んだ剣の方が逆にへし折られた瞬しゅん間かんなど、大気が震えるほどの大だい歓かん声せいだった。

みんな祭りが、そして騒そう動どうが好きだ。

多少の巻き添えダメージは興奮バトルのお裾すそ分わけとして気にもしない。

そんな連中が群れている……それがこの、リキュールという街だった。

「軽いねぇ、軽い男だよ、アンタはさ。アタシというものがありながら……トドメだ!!」

甲冑が鉄てつ屑くずに成り果てた頃ころ、痩せた男は強きよう烈れつなアッパーで空へと舞まい上がっていった。

見上げる碧あおい空に浮かぶ太陽、そして男の涙なみだの煌きらめきが眩まぶしくて、モルトは目を細める。

「……今日も平和だ……」

●

荒こう野やを行く二頭立ての乗り合い馬車は、この数日もの間、

何も変わらず揺れ続けていた。

「お客さん方、辛つらいだろうが今夜は夜通しで行くぜ。嵐で遅おくれた分を取り戻もどして、明日の朝には予定通りにリキュールだ。辺境だが、三〇〇〇の人が住み、一〇〇〇の旅人を抱かかえる街には、古代遺い跡せきを利用した上下水道完備の宿もあるし、温泉もある。ガッツリ疲つかれを癒いやせる宿しゆく場ば街まちだ。ロテ国に行くにせよ、オードビー国に行くにせよ、もうひと辛しん抱ぼう頼むぜ」

　そんな御ぎよ者しやの声を聞いて、エンガディナは席を立ち、幌ほろの隙すき間まから外を見やった。

　辺りは昔の大戦争で、不毛の荒野となった広大な土地。だが、エンガディナの視界の先にある山は生き生きとした緑に覆われ、麓ふもとにも広い森を引き連れている。

　あそこに街リキユールがある。そこを経由すればロテ国の首都まですぐ……。

　追っ手の気配はない。

　ここよりはるか南の港に流れ着いてからすぐにこの馬車へ乗り込んだのだ。かなり先行しているはず。逃にげ切れるはず……。

　エンガディナは再び座席に戻り、他の乗客達がそうしているように、そしてこれまでの数日間ずっとそうしていたように、瞼まぶたを閉じて眠ねむりに身を任せた。

　ガタガタ揺れるだけの馬車にはもうとうに飽あきていた。けれど、嵐の夜、荒あれた海へと小こ舟ぶねで脱だつ出しゆつした疲ひ労ろうは今でも色いろ濃こく、エンガディナをたやすく眠りへと導いてくれる。

　まるで全てから逃げるかのように。流されるように。

　……いつだってそうだった。これからもそうなのか。

　誰だれかに、何かに、流されて……。

　瞼を閉じていたエンガディナは無意識に胸むな元もとのリングに触ふれた。

チェーンを通して首から提げ、服の下に隠かくしたそれは、外からは誰にもわからないだろう。

酷ひどく疲れていた。母の死の報せを聞いてから、ずっと……。

いや……もしかしたら生まれた時からかも知れない。

この双そう肩けんにかかる重荷の全てを捨てて、当たり前の町娘として生きたいと願うのは贅ぜい沢たくなのか。

冷水に手を浸ひたして働き、当たり前に恋こいをし、好すいた男の妻となって、小さな家で暮らしていく……そんな……。

しかしそれは叶かなわぬ夢。誰もそうしていいなんて言ってはくれない。

もう、どうでもいい。けれど、嫌いやなことだけはいっぱいある。

今、自分は生きているだけ。死にたくないから、ただ、生きている。

生きるというのも、きっと生物の本能に従い、流されているだけなのだろう。

自分はずっと、そうだった。

今までも、そしてきっとこれからも。

「そういや、お客さん方の中でリキュールが初めてって人もいるだろうから、ここいらでお得な情報を一つ。景気のいい街だし、飯はうまいし、物はたくさんあって治安もいい街なんだが……一つだけ注意しなきゃならねぇことがある。それは──」

御者の声を聞きながら、諦あきらめにも似た想おもいと共に、エンガディナは眠りに落ちていった。

## ●１章『何でも屋の仕事』

「大だい丈じよう夫ぶ、怖こわがらなくていい。……全部、俺に任せてくれればいいんだ」

　モルトは不安げな顔をしていた美女の頬ほおを撫なでる。

　照れているのか、やんわりと抵てい抗こうする彼女の腕うでを巧たくみにいなして、ベッドの中へと誘さそい込んだ。

　こうなってしまえばこっちのものだ。仰あお向むけになったモルトは美女を己おのれの体の上に寝かせるようにし、安心させるように優しく抱だき締しめ、それからその体を撫でた。

　触れるか触れないか、まるで研ぎ上がったばかりの刀とう剣けんの刃はに触れてその鋭するどさを確かめるように、そっと慎しん重ちように、優やさしく、遺い漏ろうなく……。

　感かん触しよくにあえぐ彼女の頬を今一度撫でるように手を滑すべらせ、そのまま彼女の白いワンピースの肩かた紐ひもをスルリと外し、ストンとその細い腰こしにまで落とした。

　彼女は顔を赤らめ、喘あえぎながらも俯うつむくように、そして己を抱き締めるようにして胸元を押さえてしまい、そのたわわな実りを露あらわにしない。

「や、やだ……ちょっと、ダメ……！」

　モルトは微笑ほほえみながらも彼女の胸を隠す腕をつかみ、開く。

　そうすれば、目前にたわわに実った素す晴ばらしきものが…………………………なかった。

　──これは、どういうことだ……？

　モルトは己の目を凝こらした。あるべきはずのたわわな実り……

即すなわち、おっぱいが、ない。

　いや、それらしきものはないわけではないが、隠そうとする腕の隙間から見える美女のものは貧ひん弱じやくで、手の平にすっぽりと収まりきってしまうような小ぶりな……あまりにも未熟な青過ぎる果実。揉もむに足りず、触さわるに心こころ許もとない、そんな──やられた!!

「た、大変だ、盗とう難なん事件だ！　大切なおっぱいが盗ぬすまれ──おっぱい泥どろ棒ぼうだ!!」

「寝ぼけんなぁ!!」

　驚愕に見開いたモルトの目に、美女が繰り出した細い指先が突つき刺さる。──目め潰つぶしだ。その激げき烈れつな一撃に、モルトは絶ぜつ叫きようを上げた。

　両目を押さえたモルトは、陸りく揚あげされた巨大魚のようにのたうち回ってベッドをギシギシと揺ゆらす。痛みから逃のがれるために、本能的にベッドから転がり落ちようとするものの、半はん裸らの美女──否いな、半裸の少女がモルトの体に跨またがっているためにそれもできず、ひたすらに少女を上下に激しく揺らしてギシギシとベッドの音を立てるだけ。

　何が起こっているのか。モルトは困こん惑わくしつつも、意識と視界に冷静さを取り戻させ、一度辺りを見み渡わたした。

　……自室だ。いつも寝る時のように、上半身だけ衣類を脱ぬぎ捨ててベッドに横たわる己の体と、その上に跨がっている美女というには幼い少女を、窓から差し込む光が照らしていた。その娘むすめは両方の肩紐を外され、フリルの付いた白いワンピースが腰周りに集まってしまい……透すき通るように白い肌はだを朝日に晒さらしている。

　ここまではいい。けれど、やはり……自分を抱くようにして腕で隠した胸には……男のロマンの塊が、ない。哀かなしくなるほどに、小さい。

「悲劇だ、どうして……どうしてこんなに小さく萎しぼんでしまっ──おぶっ!!」

　モルトの喉のどに割といい感じの手刀が叩たたき込められ、言葉

は無理矢理切られた。

「萎しぼんでないっての!!」

　モルトに跨がるアパート大家の娘、リッツは顔を真っ赤にしてがなり立てた。

　あぁーもう!!　と大声を出しつつ、リッツはワンピースの肩紐を直す。

「起こしに来たらいきなりベッドに引きずり込まれるわ、肩紐外されるわ、そして何、最後の？　……ったく、まだ一二歳なんだから成長中に決まってんでしょ!!」

　そう言って彼女は怒いかりを何とかおさえるように、大きなため息をついてそっぽを向く。

　左側に一本だけ三つ編みを持つ、変わった髪型ボブが、少し揺れた。

「俺は……寝ぼけていたのか。……いや、違ちがう。これはまさか……コイツのせいか!?」

　モルトはベッド脇わきに転がっていた酒さか瓶びんを手に取った。

「この『ムリエルプルクラ』……最高の美女といいことできちゃう夢が見られる魔ま法ほうの酒だって聞いて……くそ、変な薬でも入ってんのかよ。飲んだ直後から記き憶おくがねぇ……」

「たまにお酒飲むのもいいと思うけど、せめてまともなのにした方がいいよ、モルト」

　おや？　と、モルトは思う。いつものリッツならば、酒なんかに金を使うな、滞たい納のうしている家賃を払はらえとせっついてくるはずである。

　いくら目潰しと喉のど潰つぶしを放った後とはいえ、今日はやけに寛かん大だいではないか。

「どうした、リッツ。今日は優しいな。俺に惚ほれたか？」

「……どこをどう解かい釈しやくしたらそういう結論に達するわけ？　わかってるでしょ。はい」

　リッツが手の平を出してきたので、そこにモルトは手を置いて「ワン」という声と共に〝お手〟をした。叩かれた。痛かった。

「家賃に決まってんでしょ！　昨日いっぱい稼かせいだって豪ごう語ごしてたじゃん！」

　あぁ、なるほど。何故なぜ今日のリッツが寛大であったのか、モルトはようやく理解し……そして、この後の展開もまた同時に予想がついた。

「まぁ聞けリッツ。ここんとこ続いていた嵐あらしがようやく過ぎ去った昨日、俺は仕事をして稼いださ。だが、その時だ。遠国の秘酒を大量入荷した、これが何と美女に会える代しろ物ものだと酒屋の店主がはやし立てる。えらい高いが、偶ぐう然ぜんにもその時、俺の懐ふところには不思議とまとまった金があったわけだ。こりゃもう全財産かけてでも買わざるを得な――」

　いい感じの手刀が今一度モルトの喉を激しく殴おう打だし、言葉を途と切ぎれさせた。

「お金ないならさっさと働きに行け、このクソ何でも屋!!　もう二ヶ月も滞納してるんだよ!?」

「えっほげほ……わ、わかった、わかったって。どのみち稼がなきゃって思ってたんだ。そろそろあの一座が来る頃だし、まとまった金を用意しておかないと……悔くやしいからな」

　リキュールから見て東にあるオードビー国と西にあるロテ国、この二国の国境は一〇〇〇年前の大戦争で荒野と化した関係で、首都間を繋つなぐルートは実質的にリキュールを通過するものしかなかった。そのため興行を為なす者達もまた必ずリキュールを訪おとずれ、旅費を稼ぐ目的で数日間公演していくことが多いのだ。

「あの一座……？　あぁ、何か、たまに来る……？」

「大人のサーカスさ」

　妖よう艶えんな美女が見事な踊おどりと共に服を脱ぎ捨てていくストリップショーを行う一座……踊り自体も見事だし、建前上は人

体の美しさを用いたアート公演ということになっているので、必ずしも間違いではないだろう。

リキュールの少年達の多くは、女の裸ら体たいを初めて見るのはだいたいこの公演の時であり、大人への通過儀礼イニシエーションとも言える極きわめて大事なものなので、その翌日は惚ほうけた顔の若者が街をふらつくまでが、ある種、街の伝統と言えるものであった。

……が、さすがに少女が理解するには早すぎる。モルトは詳しよう細さいを語りはしなかった。

「まぁそれは別にいいけど。……ともかく、早く稼いできてよね」

「あぁ。あれの入場料って結構高いしな」

「家賃だっつーの!!」

1

日差しを浴びて半分鏡のようになった商店の窓に、モルトは己の顔を映した。

黒くろ髪かみの若くも老ふけたようにも見える男の顔。顔付きは悪くないと思うが、いかんせん朝の疲つかれと昨夜の酒……というか、薬物が残っているらしく、やけに老けて見えた。

モルトは二十代前半のはずだが、何だか三十代手前のようだ。

「……目が赤いな……。リッツの奴やつめ、的確に急所を攻せめることを覚えやがって」

モルトの前ではいつも勝ち気で生意気だが、あれで実は病弱で、学校にも通えていないというのだから世の中は不思議だ。肌の白さこそ何となくそれを思わせるが……それにしたって朝、元気いっぱいの男に跨がりながら目潰しを放つのは何かがおかしい。

「……大人しく、仕事を探すか……」

普ふ段だんと比ひ較かくするに、モルトが動き出すにはいささか早い時間帯だ。けれど、嵐が去ってから一夜を経た街はいつも通りに朝から賑にぎやかで、大通りには人が溢あふれていた。

いくつも並んだ露ろ店てんや商店では旅装しよう束ぞくの者達の出入りが特に激しい。これからロテ国かオードビー国へ出しゆつ立たつしようという者達なのだろう。どちらの国へ向かうにも、これから数日間は何もない荒こう野やが続く。この先食料を手にするには逞たくましく生きる野生動物を捕つかまえるか、バカな旅人を喰くい物にしようと待ち受けている悪徳商人から買う以外にはなく、飲み水ですら知識がないとまともには手に入らない。きちんとした備えが必要だった。

モルトとすれ違う者達の顔は誰だれもがやる気に満ち満ちている。この街の住民であればこれから稼ぎ時どき、旅人にとっては出立の時、子供は学びの時……活力があるのは当然だ。

やんわりと二日酔よいで、ふらふらと不景気な顔をして歩く者はモルトだけである。

ちょっと元気を注入するためにも、と、モルトは大通りに面した花屋を訪おとなうことにした。

モルトの住むアパートから程ほど近いそこには、若い女店主、オリービーがいるのだが……彼女の豊満な胸は見る者に勇気と希望と活力を与あたえてくれる。

「……んー、繁はん盛じようしてんのな」

亜あ麻ま色の長い髪かみに、肩かたの出たゆったりとしたセーターをまとっているものの、そのふんわり感だけでは誤ご魔ま化かしきれぬ胸の大きな出っ張り具合はやはり素す晴ばらしい。また、胸だけでなく、細いくせに抱き締めたら全身柔やわらかそうな体具合も男を引きつけるものがある。

だが、今店の前を占せん拠きよしているのはリキュールに住むおばちゃん集団だ。花の種の植え方についてあれこれ質疑応答を繰くり返しているので、当面は離はなれそうになかった。

弾はじける笑顔を見せるオリービー……の、揺れるおっぱいを遠目にしばし眺ながめ、商売の邪じや魔まをするのもなんなので、モ

ルトは少々後ろ髪がみを引かれる思いながら、その場を後にした。

「あれでまだ誰にも揉まれたことないってんだから、世界には夢と希望が溢れてるよな」

　モルトがこの街に来て一〇年程が経たつが、その間、オリービーに男の影かげは一いつ切さいない。

　顔良し、気立て良し、体に至っては語るに及およばない美女でありながら、なお手つかず。

　それは自警団団長を勤める彼女の弟、ライがガッチリとガードしているおかげだ。

　モルトは……いや、リキュールの男達は誰もが思う。

　──もしかしたら俺にもあの豊満な胸を揉みしだくチャンスがあるのではないか？

　真っ白な新雪を最初に踏ふみしめるかのような夢こそが、今日も仕事を頑がん張ばらせる活力をくれるのだ……などと考えていると、モルトの耳は女性の悲鳴を捉とらえた。

　大通りの雑ざつ踏とうでは声もろくに聞けぬほどの賑やかさだが、悲鳴や怒ど声せいを聞き逃しているようでは何でも屋はやっていけない。……それが女性のものとなれば尚なお更さらだ。

　声の出所は通りを一本挟はさんだ向こう側か。モルトはそう判断すると、人ひと混ごみを半ば強ごう引いんに進み、大通りから外れる。そして、人ひと気けの少ない住宅街へと出ると……路上の片かた隅すみに転がる喰い掛かけの串くし焼やきを見つけた。……触れば、熱い。まだ近くだ。

「ほ、本当に今は持ち合わせがないのです！　ですが、後で必ずお支し払はらいを……！」

「んなもん、信じられるわけねぇだろ⁉　今だよ、せめて有り金全部出せよ！」

　もう間違いない。聞こえてきた野太い怒声は完全に誰かを威い嚇かくせんとする脅おどしのそれ。

モルトはその声のした場所──古い住居が並ぶ一角、家と家の壁かべによって偶ぐう発はつ的に生まれた、薄うす暗ぐらく狭せまい袋ふくろ小路こうじを覗のぞき込む。すると案の定、小男と二メートルほどもある巨きょ漢かん、そして……袋小路の一番奥には、尻しり餅もちをついて震ふるえる若い女の姿があった。

薄うす汚よごれた衣服からして金がなさそうなのが残念だが……乱暴につかまれたのか、服が破れている胸むな元もとを見るに、体つきは悪くない。男が啖たん呵かを切るには十分だろう。

そんな彼女の双そう瞳とうがモルトを見つけた。目と目が合う。長い前髪の隙すき間まから覗く深い緑グリーンの瞳ひとみは、一いつ瞬しゅん息が詰つまる程に綺き麗れいだった。



翡ひ翠すいよりも滑なめらかな色合いで、エメラルドのような透とう明めい感。そして花を思わせる鮮あざやかな左右の虹こう彩さいは、未いまだかつて見たことのない芸術品を思わせた。

「……あっ、そ、そこの方、どうかご協力を願えませんか……!!」

美女の視線に倣ならうようにして小男と熊くまのような大男が振ふり返ると「なんだぁてめぇ」とこの手の状じよう況きようにおける常じよう套とう句くを口にした。

モルトは肩に担かついでいた得え物もの、それの鞘さや代わりに巻き付けていた帯バンドを払う。

現れるのは刃は渡わたり九〇センチにも及ぶ肉厚な片かた刃ば、そこから伸のびる鋼鉄製の柄えが九〇センチ……計一八〇センチに至る巨きよ大だいな武器――長なが柄え刀とうだった。

「通りすがりの……何でも屋だ」

決まった。そうモルトは格好つけながらほくそ笑え――。

「なんでぇ、何でも屋か！　得物からして小うるせぇ自警団かと思ったぜ！　向こう行ってろ、こっちは取引の真っ最中だ！」

小男が喚わめくようにして言うが、どう見ても取引ではない。彼の衣服に油あぶら汚よごれがあるのを見るに、こいつが串焼きを持って女にぶつかり、「お前のせいで」といちゃもんを付け、そこに大男登場、力ちから尽ずくでここへ移動……といったところか。

彼らがネックレスや指輪など、似合いもしない貴金属類を身につけているのを見るに、似たようなことを何度もやってきたのだ。
……ならば、悪党だ。遠えん慮りよなどいらなかった。

「お、なんでぇその顔。やる気か？　いいぜ、そんなデケぇのなんざ怖こわくも――」

モルトは大きく踏み込むと共に長柄刀を横よこ殴なぐりに振り、空気を斬きる。

鋼鉄の塊かたまりが小男の腹に触ふれる直前、モルトは手首を捻ひねり、刀身の腹で打つ。その瞬間、小男の体はおぞましい打だ撃

げき音を上げ、巨漢、そして緑の瞳の美女、その頭上をぶっ飛んだ。

　小男は袋小路の壁に叩たたき付けられると、そのまま地面へと落ち、ピクリともしない。

「どうだ、多少は怖い得物だろう。……おっと、人が来たぜ。まだ続けるかい？」

　大きな打撃音であったためか、数人の野次馬がなんだなんだと集まってきていた。

　揉もめ事らしき音を聞きつけた場合、普ふ通つうならば遠ざかろうとするだろう。だが、ここの住民の場合は逆だ。事件だ喧けん嘩かだイベントだと誰も彼もが騒さわぎ立て、群がるのである。

「……なんだでよぉ、アンダば……」

「何でも屋さ。ちょいとばかし、腕うでが立つってだけの――なっ!?」

　大男が突とつ如じよとして突とつ進しんしてきた。彼は腰こしに下げていた肉厚な鉈なたで頭上からの一いち撃げきを放つ。

　モルトはこれを両手に握にぎった柄で受ける。鉈の刃はが弾けるも、大男はそんなもの気にもせず、体ごとぶつかり、モルトを易やすやすと吹ふっ飛とばした。

　集まってきていた野次馬数人を巻き添ぞえでぶっ飛ばしつつ、モルトの体は路地を飛び越こし、その通りを形成していた一軒けんの壁に、背を激しくぶつける。衝しよう撃げきに咳せき込む――間もなく大男の追撃が来た。全力突進、そしてまたも振りかぶられた鉈。

　モルトは長柄刀を遣つかおうとするも……歯を喰い縛しばる。背後に壁があると長い柄を持つ重量級武器はその動きを極きわめて制限されるのだ。

　モルトは鉈を長柄刀の柄でまたも受ける。激しい金属音が響ひびいた直後、モルトの腹に強きよう烈れつな蹴けりが叩き込まれた。

　衝撃にその壁の窓が弾け、石いし壁かべが砕くだけてモルトは家の中へと押し込まれ、室内にあったテーブルの上に背から落ちる。

「な、なんじゃぁ、おぬしは！」

　視界の端はしに長い白しろ髭ひげを蓄たくわえた老ろう爺やが椅い子すに座ってパンを持っているのを見るに……どうやら朝食の最中にお邪魔してしまったようだ。

「うちの壁がブッ壊こわれて出入り自由な快適空間へリフォームされ……って、うぉおい!?」

「ジイサン、怒おこるのは後にしてとりあえず逃にげ──!!」

　大男が来る。テーブルの上、仰あお向むけのモルトの上に飛び乗ってきた。その靴くつ裏を三み度たび長柄刀で受けるも、衝撃に耐たえきれずに今度はテーブルが潰つぶれ、モルトの体を浮ふ遊ゆう感が包む。

　その一瞬、何とか長柄刀を振るい、石いし突づきで大男の体を打ち、巨きよ体たいを横へ押し飛ばした。

「あああぁああ今度は暖だん炉ろが!?　おぬしらウチで何してくれとんじゃ!!」

「俺に言うな、あっちのデカ物に言ってくれ！」

　背をぶつけた暖炉にあった火掻かき棒を左手に握ると、大男は右手の鉈を振り被かぶって突進してくる。モルトは老人を押しのけると、左手一本で長柄刀を掲かかげて鉈を受け、突つき付けられた火掻き棒は右手で受け、握り絞しめた。

　左手一本では力負けするようだ。鉈の刃がモルトの頭に迫せまっていく。

「やっぱり、お前の武器……デカイだけ。重いだけ。強くない」

　大男は勝ちを確信したのか、ニヤリと笑った。

「……なんじゃと……？　おい、デカイの、今、貴様、何と言った？」

　その、深く沈しずんだ声は老爺のもの。彼は酷ひどく冷たい声で続けた。

「鋼鉄製の長柄刀はこの街の誇ほこりそのもの。はるか昔、ロテ国の最前線防衛拠きよ点てんとしてこの地に寄った我らが祖先は、幾いく万まんというオードビーの軍勢による猛もう攻こうをこの長柄刀を手に耐え凌しのいだのだ。その英えい傑けつ達が好んで用いた得物を……おい、貴様、今、何と言った？」

「へ、へへ。デカイだけ、重いだけ、強くない。こんなの大事にするのか？　こんな街の誇り、埃みたいに軽いど」

　モルトはその大男の言葉に、思わず口元で笑みを作った。

　……間ま違ちがいない。こいつはつい最近街に来た、流れ者だ。

　旅行ガイドの誰もが口にする。リキュールはいい街だ。しかし住民の血の気は多く、誰もが街を愛している。だからこそ街を貶おとしめるようなことを口にすれば──と。

　老爺は頰ほおを引きつらせながら、力勝負をしているモルトへと近づき、その顔を寄せた。

「小こ僧ぞう……あれだけ言われて何をしておる。何故なぜもっと勇ゆう猛もうに戦わん」

「やってできねぇこたぁねぇが……家がぶっ壊れちまうんで、ちょいと遠慮してんのさ」

「こんな家の一軒や二軒ぶっ潰したって構わんわ‼　そもそも元石工職人のワシが弟で子しと引退間際にちゃっちゃと手て抜ぬきで造ったもんじゃ‼　……えぇい最近のガキは頼たよりにならん‼　こういうのは、こうするんじゃ‼」

　老爺は一度モルト達から離れると……そこから助走をつけて全力の飛び蹴りを放ち、大男をモルトの上から吹っ飛ばし、壁の穴から再び路上へと転がしてみせた。

「うぉっ⁉　……お、おい、マジかよ。ジイサン……よくやれたな」

　老爺もまた穴から外へと出ていくのだが、その背は当然のように小さい。それでよくもまぁあの大男を飛び蹴りで吹っ飛ばせたものである。

　モルトもまた外に出てみれば、そこにはいつの間にか大勢の人々の姿。リキュールの住民達がどんどん寄ってきているようだ。彼らは老爺と大男の周りにあっという間に人ひと垣がきを作り、中には近きん隣りんの家々、その屋根の上から仁に王おう立ちで見下ろしている者、さらには串焼き屋などの立ち売りまでもが素す早ばやく現れる始末だった。

　大男は地面を数度転がった後、周りの状況に驚おどろきつつも鉈を構えた。

「聞け、皆みなの衆!!」

　老爺が声を上げると、ざわついていた野次馬達が訓練された犬のようにーいつ斉せいに注視する。

　──あのジジイはまさか!?　──引退して見なくなったと思ったらこんなところで……。

　そんな声が聞こえてきた。どうやら有名な男らしい。

　言われてみれば、腕を組みつつ大男と対たい峙じする老爺の体はシャンとし、眉み間けんの皺しわは深く、威い厳げんを漂ただよわせてもいる。名の知れた名士か何かの類たぐいだったのだろう。

　──間違いない、あの男だ!!　──早い、安い、手抜き工事でリキュールの街を恐きよう怖ふに陥おとしいれた伝説的石工集団の頭とう領りよう、ヤナギタデだ!!　──あの野や郎ろう、あざとく稼かせいだ金でこんないい場所に住んでやがったのか!!

　威厳というのは必ずしも過去に囚とらわれないものなのだと、モルトは一つ学んだ。

　どうりで石壁のクセして簡単にぶち抜ぬけてしまったわけだ。

「この大男、我らが街の誇りである長柄刀をデカイだけ、重いだけ、強くないと宣のたまい、この街の誇りなど埃のように軽いと笑った！」

　ヤナギタデの言葉は、見世物を期待して集まっていた野次馬ギャラリーの楽しげな表情を一瞬にして凍こおり付かせた。

　辺りに漂う雰ふん囲い気きも変わっていたが、大男だけはそれを

察していないようだ。

「ぞうだ、ごんな田舎いなか街の誇りなんて、埃みだいなもんだぁ。都会の方が女オンダは綺麗だし、金持ちもいっぱいいるど。ここは狭くて人が多いだけの小うるさい田舎街だぁ！」

　モルトは思う。──あ、これもう俺の出番終わったわ、と。

「おじじ……まさかおでとヤり合う気かぁ？　やめどげ、ケガすっど？　死ぬど？」

　ヤナギタデの体は胸むな板いた薄うすく、腕は骨に皮が張り付いているだけに見える。動きがしっかりしているのでヨボヨボとした印象はないが、八〇以上であろう年ねん齢れい相応の体をしていた。

「家を壊され、街をバカにされ……それで大人しく引き下がれるか。相手になろう」

「おじじ、やめとけぇ、そんな棒ッ切れみたいな体で……え？」

　ヤナギタデがゆったりとした動きで家の瓦が礫れきである大きな岩石に手を伸ばした……その瞬間だった。彼の体が波打ち、風船に空気をぶち込んだかのように全身がメキムキキッと膨ぼう張ちようし、巨大な瓦礫を軽々と左右それぞれの手で持ち上げる。

　その光景に大男はもちろん、モルトや街の住民達でさえ目を見張る。だが年齢がそこそこいっている者達は当然のものを見るようにニヤリと口元に笑みを浮うかべただけだった。

「皆を、そして街を代表し、不ふ肖しようヤナギタデ……参る」

　ヤナギタデが疾しつ駆く。一気に距きょ離りを詰めてきたので、大男は反射的に鉈を振るってこれを弾はじかんとするが、ヤナギタデは左手の瓦礫で迫り来た刃を容易たやすく迎げい撃げきし、呆あっ気けに取られる大男の顔面に右手の岩石を叩き付ける。激しい破は砕さい音と衝撃が辺り一帯に轟とどろいた。

　瓦礫が砕け散り、野次馬数人を巻き込んで、大男がぶっ飛んだ。

「齢よわいを重ねたとはいえ……我が《神速の石積み師》の名は伊達だてではないぞ!!」

怒ど号ごうのような歓かん声せいが上がり、ヤナギタデの周りに人々が群れ、彼を褒ほめ称たたえ始める。

—すげぇ！　あの伝説の張本人に会えるなんて！　—たった一人で一夜に七軒の家をおっ建てたってのも頷うなずける速さだ！　—あぁ翌日には神がかりのように全部倒とう壊かいしていたという、そのあまりの速さからついた伝説の二つ名、《神速の石積み師》は本物だ!!

「……あぁ、神速ってそっちの意味か」

モルトの呟つぶやきにギャラリーが「そりゃそうだ！」と笑う。

—あんな力任せで積んでりゃ当然じゃないか!!

その異様なまでの説得力にモルトは納なっ得とくしつつ……それとなく、辺りに視線を巡めぐらせた。

正直リキュールのビックリ人間伝説などどうでもいい。モルトにはあの美女が大事だ。

ピンチを助けた男には報ほう酬しゅうが……最低でもキス以上のご褒ほう美びと古来より決まっている。

結局トドメを刺したのはヤナギタデだが、最初に助け、小男も倒たおしている。

褒美を貰もらうだけの仕事はしたはずだ。

何となく頭の中で〝悪党共とやっていることが一いっ緒しょじゃねぇか〟とツッコミが入るものの、モルトはそっと首を振ふる。こういうのは気持ちが大事なのだ、気持ちが。

「どさくさ紛まぎれに逃げちゃいないだろうな。……どこだ、どこ……あっ……」

先程の袋ふくろ小路こうじで見つけた。見つけはしたのだが……胸元を押さえた彼女は瞳ひとみを潤うるませ、震ふるえながら、その首先にナイフを突き付けられていた。握るのは、あの小男である。

「ご、ごめんなさいなのです、捕つかまってしまったのです、ごめ

んなさい……」

「何でも屋、てめぇよくもやってくれたな!!」

　彼の破れた服から覗のぞくのは薄うす手での革の鎧よろい。それでかろうじて意識を保てたようだ。

　それはいい。問題はこれだけ野次馬が大勢いる中、ナイフを持って美女に近づいていく小男を誰だれも止めようとしなかったのだろうか。

　モルトが野次馬を見み渡わたせば……小男の怒ど声せいに状じよう況きようを察して静まり返った誰も彼もが〝大男とヤナギタデに集中してたせいで、見み逃のがしてしまったんだ〟と視線で訴うつたえていた。

　強い漢おとこが好きだとする住民の特性もここまで来ると、ちょっとばかし異常な気がした。

　モルトならすぐ横で勇者と魔ま王おうが世界の命運を賭かけて戦っていようとも、胸元破れている美女の方を全力で注視していることだろう。

　小男は美女を連れて袋小路から通りへと出る。逃げ道を確保しようとしたのだろうが、いかんせんすでに野次馬の群衆のせいで道の一方が物理的に塞ふさがり、もう一方には長なが柄え刀とうを手にしたモルトがいる、という状況である。

　小男は前後を見比べると、群衆に背を向け、モルトへと近づいてくる。

　こっちの方が対処しやすいと踏ふんだようだ。

「大人しく武器を捨てろ、こいつがどうなってもいいのか!?」

　モルトはため息を吐つく。そして……すんなりと、長柄刀を地面に落とした。

「い、いけません！　わたしのことはもう……!!　ですから、どうか、そんな……!!」

「モルトだ。今度からは名前で呼んでくれ」

モルトが微笑ほほえむと、美女は溜ためていた涙なみだを頬に伝わせ、嗚お咽えつを漏もらしつつ俯うつむいた。

「あぁ、あぁ……何故そんな……ご、ごめんなさい、ごめんなさい……!!」

その涙にモルトは思う。なんて良い娘こなのだろう、と。

そして大男同様、この小男と美女もまた、リキュールに来たばかりなのだろう、と。

彼らはわかっちゃいない。この街を、そしてそこに住む愛すべき住民バカ達を。

お祭りイベント好きで、強い漢が好きで、知より力、力より心、そして無む駄だに持ち合わせるノリの良さと正義感……そんな連中が取り囲む中で、悪党がナイフを突き付けて美女を泣かせる……それがどれだけ自殺行為か。

小男の背後の群衆、その幾人かはすでに護身用の短たん剣けんを抜き、中には仕事道具であろうカナヅチや斧おの、鋸のこぎり、果ては注射器を手に謎なぞの液体を打ちこまんと準備を始める者までいる。さらには串くし焼やき屋さえも長い鉄串を指の間に挟はさんでおり、もはや調理器具が暗器にしか見えない。とどめに、武器を持っていなかった者達は魔法のようにどこぞから荒あら縄なわを取り出し、先せん端たんを輪にして頭上で振り回し出している始末である。

モルトから見ると、小男の背後にはちょっとした地じ獄ごくの軍勢が足並み揃そろえて鬨ときの声を待っているようなおぞましい光景となっていた。

呆あきれてモルトが空を見上げようとすれば、途と中ちゆう、家々の上から観戦していた老人達が迷めい彩さい柄がらのマントを羽織り、気配なく弓を引ききっている姿が見えてしまう。……狩かる気満々である。最近ではほとんどいなくなったとされる魔獣猟師ハンターなのかもしれない。

これが軍属でもなければ自警団でもない、ただの民間人なのだからわけがわからない。

もはや美女に危険はないだろう。あとは手て柄がらが誰に行くか

だけだ。住民達か、モルトか、それとも小男が状況を察して平謝りして有う耶や無む耶やになるか……それらの三さん択たくだ。

　そう考え始めた時、モルトの鼻にふわりと、嫌いやみのないわずかばかりの香こう水すいの匂におい。

　四択になったのをモルトは直感して、焦あせる。

「ほぅ？　これはまた、なんてわかりやすい状況だ。たまには帰宅の道を変えてみるのもいいものだ。モルト、悪いが、ちょっと持っててくれ」

　突とつ如じよとしてモルトの脇わきに人ひと影かげが現れ、食料が入った大きな紙かみ袋ぶくろを投げ渡わたされる。

　モルトは反射的に受け取ってしまったものの……その瞬しゆん間かんに、それが大きなミスであることに気が付いた。

　白に近い金きん髪ぱつを簪かんざしでまとめ、異国情じよう緒ちよのあるマフラーを巻いた細身の男。

　そいつは両手を空からにすると、何の躊ちゆう躇ちよもなく小男と美女へ向かっていく。

「お、おい、サシャ！　ダメだ、これは、俺の仕事だぞ!!」

　小男は突如現れた新手におののくのではなく、眉まゆ根ねを寄せた。

「な、なんだ、てめぇ!?　女の出る幕じゃねぇ、すっこんでろ!!」

　その言葉にサシャはわずかに目を細める。

　サシャは遠目には女にも見えるほど細身で……いや、むしろ近くで見た方が綺き麗れいな女に見えるのだから、小男の言葉も無理はなかった。

「三年ほど前からこの街で何でも屋をしているサシャだ。覚えておいてくれると嬉うれしい」

　サシャが首を傾かしげてニッコリと笑う。それはもはや天てん女によの微笑み以外の何物でもなく、小男は瞬時に、そして明らか

に、見み惚とれた。

　その一瞬の隙すきに、サシャの刀は見事なまでに滑すべり込む。

　抜ばつ刀とう、そして納刀。……おぞましい速度の居合いである。

　ナイフの刃はが地に落ち、カキンッと小さな金属音が聞こえてから「ん？」というように、小男は俯き泣いていた美女と共に地面を見た。そして、状況を理解できないままに固まる。

「さて、後は住民の方々にお任せするとしよう。お嬢じようさん、こちらへ」

　トンっとサシャは小男を突つき飛ばし……満面の笑みを浮かべる地獄の軍勢、もとい、地元住民達に獲え物ものを引き渡し、その腕うでですぐさま美女の肩かたを抱いだいた。

　ヒャッハー!!　の声が上がって荒縄が飛び交かい、矢が放たれ、男達が突とつ撃げきを仕し掛かける。

　肉にく食しよく獣じゆうの檻おりに子ウサギでも入れたかのような見るも無む惨ざんな光景が始まったのだが……小男にとって幸運なことに、長柄刀を手にした数人の男達が素す早ばやく駆かけつけてくる。騒さわぎを聞きつけたらしいリキュール自警団である。

　彼らは狂戦士バーサーカーと化した住民達と小男を引き離はなし、状況を押さえようと声を張り上げた。

「これでいい。お嬢さんもう大だい丈じよう夫ぶですよ。さぁ、顔を上げて。涙を……何だ、モルト」

　モルトは投げつけるかのようにして紙袋を乱暴にサシャへ返し、顔を上げようとした美女の視線を遮さえぎるように手の平を当てた。



　女性がサシャの顔を間近で見るのは危険だ。恋こいに落ちかねない。

　悔くやしいがこればかりはどうしようもなかった。ノンケでさえ落としてしまうのがサシャという男である。付き合いはそれなりに長いが、モルトでさえ大量に酒が入って、気を抜ぬいていると「……こいつ、随ずい分ぶん綺き麗れいな顔してやがるな……」と、今でも危ない時がある。

　サシャは苦く笑しようしつつも美女の顔を見ようとしてくるので、そうはさせまいとモルトは担かついでいた長柄刀の石いし突づきでサシャを押しやろうと、その胸を軽く突く。

「ひゃっ……！」

　甲かん高だかい声を上げてサシャがよろめき、胸を押さえて下がった。

　そんなサシャの妙みようなリアクションに、モルトはハッとした。

「お、おい、サシャお前……まさか……そんな、まさか……」

「ち、違ちがう、今のはたまたまで……！」

「知らなかったよ、サシャ、まさか、お前が……乳首開発済みだったとはな」

「違う‼」

　モルトも冗じよう談だんのつもりで言ったのだが、サシャには思いの外ほか効いたようだ。

「……ま、まぁいいさ。涙する女性がいたからつい出で張ばってしまっただけだからな。私は泣いている女性は放ほうっておけなくてね。……お嬢さん、またお会いしましょう」

　いつもならここで手柄の奪うばい合いという見苦しい展開が待ち受けているのだが今回はアッサリと去って行く。乳首が敏びん感かんな男だというのがバレたことを恥はじているのだろう。

今度から揉もめた時は乳首を突つついてやろうとモルトは決めた。

「モルト、この状況は何だ？」

サシャと入れ違いになるように自警団の馴な染じみの一人が話しかけてきたので、説明してやる。元々さほど込み入った状況ではなかった上、やはり似たような事件が最近多発していたらしいので、大男と小男は躊躇なく御ご用ようとなって連れて行かれることとなった。

捕ほ縛ばくは捕縛だが、どちらかといえば住民達から守るため、という感じなのが苦笑を誘さそう。

「あ、あの……お助け頂きまして……。大変なご迷めい惑わくを……ごめんなさい」

少女のような幼さ残る声がした。自警団と話している間、少し離れていた美女である。彼女は長柄刀の鞘さや代わりにしていた帯を抱いていた。拾っておいてくれたらしい。

小動物のように未いまだ震えながら俯いていた女が顔を上げる。

おっ？　とモルトはちょっとばかり驚おどろいた。

てっきり二十歳はたちぐらいかと思っていたが、そこまでいっていない。骨格がまだ若いのだ。

地に座っていたせいでわかりにくかったが、発育がいいだけでまだ十代半ばを過ぎた辺りか。涙なみだ声ごえが消えてはっきりわかったが、声質もまだ子供のそれである。

手を出すのにちょっと躊躇ためらいが出るな、とモルトは考えつつも、彼女の抱いていた帯を取れば……破れた衣服から大きな胸が顔を出し掛かかっているのが見えた。

……たわわだ。実にたわわだった。しかも若さのためか、大きいくせに重力に逆らうかのように張っていて……柔やわらかさよりも強い弾だん力りよくを感じさせる代しろ物ものだ。

彼女は「はぅッ」と、か細い声を上げて、瞬間的に顔を赤くし、胸むな元もとを抱くようにしてしゃがむ。その仕草もまた何とも初

心うぶで、実にいい。モルトの顔がにやけてしまう。

「あー、ごめんごめん。とりあえず無事で良かった。……そんな素す敵てきな格好でいるのも何だし……近くに知ってる店があるから、そこまで行こう」

　不安げな顔で見上げてくる彼女の姿は、どこか迷子の子犬のようだ。

「安心していい。安あん美び亭ていっつーただの大衆酒場だよ」

　モルトが手を差し出すと、そっと華きゃ奢しゃな手が重ねられる。

　美女は、ディナと名乗った。

2

　安美亭は大通りの一角にある地元民と旅慣れた者達に人気の店だ。その名の通り安くてうまい料理と酒を出す。また、カウンターの中には若くて綺麗な……というか、少々カクテルを作るには若すぎる一七歳の看板娘バーメイド、クラッツもおり、客を楽しませてくれもする。

　残念だがお触さわりはなし。というより触ろうとしても自然とかわされるのがオチだ。

　長く店に通っていても誰だれも触れず、本当はクラッツというのは幻まぼろしで実在しねぇんじゃねぇのか？　と、宣のたまう酔よっ払ぱらいすらいるレベルである。

　とはいえ、体がダメなら心だとして口説こうとすれば、今度は彼女の叔父おじにして安美亭の店主、グレーンに鉄てつ槌ついを下されるために、注意が必要でもある。

「開店前で、大したもん、できないが、まぁ、いいだろ」

　言葉の違う遠方の地で生まれ育ったという店主グレーンは、独特

のイントネーションで言って、モルトの前に皿を出した。鶏とりササミの燻くん製せいとチーズを少々。頼たのんでないし、ほぼ無一文だとモルトが告げても彼は皿を引っ込めることなくその大きな背を見せる。

「女と来て、水だけってのも、格好、つかない、だろ」

　開店前に迷惑承知で押しかけて、金がないと言ってもこの対応だ。

　これだからこの店はいい。店主はオーガのような巨きよ漢かんにして笑顔で子供を泣かせる強面こわもてだが、機き微びが効く。店の常連が増える理由の一つだ。

　モルトは彼の背に礼を投げかけ、燻製を一つ摘つまんだ。

　チップの香かおりが効いていて、いい風味。酒が欲ほしくなるのだが……。

「酒は、自費だぞ、モルト」

　だと思った。モルトは苦笑しながら、肴さかなと水を相手に時を潰つぶしていると、店の奥からようやくクラッツと、胸元を手直しされたディナが戻もどって来る……のだが……。

「おい、クラッツ、お前、いつから俺の趣しゅ味みをここまで理解したんだ？」

　クラッツは卓たくに着くなり、呆れ顔で右目にかかっていた金色の前まえ髪がみを軽く掻かき上げる。まだ若いが、派手さを押さえつつもしっかりと決めた化け粧しようと、嫌みのないアクセサリが実じつ年ねん齢れいよりもずっと大人っぽくシックに彼女を魅みせていた。

「それ、絶対言うと思ったわ。別にアンタの趣味に合わせたんじゃなくて、これしか方法がなかったの。……元々服のサイズが小さいのよ、これ。だから破れる前でもパツンパツンだったんじゃない？　縫ぬい合わせただけじゃすぐ破れそうだったし、こうしてみた」

　ディナの服は、今や破れた胸元を逆に活いかし、その谷間を隠かくさずあえて大だい胆たんに晒さらすように直されていた。

破れた箇か所しょは綺麗に整えられ、左右の布地を引っ張るようにして荒あらく革かわ紐ひもで結んでいるのだが……紐が谷間を覗のぞかせるのをほとんど邪じゃ魔ましていないため、やたらと扇せん情じょう的だ。

上はもちろん、正面、果ては下から見ても谷間が存分に見える素敵な仕様である。

まるで深き渓けい谷こくに渡された橋のように、ピンピンに張られ、ムギュッと両胸に喰くい込んでいる革紐は、彼女の柔らかさや弾力を弥いやが上にも見る者に伝えている。

モルトの手は自然と褒ほめるようにクラッツの頭を撫なでた。クラッツも満まん更ざらではない顔だ。

「た、助けていただいた上、このようなご配はい慮りょまで賜たまわり……本当にご迷惑を……」

ディナはやや恥じらうように赤い顔で視線を泳がせつつ、やけに堅かた苦くるしい言葉を連ねた。

「何かお礼をとも思うのです……が、生あい憎にくと今、わたしの手元には何もなく……。今しばらく時を置かせていただき、しかる後に……」

ディナは髪かみの毛などもボサボサで顔も薄うす汚よごれて化粧っ気けもない。また、申し訳なさそうに俯うつむいているせいで、長い前髪が下がり、綺麗なあの両目をも隠していて、陰いん気きな雰ふん囲い気き。……だが、素もとがかなりいいのはわかった。肌はだだって張りがあって、健康的だ。

何とかこの件を利用して彼女とお近づきに……そう、心はもちろん物理的にも……より具体的に言うなら体カラダ的な意味で密着するところまでいきたい。

無論、そんなことをしていれば数日後に迫せまっている大人のサーカスの資金を稼かせぐ暇ひまがないのだが……それならそれで、ディナがいてくれれば十分だった。

眺ながめるだけのいっぱいのおっぱいより、触れる一いつ対ついのおっぱいである。

　家賃は？　という少女の声が頭の中で響ひびいた気もしたが、モルトは無視した。

　軽く咳せき払ばらいをし、できる限りの良い声をモルトは発する。

「フッ。金銭なんて必要ない。お困りのかよわき美女を助ける……男として当然のこと。君が無事で本当に良かった」

　モルトは優やさしく微笑ほほえみながらもキレのある口調で述べ、ディナを見つめる。

　視界の端はしでクラッツが笑い出しそうになっていたので、モルトは素早く彼女の口に水のグラスを押しつけ、出かけていた笑いを無理矢理に止めた。

　大事な決め台詞せりふである。爆ばく笑しようされて邪魔されてはたまらない。

「まぁ、なんと。モルト殿どのはまるで英えい雄ゆう譚たんで語られるナイトのよう、素敵なのです！」

　クラッツが盛せい大だいに水を噴ふいた。危あやうく椅い子すをひっくり返しそうになるも、何とか堪こらえる。

「あ、あなた大丈夫!?　この野の良ら犬みたいな薄汚れた冴さえない男が虫むし酸ずが走るような台詞せりふ吐はいたのよ!?　何でそれを素直に受け入れられるわけ!?」

「……なぁクラッツ、俺達も長い付き合いだが、割と酷ひどい表現するのな、お前」

「お、おっしゃっている意味がわからないのです……。モルト殿は立派な殿との方がただと……」

　クラッツはバレッタで髪を纏まとめている頭を抱かかえるようにしてテーブルに肘ひじを突つき、呆あきれたように「はぁ

〜〜〜」と長い息を吐いた。

　あ、あの、モルト殿……とディナは真まっ直すぐにモルトを見つめ、居住まいを正す。

「できればで良いのですが……その、め、迷惑と恥はじを重ねる覚かく悟ごでお願い申し上げるのです。何でも屋なる職種の貴き殿でんを見込み、わたしの頼みをお聞き入れいただきたいのです」

　モルトの目は自然とディナの谷間へと向かっていたのだが……その時、ふと、気が付いた。彼女の首から鎖さ骨こつの上を滑すべり、谷間の中へとネックレスらしきチェーンが伸のびている。

　目を凝こらして見れば、チェーンには指輪リングが通されているようだ。乳ち房ぶさからわずかに顔を出しているそれは、見た事もないような宝石が鏤ちりばめられた、高級そうな代しろ物ものである。

「どうか、わたしを西のロテ国、その首都まで導いていただきたいのです」

「お、二人旅か。いいね。……ただ、それ自体はやぶさかじゃないんだけど、先立つ物がないとキツイな。ぶっちゃけ俺も金ないし、ディナも手持ちはないんだよな？」

「そうですが……。しかし、リキュールはロテ国とオードビー国を結ぶ最短ルートの中央にある街のはずなのです。さほどの距きょ離りは……？」

「ディナ、それは違ちがうんだ。リキュールはその二カ国の首都を結ぶ最短ルートの中央部だけれど、他と比べれば短いというだけで、それなりの距離がある。それに、その道程の多くは不毛の荒こう野やだ。俺一人ならともかく、君がいるとなるときちんとした準備は絶対に必要だろう。今、アルコ・ホールをうろうろしている連中が何をしているかを考えるんだ」

　アルコ……？　とディナが首をかしげるので、クラッツが、あのね？　と説明する。

　アルコ・ホールは言うなればリキュールの中心部を指した名だ。

　東西南北、十字に走る大通りの交差点を中央として、同心円状に幾いく重えにも道が造られているのだが、その円の内側エリアを人々はアルコ・ホールと呼んでいた。

「旅人達は、荒野を渡わたるためにそのアルコ・ホールで十分な準備をするのよ。だからこそ、この街は常に栄えているんだけど……手持ちがないとなると、ちょっと難しいかな」

「……ロテ国の首都に行けばある程度は都合がつくと思うのですが……。あ、で、では、便りを出すというのはどうなのです？」

「まぁ、それぐらいなら大だい丈じよう夫ぶだろう。んで、お相手は？」

　何故かディナは言いい淀よどむので、答えを待つ間にモルトはチーズをつまみ、水を口にする。

「シャルロッテ王おう妃ひなのです」

　モルトが盛大に水を噴いた。その飛ひ沫まつが少々ディナの胸にかかっていささかエロくなったが、それどころではない。王妃に庶しよ民みんからの手紙が届けられるわけがなかった。

「ダメです？　……ということは……やはり、直接向かうしか方法がないのです……ね」

　モルトとクラッツは今一度ディナを物もの珍めずらしいものを見る目で見つめた。

　不思議な娘むすめだ。着ているものは━今でこそ扇情的になった

が──田舎いなか娘が着る地味なもので、髪や化粧からすると身み支じ度たくもろくにできそうではない。

　自分の魅み力りょく的な双そう瞳とうを前髪で隠して俯いているような、恥はずかしがり屋でもある。

　一方で、言こと葉ば遣づかいからして相応の教育も受けているようなのだが……王妃に手紙を出したいなどと神しん妙みような顔で言い始める常識のなさなど、妙みようなアンバランスさを感じさせた。

　ロテ国に繋つながりのある良家の家いえ出で娘むすめ。そんなところが妥だ当とうか。それとも、そういうキャラを演じているだけの不思議ちゃんか……それも割とありそうだった。

　呆れてしまったクラッツは、仕込みがあるから、とため息と共に言って立ち上がる。

「まぁ、直接行くしかないっていうのならリキュールでちょっと働いて、それで旅の資金でも貯ためたらどう？　この街、女の子の働き口は結構あるわよ」

「わ、わたしに仕事が……？　あ、でも、あまり……その、時間がないのです」

「じゃ、こういうのはどうだ？　とりあずダメ元で手紙は出して、返事を待つ間に働いて、返信がなさそうなら自分で向かえばいい。……その間、俺がディナの面めん倒どうを見よう。ただし、何でも屋の仕事として、だ。依い頼らい料は……」

　モルトの目はディナの胸元に向かった。

「その胸……にある、指輪でいい」

　思わず〝胸〟というところで微び妙みように本心が顔を覗かせ、言葉が途と切ぎれてしまった。

　いらぬ誤解を招いたかもしれない。……誤解でもないが。

　ディナは目を見開き、顔を真っ赤にして「えっ⁉　そ、そそそれは……わたし……あの……！」と慌あわてふためきつつ、谷間から顔を出していた指輪を奥へと押し込んだ。

「あぁいや、違う違う！　勘かん違ちがいするな、その、体目当てとかじゃないから、な？　純じゆん粋すいに俺が欲ほしいのは……な？　間違えるなよ？　さっきの小悪党共とは違うぞ、俺は」

　慌てて言ってみるものの、ディナは聞いているんだか聞いていないんだかわからない様子で、顔を赤らめたままおろおろと視線を泳がせていた。

　モルトは困ってしまい、逃にげ道を探すかのように窓の外を見やる。

　ん、なんだ？　モルトは眉み間けんに皺しわを寄せた。

　大通りを行き来していた大勢の人々が足を止め、全員が同じ方向へ視線を向けていた。

　唐とう突とつに街のざわつきが失うせ、妙な静せい寂じやくが大通りを占しめる。さすがのそれにはモルトも思わず椅子から腰こしを浮うかし、体に緊きん張ちようを走らせた。

　そんな静寂を破ったのは、異様な蹄ひづめの音。

　モルトは反射的に壁かべに立て掛かけていた長なが柄え刀とうを握にぎり、窓へと体を寄せて外を覗うかがう。

　通りで立ち止まり、往来を埋うめ尽つくしていた人々の顔が驚おどろきのそれに変わり、一いつ斉せいに身を寄せ合うようにして脇わきへ除のけた。そこを四騎きの騎馬が駆かけ抜ぬけていく。

　三騎は白銀の鎧よろいを纏まとい、手には盾たてと槍やり。先頭を行く騎馬だけは鮮せん血けつのような赤色に、同色のマントが靡なびき、そこには国旗らしきマークが描えがかれていた。

　装備からしてリキュールの属するロテ国や隣りん国ごくのオードビー国の騎き兵へいではない。つまり、リキュールに何ら縁えんのない他国の騎馬だ。それが我が物顔で大通りを抜けるなど……。

　モ、モルト殿！　そんなディナの声。見やれば、緑の瞳ひとみがモルトを見み据すえていた。

「こ、このわたしの面倒を見る、というのは身の安全を保証する、という認にん識しきでよろしいのでしょうか？」

慌てふためいているようにも、一いつ生しよう懸けん命めいに勇気を振ふり絞しぼっているようにも見えるディナ。

彼女の手はテーブルの上で握り拳こぶしを作り、かわいそうなほど震ふるえていた。

「あ、あぁ。えーっと、仕事期間は君がロテ国首都に入るまで……かな」

「問題ないです。でしたら、先の条件にて護衛の任を貴殿に命じさせてください。ただし、報ほう酬しゆうは仕事が完かん了りようの暁あかつきに渡すことにします。……何でも屋モルト、わたしを……その、あの……よろしくお願いします」

モルトは外を見やり、それからディナの瞳、そしておっぱいに視線を移す。

この状じよう況きように嫌いやな予感を覚えないわけではないが、質のいいおっぱいの前にはそんなもの、朝あさ霧ぎりのようなものでしかない。時が経たてば自然と消えていくものだ。

まぁ何とかなるか。そう思って、モルトは頷うなずき、依頼を了りよう承しようした。

突とつ如じよとして現れた一個大隊の軍に包囲され、街が封ふう鎖さされたという情報が飛び交かうのは、それから間もなくのことであった。

3

リキュールの政治中ちゆう枢すうたる議場の壇だんに、若き議長、マドラーが秘書を連れ、上った。

彼は生意気そうな笑えみを見せると、円えん卓たくに着く一二人の議員達を見下ろす。

　眉まゆは細く尻しり上あがりで、眼め鏡がね越ごしの目は酷く鋭するどく、小こ柄がらで細身であることさえも、マドラーの知的さを強調しているかのようだ。実際、頭は悪くない。悪いのはその性根だ、と秘書のクリミオは思う。実際悪人面づらでもあるし、黒いパンツに黒いシャツ、そのくせして羽織った薄うす手でのコートは真っ白といういつものスタイルも、かわいげがなかった。

「遠方より来られたヌストルテ帝てい国こく第二近この衛え大隊の者が言うには、かの国の重要人物が逃とう走そうし、現在このリキュールにいる、という確信を得ている。それ故ゆえ、その人物のさらなる逃走を防ぐために……と協力を請こわれた結果、貴様らが議場に顔を出す前に、この僕が……そう、議長という要職であるこの僕が自らの仕事を全まつとうするため、リキュールの代表として議長権限により、次の通りの協約を独断において締てい結けつした」

▾街では住民に一いつ切さいの危害を加えてはいけない。その見返りとして住民を始めとしたリキュールの者がヌストルテ帝国軍にも同様に危害を加えないことを約束する。

▾事態解決まで街の外がい縁えんに滞たい留りゆうするのを許可し、街の出入り制限を委任。また、これを円えん滑かつに行うために自警団の活動を自じ粛しゆくする。

▾これら協約が破られた場合、双そう方ほう実力をもって抗こう議ぎを行う。

「これらを結ぶ見返りとして、それなりの額になる金品を交こう渉しようの末、引き出すことに成功した。詳しよう細さいは先さき程ほど配った資料をご覧いただこう。……どうだ、優ゆう秀しゆうなる僕だからこそ引き出せた金額だ。お前らがいてはこうはいかなかっただろう。まったく、怠たい惰だで助かった」

　協約を証する書類を手に、マドラーはパーマのかけられた髪かみを掻かき上げ、薄手の眼鏡めがねを得意げにクイッと直してみせる。

議員達は一様に呆あつ気けに取られた顔で彼の姿を見つつ、ゆっくりと席から立ち上がった。

それを踏ふまえてクリミオはそっと、壇上から下りる。

どうして下りるのだ？　と、マドラーはドヤ顔のままクリミオを見てくるのだが……その顔は飛来した八〇を越こえる老議員の飛び蹴げりによって吹ふっ飛とばされた。

卓たく上じように足をかけ、そこから壇上のマドラーに到とう達たつする脅きよう威いの跳ちよう躍やく力はもちろんのこと、両足揃そろえ、背筋が地面と水平にピンっと伸びた美しい飛び蹴りドロップキックは足あし腰こしの強健さを見る者に感じさせる。続け様に我も我もと三十、四十代はもちろんのこと、五十、六十代の議員達も含ふくめ、全員が次々に議場の高い天てん井じようを活いかすが如ごとく、宙へ高く飛び上がり、倒たおれたマドラーへと追つい撃げきを仕し掛かけていった。

クリミオは胸に抱いだいた資料を落とさぬようにして、己おのれの長い黒くろ髪かみを後ろに払はらい、ため息を一つ。

他の街で生まれ育ったクリミオとはいえ、さすがにここで議長秘書を二年も務めていれば、この手の事態にも慣れてくる。それがマドラーのような若じやつ干かん二四歳で最高権力者である議長という座に着きながら、次々に独断専行をしでかす男の秘書ともなれば、その手の光景は日常的ですらあった。

―なに勝手な協約結んどんじゃワレェ!!　―何だよ出入りの委任に自警団活動自粛ってのは!?　もはや自治権の委任だぞ!?　――一〇〇〇年前の大戦の時でさえ守り抜いた街を簡単に他国に!?　―街の誇ほこりに等しき自警団を封ふうじて……貴様何をしたい!?　ここは忠犬の街じゃねぇんだぞ!!　―そもそも流通でもってる街が出入り制限を行えばあっという間に滅ほろぶぞ!?　―はした金で街を売うり渡したようなもんじゃ!!

「じ、時間がなかっ……オブッ!!　急ぎ返答をと請こわれオグッ!!　だ、だから議長権限を緊きん急きゆう的に発どグホ……!!　何より、平和的に、事を運ばんがためにグハッ!!」

議会の壁に埋め込まれている大型の鏡に、クリミオは己の姿を映す。長い自じ慢まんの髪と長身でスレンダーな体型。パンプスにス

トッキング、体のラインがはっきり出るペンシルスカートにぴっちりめのジャケットを黒一色でまとめていた。シャツばかりはさすがに白だが、それでも黒い印象である。しかしそうであるからこそ、手や首、そして顔の肌はだの白さが際きわ立だっていて、彼女自身、なかなか綺き麗れいだと思えた。やや目め尻じりの上がっている鋭めの両目だって悪くない。よっぽど選えり好みのある男を除けば何とでもなるような気はしていた。

　やはり適当な男でも捕つかまえて、バイオレンス極きわまる職場からは引退した方がいいかもしれない。二四歳。まだ若いが、今いま更さらまた別の土地で職探しするのも億おつ劫くうだった。

　そんな人生設計を考えていると、いつの間にか肉を蹴り回す生々しい音は終わって、瀕ひん死しのマドラーが議員達の息の合った共同作業によって荒あら縄なわで縛しばられ、高い天井から吊つるされるいつもの展開になっていた。

　この街は至るところから荒縄が出てくる。リキュール七不思議の一つであり、頻ひん繁ぱんに目もく撃げきしているはずなのに、クリミオが未いまだ真相に辿たどり着けない謎なぞの一つだった。

　──えぇい、これはここ最近で一番の問題だぞ！　──マドラーの議長解任動議を提出する！　詮せん議ぎ及および投票するまでもなく満まん場じようーいつ致ちじゃろうがの!!　──いっそ自警団を焚たき付つけてこちらから奴やつらを……。──無理だ、マドラーの独断専行とはいえ協約を正規に結んだ以上、反ほ故ごにすればこちらの汚お点てんとなる。──いっそ一人残らず殺ヤれば証しよう拠こは……。──奴らは一個大隊規模だというではないか、さすがに我らが誇るリキュール自警団をけしかけたとて皆みな殺ごろしとするには難しいぞ。──とにかく時間が惜おしい！　敵の詳細な数を調べつつ、街の識しき者しやを招集して緊急会議だ。皆みなの者、行くぞ!!

　議員達が去ると、クリミオは天井からぶら下がっているマドラーの下まで行って、呆あきれた目で彼を見上げる。

「何でまたあんな無茶苦茶な協約結んだんですか。こうなるのわかっていたでしょう？」

「し、しかし、オードビー国から国境沿いに駐ちゆう屯とんの許しを得てると向こうは言う……。確認のために使者を出したとて一週

間はかかる。……何より、軍事大国のヌストルテだ……大隊規模の軍が動いたら街がどうなるか……当直だけの自警団員だけでは対応など……」

　クリミオはため息をまた一つ。あの無茶苦茶な協約は致いたし方なく、ある意味では平和的な現状を何とか維い持じするため、彼なりに最大限に健けん闘とうした結果なのだろう。

　しかし、正規軍相手では敵かなわないと判断した、などと素す直なおに言ってしまうと英えい傑けつ達の技わざと伝統を受け継つぎしリキュール自警団、そして彼らを街の誇りとする議員達や多くの住民達の自尊心を傷つけてしまうかもしれない。そこまで言うのなら試ためしてやろうじゃないか。そんなことを言い出す者が確実に現れ、大量の血が流れるのは確実だ。

　そこまで彼は考えて、自分一人が犠ぎ牲せいになるように話を持っていったのか。

　ロテ国の首都にある大学で彼と知り合ってから三年となるが、たまに見せるこういう妙みような気転の働かせ方は、嫌きらいではなかった。

　普ふ段だんは偉えらそうで、小こ賢ざかしく、あざとく、小悪党な部分ばかりだが、それでもそういう一面があるからこそ、彼に雇やとわれ、リキュールにまでクリミオはやって来たのだ。

　仕方のない人ですね。クリミオはそう口にすると顔を背そむけてから柔やわらかに、小さく、そっと……微笑ほほえんだ。壁に取り付けられた荒縄の結び目を解ほどこうと手を伸のばす。

「それに……見返りとしてあんなに金品を……ぐふっ♡　しかも僕個人に秘ひ密みつ裏りにって言われたら従う他はない……貰もらえるものは貰っておいた方が絶対にお得だからな!!」

　クリミオは手を止め、満面の笑みを見せるマドラーに飛び蹴りを放った。

　街の封鎖など、少なくともモルトがこの街に居着いてからの約一〇年、聞いたこともない。それが他国の手によって行われるというのだから、とんでもないことである。

「……自分に護衛を依い頼らいしてきた美女と、街を囲んだ軍隊に何ら関係がない、と考えるのはさすがに楽観主義にも程ほどがある……か」

　安美亭の窓から騒そう然ぜんとする通りを眺ながめつつ独り言を呟つぶやくと、モルトは店内に視線を移す。

　すでに時刻は昼を回り、安美亭開店の時間となっていたが、客の入りはあまり良くなかった。皆、食事よりも情報に飢うえて街中を行き来しているのだ。

　ディナはあれから特に何をするわけでもなく俯うつむき加か減げんに椅い子すに座り、たまに水を口にするだけである。たまにその前まえ髪がみの隙すき間まから上うわ目め遣づかいでモルトの様子を覗っている気配はあるが、特に何も言ってこない。まるで、何かを待っているかのようだった。

　郵便集配人ポストマンも街へ出入りできなくなったため、やることがないと言えばそうなのだが…。

「……えっと……なぁ、ディナ。これからどうするんだ？」

「あっ、はい！　え……っと、ど、どうするというのは……？」

　名を強く呼ばれた犬のように、ディナはビクッとして顔を上げ、あわわわと慌あわてた。

「君がどうするのか、だ。何をするにしても俺は護衛だ、君に付き添そう」

「そ、そうですね……えっと……わたしは何をしたら……良いのです？」

　さすがにそう言われてしまうとモルトも閉口してしまう。勝手の知らぬ街、故にどうしていいのかがわからない、ということなのだろうが……どこか自主性に欠ける気もした。

　──あれぇ、まだ開店前だったか？　──いや、窓から見たら人ひ

と影かげがあったぞ？

　そんな声と共に、安美亭の扉とびらに取り付けられたカウベルが早はや鐘がねのように鳴り、どやどやと二〇人ほどの男達が次々に店内へと入ってくる。

　ディナは反射的に一いつ瞬しゆん身構えるのだが……無理もない。男達は全員がどこかしらに傷を負っており、ボロボロだ。鼻血を垂れ流している奴までいる。

　てんやわんやの最中だったのでディナは覚えていないのだろうが、彼らは先程小男をボコボコにしていた街の連中である。

　ヤナギタデが入ってきた時に、彼女もようやくそれに気付いたようだ。

「み、みなさん、ひょっとして……あの時に、お怪け我がを……!?」

　男達は泥どろ遊びをして帰って来た子供のように、どこか照れた顔をする。

　━違ちがう違う。━あの野や郎ろうをぶっ飛ばしてやろうとしたら自警団に止められてな。━うるせぇってやってたら……なぁ？　━あぁ、まさか自警団が俺達の方をちぎっては投げちぎっては投げってやり始めて……このザマさ。━揉もめに揉めて、最後は面めん倒どうクセぇから落ち着くまで入ってろって全員強制的にブタ箱入りだ。━しかし何故なぜワシまでぶち込まれたんかのぅ。何もしとりゃせんってのに。━アンタが両手に石材持ってたら勇者が剣けん抜ぬいてんのと一いつ緒しよだからな、そりゃぶっ飛ばされるわ！

　だはははははははっと男達は笑い出すのだが、その内の数人は、ふと何かに気付いて顔付きを神しん妙みようにさせていく。視線の先は、狼狽うろたえて席を立ったディナの胸の谷間である。

「げ、原因は不注意なわたしにあるのです。……皆みな様さまには……その、大変なご迷めい惑わくをおかけしてしまい、申し訳ないのです。ごめんなさいです」

　ディナが深々と頭を下げるのだが、そうするとなかなかにいい光景が見えるようで、真しん剣けんな眼まな差ざしの男達は「フッ」

と小さく格好つけた笑みを浮うかべる。

　──男としては当然のこと。──うむ、ところで物の本によれば美しい女性を助けた暁あかつきには、とてもいいことがあるとかなんとか……？

　あからさまなお礼の要求だったが、ディナにはうまく伝わらなかったようだ。

　彼女が不安げな様子でよくわからないというように首を傾かしげていると、助け船でも出すかのように店の奥からクラッツが現れる。

「はいはいはい、楽しい会話は注文の後で。今日はランチメニューが全然出てないからどんどん食べてってねー」

　クラッツは銀のお盆ぼんに載のせたカトラリーボックスを男達が座った卓たくやカウンターに流れるように置いていく。その軽かろやかで滑なめらかな動きは水中を行く魚のようだ。

　男達はその魚を捕まえようとするかのように、クラッツの尻しりへと手を伸ばすのだが……誰だれ一人ひとりとして触ふれられはしない。が、帰り道にクラッツの放つお盆による打だ撃げきはその全すべてが的確に手を伸ばした男達の頭頂部にヒットし、リズミカルな音を立てていった。

「はい各自、注文。食事でしょ？」

　──それより飲みモンだな！　──消毒しないと！　──とりあえず人数分ビールを！

「一、二の三の……二一人分のビールとステーキランチね。叔父おじさん、聞こえた？」

　──何か増えてねぇか!?　──しかも一番高いランチだぞ!!　──えげつねぇ!!

「おぅ、二一人分の、ステーキランチに……カニサラダセット、な」

　──さらに増えた!!　──しかも一番高いサラダセットだ!!　──えぇい、こうなったら酒だ、強めの酒で気合いを入れるぞ！　ビール取

りやめ！

　朝の興奮を残す男達が次々に勢いで酒の名を上げると、クラッツがカウンターの裏に入り、ワインに、ウィスキーに……と次々にグラスに注ぎ、合間にシェイカーを振ふり始める。

　テーブル席が一〇、カウンター席が八つという規模の店なのだが、グレーンとクラッツの二人で回しているので、今回のようにまとまって客が入ると二人はもう大おお忙いそがしだ。

「そこの、えっと、ディナさんだっけ。旅支じ度たくのためのお金、必要なのよね。良かったら手伝ってくれない？　その間の売上げに応じてバイト代出すから」

「えっ、は、はいぃ!?　わ、わたしが……ですか!?」

「そうそう、臨時ウェイトレス。どう？　お願いしたいんだけど」

「いえ、その、は、はい、でも、その……わ、わぁわわわたしに、で、できるのです？」

「セクハラにだけ注意すればね。さぁ、頑がん張ばって！」

　クラッツがウィンクをした瞬しゅん間かん、男達はハッとした。

　──ほぉ？　この娘むすめ、金が必要なのか。──そうか、それでクラッツちゃんは彼女にバイト代を出すためにわざと注文を……。──そういうことか！　──どうりでえげつねぇ注文間違いすると思ったぜ！　──それなら仕方ねぇ、どうせ半日潰つぶれて今日はろくに仕事になんねぇんだ、協力してやるか！　──おう、犬拾うのと一緒、助けたのなら最後まで責任持たねぇとな！　──ディナちゃんだっけ？　酒の追加、注文を取りに来てくれ！

「ほら、ディナさん、伝票これ持って注文聞いてきて！」

　クラッツから伝票とペンを投げ渡わたされると、さすがにディナもおろおろしつつも手を上げる男達のもとへと駆かけていく。



　慣れない手つきで注文を聞き、ペンを走らせる彼女の姿を見守る男達の視線は穏おだやかかつ、時折少々ゲスである。

　慌てふためき胸を揺ゆれ動かすディナの姿に、頬ほおの筋肉が緩ゆるんでしまうようだ。

　そしてそんな様子を窓の外から見かけた連中が一人、また一人と店内に入ってくる。

　モルトは一人で卓を占せん領りようしているのも何なので、クラッツ近くのカウンター席に移った。

「……ディナを利用して、大量注文承うけたまわろうってか？」

　ここの住民達を相手に商売するにはそれぐらいの器量がなければやっていられない。

　セクハラをかわして、酒を用意し、いい気分で金を払はらわせる……完かん璧ぺきな仕事である。

　クラッツはカウンターを挟はさんでモルトに顔を近づけると、ビールジョッキを置いて鼻先触れる距きよ離りでウィンクを一つ。

「注文取り消される前についじゃったから、奢おごりでいいわよ？」

　黙だまってなさい、ということなのだろう。モルトは泡あわの髭ひげを作って了りよう承しようを伝えた。

　恐おそらくディナに支度金を渡すため、というのもきっと間違いではないのだ。

　だから、モルトは安美亭が好きだ。いい店だ。儲もうけを考えつつも、それにとどまらない。

　新たな客の来店を報しらせるカウベルの音が店内に転がる。

　来客には、温かな小麦の香かおりが伴ともなっていた。

「あ、いらっしゃいです！」

「おっと、何だ新しい店員か？　景気いいじゃねぇか。昼過ぎだっ

てのにえらく繁はん盛じょうしてやがるし。……あ、お嬢じょう、グレーンの手は空いているか？」

　席に案内しようとするディナをかわし、モルトの隣となりに座るのは樽たる腹ばら見事な貫かん禄ろくのあるちょび髭の中年。前まえ掛かけエプロンに白いコックシャツ、コック帽ぼう……それらからも小麦の香りを漂ただよわせていたが、やはり一番の出所は彼が抱だく紙かみ袋ぶくろの中にある四本のバゲットだろう。

　リキュールの外れでパン工こう房ぼうをやっている豪ごう腕わんのパン職人、ピンガだ。

　彼が持って来た香こうばしい匂においはあまりに強きょう烈れつで、朝っぱらから一ひと悶もん着ちゃくやらかしてきた店内の男達の腹を鳴らすに十分だった。

　――焼き立てのバゲットは大好物なんだ。一本こっちくれよ、腹減ってやべぇんだ。

「ったくしょうがねぇな。ほれ、一本だけだぞ。グレーンに頼たのまれた試作品だ」

　ピンガが逞たくましすぎる腕うでででバゲットを一本、客に投げ渡した。

　試作品？　と、クラッツはシェイカーを振りながら不思議な顔をする。

「おぅ。スープ専用のバゲットが作れねぇかってな。とりあえず三本だけ焼いてみた」

　奥の方から、持ってこい、との野太い声がかかったので、バゲットが三本入った紙袋を、ピンガはクラッツに渡した。

「なぁ、ピンガ。三本だけ焼いたのに何で四本あるんだ？」

「あぁん？　モルト、どうした？　三本しかねぇじゃねぇか」

「いや、だからさ。今、一本客に渡しただろ」

　ピンガは「あー……」と声を漏もらしながら、バゲットが大好物だと宣った客を見やった。

客はバゲットの熱さに顔かおを綻ほころばせつつも、大きな口でガブリといった。歯が逝いった。

—あぎゃあぁあああぁあぁ!!　—今金属音したぞ!?　—こいつ前歯が二本も!?

「おっといけねぇ。間違えちまったか」

「何と間違えたんだよ!?」

床ゆかをのたうち回る男と、口を押さえて顔を青くするギャラリーを見やりながらモルトが問えば、ピンガは自信たっぷりに微笑ほほえんだ。

「次の『漢祭り』用、最高硬こう度どのバゲットを一緒に試し焼きしたのよ。どうだ、おぞましく硬かたいだろう？　自信作だ。一応スープに漬つけてふやかせばそれも喰くえるぞ？」

クラッツが不安げな顔をしつつ、手にした三本のバゲットそれぞれを指で弾はじけば、どれもやたらと硬い音がした。

「さすがに二本も三本も間違えねぇって。たまたま余計なのが入っていただけだ」

だといいけど。そんな不安を口にして、クラッツは厨ちゆう房ぼうへと入っていった。

「た、たたたたたたたた大変なのです！　血、血が……この方、前歯が……！」

ディナが唇くちびるをわなわなさせつつ震ふるえ出したので、モルトは席を立って彼女の肩かたを抱く。

「大だい丈じよう夫ぶだ、落ち着けディナ。異様に見えるだろうが、これもリキュールの日常風景だ」

その時、厨房の方からガギンという金属音がし、そして……。

「ぬあぁあああぁあああぁああぁあああぁああぁぁあぁああぁあぁぁああぁあ!!」

巨大な獣グレーンによる魂たましいの咆ほう哮こうが轟とどろ

き、店を揺らした。

「おっとこいつぁいけねぇ、まだ間違えちまってたか。だっはっはっやっちまったぜ！」

「……ピンガ、てめぇ、ぶっ殺す……!!」

　口から血を流すグレーンが、焼けたフライパンを振り上げながら店内に躍おどり込む。ピンガは床を転がっていたバゲットを拾い上げ、グレーンの一いち撃げきを受け止めるのだが……。

　猛もう烈れつな勢いの金属製フライパンがバゲットに触れた瞬間、強烈な衝しよう撃げき波はが生まれた。

　グラスが砕くだけ、客が転がり、モルトはディナを庇かばいつつ床に伏ふせた。

「こ、こここここれが、この街の日常風景なのです!?」

「……多分な」

　巨きよ漢かんの中年×２が客を吹ふき飛ばしながら武器ならぬ得え物ものを打ち付け合って衝撃波を放つ……そんな光景はさすがにあまりない。

　年に三度ぐらいである。

5

　妙みような街だった。辺境の地でありながら、普ふ通つうは大国の首都などでしか持ち得ない完全な上下水道施し設せつを有しつつも、どこか懐なつかしい田舎いなかの雰ふん囲い気きがある。

　またロテ国とオードビー国の首都、それらを繋つなぐ最短ルートであることから物流の通り道ということで余所よそ者ものも多い。しかしながら治安は良く、やけに落ち着いている。若い女や子供が人ひと気けのない道を当たり前に一人で歩いている光景はいささか奇き妙みようですらあった。

赤い鎧よろいのアセト・バクターは、そんな感想を得て六〇〇の兵が待つ本隊へと帰き還かんした。

リキュールの東側、荒こう野やに入る直前のエリア。そこでは辺り一帯に広がっていた大量の瓦が礫れきをどかし終え、すでに幕舎テントも建てられていた。それは一いつ般ぱんの軍が用いるものより数段大きく、かつ、いささか無む駄だな飾かざり付けがなされたものだ。

帝みかど直属の独立近衛大隊ともなると、建国時からの伝統で豪ごう奢しやなものが用意されるのだが……これはまったくもって無駄だと、アセトは思っていた。

女が上に立つと無駄が増える。ヌストルテ帝てい国こく建国初期からの悪あしき伝統だった。

幕舎に入れば、すでに卓が用意され、従者が地図を広げているところだった。

「首しゆ尾びは予定通り、船の管理のために二〇〇程ほどを置いてきたとはいえ、八〇〇という大隊規模の前では辺境の宿場町の議長など、頷うなずく以上のことはできまい、それ故ゆえに疑問だ、こちらから金品を差し出す必要があったのか？　……と、お考えで？」

アセトは振り返り、その声の主を睨にらみ付ける。

白いを通り越こして不気味なほど青白い肌はだに長い黒くろ髪かみを地に着きそうな程も伸のばし、漆しつ黒こくのドレスを纏まとった陰いん気きな女。その指先同様に細く長い体つきではあったが、いつも俯うつむき加か減げんでいるせいでやや小こ柄がらに見える。

今作戦の水先案内人コーデイネーターである、ロンシュータンだ。

彼女は初めて会った時からそうしているように、胸にボロボロの人形を抱きつつ、アセトを長い前まえ髪がみの隙すき間まから見上げる。

光をも吸い込むかのような禍まが々まがしい両目が細まり、口元には薄うすら笑い。愛あい想そ笑いのつもりなのかもしれないが、

何だか呪のろいでもかけられていそうな気がして、気味が悪かった。

　そもそも言葉一つとっても、嫌いやな女なのだ。あからさまに軍属ではないくせに、アセトにすら提案という体テイで命令する。指揮権はアセトにあったが実質的な指示は彼女から出ているようなものだ。第一独立近この衛え大隊長にしてアセトの兄であるグルコノ・バクターがどこぞから探し出して雇やとった逸材プロとはいえ、腹立たしかった。

　そして何より、こちらの言葉を先読みし、今のようにして口にする。まるで考えていることは全すべてお見通しだと言っているようで、これが苛いら立だちを加速させるのだ。

「アセト大隊長殿、あくまでヌストルテ帝国第二独立近衛大隊は何らかの理由により失しつ踪そうした重要人物捜そう索さくのため平和的に活動している……建前だけでもそう思わせると共に、それに加えて、あらかじめ礼金を払っておけば向こうも協力的になるというもの」

「……幕舎が街に近すぎる。ここはリキュール及およびロテ国内ではないのか？」

　疑問を先読みされた上、その疑問を勝手に答えられるのは面おも白しろくなかった。そのため、アセトはあえてさほど気になっていないことを尋たずねてみる。

「大戦時、リキュールにはロテ国の英えい傑けつ達が集まり、最強の盾たてとしてその役割を果たしたとか……このリキュールの街とその山と森だけはありとあらゆる魔ま導どう兵器を駆く使しされても停戦に至るまで落ちず、不落の城じよう塞さい都市として名を馳はせたものの、辺り一帯は馬でも数日かかるほどの広大な不毛の荒野に……それ故に、国境線が引き直される際には、リキュールの東とう端たんを基準として南北に線が引かれたようで……えぇ」

　つまり、街の東側から一歩出ればそこはオードビー国、ということなのだろう。

　実際、地図を見てみると、山や川の影えい響きようで多少左右に振ふれている箇か所しよもあるが、リキュールから南北へほぼ直線に国境線が引かれていた。

「城塞都市というには開かれた街だ。城じよう壁へきはおろか、門も何もない」

「大戦は一〇〇〇年も昔、何よりロテ国とオードビー国が長く交流を続けてきたので、大量の瓦礫がこの辺り一帯に散らばっていたのを見るに、壁かべは自然に壊こわれるに任せていた……ということでしょう、一応、名残なごりとして見張り台はありますが」

　ロンシュータンは人形を抱いたまま、地図の四箇所にペンで黒点を書き足した。

　リキュールの北東、南東、南西、北西。これらを結んだところに本来であれば厚く高い城壁があったのだろう。

　アセトが幕舎から出て目を凝こらしてみれば、なるほど、北と南にそれらしき塔とうが見えた。四階建てぐらいの高さはあるだろうか。辺りが平らな荒野であることを鑑かんがみるに──。

「あそこに兵を置ければ夜間はともかく、日中の監かん視しは相当楽になる、兵を休ませるにせよ、捜索するにせよ……だが、あれもロテ国内、難しいか……と、お考えで？」

　いつの間にかニヤニヤと嫌な笑みを浮うかべて、ロンシュータンが隣に立っていた。

　そのまったく気配を感じ取れない身のこなしに、アセトは思わず腰こしの剣けんに手を伸ばす。

　とはいえ、斬きる気などなかった。訓練してきたが故の反射的な動きである。

　だが、彼らはそうは思わなかったようだ。

　四名のローブを羽織った男女がいつの間にかアセトを取り囲んでいた。

　アセトの部下達がかなり遅おくれてからその状じよう況きようを察し、ローブの男女へ向かって剣を抜ぬく。

　アセトは手を上げ、部下に下がるよう指示を出した。

　陰気な女ロンシユータンは鮮せん血けつに似た鮮あざやかなルー

ジュの唇で、不気味な笑みを作る。

「街を包囲、そして議会との協約も締てい結けつ、オードビー国に許しを貰もらった上で陣じんを敷しいていると信用もさせられた……あとの仕事は捜さがし出すだけですよ、アセト大隊長殿」

　お前の仕事はそれだけだ。そう言っているのだと、アセトは思った。

　腹立たしい女だ、必ずどこかで鼻を明かしてやる……アセトはそう心の中で唱えるも、大人しく頷いてみせた。

　その心内も彼女は察しているのではないか、そんな疑いを抱きながら。

6

　アルコ・ホールはもちろんのこと、リキュールの街全体は包囲の一報以降、どこもかしこも騒さわがしくなっていた。それもそのはずで、旅の中ちゆう継けい地点であるリキュールの出入りが封ふうじられてしまうと、物資や情報はそこで止まり、商人によっては生せい鮮せん食品を運んでいる者だって多いので、死活問題に発展するのだ。

　また、街の中にいるモルト達には窺うかがい知れないが、リキュールを目指してやって来た者達が街に入れないというのも一大事のはずである。こちらに至っては引き返すにしたって補給がなければ物理的な意味で命に関かかわる恐おそれがある。

　加えて、物流の道はリキュールにとって大動脈に他ならない以上、それを封じるということは、街そのものもまた死にかねない。商売というのは信用がものを言うのだ。

　リキュールを抜けるルートが危険だという噂うわさが流れる……それだけで信用は落ち、流通量は減り、街の収入は減っていく。だからこそ、流通ルート上で問題が起こった場合、リキュールはロテ国の街でありながら、オードビー国側の流通ルートであっても自警団を出動させて問題解決に尽じん力りよくする。そして、それが出

来るようにするためにロテ国はもちろん、オードビー国に特別納税という形で多額の税金を払はらっているほどであった。

　そんな街と流通ルートの安全を守る自警団すら、議会は活動自じ粛しゆくを指示したらしく、今、議員達に対して自警団とそれを支持する住民達は猛烈な抗こう議ぎをしているらしい。

「噂では独断で協約を結んだマドラーが街中を引きずり回されとるらしいのぅ」

　なるほどね、とモルトは安美亭の隅すみっこにて魔導士ギルドの爺じいさんからそんなよくある話を聞いていた。ロテ国の有名大学を首席で卒業する寸前に大規模詐さ欺ぎ事件の容疑━証しよう拠こ不十分で不ふ起き訴そだったが━で退学になった過去を持つ天オマドラーが何かしら問題を起こすのは日常茶さ飯はん事じだったので、モルトはさほど興味を持たなかった。

　ただモルトにとって年下の兄弟で子し、長い付き合いである自警団団長のライがどれほど怒いかり狂くるっているか、想像して苦く笑しようするだけだ。

　安美亭は、今、祭りのように賑にぎわっていた。夕食時なのだ。

　おかげで食事を注文しない連中はモルトのように壁かべ際ぎわに立たされるという有様である。

「はいはーい、燻くん製せい盛り合わせおまちどおさま！　あ、ガーナ姐ねえさん、お酒の注文はちょっと待ってね！　ちょっと今日はグラスが少なくなちゃってて……」

　四〇人程度でいっぱいになる店だが、今はすでに五〇人に及ぼうという人数がおり、さすがにこれでは手が回らない。

　あげくの果てに最後の手段として取られているのは、テーブルごとに大皿料理を出してたまたま相席になった相手と折半するという安美亭ならではの荒あら技わざである。

　常連客ばかりで、誰だれもが顔見知りだとする店の特性を最大限に活いかしたやり方だった。

「お爺さん、調理場の魔光球、切れちゃったから充じゆう塡てんしておいて！　手元見えないって叔父おじさん苛立ってるの！　昼に

前歯欠けて機き嫌げん悪いから急ぎで！」

　お盆ぼんを小こ脇わきに抱かかえたクラッツが、握にぎり拳こぶしより一回り大きなガラス球──魔光球を魔導士ギルドの爺さんへと投げ渡わたした。

　爺さんは受け取る代わりにウィスキーをロックで要求し、フンッ！　と気合いを入れる。

　魔光球への魔力の充塡は魔導士ギルドのお家芸であり、実質的に唯ゆい一いつの仕事だ。

　元々は魔導球と呼ばれる魔力をエネルギー源とした魔導兵器であったが、それらはすでに過去の遺物となり果て、今も造られているのは夜の灯あかりである魔光球を始め、氷を作ったり、食材を冷やしたり……といった日常生活に使われる魔導球だけである。

　モルトの隣となりで気合いを入れている爺さんを含ふくめ、リキュールには三人の魔導士が派は遣けんされていたが、全員が老人である上、サボり癖ぐせが酷ひどく、魔光球の魔力が切れたからといって充塡されるには早くて数日、遅おそければ数週間もかかる。

　だが、この状況からもわかるように酒が関連する店の魔光球はいつも満タンだった。

　爺さんは額の汗あせを拭ぬぐうと、魔光球をキュッと擦こすり上げる。店内に設置されているやや黄色みがかった温かい光のものとは違ちがい、調理場用の白く煌こう々こうとした光が生まれ、近くにいた客の目を細めさせた。少し擦り下げ、光を調整してウィスキーのグラスと交こう換かんする。

　唇くちびるを湿しめらせた魔導士ギルドの爺さんが満足げに微笑ほほえんだ。

「ま、何にせよ、今しばらくの騒ぎじゃろぅな。重要人物とやらが見つかればそれで終しまいらしいしの。明日あしたから本格的に捜すそうじゃ」

「帝国の連中、誰を探しているんだ？　オードビー国に許しを貰っているといったって、街の西側、ロテ国内にすら二〇〇だかの騎き馬ば隊を配備させてるっていうじゃないか。多少の問題なんて気にしないっていう態度だ。ここまで大おお事ごとにするってこと

は……」

「噂で聞いた話じゃと、何でも緑の瞳ひとみをして、指輪だかを持っておる者を捜しているとかなんとか。しかしのぅ、緑の瞳の者など大勢いるじゃろうし、指輪なんぞいくらでも隠かくせてしまうから、それだけではのぅ。……まぁ、盗人ぬすつとか何かなんじゃろう」

……緑の瞳と指輪ね、とモルトは水のグラスを口に近づけつつ一人呟つぶやいた。

—いい、そっち持った？ —は、はいです！ —それじゃ行くよ、せぇーのっ!!

厨ちゆう房ぼうから声が聞こえ、モルトや店内の一部の客はそちらに視線を向ける。

現れたのは巨きよ大だいな鉄板を持つクラッツと、昼間から手伝いっぱなしのディナだ。

彼女らの登場に店内が歓かん声せいに包まれた。それは美人二人という華はなの登場もあったが、それ以上に店内に広がる猛もう烈れつないい匂においと巨大鉄板の上の大きな料理へのものだ。

その料理は異様だった。鉄板の上に肉にく厚あつな魚のステーキが大量に載のっているのはもちろんのこと、その鉄板の中央には巨大魚の頭が天を向いて載せられているのである。

マグロという巨大魚の兜かぶと焼きだ、と、厨房からそのオーガのような顔を覗のぞかせたグレーンが誇ほこらしげに言う。

その量はどう見ても一ひとテーブル分ですらない。店中の人間でつついて余りあるほどだ。

こういう時の常連客は訓練された軍人よりもきびきび動く。

全員がグラスを手に持って席を立つと、ディナとクラッツから男達が鉄板を受け取り、店の中央に寄せ集められたテーブルの上に置く。

重荷から解かれたクラッツは素す早ばやくカウンターの内側に入り、次々に入る酒のオーダーを捌さばいていく。そしてそれをディ

ナが慌あわてふためきながら客達に渡していった。

　先程まで街はどうなるのか、早くロテ国に行かなければ商売あがったりだ、俺は軍が嫌きらいでな、宿屋がボッタクリ価格になっててよ……といった暗い話題で占しめられていた店内は、今度こそ本当の祭りのように活気に溢あふれた。

「マグロは、コイツが、安く、売ってくれた。みんなで、ありがたく、喰くおう」

　店内にグレーンが入って来ると、若い坊ぼう主ず頭あたまの魚売りの肩かたを抱だいてみんなに紹しよう介かいした。

　何でも、オードビー国に売りに行く予定だったものの、封ふう鎖さを聞いて即そく座ざに諦あきらめ、馴な染じみのグレーンに安く売うり払ったらしい。

　魚ぎよ介かい類るいは魔ま導どう球の力で冷れい凍とうしてから運ぶ商人がほとんどなのだが、冷やすだけで凍こおらせず、味を落とさない商品を届けるということで評判の男である。当然のことながら時間との勝負になるため、リキュールで馬の交換と補給を行う以外は、南の漁港から目的地までノンストップで走り切る……という若者ならではの無茶な商売スタイルらしい。

　当然、今回のような足止めを喰らうと商品劣れつ化かは著いちじるしいために、リスキーな商売だ。

　しかし、そういう無茶をしている者を、この街の住民は何よりも好んだ。

　しかも未練がましく凍らせたり、明日には包囲が解かれるかもしれないから鮮せん度どが落ちてしまっても予定通りに届けよう……といったまどろっこしいことをせずに、その日の夜に売っぱらう決断をする辺りがたまらない。

　客達が若手商人の名を褒ほめ称たたえ、次々に彼へ酒を奢おごらんとする者達が名乗りを上げる。そして、匂いと騒ぎに釣つられて表を歩いていた者達が次々と扉とびらを潜くぐって来る。

　あっという間に、店内は足の踏ふみ場もないほどになった。

　また客の中には商人や他の料理店の者達までいるようで、彼らは

表面こんがり、中は赤みの残る超ちようレアなマグロのステーキを頬ほお張ばり、冷凍していない魚の旨うまさに目を見張ると、すぐさま魚売りに「うちの店にも卸おろせるか？」と我も我もと交こう渉しようを始めていた。

　今こ宵よい、若い魚売りは、損した分以上の儲もうけを手に入れるのは確実だろう。

　こういう仕込みのないイベントが次々に起こるこの店が、モルトはたまらなく好きだ。……酒とマグロに手を伸のばせる資金があれば、だが……。

　当然のことながら酒はもちろん、マグロ料理も無料ではない。全員一律で金を払うことになるので、モルトはできるだけ邪じや魔まにならないよう隅っこの方で小さくなる他なかった。

　話し相手だった魔導士ギルドの爺さんでさえマグロに……というか、ディナの胸に飛び付かん勢いで向かっていってしまったので少々寂さびしい。

　そのディナも客商売が性しように合っていたのか、最初はクラッツが作った酒を客に持っていくだけでてんやわんやの大おお騒さわぎだったが、今では額に汗を浮かべながら、客達に酒を渡し、時にはサービスのワインを注いで回り、クラッツのようにはかわせぬセクハラに戸と惑まどいながらも、何だかんだとうまくやっている。時折前まえ髪がみが分かれて両目が現れるのだが、その際には幼さ残す素す晴ばらしい笑顔が現れ、客達の息を止めさせていた。

　……さすがに切り上げた方がいいかもしれないとモルトも思っていたが、先さき程ほどから表を騎き兵へいが行き来するのが見えるので、ヘタに店から出るに出られなかった。

「モルト、暇ひまなら、少し、手伝え」

　グレーンに言われ、店内はもはや立食パーティの有様になったために邪魔になった椅い子すを彼と共に片付ける。……これでマグロ料理にありつけるかもしれない。

　モルトは口内に涎よだれを湛たたえながら、椅子を片付け、クラッツの代わりに客達から代金を受け取ったりもするのだが……結局「喰って良し」の声が掛かかることはなかった。

　そうして来店時は暗かった人々を笑顔にして夜が更ふけたアルコ・ホールへと送り出すと、店内には酔よい潰つぶれた数人と、もはや自分でカウンターに入って酒を作るような常連中の常連が幾いく人にんか残るだけとなったのだった。

　さすがにその頃ころにもなると、ディナは若じやつ干かんの笑みの残ざん滓しを口元に置いたまま、ぐったりとカウンターに突つっ伏ぷしていたので、モルトも期待を裏切られた傷心を抱えて隣に座る。

「……こ、こんなの初めて……なのです」

「それは二人だけの時に聞きたかったな」

「まるでカーニバルのようなのです。……活気に溢れていて、思わず乗せられてしまったのです。口の端はしが上がったまま戻もどりません」

「今日はちょっと忙いそがしかったかな。毎日がこれじゃクラッツでも耐たえられないさ」

　安美亭は夜が更けてくると、若いクラッツは先にはけるのだが、今宵ばかりはさすがにしばらく残って働き、先程になってようやく着き替がえに引っ込んだところだった。

「モルト、ディナ、ほれ、腹、減っただろ」

　厨房からグレーンが、大きな石いし鍋なべをグツグツ言わせながら現れた。

　石鍋がモルト達の前に置かれる。そこから漂ただよう芳ほう醇じゆんな香かおりは……トマトにニンニク、サフラン、しかしそれら以上に魚ぎよ介かいの匂いが濃のう密みつだった。熱々のブイヤベースである。

　朝からてんやわんやでろくな食事をしていなかったモルトは「ほわぁ……」と口を開けているディナを余所よそにトングで大きな海老えび、ムール貝と大きなハマグリ、そしてぶつ切りにされた小ぶりなカニをやや深めの取り皿に移し、スープを注いだ。

　落ち着け、モルト。そうグレーンが苦く笑しようしながら薄うす切ぎりのバゲットが入った小さい籠かごとフォークとスプーン、そ

してフィンガーボールを出してくれる。

「おやっさん、このバゲットって……」

「今日、ピンガが持って来た、スープ用のだ。……喰える方の、な」

　カットしてあるとはいえ……バゲットに手を伸ばすのはちょっと怖こわかったので後回しにすることにした。何より熱々のスープの誘ゆう惑わくが強い。

　スプーンで細かな油の浮ういた汁しるを掬すくう。ブイヤベースにしてはやや油が多い気がする。

　モルトはふぅふぅとスープに息を吹ふきかける。

　ふと、視線を感じて横を見れば、ディナが驚おどろいたような顔をしていた。そしておずおずと彼女もまた掬ったスープにモルトの見み様よう見み真似まねで息を吹きかける。

　どこか恥はずかしげな顔をする彼女を見ていて、そういえばスープに息を吹きかけるのはマナー違い反はんだったか、とモルトは気が付いたものの……安美亭ていでマナーを気き遣づかう客はあまり多くない。モルトもまた気にしないことにした。

　スープを口にする。わずかなとろみを感じ、そして……ぶっ飛んだ。

　思わず目を見開き、ディナと顔を見合わせる。おぞましい程の旨うま味みである。味としては薄うすめのトマトのそれ。しかしそれ以上に魚介の旨味が信じられないぐらい濃のう厚こうに仕込まれているのだ。生なま臭ぐさささなどこれっぽっちもないのはもちろんのこと、とにかく濃厚で、口内全体を包み込むかのようである。特に舌の付け根の辺りに猛烈に、くる。

「なんなのです、か……これ、こんなブイヤベース、初めて……おいしい」

　グレーンが嬉うれしそうにニヤニヤしていたが、モルトもディナもスープの味に魅みせられ、会話をするどころではない。二口三口と続けざまに味わい、止まらずに海老に手を付けた。

ディィナは「あちっ、あちちっ……」と妙みようにかわいらしい声を上げつつ殻からを剝むいていくが、モルトは足と頭をむしり取ると、殻ごと喰らう。バリバリと嚙かみ砕くだくに海老の風味が口内を暴れ、鼻から抜ぬけていく。「ぅんー!!」と思わず唸うなった。

綺き麗れいに身まで剝いたディナもまた、同様だ。微笑み合って、それからモルトは左手の海老の頭を軽くスープに浸ひたし、むしゃぶりついた。味わうは、海老の味み噌そ。ほろ苦い以上にまったりとした旨味。それがスープに交ざり、見事なまでの渾こん然ぜん一体の濃厚汁となって襲おそってきた。これにはモルトは瞼まぶたをギュッと閉じて天を仰あおぐ他にない。

恐おそる恐るモルトのマネで味噌を啜すすったディナも同様だ。

フィンガーボールで指を洗う間もなく、ムール貝にハマグリにと口に放ほうり込んでいく。どちらもムッチリとした食感にしっかりとした味わいで……特にハマグリはかなり上等のもの。食はむに潮の香りを伴ともなう味わいが口内に広がった。

そして、トドメにカニだ。小型のカニ一いつ匹ぴきを十字に一つまり、四つにぶつ切りにして鍋なべに入れただけのもの。脚あしは細く、さすがにほじるほどのものはないが……この脚をしゃぶれば染しみ出てくる汁……これが最高だった。小さいくせにこれでもかと言わんばかりにカニの旨味を発揮する。

具材は具材としての味を損そこなわず、出しガラにはなっていない。

だから具を食べる度たびに一つ、また一つと新しい味の出会いがあった。

煮に込こみ料理はどんな食材とて全すべてはスープの味に染まる。けれど、ブイヤベースは煮に込こみ過ぎない方が良しとされる料理であるから、食材の味がそのまま残っているのだろう。

ただ、モルトにはわからない。以前にここのブイヤベースを食べた。その時のは、こんなにもまろみのある、口全体を包み込むほどの味わいであっただろうか。

はぐ、ちゅっ、ちゅっ……という妙な音にモルトはカニの身を咥くわえたまま、そっと隣となりを見やる。するとディナもまた、頰

ほおを興奮でわずかに赤らめてカニにむしゃぶりついていた。

　ディナは視線に気が付いたのか、ハッとしてカニの身を咥えたまま、恐る恐るというようにモルトを長い前髪の隙すき間まから覗き見た。当然、モルトの瞳ひとみとディナの瞳が合う。

　ディナは恥ずかしさに顔を真っ赤にして、俯うつむいてしまう。……けれど、カニの身は相変わらず咥えたまま。その愛らしい姿にグレーンが笑い、モルトは微笑ほほえんだ。

「こ、これ、本当においしいのです。ブイヤベースに貝や海老が入っているのも初めてで……こんなにおいしくなるのですね。それにいつもは具とスープは別で出るので……」

「ふむ？　ブイヤベースは、本来、魚だけで、具を、分けて、出す。本格を謳うたう店のも、そういうのが多い。つっても、一いつ般ぱん的な店では、貝や海老が、入る、が……」

　本来は漁師料理だからそんな堅かた苦くるしく決める必要はないだろう、ということで安美亭のには味が良く、客が喜ぶものを入れているそうだ。

「今まで食べた中で一番これがおいしいのです！　本当……その、いっ、一いつ瞬しゅん我を失っていたような気すらするのです！」

　一瞬ではなかった気もして、モルトとグレーンはまた笑う。ディナはまた恥ずかしげに顔を赤らめ小さくなるものの……カニを自然とまた口に咥える。

　それは本当に無意識の行動だったようで、彼女は自分で口のそれに驚き、モルトとグレーンを見み渡わたして目を合わせ……そして、三人で、笑った。

　最初は俯いたまま、カニの脚を揺ゆらして。けれど、ディナはたまらず口からカニを除のけ、顔を上げ、そして肩を震わせての大笑い。

　その笑い声は、幼い少女がどろんこになりながら上げる笑声に似ていた。

　楽しいから、面おも白しろいから、ただそれだけの純じゆん粋すいなもの。

　当たり前なのに、大きくなるにつれて忘れてしまうような、そんな笑い方。

　グレーンはたまらなく嬉しそうな顔をすると、よく働いてくれた礼だ、と酒さか瓶びんをカウンターの下から取り出してくれる。

　嬉しいサービスに顔を綻ほころばせながらも、モルトは香こうばしさを漂わせる薄くスライスされたバゲットに手を伸ばす。表面はやたらと硬かたいくせに、内側はしっかりとした重さがあるもっちりのふわっふわ。……これなら食べられそうだ。

　ディナも昼間の惨さん劇げきを目もく撃げきしているので、恐る恐るバゲットに手を伸ばすが、柔やわらかな部分に触ふれた瞬間に大だい丈じよう夫ぶだとわかったようだ。早さっ速そくスープに浸し、頬張り、目を見開く。

「わっ、凄すごいです！　このバゲット、こんな……！」

　モルトも真似てみれば……確かに目を見開く。魚介の旨味をたっぷり詰つめ込んだスープをそのふわっふわ部分に大量に抱だき込んだバゲットは、とんでもないことになっていた。

　飲むだけだったはずのスープなのに、唐とう突とつに食はむことができるようになるのだ。

　単にパンに染しみただけと言えばそうなのだが、それが生み出す食感の差、ひたひたにしたパンはもはやとろとろに至り、喰くらい付いた時にデュワッと小麦の風味を伴いながら溢あふれ出るスープ……この柔らかくもまろやかな食感は他にはないものだ。

「……悔くやしいが、ピンガアイツのが一番、うまい。特にバゲットはな」

　彼はシュポンッと音を上げて酒瓶のコルクを抜くと、グラスにたっぷりと発はつ泡ぽう性のワインを注いで出してくれた。もちろん、二人分である。

「凄い、こんな……ブイヤベースもバゲットも、どちらも味がしっかりしてて……でも、だからこそ、どちらも負けてなくて……口に含ふくむと混じり合って、どちらの個性も殺すこともなく、ただただおいしさだけが高まって……」

「昼間のパン職人、ピンガっていうんだけど、おやっさんとは漢おとこ祭りの際にはライバルだったり、最強のパートナーだったりするんだ。料理にもそれがそのまんま出てる」

　グレーンはらしくもなく照れた顔を浮かべるが、何故なぜ照れたのかディナにはよくわからなかったようだ。しかしながらリキュール名物にして世界一血ち生なま臭ぐさいと称しようされる祭りの説明を食事時にするのは若じやっ干かん憚はばかられたし、常人に説明したところで理解も難しいだろうから、モルトもそれ以上言葉を続けなかった。

　そう。説明がしにくい……この街にはそういう人物や事象が割と多いのだ。

　苦笑しつつ、モルトはグラスの発泡ワインを呷あおる。ロゼの色合いをしたそれは程ほど良よい酸味に炭酸の刺し激げきと相まった軽かろやかなもの。度数はやや高めのようだが、これが魚介とはいえ濃厚なブイヤベースに実に丁度よく、喉のどをサッパリさせ、次の一口を誘さそってくる。

　ここまで来ると、もう会話もいらなかった。貝を喰らい、海老を喰らい、カニをしゃぶって、パンを浸してむしゃぶりついて、発泡ワインでスッキリして……そしてまた、喰らう。スープを飲む。顔には味わう真しん剣けんな表情と、味わいに悦よろこぶ微笑みとが交こう互ごに現れた。

　そんな時……ふと、モルトは気付く。

　ディナはカニを結構念入りにしゃぶるが……その際、ちょっと、エロいことに。

　アルコールが入ったせいか、晒さらす胸むな元もとまでをほんのり赤らめながら、ちゅばちゅぱっと音を立てる彼女の姿は……
ちょっと、そそる。

　そして、その後に指先を舐なめる仕草……それ一つとっても、何だかドキリとする。

　いつの間にかに妖よう艶えんさがほのかに漂い出しており、細められた目がやけに婀あ娜だっぽい。

「うわっ！　叔父おじさん、それ結構高いやつでしょ!?」

　クラッツだ。先程までの仕事着からラフなパーカー姿になって店内に戻もどってくるなり、その手と目は酒瓶に向かっていた。

「気にするな。今日みたいな、日には、これでいい」

　小さめのカクテルグラスに味見程度に少量注いで、それをクラッツに差し出すと、グレーンは半分ほど残っていた発泡ワインを一息に飲み干し、ゲェフゥ～、と特大のゲップ。

　呆あきれ顔のクラッツが、銀のお盆ぼんでグレーンの頭を小こ突づいた。

　近くにいた客はもちろん、ディナもまた声を出して笑っている。

　クラッツも苦笑するが、グラスを口に近づけるとすぐに真剣な表情に。彼女は発泡ワインの香りを確かめると、飲むというよりは舐めるように、最小限の量を舌の上で転がし、その味を舌と頭に刻む。

　まだ酒をきちんと飲める程に大人ではないため、クラッツの味見は一度一度が真剣勝負。一流でなくともいいが、腕うでのいいバーメイドにはなりたいとする彼女は少ない経験で、少しでも歩を進めようとしていた。今でも十分な腕うで前まえなのだが、それはまだ教科書テキスト通り。そこから自分の感性で酒を判断できるようになれば、一流店からスカウトの一つや二つが来るのは間ま違ちがいないだろう。

　その時クラッツはどうするのか。彼女の決断を見守るのは、きっとそう遠くないはずだ。

　明日あしたの仕込みのためにクラッツとグレーンが厨ちゆう房ぼうに向かおうとしたので、その背をモルトは呼び止めた。

「おやっさん。今夜のブイヤベース、絶対いつもと違うよな。明らかにまろみが強くて、味がどっしりしてた」

「酒が、入ると、舌が働く、な、モルト。……そうだ、今回、マグロのアラと、ゼラチン質たっぷりの、厚い皮で、スープを取った。濾こしたからわからない、と、思ったぞ」

　やっぱり、とモルトはニヤリと笑って酒を口にする。あのブイヤベースのどっしり感の秘密は巨きよ大だい魚ならではのものだった

か。たっぷりのゼラチンが溶とけ込んだからこそ、うっすらとしたとろみが付き、味に力強さが生まれていたのだ。

　今後、生マグロが安美亭に入荷したと聞きつけたら何としてでもここでブイヤベースを喰おう。モルトはそう心に決めたのだった。

　ディナがニンマリとした笑みを浮うかべてモルトを見ていた。

「これが、普ふ通つうの人の、当たり前の生活なのです……ね。一度でいいからと夢見ていたものが……思いがけずに……。とてもいいものなのです」

　チンピラに絡からまれ、街の人々に助けられ、何でも屋を雇やとい、ウェイトレスとして働き、パン職人とシェフの喧けん嘩かに巻き込まれ、そして……疲つかれた体に染み渡わたる料理を口にする。

　こんな一日を普通の人の、当たり前の生活と表現していいものか、モルトは少々迷った。

「まぁ、リキュールなら普通……かな」

「最高なのです。それを体験できたのは、まるでわたしも街の住民、その一人になれたようで……何故でしょう、とても嬉うれしいのです」

「昼間のアルコ・ホールも歩いてみるといい。その感覚をよりはっきり楽しめるさ」

　はい、と赤みのある顔で、緑の瞳を細めて微笑むディナ。その胸元では、動き回ったせいで谷間に隠かくれていた指輪がまた顔を出しつつあった。

　明日、アルコ・ホールを歩けるかどうかは正直際きわどいところかもしれない。

　窓の外はさすがに人の気配は減ってきたが、兵隊の行き来だけは変わっていなかった。

「ところでディナ、そろそろ教えてくれないか。今後の仕事をする上でも重要だ」

「何をでしょう？」

「……君は、何者だ」

　彼女はクスクスと笑って、モルトの体に寄りかかってくる。酔よっ払ぱらっているようだった。

「ただの町娘むすめなのです。いっぱい働いて、殿との方がたとおいしいご飯を食べて、お酒に酔ってしまう、そんな……。今は、それで、いさせて欲しいのです」

7

　結局、ほぼ一日を安美亭で過ごしてしまった。

　夜も更ふけ、あれだけ騒さわがしかった街からさすがに人ひと気けが失うせた時間に、モルトとディナは店を出ることにした。

　どうやら見回りの兵隊達はすでにローテーションを組み終えているらしく、いつまで待ってみたところで完全に消えることはないだろうとモルトが判断したのと……これ以上店にいるとディナが眠ねむってしまいそうだったからだ。

　安美亭を出ると、彼女はふらつきながらモルトに手を伸のばしてくる。

「モルト殿……お待ちください……のです……」

　彼女の細い両手がモルトの左ひだり腕うでを抱だき留め、そこにむぎゅっと胸を押しつけられる。

「おっと。おいおい、ディナ、君は……うっ」

　革コート越ごしでは残念ながらその感かん触しよくも温ぬくもりもいささか遠い。けれど彼女が抱きつくと同時に放った柔らかで湿しめった吐と息いきはモルトの首筋を優やさしく撫なで、背筋をゾワリとさせた。

最近ご無ぶ沙さ汰ただったせいもあってか、それとも思いの外ほか、酒が回っているのか、モルトは年とし甲が斐いもなく生なま唾つばを飲んだ。

このままどこか人目のつかないところへでも連れて行ってしまおうか。いやいやしかし依い頼らい主……だが……本人がその気なら……強ごう引いんなのは好みではないが、ディナの方から迫せまってきているのなら……何より男の体を彼女が求めているというのならばそれに応じるのもまた何でも屋の仕事ではないのか。

……そう、何でもするのが、何でも屋ではないか!!

「……ディナ、いいのかい？」

見上げる彼女の長い前まえ髪がみを指先で分ければ、わずかに潤うるむ緑の瞳ひとみが現れる。女の目だ、とモルトは思った。しかし、どこか硬さというか、異様な緊きん張ちようを感じるのは何故だろう。

……そうか、わかったぞ。初めてか。だから、恐きよう怖ふと緊張があるのか。なるほど。

モルトは微笑ほほえみつつも、目元だけはキリッと力を入れてある種の風格を漂ただよわせる。

「大丈夫、怖こわがらなくていい。……全部、俺に任せてくれればいいんだ」

はい……と、しっとりとした吐息でディナはモルトの頰ほおを撫でる。

もういくしかない。これで身を退ひいてしまってはそれこそ男が廃すたるというも—。

「おい、そこッ!!」

野太い声が轟とどろき、モルトに星空を仰あおがせる。

……わかっている、わかっていた。自分にこんなおいしい展開が何のリスクもなしにやって来るわけがないということを……。

そう、これが人生だ、いつもそうだ。おいしい展開が来たと思っ

たら必ず邪じや魔まが入る。

　モルトは夜空にため息を解き放ち、声の主を見やった。やって来たのは、馬に跨またがり槍やりを持った二騎き。ヌストルテ帝てい国こくの騎兵だ。……路上に長居しすぎたようだ。

　ディナがモルトの腕を抱いたまま背後へと回り、身を隠すように体を縮こめる。

「貴様、自警団だな？　活動は協約により禁止されているはずだ」

「違う。俺はただの何でも屋で……あぁ、ひょっとして長なが柄え刀とう見て言ってんのか」

　柄つかまでが鋼鉄製の長柄刀は自警団の標準的な装備であり、街中でこれを見かけた場合十中八九彼らで間違いない。しかしながら専売特許というわけでもなく、リキュールの特産品として──重過ぎるため鑑かん賞しよう目的としてだが──諸外国に売り出されていたりもする。

　モルトの場合は昔、自警団で見習いをやっていた際に技わざと長柄刀を自分のものとしたが、その後正規団員になることなく、何でも屋として生計を立てていた。

　そのことを説明すると、兵士達は面白くなさげな顔をし……そして、ふと、モルトの陰かげにいるディナを見やる。

「おい、そこの小こ娘むすめ。顔を見せろ。……顔だ、顔を見せろと言っているんだ」

「よせよ。……俺の女は恥はずかしがり屋でね。怖い兵士に顔なんて見せたくないとさ」

　ふざけるな、と、兵士は馬を下り、モルトを除のけようと彼の肩かたに手をかける。

「おいおい、街の住民に手出しはしない、それも協約じゃなかったか。ここの生まれじゃないが、俺は今じゃ住民登録した立派なリキュールの人間だぜ？」

　そう言われては、さすがに手を掛かけた兵も離はなれる他ない。しかし、まだ馬上にいた兵は機転が回るらしく、兜かぶとの下で目

を細めたのをモルトは見み逃のがさなかった。

「俺は、と言ったな？　ということは、お前のその後ろにいる小娘は住民ではないな。ならば、誰すい何かすることに何ら問題はないではないか。……それでもなお、邪魔するか？」

　モルトは口元に笑えみを作ったが、やせ我が慢まんだった。心内で己おのれのミスを悔くいる。

　そして、この場合彼らの行動を邪魔すると、果たして街側からヌストルテ帝国へ危害を与あたえたことになるかどうかを考える。……正直、際きわどいところだろう。

　この二人を相手に長柄刀を振ふるうのは難しくない。だが、それで街が危機に陥おちいるとまではいかなくとも、何かしらの罰則ペナルテイを街が払はらわされる可能性が高い。

　自分の勝手で街にそこまでの代だい償しようを払わせてしまうのか。それは心に重くのしかかる疑問──いや、心に湧わくのは払わせられないとする気持ちだった。

　それはきっと、モルトだけでなく、街の誰だれもがそう思っているに違いない。

　血の気の多い住民がこうも大人しくしているのは、誰もが街を大切に思っているが故ゆえだ。

　大切だからこそ他人に明け渡しているような今の状じよう況きようが許せず、しかしまたそうであるからこそ何もできない。

　議長マドラーが結んだ協約は、郷土愛を絶ぜつ妙みように利用したものになっている。

　まるで街の人間の特性を十分に理解し、手足を縛しばった上であえてストレスを与えるような内容であった。遅おそかれ早かれいつか必ず爆ばく発はつする……そんな時限制の爆ばく弾だんだ。

　モルトと兵達の間に緊張が走る。一いつ触しよく即そく発はつ。その気配が濃のう密みつになった時、状況を察したらしいディナが自らモルトの背から出ようとするのだが……それをモルトは手で制した。

槍を握にぎる兵士達の手に力が入った。モルトもまた、長柄刀を握る手に力を入れる。

互たがいに即そく応おうできるよう、心と体に気合いを入れ、静かに、ゆっくりと、臭わすように覇は気きを放ち合う。兵を下ろしていた馬が場の空気におののき、低く鳴いた。

──何か面白そうなことやってるじゃねぇか！　──ついに口火を切る奴やつが出たか？

敏びん感かんに闘とう争そうの気配を感じ取ったらしい住民達が一人また一人と大通りに現れてくる。

殺し合いになりかねない状況を察した上で、堂々と物見に一いつ般ぱん人じん達が現れ出すという妙みような事態に、兵士達は少しばかりたじろぎ出した。

「どうしたんだ、モルト。やるのか？　おい、なら、どうしてオレを誘さそわないんだよ」

少年のような声がモルトの背後から聞こえる。

静かな、落ち着いた声ではあったが、それ故に妙な凄すごみがある。振り返るまでもなく、その男は今にも爆発せんばかりの怒いかりを内に秘ひめているのがわかった。

モルトの脇わきを抜ぬけ、兵士達に小こ柄がらな体が触ふれるほどに近づくのは……若じやつ干かん一八歳ながら自警団団長のライである。今は軽装そう甲こうの鎧よろいも着けておらず、私服だった。

幼さ残る微笑みでも浮かべていれば年相応か、それより少し年下の純じゆん朴ぼくな少年にしか見えないだろうが……今、その体から発せられている覇気は完全に猛もう獣じゆうのそれだった。

そんなライの手にはモルトと同じく、彼の身長より巨大な長柄刀。

見た目は子供同然でも、兵達は肌はだでわかったはずだ。……まともじゃない、と。

ライが半歩踏ふみ出す。下馬した兵はもちろん、馬でさえ自おの

ずと一歩退いた。

「いざこざかぁ？　帝国のお強い兵士様がうまく解決してくださるんだろうなぁ」

　挑ちよう発はつ気味な声を上げながら、ライと同様にしてモルトの背後から五人の男達がズリ、ズリ、ズリリ……とあまり聞き慣れない音を立てて現れる。全員が一九〇を優に超こえる図ずう体たいを持ち、その大だい腿たい部ぶと見み間ま違ちがえそうな太い腕うでで鋼鉄製の長柄刀を軽々と握っていた。

　全員が自警団員である。ライと同じく私服に長柄刀という姿ではあったが、そのガタイの良さと異様な得え物ものが群れを成すことで生み出す威い圧あつ感は相当なものだ。

「協約で我々に手を出すことは……!!」

「証しよう拠こを残さなければ何も起きていないのと同じ……悪党共の言葉をたまには借りてみるのも悪くない。そうは思わないか、みんな」

　ライの言葉に、彼よりもずっと年上の男達が、おう！　と、笑いを含ふくむ声を上げた。

　協約という後ろ盾だてに頼たよっていた兵達もさすがにたじたじになり、ついには騎き馬ばが一目散に走り出すと、下りていた兵も馬に飛び乗り、捨て台詞ぜりふすら忘れて駆かけて行った。

　ライ達が野次馬達から拍はく手しゆと歓かん声せいを受ける中、モルトとディナは……自警団員が引きずってきたものに視線を向けた。

「あのさ。その引きずられているのって……まさか、議長のマドラーか……？」

　他に誰がいる？　と、ライが笑い、肩に長柄刀を乗せた。

「議場で天てん井じようから吊つるされててさ。話したいことがあったから、散歩に誘ったんだ。飽きたら牢ろうにでもぶち込んでおくさ。……それより、モルト。どうしてやるなら声をかけてくれないんだ。水くさいじゃないか」

「たまたま因いん縁ねんつけられただけさ、ライ。遠えん慮りよも何もねぇよ」

　かつては自警団見習いとして寝しん食しよくを共にした相手であり、昔はよく〝相棒〟と呼んでくれていたライ。その関係はモルトが自警団を離れても、そしてライが団長になった今でも、変わっていなかった。

「そっちは誰を連れてるんだ？　あんまり夜中に……うっ⁉」

　ライがモルトの背に隠れているディナを見るなり、短く呻うめいて固まった。

　その彼の視線を辿たどれば……ディナの胸むな元もとである。

「団長は俺達で持って帰る。お前はまた小うるせぇ連中に見つかる前にふけちまえ」

　よいしょ、と自警団員の一人が、ライの体を担ぎ上げる。

　彫ちよう像ぞうのようにディナの胸を見た体勢のままカチンコチンに固まってしまっているライ、そして引きずられすぎて襤ぼ褸ろ雑ぞう巾きんのようになったマドラーと共に、男達は去って行った。みんな、慣れたものである。

「あの、モルト殿……今し方の少年は、何故なぜあんなふうに固まってしまったのです？」

「ディナの胸のせいさ。昔から女に免めん疫えきがないんだよ、アイツ。オリービーさんっていう美人で巨きよ乳にゆうの姉がいるくせに、ちょいとばかしいい景色を目もく撃げきしたらすぐにカチンコチンさ。まぁ、普ふ通つうの男でもカチ──」

　ド下ネタが極ごく々ごく自然に口から零こぼれそうになって、モルトは慌あわてて口を噤つぐんだ。

　酒を飲み、馴な染じみの自警団員達に会ったせいで気が緩ゆるんでいるのかもしれない。

　引かれてないか、モルトは確かく認にんするように背後を見る。

　ディナはどこか惚ほうけた様子のまま、不思議そうな顔をして己

おのれの胸を見やっていた。

「いささか恥ずかしい服だとは思うのですが……これで、殿との方がたが……？　モルト殿も？」

「そりゃもちろん。とりあえずこの辺りを、ズブリとおいしく……」

　あ、マズイ、またド下ネタが……。気づきながらもモルトはディナの胸元に指を向ける。

　それをディナはやっぱり不思議そうな顔をして見……そして、何気なく体を寄せた。

　その瞬しゅん間かん、モルトの人差し指は革かわ紐ひもの縫ぬい目の隙すき間まに入り込み、ディナの汗あせばんだ肌の感かん触しょくを覚える。そして次に来るのは温もりとギュウギュウに押しつけてくる圧力—。

　モルトの人差し指は根元までがディナの胸の間に飲み込まれてしまった。

　目が点になる。そんなモルトをディナはゆっくりと見上げる。

　長い前髪から細く歪ゆがむ緑の双そう瞳とうが現れ、イタズラッ気に微笑んだ。

「……おいしく……食べちゃったのです」

　その表情、その言葉、指先に感じる感触と温もりに……モルトはたじたじとなって一歩下がって、指先を引き抜いた。

　その際の「……あっ」というディナの言葉一つさえも、モルトをたじろがせる。

「……食事も終えて気が抜けたせいか、疲つかれが……その、少し休みたくなりました……。モルト殿どの、あの……この後は……どうするのです？」

　女性が夜に疲れた、休みたいと言うのならば、もはやするべきことは一つしかなかった。

「わ、わかった。……金もないし、俺のアパートに行こう。そこでゆっくりすればいい」

　モルトはこれ以上面めん倒どう事に遭そう遇ぐうせぬよう、ディナの手を引き、帰路を急いだ。

　アルコ・ホール三番街にある三階建てのアパート、その角部屋という好条件な部屋がモルトの住処すみかである。当然そんな部屋だと家賃も相応なので、モルトの財政はいつだって苦しく、今現在も絶賛二ヶ月滞たい納のう中だった。

　窓からスポットライトのような月明かりが差し込み、青白く照らされていたベッドの上へ、ディナは部屋に入るなり倒たおれ込んだ。

　嵐あらしの数日間、ベッドの上で悶もん々もんと過ごしたので、少々臭におうかもしれない。

　モルトはちょっと不安になったが、ディナの様子からすると気にならないようだ。

「ちゃんとしたベッドは久しぶりなのです……それも洗い立てで、気持ちいい……」

　なに？　とモルトが長柄刀を部屋の壁かべに立て掛け、眉まゆ根ねを寄せた。言われてみるといつもヨレヨレのシーツは、今は糊のりの利きいたものになっているような気も……。

「港からリキュールまで、持っていたお金全部で乗り合い馬車に乗せて頂いたのですが、道中は危険だということで毎晩馬車の中で眠ねむってまして……」

　乗り合い馬車となると金額はさほどでもないはずだ。元々小金しか持っていなかったのかと尋たずねるのだが……彼女が口にした額は結構なものだ。何ということはない。ぼったくられたのだ。だが、大金を取ったことで満足したのか、ディナ本人には手出しされていなかったところを見るに、果たして安かったのか高かったのかは微び妙みようなところだろう。

「だから、こうしてゆっくり寝ねられることが嬉うれしく……あっ！」

　ディナが勢い良く半身を起こし、月明かりでもわかる程に顔を真っ赤にしていた。

「ご、ごめんなさいなのです！　あまりお酒に慣れておらず、ついうつらうつらして……お、お恥はずかしいところを……。モルト殿の寝しん室しつということは、その……つまり……そ、そういうことなのです……よね？　ごめんなさいです、心得ているつもりでしたのに……。だ、大だい丈じよう夫ぶなのです。勤めは果たせるかと……ただ、経験が……ごめんなさい、まだ先のことと思い、ほとんど学んでいなかったのです……。モルト殿にお任せしてしまうことになるかと思うのですが……それでも構わないと仰おつしやっていただけるのなら……」

「あ、あのな、ディナ。別に無理してすることじゃないし……何より、俺が欲ほしいのはあの指輪なわけで、だから……」

「は、はい。存じているのです。ですから、その……事前に房ぼう事じが行われるのは世間一般では普通のことだと、物の本にあったような……ち、違ちがうのです？」

　いいか悪いかで言えばもちろんいいのだが、モルトにはこの流れが理解できなかった。

「あ、あの、脱ぬいだ方が……よ、よろしいのです……よね……？」

　上ずった声を口にしながらディナはモルトに背を向け、胸元の革紐を解ほどこうとしていたが、震ふるえてうまく解けないようだ。

　モルトは革コートを脱ぎ捨て、ネクタイを緩めつつ、ベッドへ近づいた。

　ディナの背を抱だき締しめるように、彼女の腕にモルトは己の腕を沿わせる。

　ビクッと大きく震えたディナの耳元に口づけし、その髪かみにモルトは頰ほおを寄せた。

　絡からみ合う指は……ちょっと冷たい。緊きん張ちようしているのが嫌いやでも伝わってくる。

　ベッドに座る小柄なディナに覆おおい被かぶさるようにしたまま

モルトは彼女の手がぬくまるまでその手を握っていた。

　緊張でわけがわからないままに、気が付いたら終わっていた、というよりはきっといい。

　最初だからこそ、嫌な思い出にはさせまい。そう思う。

　そんなモルトの気持ちがディナにも伝わったのか、彼女は呼吸を落ち着け、指先が温まった頃ころに「……もう、大丈夫なのです」と俯うつむいたまま小さく声を出す。

「無理しないでいいんだ。今日は疲れてもいるだろうし、やめたっていい。……君のしたいようにすればいい」

「……したいように……？」

　肯こう定ていするように、モルトは彼女にそれと感じられるよう、髪に触れたまま頷うなずいた。

「教えてくれ。今、君は何がしたくて、何をしたくないんだ？　俺は何でも屋だ。どんなことにだって応こたえてみせる」

「わたしの……したいこと……」

　ディナはそっと胸に手をやり、首から細いチェーンで下げられたリングに触れた。

　月明かりに照らされるそれは何とも綺き麗れいな代しろ物ものである。七色どころではない鮮あざやかさだ。

　モルトがさりげなく目を凝こらせば、指輪はサイズ調整できるよう職人技のギミックが施ほどこされてもおり、それだけとってみても田舎いなか娘むすめが持てるようなものではないのが知れた。

「それ、大切なものかな」

「はい。これは、わたしの故郷で採れる石だけで作られている貴重なものなのです。大切かと問われれば……もちろん。でも……もう、モルト殿のものなのです」

　仕事が終わったらな。そう言ってモルトは小さく笑うが……どうしても、考えてしまう。

　ディナは大事なものだと言う。そもそもロテ国への旅費がなくて困っていたはずなのに、彼女は指輪を売るという発想を持ってなかった。そのくせして朝、安美亭で彼女はモルトにきっぱりとこれを渡わたすと決断し、そして今もなお、モルトに渡すことを躊ちゅう躇ちょしなかった。

　だとすると意味がわからない。モルトはどこかでディナが何かしらの理由からこの指輪を盗ぬすんだのではないか、だから帝てい国こくが追っていて……と考えていた。だが、売ろうとも思わない大事なものではあっても、モルトに渡すことに躊躇がないというのは……。

　大隊規模の軍が動く一品を、生きるためとはいえ諦あきらめるにしては、あまりに簡単過ぎる。

　……騙だまされているのではないか。その予感がした。もし、うまく包ほう囲い網もうを脱だつ出しゆつし、自由を得た時、ディナは約束を違たがえて姿をくらましたりする魂こん胆たんではないか。

　それは十分に考えられる。けれど、信じてしまいたい……否いな、騙されても構わないとする気持ちがどこかにあるのを、モルトは感じていた。

「……モルト殿……」

　ディナは頬を寄せ、モルトに体重を預けてくる。やめる気はなさそうだ。

「……ディナ……」

　ならば、それを拒きよ否ひする理由もない。モルトは今一度彼女の手を強く握にぎる。

「……モルト……？」

「あぁ、ディ……ん？　何で半疑問形だ？」

　というより、声は目前のディナの唇くちびるから発せられたものではなく、背後から聞こえたような気がした。その意味、そして声、状じよう況きよう……それらを踏ふまえて考えてみるに……。

　モルトは恐おそる恐る、ディナから顔を離はなして振ふり返った。

　扉とびらの隙間から顔を差し込んでいたリッツと、モロに目が合う。

「いやぁ、いい天気だな、リッツ。そうは思わないか？」

　キリッ、といい顔をして中身のない台詞せりふをモルトは吐はいてみたのだが……その顔面に飛び蹴げりをねじ込まれるのは止められなかった。

　ディナが驚おどろきの声を上げると共にモルトは吹ふっ飛とび、壁に後頭部を叩たたきつけ、攻こう撃げき者であるリッツはパジャマワンピースを揺ゆらしつつ綺麗に床ゆかへ着地する。

「夜よる遅おそくまで帰って来ないと思ったら……何女連れ込んでるわけ!?　誰だれ!?　仕事は!?　家賃は!?　正気!?」

「ち、違う、リッツ、違うんだ……これは仕事で、その、護衛をだな……」

「だったら余計にアンタが手を出してどうすんの!!　ふっざけんなぁ!!」

　瀕ひん死しのモルトにリッツはさらに蹴りを放つが、その彼女をディナがおろおろとしつつも止めようとする。

「だから、誰なのアンタは!?　そもそもこんな野の良ら犬みたいなのに手を出されたんだったらすぐに悲鳴の一つもあげなきゃダメでしょ!?」

「あぁ、そ、その、ご、ごめんなさい、作法がわからなくて……何なに分ぶん初めてで……」

「初めてって……だっ、だったら尚なお更さら声上げないとダメでしょ!?」

「ご、ごめんなさい、世間では声を上げるものなのですね。あ、あの、失礼を承知で尋ねるのですが、参考にどんな声がいいのか聞かせて欲しいのです」

「ど、どんなって……そりゃ、嫌ぁ！　とか、ダメぇ！　とか、助けてぇ！　とか……」

「な、なるほど！　それが初夜の礼儀作法マナーなのですね！」

「マナーじゃないから!!」

「え、でも初めては声を……え？　あ、あのバカでごめんなさい、よくわからないのです……嫌ぁ、ダメぇ、助けてぇと声を上げながら殿との方がたを受け入れるだけではダメ……？」

「絶対ダメでしょ!?」

「うぅ……難しいのです……。それに、もし助けてと声を上げて、本当に誰かが助けに来たらどうするのです？」

「絶対来てもらって！　すぐ!!　……あぁもう！　モルト！　この人なんなの!?」

「あ、その……えっと……話すと長くなるんだが、とりあえずリッツ、落ち着け。こちらの女性とはだな、無理矢理じゃなくて……俺に仕事を依い頼らいして……なぁ？」

「あ、はい。モルト殿とはそういう約束というか、契けい約やくというか……その流れで……」

「ま、まさか……体で払はらわせようとしたの!?　信じられない!!」

　尻尾しつぽを踏んづけられた猫ねこのようにリッツは喚わめき散らし出すのだが、やはり体力がないせいであまり続かず、すぐにゼェゼェと息を切らし始める。

　彼女は俯き加か減げんになりながら、ディナの乗るベッドを見やる。

「……人が一いつ生しよう懸けん命めいに……何で……」

　え？　なに？　とモルトは聞き返そうとするのだが……リッツがうっすら涙なみだ目めで唇を噛かみ、両手でパジャマワンピースの裾すそを握り絞しめているのを目前にすると……何も悪くない気がしたが、何となく「ごめん」と謝ってしまった。

モルトの頬にパチンと、先さき程ほどの飛び蹴りに比べるとあまりに弱々しい、年相応な平手を打ち、リッツは部屋を出て行ったのだった。

「あ、あの……モルト殿、あの子は……？」

「ここの大家の子でさ。俺の家賃回収係というか……」

モルトは叩かれた頬をポリポリ掻かきながらリッツについて説明しようとするのだけれど、改めて話すとなるとちょっと関係が複雑だった。

元々モルトを街に引き留めた一人、大家の娘、モルト専用家賃回収係、毎朝のように仕事に行けと起こしに──家賃滞納の時のみだが、基本滞納しているのでほぼ毎朝だ──来る、部屋の鍵かぎも持っているので出入り自由だから油断も隙すきもなく……。

「そんな感じでここ七年ぐらいかな。……まぁいつものことだから、気にしないでくれ」

モルトは恥ずかしげな気持ちで頭を掻くと、ディナは先程までの緊張や焦あせりを打ち消し、微笑ほほえみながら部屋を見回す。彼女は、クスリと笑った。

「……このアパートはメイドなどを雇やとってはいない……ですよね？」

「あぁ。立地が良くて、上下水道もあるから高いけどメイドはいないな。それが？」

「モルト殿、その、お節せつ介かいかもなのですが……今すぐ追い掛かけてあげて欲しいのです。……今し方のは、その、ともかくなのですが……ちゃんとしたお仕事をしていたのだときちんと説明してあげてください。そうでなければ、かわいそうなのです」

「別にいいさ。飲んだくれで常時家賃滞たい納のうの俺に軽けい蔑べつなんて当たり前だ。それより……」

モルトは飛び蹴りと平手を喰くらった顔で、何とかキリッとした表情を作り直す。そしてディナの唇を奪うばおうとするのだが……彼女の細い指先が入り込んで、邪じや魔まをした。

「ダメなのです。まずは……あの娘こを」

　ディナはモルトの腕うでから抜ぬけ出すと、ベッドから折りて前まえ髪がみをかき分けて両目を晒さらす。

　仕事を依頼した時と同じく、不安げに……けれど、踏ん張ろうと気力のある瞳ひとみで真まっ直すぐに、彼女はモルトを見つめた。

「モルト殿、リッツさんの所に行って、謝ってあげて欲しいのです。……彼女、きっとこの時間になるまでモルト殿の帰りをお待ちになっていたのです。……多分、ですけど」

　眉まゆ根ねに皺しわを作るモルトに、ディナは部屋を見回すように言った。

　出入り口近くに集められた酒の空あき瓶びん、畳たたまれたシャツ類、拾いものやら貰もらい物の雑貨が並ぶ棚たな、埃ほこりのない床、そして……ディナはベッドのシーツを撫なでた。

「部屋の掃そう除じに、洗い立てのシーツ……モルト殿がお帰りになった時に気持ちいいように、と気き遣づかいが……。そんな気がするのです」

　確かに部屋が少し変わっているのはわかっていた。

　ただ、気になるのは、ディナはモルトが朝方掃除したとは思わなかったのだろうか。

　そんな疑問をぶつけてみると、彼女は耳元に手を当てた。

「その、言いにくいのですが……ちょっとだけ、痛かったので」

「え!?　まだ何もしてないぞ!?」

　ディナの指先が次に向かったのはモルト。頬と顎あごだ。ジョリっと無ぶ精しよう髭ひげが音を立てた。

「お髭ひげなのです。お髭を剃そらないのにお部屋だけ掃除するのは、少しおかしいかと」

　言われてみるとその通りだ。さすがにぐうの音ねも出なかった。

「きっと褒ほめたり、喜んだりして欲しかったのです。ありがとうって。それなのにモルト殿はわたしと……。もしかしてこれまでも似たような事があったのではないのですか？」

「そりゃ何でも屋は取とっ払ぱらいだから、仕事が終われば金があるに違ちがいないって部屋を覗のぞきに来たり、部屋にいたりは……」

　その時、部屋が掃除されていたりしたかどうか……正直、モルトの記き憶おくにはない。

　ただ、ろくに洗せん濯たくも掃除もしないモルトでありながら部屋に不快感を持ったことはない。

　自分の部屋というのはそういうものだと思っていたのだが……。

「だから……モルト殿、お願い……いって……欲しいのです」

　モルトはボサボサになっていた己の頭を掻きつつ、ちょっと恥はずかしさを覚えた。

「その言葉は別のシチュエーションで聞きたかったな」

　下ネタだと気付けずに首を傾かしげるディナに待っているよう伝えて、モルトは部屋を出た。

　部屋の前にある階段を下りれば、リッツの家族が住む大部屋の玄げん関かん扉とびら前である。

　ノックしようかとも思ったが……扉の向こうにリッツがいるのは、さすがにわかった。

　気配がする。隠かくそうともしていない……いや、見つけて欲しそうな、そんな気配がする。

「なぁ、リッツ。……部屋、掃除してくれたんだよな。……ありがとうな」

　かすかに「……うっさい」という不満たらたらな声が聞こえる。

　気配と声の位置からするに、彼女は扉に寄りかかって膝ひざを抱かかえているようだ。

　だからモルトもまた、扉の前に膝をつき、リッツの耳の高さに顔を合わせた。

「朝、彼女から護衛の仕事を受けたんだ。報ほう酬しゅうは高そうな指輪。それは仕事が終わり次し第だい受け取ることになっている。だからまだ家賃は払えない。……それと、さっきのは……その、流れというか、酒が……うん、彼女、酒に弱かったみたいで、それでノリ的に……」

「……ノリで、あんなことするんだ」

　今度ははっきりと聞こえた、というより、聞こえるように発したのだろう。

　モルトは頭を掻き、言葉を探した。大人になればわかるさ、とクールに告げたところで、火に油かもしれない。子こ供ども扱あつかいすんな、とキレるだろう。



「酔よっ払ぱらってて、それで……いや、いいわけだな。下心が出ちゃったのは事実だよ」

　とはいえ「もう手は出しません」とは言えないので、モルトは話を別に振ることにした。

「なぁリッツ。これまでも度々、俺の部屋、掃除してくれてただろ。助かってた」

「……あっ……き、気付いてたんだ……。気付かれてないと……思ってた」

「あ、あぁ。もちろん気付いていたさ。お礼はちゃんと言えてなかったけど……今、まとめて言わせてくれ。リッツ、ありがとう。嬉うれしかった。そして何より、感謝してる」

　すると扉が開き……モルトの額にガンッとその角がぶち当てられて悶もん絶ぜつした。

「……あ、ごめん！　だ、大だい丈じよう夫ぶ……？」

　薄うす暗くら闇やみでもわかるほど赤い目をしたリッツが、のたうち回るモルトに手を伸のばしてくる。

　どうやら、ホラ吹いてんじゃねぇ！　という意味でのドア攻撃アタツクではなかったようだ。

　モルトが上半身を上げる。膝をついていたリッツは俯うつむき加減に、ごめん、と口にする。

　モルトもまた、俯くようにして彼女の額に己おのれの額を合わせ、同じ言葉を彼女へ返した。

　そうして、長い沈ちん黙もくの時間を二人で共有したが……始まりと同じように、どちらからともなく立ち上がった。

「護衛依頼したあの人に、謝った方がいい……かな」

「別に失礼はしてないだろうし、大丈夫じゃないかな。もう遅おそいし……」

　これ以上リッツに二人の時間に介かい入にゆうされるのは正直邪魔なので何とか部屋に帰そうとしたのだが……モルトの思おも惑わくはうまくいかなかった。

「ううん、ちゃんと謝っておく。それにモルトが一番危ないって伝えておかなきゃだし」

　リッツは笑ってみせ、それにモルトは微笑みを返す。

　……余計なことを！　と内心頭を抱えながら。

　そうして部屋に戻もどってみると……月明かり落ちるベッドに、ディナの姿がない。

　しまった、とモルトは思うものの、よく見たら床に脱ぬぎ捨てたモルトの革コートにくるまって寝ね息いきを立てる彼女の姿があった。

「ベッドで寝ればいいのに……よいしょっと」

　コートごとディナを抱だき上げると、長い前髪の間で瞼まぶたがうっすらと開かれる。

「……ごめんなさい……でも、ベッドは、モルト殿のためのものなのです……」

　うとうととするディナはそれでも薄うすく笑えみを作る。リッツはバツが悪そうな顔をしていた。

「リッツっていいます。あなたは？」

　ディナがスッとリッツへと手を伸ばした。手の甲こうを上にしたそれは頭を撫でるようでもあったが、手が向かったのはリッツの胸元だった。

　まるで手の甲へのキスを許すかのようなそれに、わけもわからず、リッツは下から掬すくうようにして手を重ねた。

「よろしくなのです、わたしはエンガディナ。エンガディナ・ヌストルテ」

　ヌストルテ？　と、リッツとモルトは声をハモらせ、そしてディ

ナは惚ほうけていた目を見開き「……あっ」と、短く声を漏もらしたのだった。

8

　深夜、議場では一二人のリキュール議員、そして、身の安全のために牢ろうに放ほうり込まれたマドラーの代わりとして、秘書のクリミオが卓たくを囲み、難しい顔をしていた。

　──すでに七件、協約違い反はんに当たる程ほどではないが、トラブルの報告が入っている。未いまだ連中の本格捜そう査さが始まる前の段階で、だ。明日あしたからは倍増では済まんだろう。──いくら住民に協約を破は棄きするまで待てと伝えたところで突とつ発ぱつ的に手を出してしまうことはあるはずじゃ。そうなれば……。──協約を反ほ故ごにした、その汚お名めいは街の信用を落とすに十分か。──マドラーが結んだ協約がおかしいのだが……それらを唱えたところで事実は変わらん。致ち命めい的ではないが、今後の街の発展にとって酷ひどく痛い。──このまま自治権を他国の、それも武力を抱えて現れた連中に渡わたしておくことこそ痛い！　いや、致命的ではないか！

　クリミオはあくびをしながら議員達の会話を聞き流していた。昼からずっと堂どう々どう巡めぐり。紛ふん糾きゅうにすら至っていない。要は八はっ方ぽう塞ふさがりで、どうにかしなければ、と悩なやんでいるだけでこれといった打開策の目安検討にすら至っていないのだ。

　こんなことで自分の睡すい眠みん時間が削けずられることに不満を覚えつつ、肌はだに悪あく影えい響きようが出なければいいな、と願いながらクリミオはメモを取り続ける。

　──放った使者はどうなったのじゃ？　──包囲を抜けた際に狼煙のろしを立てる手はずですが、未だそれらしきものは……。恐おそらく捕ほ縛ばくされたかと。──良かったではないか、これで他に助けを求める選せん択たく肢しは消えた。大国の力なければ維い持じ出来ぬ辺境の街、その汚名こそが信用の失しっ墜ついだ。──助けを請こわなくとも、オードビー国に本当に許しを得た上での駐ちゅう

屯とんなのか否いなかを確かく認にんするだけでも大きいじゃろう。もし向こうがホラを吹ふいていたとわかればこちらも強く出られる。協約とて破棄できる。──それが知れた段階でオードビー国の軍が動くはずだ。使者の帰き還かん、それを踏ふまえた上で交こう渉しように至る頃ころにはオードビー国とヌストルテ帝てい国こくの対立の図になり、リキュールは何も出来なかった被ひ害がい者しやというだけの存在になる。──ではこのままでいいというのか!! 屈くつ辱じよく的にでも街を解放せねば……!!　──そもそもリキュールに向かっている者達が追い返されているのなら、彼らから情報が軍に届くのも時間の問題だろう。──追い返して……？　あっ、おい、今日は何日だ!?　──どうした慌あわてて。──あ、あの一座が来るのがそろそろではなかったか!?

　その瞬しゆん間かん、小うるさかった議場が水を打ったように静かになり、全員が目を見開いた。

　その一方で、クリミオは口を開ける。あくびである。

　──しまった!!　すっかり忘れておった!!　──急げ、カレンダーを確認しろ!!　事前の連れん絡らくでは、確か……まずい!!　明後日あさつてには到とう着ちやくしてしまうぞ!!　そこでヌストルテのバカ共が追い返したら……。──くぅ!!　それだけは、それだけは避さけねばならん!!　ヌッちゃんの豊満なボディを見るのが楽しみで生きてきたというのに!!　──バカかお前！　それより前回から参戦するようになった新しん進しん気き鋭えいの若手、ショトちゃんの成長を愛めでることこそ大人の楽しみではないか!!　──俺の甥おいっ子こ、ようやく一八になったんだ。今年、いよいよアレが見られるって……マジで楽しみだって言って、今バイトして入場料稼かせいでてな……。もし来なかったら甥っ子は、いや、街の若い男共は……。

　議員達が絶望的な顔をし、誰だれもが頭を抱えた。

　うつらうつらしていたクリミオも卓に肘ひじをついて重くなってきた頭を支えた。

　そんな時、ドンっと、一人の議員が卓を叩たたき付け、彼女の眠ねむ気けを薄れさせる。

　──今一度使者を放つ。今度は闇やみ夜よに紛まぎれてではなく……山を抜く。一座に少しばかり待ってもらうよう交渉すると同

時に、オードビー国に確認……いや、わずかに距きょ離りが近いロテ国に救きゅう援えんを求めるのじゃ。……もはや恥はじも外聞もないと知れ!!

議員達全員が息を呑のみ、その目に鋭するどさを宿したのを、クリミオはアホを見る目で眺ながめていた。鬼き気き迫せまる迫はく力りょくで今の言葉を発したのが八〇歳の議員だということが、クリミオを呆あきれさせる。元気にも程があるだろう。

──魔ま獣じゅうが跋ばつ扈こする山を、ですか。確かにそちらからなら比ひ較かく的てき包囲を抜きやすいでしょう。しかしながらそこを抜けるのも猟りょう師しや自警団でもなければ一苦労、さらに言えば馬はあの厳しい山を越こえられない。つまり、包囲を抜けた後に発見されれば、帝国の騎き馬ば隊にすぐに追いつかれる。──賭かけですな。捕ほ縛ばく覚かく悟ごの上での。──女に苦労している若者に声をかけよう。一座のために命を賭とすことを躊躇ためらわぬ汚けがれなき英えい傑けつ達を可能な限り集め、魔獣が跋扈する山トルシユ・オマロンに解き放つ！　成功の暁あかつきにはショーの最前列の席を用意してやると伝えろ！　──いっそもう協約反故上等で自警団をぶつけてみるか？　調べでは大隊とはいえ、騎馬隊二五〇、歩兵隊六〇〇程度だそうではないか。二〇〇の自警団員に一人四人を相手にさせれば……。──俺も当初はその意見に賛成だったんだが……冷静になって考えてみると、歩兵に該がい当とうする自警団員では、騎馬隊を有する軍勢を駆く逐ちくするのは戦力比以上に無理があるんだ。何かしらを防衛するのは可能でもルート解放にはならない。

騎馬隊と歩兵が戦うとなった場合、基本的に歩兵が騎馬隊を完全に駆逐することはできない。そもそも騎馬の方が圧あっ倒とう的に戦力としては高い上に、機動力が違ちがうのだ。

単騎であればともかく、状じょう況きょうがマズイと判断すれば騎馬隊は最小限の犠ぎ牲せいを払はらうだけで逃にげられ、決定打を避けることが可能だった。特定の何かを守らねばならない、または待ち構える歩兵に向かって自ら飛び込まねばならない何らかの理由がない限り、歩兵と騎馬の優ゆう劣れつは変わらず、最後の一兵までの決戦には持ち込めない。

また、何より自警団はあくまで街の治安を守るための存在であるから、組織戦を想定した訓練をしていなかった。長なが柄え刀とう一本による個人での強さを求めている以上、騎乗での戦せん闘とう

はもちろん、密集隊形で方ほう陣じんを組んだり、盾たてなどを大量に用いての対騎兵戦術を用いようにも基き礎その訓練から始めなければならない。

　そんな説明を受けると、それもそうか、と議員達は納なつ得とくして諦あきらめ、山を抜いて使者を放つためにはどうしたらいいのかの議論へと移っていく。

　……確かに彼らの言う通りだ。だが、もしこれを今朝方、つまりマドラーが独断で協約を結ばず、緊きん急きゅう会議として議員達を集め、議論していたとしたら……誰もがこんな冷静に状況を判断できただろうか。

　直情径行、猪ちょ突とつ猛もう進しん、脳みそまで筋肉いっぱい夢いっぱい、腹が立つことがあればドロップキックで万ばん事じ解決……そんなリキュール出身の議員達が納得するわけがない。

　理由はどうあれ、マドラーは彼らが冷静になるまでの時間を稼いでいた……。

　議論を重ね始めた議員達をよそに、クリミオは静かに席を立つ。議場の壇だん上じょう、その片かた隅すみにはレンズが粉々に砕くだけ、フレームの歪ゆがんだマドラーの眼鏡めがねがまだ転がっていた。

「……予備の眼鏡でも、買っておいてあげますかね」

　眼鏡のツルの部分に、街の眼鏡職人の名。店を尋たずねれば彼の度数もわかるだろう。

　それぐらいはしてあげてもいい。自分は彼の秘書なのだ。

「それはそれとして……いつ終わるんですかね、このクソみたいな時間……」

　議論は今にも血を見んばかりの白熱したものになっていた。

　貧ひん乳にゅう派と巨きょ乳にゅう派で、だが。

●幕まく間あい『嵐あらしの夜、脱だつ出しゆつの刻とき』

　嵐が続いていた。船は苦手というわけではなかったが、この長い嵐は殊こと更さら酷ひどい。

　エンガディナが乗る船は大型のものではあったが、波に揺ゆられて激しく傾かたむく。当初はその度たびに足に力が入ったが、今では転てん覆ぷくの不安よりも船ふな酔よいの方が彼女の気を重くさせた。

　……いや、それよりも母の死というものが心の重荷になっているのか。

　旅先に届けられた女じよ帝てい崩ほう御ぎよの報しらせ。それは、即すなわち自らに定められていた役目を果たす刻ときがきたということに他ならなかった。

　帝みかどの地位など欲ほつしているわけではない。だが周りの人間、誰もが言う。

　エンガディナの先祖、一代で建国を成し遂とげ、国のため、民たみのために戦い抜いた初代女じよ帝ていのように皆みなを率いてくれ、と懇こん願がんする。

　考えるに頭が痛くなる。気分が落ちていく。

　今までは母の臣下達にひたすら従ってきただけで一六年生きてきた。

　今度は逆に自分が彼らを？　……できるわけがない。

　エンガディナは首から提げるチェーンに取り付けられた指輪に、指先で触ふれた。

「……姫ひめ様、姫様……起きてくださいまし、姫様」

　船室の外から緊きん張ちようを孕はらんだ従者の声が聞こえた。

エンガディナは転ばぬように真っ暗な部屋を慎しん重ちように歩き、扉とびらを開く。……船室の外にいるはずの警護兵が何故かいない。

　廊ろう下かは不気味に暗かったが、雨に濡ぬれ、長い髪かみを顔に張り付ける侍じ女じよの必死の形相は見て取れ、エンガディナの背筋に緊張を走らせた。

「危急の事態にございます、刺し客かくです、姫様を狙ねらって……」

　刺客？　しかしこの船はもちろん、船団自体がヌストルテ帝国の近この衛え兵だけで構成されているはず。しかも嵐の海である。どこから侵しん入にゅうできるというのか。

　そんなエンガディナの考えが顔に出ていたのか、侍女は首を振ふる。

「出航前、本来の船に乗り遅おくれたという理由で乗船した者達がいたのをお覚えですか？　……そうです、本国で雇やとわれたという怪あやしげな一派にございます……あれが今こ宵よい姫様を毒どく牙がにかけると話し合っているのを先程……ともかく、お急ぎください」

「アセトに連絡して警護を厚くするように……」

「なりません！　乗船を許可したのはあの者なのですよ！　信用できません！」

「あ、は、はい……ご、ごめんなさいです」

　エンガディナは侍女の勢いにたじたじになり、彼女が持ち込んだ服を言われるがままに纏まとい、硬こう貨かの収まる革かわ袋ぶくろを手にして船室を後にした。

　甲かん板ぱんに出てみれば、嵐の生ぬるい風が吹きつけ、猛もう烈れつな雨あま粒つぶと波の飛ひ沫まつが全身を打つ。

　酷い海だった。厚く黒い雲が空と海の境目を消している。見えるのは、船団を構成する船々の舳じく艫ろに取り付けられた、鈍にぶく光る大型魔光球の灯あかりだけだ。

「脱出用の船の準備は出来ております、急いでくださいまし」

　船の知識はさほど多くないエンガディナでも船の横腹にロープでぶら下がって揺れている脱出船ボートはあまりに頼たよりなく、海の藻も屑くずになる未来が透すけて見えてしまう。

　それでもエンガディナは侍女の言うままに脱出船に乗り込んだ。

「流れが港まで運んでくれます、そこから北へ、リキュールという街まで行ければロテ国首都への道があります……北へ……リキュールです、いいですね？」

　侍女は懐ふところから短たん剣けんを抜くと、脱出船を吊つっていた太いロープを一ひと振ふりで斬きり飛ばした。

　落下の浮ふ遊ゆう感が身を包んだ瞬間、ふと、エンガディナは疑問を抱いだく。

　あんな髪の長い侍女など、いただろうか……と。

　船は荒あれ狂くるう黒色の海へと落ち、彼女の疑問も何もかも……全すべてを闇やみが包み込んだ。

## ●２章『英えい雄ゆう降臨』

　モルトは街のざわめきで意識をわずかに取り戻もどすと寝ね返がえりを打つ。すると窓から差し込む朝日が顔に当たる。これがなかなかに強きよう烈れつで、さすがにモルトも起きざるを得なかった。

　背中も酷ひどく痛い。やはり硬かたい床ゆかの上……というか、アパートの階段前の廊下というものは寝ねるのに相応ふさわしい場所ではないようだ。

　モルトの部屋の扉が開き、ドアチェーンがガチャリと鳴る。

　中から顔を出したのはリッツだ。

「モルト、起きてる？　……外、騒さわがしいよ」

　寝ね癖ぐせ頭の彼女は廊下を見み渡わたし、他に誰も居ないのを確認してからチェーンを解く。

　部屋を覗のぞけばディナこと、エンガディナ・ヌストルテ王女はまだ寝息を立てていた。

「まだ寝てるか。疲つかれてたんだな。……しかし妙みようなもんだ。俺の部屋に美女が寝てるってのは。……部屋の主が追い出されて廊下で寝ているのはもっとおかしな光景だろうけど」

「何言ってるの。お姫様に万が一があったらどうする気？　まったくもう」

　昨夜、エンガディナがその素す性じようを漏もらしてしまった後、彼女は致いたし方ないという顔でその全てを話してくれていた。

　王女の身分、女帝であった母の崩ほう御ぎよ、そして旅先からの緊急帰国で近衛大隊と共に船団に揺られていたものの、嵐の夜に刺客に狙われ、命からがら脱出したということも……。

　王族であったことは驚おどろいたものの、帝てい国こく兵の狙いがディナであったのは大凡おおよそモルトの予想通りだったので平静を保てたが……リッツはもう大興奮である。

　何せ、彼女はこの辺境の地で生まれ育ち、街の外にろくに出たこともないのだ。本物のお姫様を見るなど初めてな上、それが命からがらの大逃とう走そう劇を繰くり広げ、自分の家アパート──のモルトの部屋──にいる……それが幼い少女にはあまりに衝しよう撃げき的だったらしく、しばらくは手品でも見せられているかのように、啞あ然ぜんとして固まっていたほどだった。

　それはまさにおとぎ話の中に入り込んだような気分……といったところなのだろう。

　それからはもうリッツは王女親衛隊である。枕まくらを持ち込むなり、モルトから鍵かぎを奪うばって部屋を追い出し、彼女の安全は自分が守ると言い始めたのだった。

「それよりモルト、外、帝国の兵隊達が騒いでるみたいなんだけど」

　廊下の窓から下を覗いてみると、そこにいたのは騎兵が二、歩兵が四の帝国兵。アパート前の民家の主あるじと何か話しているようだった。

　静かに窓を開けてみると、中に入れろ、調べさせろと喚わめいているのが聞こえてくる。

　その身勝手な言い分はもちろんだが、高圧的な物言いがそこの住民はもちろん、近きん隣りんからも反発を招いているようだった。

　かなりの人数が往来に現れ、事の成り行きを見守りつつ、帝国への不満を叫さけんでいる。

　例の協約は中央掲けい示じ板ばんに内容が張り出されているし、人の口から口に伝わっているだろうから、互たがいに手を出しはしないだろうが……このアパートに兵が来るのも時間の問題か。

「……リッツ、このアパートって人を隠かくせる場所あったか？」

　リッツが頷うなずく。三階廊ろう下か端はしから天てん井じよう裏うらに入れるらしい。七年近くも住んでいるモルトでも知らな

かったので、まず気付かれることはないだろう。

　モルトはディナを起こしてリッツに任せ、一人自室に残った。やるべきことがあるのだ。

「ったく、仕事熱心な男だぜ……俺は」

　モルトはサパッと革コートを脱ぬぎ捨て、ドフドフと重い音と共に鉄板仕込みのブーツと靴くつ下したを脱ぎ飛ばし、ベルトをカチャリと鳴らして外し、ズバッとパンツごと全てを下ろす。

　圧あつ倒とう的な開放感にトドメをさすようにグワッとシャツをも荒あら々あらしく脱ぎ捨て……ついに生まれたままの姿に成り果てれば、腰こしに手を当て、窓からの朝日を全身に浴びた。

　あまりに清すが々すがしい気分に、モルトの口元が緩ゆるむ。しかしケツにはキュッと力を入れる。

「エンガディナ様は隠したよ、モル……ちょっ!?」

　モルトが仁に王おう立ちのまま腰を捻ひねるようにして振り返ってみれば、リッツが扉を開けたまま固まり、口だけパクパクと酸欠の魚のように動いていた。

「驚くなよ、リッツ。俺はただ自室で裸はだかになっているだけだ。何もおかしなことはない。……そしてこれから行うのは、この部屋に女が寝ね泊とまりしていたという痕こん跡せきを消すために必要なことなんだ。……そう、仕事として!!」

「痕跡を消すのに何で全ぜん裸らになるわけ!?　抜ぬけ毛げとか拾えばいいだけでしょ!?」

「これだ、これだからリッツ、おまえはお子ちゃまなんだ。……いいか、人は常に体たい臭しゅうというものがあって、密着している衣服は当然ながら寝しん具ぐにも相当強く残る。それも洗い立てだというのなら、尚なお更さらだ。そんなもの、女に飢うえてる兵士なら、いや、男なら誰だれでもすぐにわかるだろう。……だから、俺はこれから彼女の温ぬくもりと匂においが残るベッドにダイブし、全身全ぜん霊れいをかけてその痕跡を打ち消そうというわけだ！　とぅっ!!」

　モルトは、飛んだ。一晩中ディナが眠ねむっていたベッドの上

へ。乱れたシーツの上へ。その久しく体で感じていない女性の温もりを全身で味わおうとして。

　リッツも、飛んだ。見事な助走から己おのれの身長を越こえる高さにまで飛び上り、両足を揃そろえ、背筋を床と水平にしての美しいまでのドロップキックだ。

「とぅっ──じゃない!!」

　飛び上がったモルトのケツに強烈な衝撃が逬ほとばしる。

　その衝撃エネルギーはモルトの体を吹ふっ飛とばすに十分だった。

　モルトの体は乱れたベッドを通り越し、空中で回転しつつ窓まど枠わくへ。

　ケツでガラスを粉ふん砕さいし、そして……モルトは地上七メートルにて全身に朝日を浴びた。

「フッ、今日も快晴だぜ」

　雲一つない、見事な晴れ。リキュールにはあまりない三階建ての窓から飛び出したとなれば、見上げる碧へき空くうを邪じゃ魔まするものは何もなかった。

　視界いっぱいの碧あお。この大きな空を独ひとり占じめ。

　──あぁ、俺は今、空を抱いている。

　全身に太陽を浴び、風を感じ、空を抱いている。

　世界を丸ごと自分の物にしたかのよう。

　そんな詩的な感想を胸に抱き……モルトは浮遊感に包まれ、落ち

ていった。

　全裸で。

1

「マドラーさんの代わりの眼鏡めがねですね。はい、前と同じのならストックありますよ」

　アルコ・ホールにある眼鏡屋に行くと、大きな眼鏡のかわいらしい娘むすめが笑え顔がおで応じた。

　クリミオは、ではそれを、と告げるものの……よくよく考えるとおかしいと気が付く。

　いくら常連でも調整済みのレンズが常にストックしてあるとは思えない。都市部の大型店とは違ちがう、小さな職人家族だけでやっている店なのだ。

「マドラーさんは頻ひん繁ぱんに眼鏡を壊こわされるので、お父ちゃんが……あ、いえ、店長がいつでも代わりが出せるようにっていつも予備を用意しているんです。眼鏡がないというだけで優ゆう秀しゆうな人間の仕事を遅らせていては街の損失だ、って」

「優秀、ですか。まぁ、秀ひいでてはいますね、あの人も。……悪い方にですが」

「家が近所で、あたしも小さい頃ころから勉強とかよく見てもらってたんです。マドラーさん、親切で頭が良くて。だから、うちも議長選挙の時は──」

　このよく喋しやべる眼鏡屋の娘にとってマドラーは幼おさな馴な染じみか、近所のお兄ちゃんといった存在だったらしい。あの鋭するどく知的で悪人面づらをした男の幼少期など想像もつかないが、話からするに当時はまだ性しよう根ねの悪さを持っていなかったようだ。

　単に外に出していなかったのか、それともその後に根付いたもの

なのか……。

　クリミオは顎あご先さきに手を当て、空を見上げるようにして彼の過去を考える。

　その様子に話を聞いてないと察したのか、眼鏡屋の娘は「あー……えへへ……」と寂さびしそうに愛あい想そ笑いを浮うかべた。

「眼鏡、すぐに用意しますね。……それにしても、今日はいい天気ですねぇ。一昨日おとといまではあんなに降ってたのに、今は燦さん々さんと──」

　パリン、と軽かろやかな音がして、クリミオと眼鏡屋の娘は店の軒のき先さきから見える、アルコ・ホール三番街に建つアパートを見やった。

　ケツが見えた。それもパンツなどという軟なん弱じゃくな物など一いつ切さい身につけない、割れ目を見せつけんが如ごとくの素す肌はだのケツが、三階の窓をぶち破って空へ──。

　ケツ、というか全裸の男は、何故か空に向かってちょっといい顔をして微笑ほほえみつつ……落ちていった。ドンガラガッシャンと何かが破は壊かいされる盛せい大だいな音と共に、悲鳴や馬の嘶いななきと兵達のものらしい「何だこいつは!?」という怒ど声せいが、クリミオ達の耳にまで届く。

「さ、燦々と……お尻しりが……」

「降りましたね、今」

　そろそろ秘書を辞やめて故郷にでも帰るべき刻ときかもしれない。

　バイオレンスには慣れてきたが、ついに変態までが跋ばつ扈こするようになったらしい。

　さすがに三階から爽さわやかな微笑みと共に落下する全裸の男を〝よくあること〟と許容する器うつわはクリミオにはない。

　クリミオはため息と共に、引ひっ越こし費用について思いを馳はせた。

──漢おとこだ、漢が現れたぞ!!　──そうか、こんなやり方があったのか!!

七メートルから全裸ダイブを敢かん行こうし終えたモルトが地面でもんどり打って藻も掻がいていると、周りからよくわからない歓かん声せいが上がっているのに気が付いた。

いつの間にやら男達に両りよう腕うでをつかまれて立たせられ、わけがわからないままにモルトは住民と揉めている兵達の前へと強制的に連れて行かれる。

「な、何だ貴様は!?　何故なぜ今、空から降って……というか、何故全裸でいる!?」

騎き馬ばの上からリーダー格らしき兵が喚き、歩兵達も家に入れろ、中を見せろの悶もん着ちやくをしている場合ではないと察したのか、慌あわてふためきながら槍やりを構えてモルトへ向ける。

「いや、何だ貴様はって言われても……その、と、とりあえず服を……」

んまぁ！　と、近隣のおばちゃん達がモルトの裸ら体たいに見入る。顔見知りだからこその恥はずかしさがモルトを襲おそうのだが……両りよう脇わきをつかまれているので隠すに隠せない。

放せ、と力を込こめるのだが、住民達の腕の力は強い。その上、兵はもちろん、野次馬達にも聞こえるように彼らは声を張り上げ始めた。

──モルトはアルコ・ホール三番街の何でも屋だ!!　──彼はあえて武器を捨て、服を脱ぎ、無防備な状態で空からダイブするという離はなれ業わざをやってのけた!!　これは非暴力・不服従という主張に他ならない!!　──そう、彼は協約を守りつつ、平和的に、かつ、この野や蛮ばん極きわまる兵達に強力な抗こう議ぎを叩たたき付けたのだ!!

モルトは思う。──あ、これヤバイ流れだ、と。

リキュールは強い漢が好きであり、無茶・無む謀ぼうが大好きで、ノリがいい。その性格が影えい響きようして、勘かん違ちがいや思い込みだけで誰かしらが英えい雄ゆうに祭り上げられる事件がたまにあるのだが……まさに、今、それが自分の身に起ころうとしているのをモルトはひしひしと感じた。

「いや、あのな、みんな……これは、その……抗議っていうか、単にリッツに……」

──リッツちゃんを助けるため……幼い少女の涙なみだを止めるためにモルトは自ら危険を!? ──感動的だ!! ──今、後世に語り継つがれるべき英雄譚たんが生まれたのだ!!

「生まれてねぇよ！　全力の捏ねつ造ぞうエピソードじゃねぇか!!」

しかしモルトの声は辺り一帯を包んだ歓声が打ち消していた。

これはまずい。かなりまずい。このままでは英雄として祭り上げられるのはもちろんのこと、自じ称しようリキュールの歴史家なる街の老人達が暇ひま潰つぶしと営利目的のために、この出来事を面おも白しろおかしく意図的に尾おひれはひれを付けた上で書しよ籍せき化しかねない。

──見ろ、兵達がビビってるぜ!! ──そりゃそうだ、アイツらだって協約がある以上何もできねぇんだ!! ──ビビッた方が負けだ!! おい、みんな!! ──おう、俺達も脱ぐぞ!! ──そうだ、俺達もモルトに続け!! 英雄に続け!! 服を脱げ!!

あらまぁ!! と、老婦人達が悲鳴とも歓声ともつかない声を上げる中、往来の男達が次々に、鮮あざやかに、躊躇ためらいなく、その衣服を脱ぎ捨てていく。

裸に成り果てれば誰もが腰に手を当て、胸を張り、誇ほこらしげな顔をする。その数、三十数人。……いや、それだけには止まらない。モルトが見回せば、家々の屋根に立って事の成り行きを見守っていた男達も服を脱ぎ捨て、胸を張り、兵達に股こ間かんを向けている。

それはこの状じよう況きようを知らぬ遠くの者達にも見えている

はずであり……単なるハイクオリティな露ろ出しゆつ狂きよう以外の何物でもないはずなのだが……やはり誰もが誇らしげである。

　これが俺だ、俺達だ、リキュールの漢なのだ、と誰もが声でなく体で言い放っている。

　その行動は、恐おそらく世界的に見ても希け有うといっていい程ほどに圧倒的かつ無意味なプレッシャーを兵達に与あたえていた。

「……な、何だ、なんなんだコイツらは!!」

　槍を構える兵達がビビり始め、馬もまた本能的な恐きよう怖ふを覚えて後ずさり始めた。

　それを見た男達はモルトを筆頭に……というか、モルトを背後から押して前に行かせ、それから全員でじわり、じわり、と距きよ離りを詰つめていく。

「くっ！　……退け!!　モルトとやら、これは上に報告するぞ!!　覚えていろ!!」

　圧力プレツシヤーに押し負けたリーダー格の騎馬が退たい却きやくすると共に、他の兵達も踵きびすを返し、一目散に撤てつ退たいを開始した。

　男達は腹の底からの盛大な歓声を上げげた。勝利の鬨ときの声である。その声に引き寄せられ……というか、恐らく屋根の上にいる全裸共を見た住民達が何事かとアルコ・ホールに群れを成して駆かけつけてきて……辺り一帯の混乱は、もはや収拾がつかなくなりつつあった。

　誰も彼もが全裸の男達を称たたえ、そして全裸の男達はモルトを称えた。

　そして、わけがわからないままにモルトは裸の男達に担かつぎ上げられ、わっしょいわっしょいと空高く胴どう上あげされ、股間のものをダバダバと激しく揺ゆれ動かしたのだった。

「もう、何が何やら……。なんなんだよ、本当に……ん？」

　揺れ動く視界ので、モルトは恐れていたものを見つけてしまう。

　……群衆の中で熱心にメモ帳にペンを走らせる老人の姿である。

「上空より全ぜん裸らで舞まい降りし男、モルト。その者、帝てい国こく軍と民たみの間に己おのれの素す肌はだを差し込み、平和、そして、非暴力と不服従を唱えた。彼の姿に目覚めし民は、彼を慕したいて服を脱ぬぎ、己らの肉体と誇りを盾たてとし武器とし、帝国へと抗あらがったのだ。この日の出来事を後に人々は……『裸はだか革命』、いや、『裸はだか英えい雄ゆうの降臨』と呼ぶ……じゃな!!　これはいけるぞ!!」

　リキュール図書館〈街の歴史コーナー〉に『裸英雄モルト　～非暴力と不服従～』の入荷が決定した瞬しゅん間かんである。

３

「だから、そういう面白そうなことするなら、連れん絡らくしろって」

「ライ、お前にはわからないんだよ。あの流れを……坂道を転げ落ちるように祭り上げられるあの感覚……おぞましいぞ。捏造で英雄にされたんだぞ……」

　英雄になるのはいいことだろ、とライは落ち込むモルトの肩かたを叩く。

　昼を過ぎた頃にはアルコ・ホールも普ふ段だんの空気を取り戻もどしていた。

　それまではイベントのノリで次々に裸になる連中が続出しており、「全裸で帝国の幕舎に押し込もうぜ！」とどこかのバカが言い始めるのはもはや時間の問題だった。

　そりゃ裸の男数十人が押し寄せたら連中もビビるだろうが、さすがに武力行使されるのは目に見えていたのと、リキュールは変態が集つどう街として有名になりかねなかったので、活動自じ粛しゅく中とはいえ自警団員達が仕方なく人を散らしに入ってくれたのだった。

　その間、モルトは先程の自称歴史家の老人と新聞記者からひたすら質しつ問もん攻ぜめにあっており、今し方ようやく解放されて服を着たところだ。しかも部屋に戻ればリッツがディナの痕こん跡せきを消すというので大おお掃そう除じを始めており、部屋に籠こもることも許されず、アパートの玄げん関かん前に座って時を無む為いに潰つぶすしかない、という酷ひどい状況だった。

「それじゃオレもそろそろ行くわ。まだ服を脱ぎたがる奴やつもいるだろうから、見回るよ」

「さっき脱いでいた連中は要注意だぞ、ライ。誰だれが誰やらだろうが……」

　全員覚えているさ、とライは少年染みた笑えみを浮かべると、手にしていた長なが柄え刀とうをモルトの肩に立て掛かけている長柄刀にぶつけて鈍にぶい金属音を鳴らし、立ち去っていった。

　よく分からない疲ひ労ろうと心の傷を抱かかえ、一人モルトは空を見上げる。

「……過ぎたことは仕方がない。そう、仕方がないんだ……もういい、忘れ……はしないだろうけど。どうしようもないもんな……。ともかく大事なのはこれからどうするかだ」

　狙ねらわれたお姫ひめ様さまを如何いかにして守るのか。

　街を包囲している大隊の隊長、アセト・バクターなる男が果たして刺し客かくを送り込んだ側なのか否いなかがわからないものの、侍じ女じょの言葉を信じるなら敵として考えるべきだった。

　ディナが言うには知己であるロテ国のシャルロッテ王おう妃ひならば必ず助けてくれるし、外交ルートで真実を祖国ヌストルテに伝え、敵を炙あぶり出した後に帰国するという手段もあるはず……とのことだが、そもそもロテ国への道のりが楽ではないだろう。

　包囲を何とか抜ぬいたとしても、そこからは見晴らしの良い荒こう野やだ。追つい撃げきは避さけられない。

　普ふ通つうであれば検問を敷しいて捜さがし人でないと判れば行き来させたりもするはずだが、一いつ切さいのそれをやっていない……つまり、街は完全封ふう鎖さの状態にある。手紙一つ通さないとする徹てつ底ていした強行。当然ながらそんな無茶は長く続け

ることは不可能だ。必ずロテ国かオードビー国が介かい入にゅうしてくる。……つまり、それをされる前にケリを付ける気でいるのだ。

　昨夜リッツが百科事典でヌストルテ帝国を調べたところ、建国時からして戦争を好み、それによって栄えた歴史を持つらしい。ならば街を落とすぐらい造作もないはずである。

　すぐにそうしないのは兵の損そん耗もうを嫌きらってか、ロテ国と本格的には事を構えたくはないからか、それともアセトは今回の事件に関係していないからなのか。

　何にせよ、誰がどんな思おも惑わくを持っていようと、とりあえずモルトが難しい立場に置かれているのは間ま違ちがいなさそうだった。

　だが、依い頼らい人を見捨てる気は、モルトにはない。それが美人であれば尚なお更さらだ。

　石いし畳だたみを見つめながらそんなことを考えていると、ふわりと女性の香かおり、首筋に吐と息いき。

「モルト殿どの、お腹なかが空すきました。ご飯が欲ほしいのです」

　うぉっ！　と、モルトは驚おどろき、座ったまま体を跳はねさせる。

　ディナがモルトの肩に顎あごを載のせ、頬ほおを寄せるようにして、後ろから首を伸のばしていた。

「お、おい、さらっと出てくんなよ。見つかるだろ」

　リッツもアパートから出てくる。肩に提げられたポシェット……お出掛け仕様だ。

「上から見てたけどアルコ・ホール内なら大だい丈じよう夫ぶ。兵隊、いなくなっているよ」

　リッツが言うにはさっきのアホ騒そう動どうでほとんどの兵がアルコ・ホール内から撤退しているそうだ。またアレによって人が集まったせいでかなりの混雑になり、馬が身動きできず、新たに入り

込むのも難しい状況らしい。

「何より人がこんなにいるんだから、エンガディィナ様も目立たないよ」

「そうは言うがな、リッツ、お前……」

「ご飯、食べに行ってくる。エンガディィナ様、何が食べたい？」

「え、いいのですか？　そ、そうですね……あ、やっぱり、安あん美び亭ていがいいのです！」

　リッツは笑みを浮うかべて大きく頷うなずくと、ディィナの手をつかみ、彼女を引っ張るようにして人ひと混ごみの中へ進み出してしまう。モルトは慌てて追い掛けた。

　先行く二人の足取りは軽い。ガタイが良く、長大な長柄刀を持つモルトは馬ほどではないにせよ、やはり人混みの中では自由に動けず、ついて行くだけで一苦労だ。

　しかも真まっ直すぐ安美亭に行くのではなく、あっちにふらふら、こっちにふらふらと二人は店を覗のぞいていく。それはさながら観光する女の子の姿だ。

　店主の笑顔と巨きょ乳にゅうが何よりの癒いやしであるオリービーの花屋。

　児童書から高等教育までお堅かたい本が並んでいるもののとある合い言葉を口にすると高等な保健教育本を買うことが出来る書店。

　商品はチープながら極きわめて安い値段でしかも大量購こう入にゅうをいつでも受け付けてくれるアルコ・ホールにおける縁えんの下の力持ちである日用雑貨店。

　一番の売れ筋はアンティーク調の天体望遠鏡だが購入すると何故か街中の女性宅の風ふ呂ろ場ば位置を懇こん切せつ丁てい寧ねいに教えてくれる古道具屋。

　古今東西のありとあらゆる武器や防具を取り揃そろえているもののまともに売れるのはカナヅチや鋸のこぎりなどの日常的な工具類と長柄刀だけという切ない武具屋。

視力が良すぎて眼鏡めがねがないと生活ができない不ふ憫びんな父娘おやこで営いとなまれる眼鏡屋。

イベントのシチュエーションはもちろん客のどんなオーダーにも合わせて完かん璧ぺきな作品を作り上げることで有名なリキュール唯ゆい一いつのケーキ屋。

街が封鎖されたと同時に価格を三倍に跳ね上げたことで悪名を轟とどろかせた宿屋。

美女の香りとして自分の嫁よめの汗あせを濃のう縮しゆくしたおぞましい商品を売り出したことで一度潰れかかった愛妻家の営む香こう水すい店。

……等々、よくよく考えてみると割かしろくでもない店々を彼女達は覗いて回る。そして、これらに加えて雑多なものが並ぶ露ろ天てん商しようを眺ながめ、たまに買い喰くいまでしたりしたことで、安美亭に辿たどり着ついたのは結局夕暮れ時であった。朝食兼けん昼飯のはずが、夕飯である。

バイト代とお小こ遣づかいを持っているディナとリッツは腹も程ほど良く膨ふくれて楽しげではあったが、二人と違って手持ちがないモルトからするとかなりしんどい付つき添そいである。

しかも行く先々で「伝記本、予約したぜ！」「次はいつ脱ぐんだい？」と異常な速さで広がった噂うわさの相手をさせられるので、モルトの心のすり減り方も尋じん常じようではなかった。

「……何でもう本の予約始まってんだよ……今朝の出来事だぞ」

思い立ったら吉きち日じつ。妙みような行動力があるのもまた、リキュール住民の特性である。

そんなこんなでようやく辿り着いた安美亭の扉とびらを開けば、店内はすでに多くの客の姿。

食事のため、酒のため、というより封鎖されてすることがない、行き場がない、そんな商人や旅人達である。中にはほくほく顔で高い酒を口にしている者もいるが……恐らくうまいこと状況を利用して商品を売り抜けたやり手達だろう。

モルトは先に入って行ったディナ達の姿を探すのだが……テーブ

ル席、カウンター、どちらにもいない。銀のお盆ぼんで酒と料理を運んでいたクラッツに二人のことを尋たずねてみると、彼女はクイッと細い顎先で厨ちゆう房ぼうを示す。見やれば、その瞬間にショートエプロンを着けたディナとリッツが少しばかり照れた様子で店内に現れ、客達から拍はく手しゆを受ける。

　モルトがカウンター席に腰こし掛かけると、ディナがやけに優ゆう雅がな足取りで近寄って来た。

「いらっしゃいませ、お客様。ご注文はお決まりなのです？」

「また、バイト？」

「あ、は、はい。その……昨日ほどではなかったのですが、大変そうだったのです」

　言ってから彼女は一度床ゆかを見、そして上うわ目め遣づかいで申し訳なさそうにモルトを見やった。

「……ごめんなさいです。嘘うそつきました。本当は……またお手伝いしたかったのです」

　昨夜の楽しさが忘れられなかったのです、と彼女は照れ笑いして付け加えた。

　ひょっとしたらここでもう一度働くのが、外に出て来た本当の理由かもしれない。

　リスクと引き替かえにするにはあまりに幼よう稚ちとも言える理由ではあったが、ディナの今の顔を見ると何も言えなくなってしまう。

「昨日はまるで夢のようでした。あんなに一いつ生しよう懸けん命めいに働けて、そして一生懸命に笑えたのは初めてなのです。だから、どうしても……。やっぱり、我わが儘ままです？」

「少し、ね。……でも女性の我が儘はかわいいよ」

　ディナは顔を真っ赤にしつつ微笑ほほえむ。けれど、それを銀のお盆ですぐに隠かくしてしまう。

　もったいないな、とモルトは笑った。

　モルトはウィスキーを注文するのだが、ディナに代わってクラッツが持って来たのは水である。無一文なのを見み透すかされていたらしい。

　お情けでくれたナッツを食べつつ、モルトは店内を動き回る少女達の姿を見やった。

　クラッツは相変わらず、ディナはその胸を弾はずませつつ、不慣れながらも一生懸命に。

　リッツは……不満たらたらに。

　多分、リッツのお姫様エスコート計画と大おお幅はばに違ってしまったことと、満面の笑みを浮かべる年寄り達に頭ポンポンと叩たたかれるのはともかくとしても、若い奴らからは「ちょっと若すぎるんだよなー」「あっちの谷間ちゃんが来て欲しかったのに」などと苦笑いされている辺りに不満の原因がありそうだ。

　当然のようにリッツはぺちゃんこだから、わからないでもない。何より、あと数年待ったところで彼女の胸が大きく育つ予感がしないというのが一番の問題だった。

　自分はあのアパートでリッツが大きくなっていくのを見守っていけるのだろうか。昔、そんなことを考えていたこともあったが、少なくとも胸に関しては望めなさそうである。

「しかし第二次性せい徴ちようのそれは竹の生長を上回るとも言うしな。希望は捨てちゃダメだ。最悪、俺が責任を持って夜な夜な揉もみしごいて無理矢理にでも大きく……ぐおっ!!」

　安美亭の店内を、銀のお盆が鮮あざやかに飛ひ翔しようし、モルトの側頭部を激しく強打した。

　店内から歓かん声せいと拍手、そしてリッツのお怒いかりの言葉が聞こえたような気もしたが……飛び行くモルトの意識では、それが夢か現実うつつか、わからなかった。

　……それからどれだけ意識を失っていたのかも、わからない。
日々の眠ねむりがそうであるように、長くもあったような、けれど一いつ瞬しゆんだったようなどっちともつかない感覚の中、モルトは壁かべ際ぎわの床に、長柄刀と共に転がされていることに気が付いた。

　店内はすでに昨日の活気同然の雰ふん囲い気きになっており、料理も昨夜同様、個人ではなくテーブル単位で出されるようになっていた。

　人々の笑い、話し声、食器が立てる音……。

　それらをリズムにディナとクラッツは踊おどっているかのよう。

　かけ声ならぬ注文オーダーに体を舞まわして踵きびすを返す。

　店内の魔ま光こう球の光が、銀のお盆と汗ばむ肌はだに反射し、彼女らを煌きらめかせていた。

　眩まぶしさに、モルトは床の上から目を細める。

　クラッツはいつものことながら迅じん速そくに淡たん々たんと仕事をこなしていくのは慣れを感じさせ、身のこなしに無む駄だはなく、美しい。けれど、ディナはその逆。素す早ばやく応じようとしても体がついていかない。でもそれを笑顔と元気で補おうとするので動きが大きくなって余計に無駄が多くなり、気持ちが先走りすぎて慌あわてる場面も多々ある……けれど、その顔、いや、その全身から楽しさが溢あふれ出ていて、見ているだけで誰もが笑え顔がおになっていた。

　こうしていると彼女が今命を狙われていることも、一国の王女であることも忘れてしまいそうである。ただただ楽しく……興奮というには穏おだやかで、忙いそがしいとしてしまうには華はなやかな、そんな光景だった。

「……しっかし、リッツはどこに行ったんだ」

「ここにいるけど……」

　声は、床に寝ているモルトの腹の上から聞こえた。

　見やれば、グッタリとしたリッツが項うな垂だれて座っている。

「元々体力ないんだから、無理すんなよ。また寝込んじゃうぞ」

「……エンガディナ様、なんであんなに働きたがるんだろ……」

「普ふ段だんできないことだから、楽しいんだろ」

　どんなことだって続けば楽しくなくなる。逆にどんなことだってたまになら楽しいのだ。

　飽あきないのは酒と女だけさ。そう思うもリッツにはまだ早い。モルトは口を噤つぐんだ。

　リッツが若じやつ干かんうとうとし始めていたので、モルトは体を起こしてリッツを抱だき上げた。

「あ、リッツちゃん寝ちゃった？　アタシの部屋、鍵かぎ開いているからベッド使って」

「やったぜ！　クラッツが普段どんな刺し激げき的なパンツを穿はいているのか確かめてや──」

　銀のお盆がモルトの笑顔に突つき刺さささった。

　──おいおい、それならオレが！　──いやいやワシがベッドメイキングを！　──ボクが下着の整理整せい頓とんを！　──全すべて俺達に任せろぉおぉおぉ!!

　ガン！　ゴン！　ドス！　バァアン！　そんな鈍にぶい打楽器の音色が店内に連続し、拍手の代わりに店内には大きな笑い声が溢れる。

「変なことしたら後で酷ひどいからね！　ほら、早く行く、そしてすぐ戻もどってくる！」

　クラッツはキツい口調で言い放つと、歪ゆがんだお盆を抱かかえて厨房へと入っていった。

　ディナもまた、お盆で口元を隠しつつも、笑っているようだ。

　店の二階にあるクラッツの部屋は、整理整頓された学生の部屋に似ていた。勉強机とぎっしり本の詰つまった本ほん棚だな。あとはベッドやクローゼットぐらいしかない。

　ノートと魔光球の転がる勉強机、そこにドンと載のせられている山積みの本を見てみれば、言語の勉強中のようだ。リキュールはその特性上、遠方の人間もかなり多い。言葉の違ちがう客に対応するためなのだろう。クラッツが夕食時のラッシュが終わるとすぐに奥に引っ込むのは、勉強のためなのかもしれない。

　んむぅ～……と、リッツが唸うなったので、モルトは慌ててベッドに彼女の体をのせる。サンダルを脱ぬがすと、すぐに彼女は寝ね返がえりを打つので、モルトはそっと掛かけ布ぶ団とんを被かぶせた。

「お疲つかれ、リッツ。さてと…………………………………………………………部屋を漁あさるか」

　モルトはクローゼットに向かい、そこの扉に手を掛け、ニヤリと口元を笑みで歪めつつ、その手に力を入れ──。

「遅おそい！　何してんの⁉」

　階下からの声に、モルトはしぶしぶ手の力を抜ぬく。

　ここでガッツリいけない辺り、自分もまだまだだと少し思う。

「……モルトぉ……」

「ん？　どうしたリッツ？」

　瞼まぶたを閉じていたが、リッツはぐずるような顔でベッドから手を伸のばしていたので、モルトはその手を握にぎってやる。

　小さな手はモルトの無骨な指をぎゅっとして、抱だき寄せるようにして首元に引き込んだ。

　それだけで安心したような顔になり、リッツは穏やかな寝ね息いきを立て始めてくれる。

　離はなれて行こうとする気配を察せられたのかもしれない。

　仕方ないな、とモルトはもう一方の手で彼女の頭を撫なでながら……もう一発、お盆を喰らうのを覚かく悟ごしたのだった。

　リッツがしっかり寝付いたのを見計らってから手を抜き取り、階下へと降りると予想通りに強きよう烈れつな一いち撃げきを貰もらって再びモルトが意識を飛ばしていると……いつの間にか時は流れて夕食ラッシュは終わりを迎むかえていた。

　モルトは本日二度目、朝の廊ろう下かを含ふくめると三度目になる床の上での起き床しようをすると、ディナと共にカウンターに座った。

　本日モルトとディナに出された夕ゆう餉げのメニューはガラス製のボールに盛られた見るからに涼すずやかな生野菜サラダと、やや深さのある白い皿の上に載のせられた変わった料理だ。

「これは……グラタン、です？」

　皿を出したグレーンは白ワインのコルクを抜きながら頷うなずいた。

　確かにグラタンではあるのだ。匂においでわかる。ただ、ちょっと特とく殊しゆなのが器うつわだろう。

　皿ではない。皿は、器を載せているだけだ。

　グラタンの器は、モルトの拳こぶしでさえスッポリ収まってしまいそうな、大きな正方形のパンなのだ。巨きよ大だいサイコロのようなパンの一面をくり貫いて器とし、具やベシャメルソースを入れてオーブンで焼き上げた立方体グラタンである。

　表面のとろけたチーズのクリーム色に、化け粧しようするようにきつね色の焦こげ目、そしてアクセントに上品な黒い焦げ色。表面に振ふりかけられているパン粉がチーズの上に立ち、それが最高にパリッとしているのが見るだけで伝わってくるのがたまらない。

　グレーンが二人分のワインを注いでくれると、やっぱり残りはクラッツのためのグラスに注いだ後、自分でラッパ飲みだ。

「あの、どうやって……グラタンこれは食べるものなのです……？」

「好きに、喰え。周り、千切っても、ナイフで、切っても、いい。火傷やけど、注意、しろ」

　そう言われてもディナはまだ動けないようだ。なのでモルトは先せん陣じんを切るようにカウンターにあったカトラリーボックスからナイフを取り出す。

　立方体のパンをつかむ。かなり熱かったが、武芸をやっている男

の手を焼く程ほどではない。

　持ち手近くまでナイフを差し込みながら、ボックス状の料理、その底の部分に至るまでをゆっくり、しっかり切っていく。……それはどこか宝箱の鍵を開けているかのようだ。

　ナイフに伝わる熱に胸を高鳴らせ、匂いが興奮を呼び、腹の虫が歓声を上げていく。

　そうして、ついに両断。モルトはナイフを置いて、立てて置いた分厚い辞書を開くかのように、ボックスグラタンパンを左右に開いた。

　溢れ出る熱気と甘さとまろやかさの混じった得も言われぬ匂い。割れてなお橋をかけるとろりとしたチーズ。こぼれるベシャメルソース。転がり落ちるのはマカロニと茸きのこの数々。白い皿の上に拡ひろがり行くクリーム色。

　その光景はモルトとディナの視線を釘くぎ付づけにするに余りあるものだった。

　モルトは得え物ものをスプーンに換かえ、そのクリーム色へと挑いどんだ。

　掬すくい上げてみれば糸を引く。上にかけられていたチーズが溶とけたものなのだろうが、ベシャメルソースとの境目はすでに曖あい昧まいだ。

　モルトは熱々のそれに火傷を覚悟で口を沿わせた。

　ミルクにバター、小麦からなるベシャメルソースは唸るほどに旨うま味みが濃こい。濃すぎて旨味が甘さに感じられるほど。思わずモルトは唸る。

　クリーミーなソースが舌を包み、チーズが躍る。そしてほのかな歯は触ざわりとして、表面に振りかけられて焦げ目を作っていたカリカリとしたパン粉の食感が楽しい。

　続けてマカロニを口にしてみれば、むっちりとしつつ、柔やわらか。あえて柔らかめに茹ゆでていることでソースとの一体感を強めているようだ。優やさしい食感である。

一方で茸の方は丸型のかわいらしいもので、口に含めばぷりゅぷりゅとしたコミカルな食感で食べ手に微笑ほほえみをもたらしてくれる。

うめぇ、とモルトがこぼしつつすぐに次の一口へ向かう横で、ディナもまたボックスグラタンパンに挑んでいた。

彼女は火傷しないよう、おっかなびっくりにパンの外側をいささか強ごう引いんに千切って、それでソースを絡からめて口へ。

彼女は口を手で押さえつつ目を見開くと、千切って出来た突とつ破ぱ口こうにスプーンを差し込み、シチューでも啜すするかのようにして追っかけでベシャメルソースを口に含んだ。

彼女は「んー！」と声にならない声を上げ、何故かモルトの肩かたをペシペシと叩いてくる。

おいしいという今の気持ち、感動を誰だれかに伝えたい。けれど、口にものが入っている上、それが熱くてなかなか飲み込めない。でも、早く、誰かに、この気持ちを、このおいしさを……そんな気持ちの絡み合いの結果が、このペシペシなのだろう。

モルトもまた同じ状態なので「わかったわかった、わかってる」と言うようにペシペシやっていたディナの手をつかんだ。

指先が、絡む。気持ちも絡む。

ディナの頬ほおが赤くなり、微笑んだ。モルトも、笑った。

見つめ合い、微笑み合う。それはわずかな時間ではあったけれど……誰かが時計の針をそっと指で押さえたような、そんな気がした。

ゲフゥ～。グレーンの特大のゲップが発せられた瞬しゅん間かんに、モルトとディナの手は反発するようにして離れ、何だか二人共に照れつつグラタンへと意識を戻した。

今いま更さら指を絡めたぐらいで照れる年ねん齢れいでもないだろうに。モルトはこっそり苦く笑しょうした。

「あ、このサラダもうめぇな。あえてグラタンに合わせたか。<br>なぁ、おやっさん」

　グレーンは満足げに、そして何より嬉うれしそうに笑うと、厨ちゆう房ぼうへと戻っていく。

　どうやら、それを言われるのを待っていたようだ。

　サラダはシンプルなものながら酸味の利きいた代しろ物ものだ。非常にサッパリとしたもので、器からして冷えてもいる。つまり、グラタンの逆なのだ。冷たく、さっぱり。グラタンは熱く、まったり。対極的なそれらは合わないようでいて、表裏一体。グラタンで笑顔にされた後に、サラダを食べれば火ほ照てった舌が冷やされ、食べ進めるにどうしても出てしまうくどさを酸味が切る。それはサウナから出た直後に飲む冷水の一いつ杯ぱいのように刺激的で、ありがたくて、最高に互たがいを引き立てる。

　そうしてモルトとディナは食べ進めていくに従い、段々と料理の熱さと空腹も落ち着いてきて、会話ができる余よ裕ゆうが生まれてきた。

「こんな面おも白しろい料理、城では……あっ！　あぁ、そうか、もう、大だい丈じよう夫ぶなのですね……城では食べたことがないのです」

「一品ずつ出てくるコース料理には組み込めないものな。パンとグラタンメインが一体化して、さらにこのサラダとも同時に合わせたい料理だ。……家庭の味、かな」

「家庭の味……。おいしいものなのです。なんでこんなに笑顔になってしまうのです？」

　さぁな、とモルトは笑ってワインを口にする。ディナも少し照れたようにそれに倣ならった。

「……来て、良かったのです」

「食事中に言うのも何だけど……あんまり街を歩かない方がいい。さすがに危険だ」

「わかっているのです。……でも、リッツちゃんに、甘えてしまったのです。あの子、何でも言ってください、頑がん張ばります……なんて、頬を赤らめて言ってくれるので……」

「おかしいな、そりゃ本当にリッツか？　偽にせ者ものじゃないの

か」

　お金は!?　いつまで寝てる気!?　家賃払はらわずに飲むお酒はおいしい？　クソ何でも屋！　早く働いてきなさい!!　……等々、モルトが記き憶おくするリッツ語録の中にはいくら探してもそんな優しげな台詞せりふは見つからない。

　嫌きらわれているという気はしていなかったが、もしかしたら自分以外にはリッツは優しかったりするのだろうか。何とはなしに、嫌いやな予感がしてモルトはワインを一息に呷あおった。

「嬉しかったのです。あんなふうに言ってくれるのは。……昨夜、モルト殿どのも……」

　ディナが赤い顔で俯うつむきつつ、横目ながら、上うわ目め遣づかいにモルトを見てくる。

　したいようにすればいい、とそう言っていた。ベッドの上でのことを言っていたのだが、好意的に取られたのなら訂てい正せいする必要はないだろう。

「いろいろ考えたのです。けれど、今自分が一番望むことは何かと考えた時、また昨晩のようにここでお手伝いさせてもらって、ここの食事を食べたいと思ったのです」

「おやっさんに聞かせてやりたいな。ここの食事は上等だ。世界的に見ても……ん？」

　不意にモルトは強い視線を感じ、カウンター奥の厨房を見やった。

　料理の出し入れをスムーズにするために厨房に扉とびらはないのだが、そこからグレーンの顔がわずかにはみ出ており、モルトとディナをガン見していた。

　目と目が合い、思わず言葉を詰まらせているとグレーンは酒さか瓶びんを一本放ほうり投げてくる。受け取ってみれば残り少ないものの、ちょっといい銘めい柄がらのウィスキーだった。

　モルトが目礼すると、グレーンは奥へと引っ込んだ。店内はピーク時を過ぎたとはいえ、まだそれなりに賑にぎやかである。それでもなおディナの小声が聞こえたのか。

　クラッツを口説こうとする度たびに、グレーンの邪じや魔まが入る理由がわかった気がした。

「き、聞かれてしまったのです……？」

「情報の出入りが激しい安美亭だ。城ってだけで、もう察しただろう。でも、多分、大丈夫だ。おやっさんは客を売るようなマネはしないさ」

　仮にグレーンが密告に動くとしても、ぶっちゃけモルトの腕うでで押さえきれるかどうかは正直微び妙みようなところである。グレーンがオーガに似ているのは何も見た目だけではないのだ。

「ともかく、料理がうまいのはいい。……でも働く必要はないだろう。人目にも触ふれる」

「……はい。でも、お手伝いさせていただくのは……働くのは、楽しかったのです」

　耳の痛い話だ。可能であれば一日中だらだらと酒を飲み、うまいものを喰くい、女性の尻しりでも揉もんでいたいモルトはそう思った。

「クラッツさんは美しく、巧たくみで、すっきりしていて……。そしてお客さん達は、優しくて、楽しくて、ガサツな人も多いですけど、皆みなさんどこかしら柔らかで、温かで……。それにお盆ぼんを持って走り回るのは、嗜たしなみとして躾しつけられた踊りダンスよりも足先は軽かろやかに……」

　酷ひどく曖昧な、そのくせしてディナがこの安美亭での時間を楽しんだというのだけははっきりと伝わってくる言葉が続く。ディナ自身、まだきちんと整理できていないのだろう。

「……あの時間、あの人々との会話、そしてモルト殿と食べた食事……これが、普ふ通つうの幸せなのだと、人が当たり前に得られる人生なのだと、そう思った時……だから、本当にわたしが望むべきことというのは……はい、その、えっと……何というか、あ、何か言葉がまとまらないのです。ごめんなさい」

　恥はずかしそうに、彼女はグラタンを慌あわてて食べ始める。

　もしかしたら、とモルトは思う。命を狙ねらわれてリキュールに

来たと言っていたが、ひょっとしてディナは単に王女としての生活が嫌になって逃にげ出しただけではないのだろうか。そして護衛の任を果たせなくなったことで近この衛え兵達が慌てているだけ……。

　それならばこの状じよう況きようも理解できるし、どうなるにせよ解決は容易たやすいかもしれない。

「まーた、叔父おじさん……あぁもう。安くないのよ、それ」

　私服のクラッツが現れるなり、用意されていた白ワインのグラスを口にした。

「あ、クラッツさん、本日もお疲つかれ様でした、そしてお手伝いをさせていただきましたことを感謝するのです」

「いいのいいの。むしろ助けてもらったのはこっちだから。……封ふう鎖さのおかげで店が儲もうかるのもいいけど、二人で回すとなると少ししんどかったし」

「商売繁はん盛じようは羨うらやましいよ」

「そうは言うけどね、モルト。……元々流通ありきの街だし、人や物が出入り出来ないとなるとそろそろ不足するものが出てくると思うわよ。実際もう──」

　──あれぇ!?　あそこで飲んでるのは裸はだか英えい雄ゆうモルトじゃねぇか！　──おっ！　しかも美人連れ！　やっぱり物理的に一ひと肌はだ脱ぬいだ男は違ちがうぜ!!

　馴な染じみの常連客がほろ酔よい気分で入って来るなり、大声で笑った。それに合わせて店内にいた連中も、そういや日中そんなこともあったな、と笑い、乾かん杯ぱいの音おん頭どが取られる。

　──この街に新たに生まれた英雄のモルトに!!　──裸好きのモルトに!!

「何か、微妙に変わってねぇか……？」

　モルトの呆あきれ声に、店内にまた笑い声が溢あふれた。ディナも、口を押さえて笑っている。

　──しっかし帝てい国こくの奴やつら、いよいよ本ほん腰ごし入れ始めたな。──あぁ、我が物顔だ。──大工連中が街外れの材木置き場から資材を取りに行こうとしたら止めやがったらしいぜ。それで大工の奴らマジギレして、打って出ようとしたとか。──あぁ、自警団の連中が長なが柄え刀とう振ふり回してようやく止めたってやつか。──ピンガのとこにも行って、厨房見せろつって揉めたそうだしな。──命知らずだな、ピンガの厨房は聖域じゃねぇか。──結局パンを抜いて追い返したらしい。──お、おい、それって例の協約を破ったことになるんじゃ……。──ただのパンを振り回しただけだぜ？　何が問題になるってんだ。──ただのパン（笑）。──大半の被ひ害がいは街の外周ばっかだけだな。──モルトの一件でアルコ・ホールから追い出せたおかげだろ。ただ、それまでは好き勝手やられちまったらしいが。──そういえば朝っぱらに大浴場で騒さわぎがあったらしいぜ？

　そう!!　と、クラッツがカウンターをバンっと叩たたくと客の会話に参戦した。

「帝国の奴らったら何してもいいと思ってるみたいなのよ！　アイツら、平然と女湯に入ってきたんだから！」

　なん……だと……？　と、賑やかだった店内が水を打ったように静まり返った。

　リフォームを繰くり返してはいるが、そもそもの大浴場はアルコ・ホールにある街最古の建物であり、謎なぞの技術力によってダンジョンの如ごとく複ふく雑ざつ怪かい奇きな上下水道を作り上げた古代少数民族達の遺産の一つだ。

　豊富な湯量を誇ほこるそれはリュウマチ、皮ひ膚ふ病びよう、骨折、傷、関節痛……その他諸もろ々もろに加え、子供が入ると成長が良くなる、胸が大きくなる、美び肌はだを通り越こして美人になる、といった謎の効果が数年ごとに新しく付け加えられたりする胡う散さん臭くささささえも有する名湯である。

　リキュールは家に風ふ呂ろを持つところも多いが、それでも大浴場は朝から晩まで人を集める人気スポットである。……が、無論、混浴ではない。

「朝、お風呂していたら、急に男湯の方が騒がしくなって、番台さんが止めるのを押し切って女湯にまで入ってきて、人を探すため

だって言ってニヤニヤしてて……」

　──なんて奴らだ！　──クラッツちゃん、そいつら部隊名とか名乗らなかったかい!?

「えっと、騎き馬ば隊の第一四番隊だか何だか……だったかな？」

　──ヌストルテ帝国第二独立近衛大隊騎馬中隊第一四番隊か!!　──今すぐ履り歴れき書しよの用意だ!!　──オレの入隊希望届けを叩き付けてやるぜ!!　──急げ、早くしなければ女湯に入るチャンスが水すい泡ほうに帰すぞ！　──今こそオレ達の長年の夢が叶かなう刻ときき!!

　男達が喚わめき出したので、クラッツがお盆を持って客の間を回っていく。

　軽やかでリズミカルな打だ撃げき音が響ひびく中、ディナが申し訳なさそうな顔をして俯いた。

「あ、あの……クラッツさん、ご気分を害されたのです……よね。本当に、その」

　モルトはそれ以上言わせないよう、カウンターの下で彼女の膝ひざに手を置いた。

「あぁ……またお盆がダメになっちゃった。……え？　まぁ、気分は良くなかったけど、ニヤニヤしながら見て回られただけでそれ以上はなかったし」

　そうは言うものの、見られたのだろう。クラッツの顔は不満げである。

　モルトは同情を顔に浮うかべ、カウンターを挟はさんだ対面で頬ほお杖づえついて座ったクラッツの肩かたに手を置いた。

「クラッツ……俺も見たい」

　ガンッと、お盆がモルトの脳天に叩き付けられた。

　冗じよう談だんのつもりだったのだが、思いの外ほか強きよう烈れつなのが来て、モルトは一いつ瞬しゆん目を回す。

　視界が戻もどった時にはグレーンが厨ちゆう房ぼうから出て来ており……若じやつ干かん身の危険を感じたが、彼はモルトの所ではなく、店の出口へと向かっていく。

「おやっさん、どうした？」

「……おう。食材が、足りない。ちょっと、仕入れてくる」

　仕入れのはずだが、グレーンの手には何故かフライパンが握にぎられていた。

　グレーンが乱暴に店の扉を開けると……そこではサシャが驚おどろいた顔で立っていた。

「うわっと！　……あれ、しまったな。もう閉店ですか？」

「まだだ。……酒ならクラッツが、出す。喰い物も、簡単なもの、なら、大丈夫だ」

　サシャがグレーンと入れ違いになって店内に入ると、彼は迷わずモルトの隣となりに腰こし掛かけた。

　どうやら女連れなのを見て、ちょっかい出しに来たようだ。

「良かったよ。どこ行ってももう店が閉まってて。さすがに遅おそくまでやる店が減ってきたようだ。……クラッツ、簡単なものでいいから頼たのむよ」

　はいはい、とクラッツが歪ゆがんだ……というか、モルトへの一いち撃げきのせいで直角に折れ曲がったお盆を手に、厨房へと入って行くのを、サシャは爽さわやかな笑えみで見送った。

「さて……モルト、そちらのお嬢じようさんは、どちら様かな？」

「いきなりだな、お前……」

「美しい女性に注目するのは当然だ、違うか？　それにモルト、君と一いつ緒しよにいるようではこちらの美女が少しばかりかわいそうだ。釣つり合いが取れない。……あぁ誰だれかと思ったら昨日の彼女か。こんな大だい胆たんな……フフッ、お似合いですよ、あなたの魅み力りよくが溢れている」

　ディナは躊躇ためらいがちに俯きつつも、モルトの前を通してサシャへと手を伸のばす。

　それはリッツにした時と同じものだが、彼女とは違い、サシャは席を立って膝をつくと、伸ばされたディナの手に己おのれの手と唇くちびるを寄せる。

　それを見て、ディナが昨夜リッツに何故なぜ手を伸ばしたのかがようやくわかった。

　王女としての挨あい拶さつをしていたのだ。そして、それをしてしまったがために、朦もう朧ろうとした意識と相まって本名を口にしてしまったのだろう。

「美しき貴婦人、あなたのお名前をこのサシャめにもお聞かせ願いたい」

　名前を聞き出すと同時に自らの名をも告げる辺り、やはりサシャはやり手だった。

「ディナ、と申すのです」

「なるほど、ディナ。これも何かの縁えん、今後ともどうか……おっと、ディナ、君はどうしてそんな前まえ髪がみで、その魅力的な瞳ひとみを隠かくし──」

　サシャの指先がディナの前髪を分ける。

　その瞬間、彼は飛び退のくようにして身を震ふるわせ、目を見開いた。

「まさかっ、ヌストル──痛テッ!!」

　モルトは反射的にサシャの腹部に拳こぶしを放ち、彼を吹ふっ飛とばす。

　だが明らかに遅い。サシャの言葉は店内に響き、店内の誰もがモルト達を注視していた。

「ちょっ、ちょっと、何、どうしたの!?」

　厨房からクラッツがフライパンを手に慌てて出てくるものの、誰

もその言葉に応じない。不自然なまでの沈ちん黙もくが店内を埋うめていた。

　ヤバイ状況だった。恐おそらく客の幾いく人にんかにはヌストルテの名が聞こえたはずだ。そうなれば当然、よほどのバカでない限り連想するに決まっている。

　帝国が封鎖してまで捜さがしている人間が、ディナではないか──と。

　モルトは息を呑のみ、そしてディナは顔面を蒼そう白はくにする。

　そんな中、サシャが跳はね起きると、乱れた前髪を掻かき上げ、そして笑顔を見せた。

「クラッツ、すまない。騒がせた。……いやなに、モルトがこの私に彼女を獲とられると焦あせったようだ。フフッ、まったく、しょうのない奴さ」

　──おっとぉ、女の取り合いかぁ!?　──モルト、顔じゃお前に勝ち目はないぜ、力で蹴け散ちらしちまえ！　俺は同じ非モテとしてお前を応おう援えんするぞ！

　客の二人がサシャの言葉を受けて、声を張った。

「ちょっとモルト！　暴れるなら追い出すわよ!!」

「あ、あぁ、すまん。つい……な」

「この美び貌ぼうじゃヌストルテの兵達に襲おそわれかねない。ディナ、君はこんな薄うす汚よごれて飲んだくれの男ではなく、私のような優ゆう秀しゅうで美しい何でも屋を護衛に雇やとうべきです。お代はあなたのハートで……どうですか？」

　サシャはディナの前に膝をついて手を差しのばす。

　声こそ完全にいつものそれを装よそおっていたが、その顔にはわずかに脂あぶら汗あせが浮かんでいた。鳩尾みぞおちに叩き込んだダメージを無理矢理押さえているのだ。

　ディナはおろおろとしてモルトとサシャの顔を交こう互ごに見や

り、そして、最後に店内に視線を向けると……彼女は俯うつむき、モルトの腕うでをギュッと抱だき締しめたのだった。

　客から驚きと歓かん声せいが上がる。サシャがやれやれというように首を振って立ち上がった。

「クラッツ、悪いがさっきの注文はキャンセルだ。美女に振られて胸が一いつ杯ぱいだ、食事なんてとてもとても……。心に効く強い酒を一杯くれるかい？」

　クラッツは「えー」と不満を訴うつたえつつも、ウォッカをショットグラスに注ぐ。

　サシャはそれを一息に飲み干すと多めの代金を置いて店を出て行こうとするのだが、その際「私に続いて彼女と店を出ろ」と、モルトの耳元で囁ささやいたのだった。

　―いやぁいいもん見た！　スカッとしたぜ！　―おう、男は外見じゃねぇんだよ！

　客達が声を上げ、モルトに酒を一いつ杯ぱい奢おごってくれた。そして、皆みなで乾杯。

　それらを飲み干してから、モルトもまた、ディナと共に店を出る。

「……モルト、こっちだ」

　店を出て数歩と歩かない内に、サシャの声。

　彼は建物の陰かげから現れると、案内するようにして先を進んで行った。

　不安げなディナが震えながらモルトの腕をつかんでくる。

「大だい丈じよう夫ぶだ……と、思う」

　警けい戒かいしつつ彼に付いていけば……辿たどり着いたのはアルコ・ホールから少々外れた場所に建つ、古い石造りのアパートである。確か、そこはサシャの家だったはずだ。

　サシャが玄げん関かんの鍵かぎを開け、扉とびらを開く。

　男一人暮らしのくせに、室内からはちょっと良い匂においがした。清潔感のあるものだが、彼が連れ込んだ女の残り香がかもしれない。

「どうぞお入りください、エンガディナ・ヌストルテ王女。事情をお聞かせ頂きたい」

４

　一瞬見み間ま違ちがいかと思い、アセト・バクターは卓たく上じょうの魔ま光こう球を手に取り、手元の書類を照らした。どうやら読み間違いではないようだ。

「何だ、この〝全ぜん裸らの男達に囲まれ、撤てつ退たいを止やむなくされた〟というのは……？」

　幕舎の隅すみに立つ、装具を外した従者に視線を向ければ、彼もまた困こん惑わくの表情を浮かべる。

「はぁ。報告書にもありますが、空から裸はだかの男が降臨し、その者が民たみに服を脱ぬげと扇せん動どうして兵達を追い込んだようでして」

「では何か？　栄はえある我がヌストルテ帝てい国こく第二独立近この衛え大隊の者が武器どころか一いつ糸し纏まとわぬ文字通りの裸連中に怖おじ気けづいたということか？」

「兵が手出しせずとも鎧よろいに触ふれれば素す肌はだは傷ができますし……今朝、アセト様が出された命令もあったので、それを遵じゅん守しゅしたのではないかと」

　従者の言わんとしていることはアセトにもわかる。

　街の者達に協約違い反はんを起こさせなければ街を潰つぶす際の大義名分が成り立たないため、そうなるように命令はした。そして間違ってもこちらから手を出すな、とも。

　向こうから手出しをした、という事実は欲ほしい。真実など後で

書き換かえられるとしても作戦途と中ちゆうは兵の士気に関かかわるし、事後処理も面めん倒どうだ。

　だからこそ間違ってもこちらが手を出すのは避さけねばならず、裸男に近寄られたがために退いたというのは妥だ当とうだったといえるかもしれない。

　そして何より、群れをなした裸男に囲まれたら逃にげたくもなるか、とアセトも個人的に思う。いや、実際かなり怖こわいだろう。

　自らを無防備にした上で距きよ離りを詰つめるという危険極きわまる挑ちよう発はつ的行動は今回の一件に関して言えばかなり有効な戦術だと言えた。肉体的・精神的危険性リスクを厭いとわなければ挑発としてはこの上なく、万が一があっても大義名分を手に入れられる。

　それらを意図した上で実行していたとしたら、その者は相当なキレ者か、単なるバカのどちらかだろう。

　……変態かもしれない。

　アセトは次の報告書に目をやる。即そく座ざに眉まゆ根ねを寄せ、目を擦こすった。

「何だ……この、パンによって叩たたき伏ふせられた、というのは」

「街外れのパン工こう房ぼうを調べようとしたところ、そこの職人が抵てい抗こうを。兵は反射的に室内で剣けんを抜ぬいたのですが……パンとの鍔つば迫ぜり合いの末にへし折られた、と」

「待て、すでにいくつかおかしいぞ。兵がパン工房に押し入ったのに、職人如ごときが抵抗したのか？　自警団でも何でもない、職人が？　そして剣を抜いた兵に対してパンで対たい抗こう……しかも鍔迫り合いの末に折られた？　おい、知っているか、剣は金属だぞ」

「はぁ。大変硬かたいバゲットだったようで。室内にいた四人はそのパンで悉ことごとく武器を破は壊かいされた上、パンによる打だ撃げきで装具の一部を破壊されまして。ですので、これは街側の協約違反ではないか、と思いましたので目立つ位置に。……ただ、パンで協約違反と文字に起こしてみると途と端たんにアホ臭くさくな

りまして……二番目に」

「当たり前だ！　どこの世界にパンに打ち負ける剣がある!?　それはパンではない、金属もしくは岩石からなる武器だったはずだ！」

「それが、やられた後に正座させられて、自らを打ち倒たおしたパンを食すのを強要され……はい、食物を無む駄だにするな、と。それで共に出されたコーンスープに浸ひたしたところ嘘うそのように柔やわらかくなり、口に含ふくめば表面パリパリ、中フンワリで最高の食感。またコーンの強い味にも負けぬ芳ほう醇じゅんな小麦の香かおりが口から鼻び腔こうへと抜け、最近ろくなものを食べていなかったせいか、心の底からうまいと──」

「……待て、おい、何だその詳しよう細さいな感想は。それに今気付いたが何故お前、装具を付けていない？　今なお我々は作戦行動中だぞ」

「はぁ、パンで打ち砕くだかれてしまいまして。現在修理中であります」

「これお前か!!　だから恥はずかしくなって二番目に置いたのだな!?」

　てへっ、と従者の男が頭を掻く。アセトは頭を抱かかえた。

　この従者もなかなかだが、それ以前にこの街はどうかしている。

　普ふ通つう孤こ立りつした街を大隊規模の正規軍で囲めばしおらしくもなるものだが、何故住民共はこうも協約違反ギリギリのラインを攻せめてくるのか。反はん抗こう的にも程ほどがある。

　過去の英えい傑けつだか英えい雄ゆうだかの血を引いた者達からなる街だというが、そんなものはるか昔の話だ。その者達がどれほど強かろうと世代を経れば所しよ詮せんはただの一いつ般ぱん人に過ぎない。

　それなのに、どこぞの王族のように、いつまでもその血筋に誇ほこりを抱いだいているのか。

　英傑でも英雄でも勇者でも王でも姫ひめでも女じよ帝ていでも……その血筋だから何だというのだ。血など、必ずしも能力を保証するものではない。

　アセトは気分を切り替かえるために兵からの報告書を脇わきに除のけ、先に議会を通して提出された、街の住民からの苦情に目を通していく。それによればアセトの命令通り、兵達は威い圧あつ的に行動し、住民達の神経を逆さか撫なでしているようだ。……悪くない。

「……ム？　どうした。外が騒さわがしいな」

　幕舎の近くを騎き馬ば隊が走り抜けていく。馬ば匹ひつの音からすると緊きん急きゅう出動だろう。

　アセトが席を立とうとした時、幕舎に軽装の兵が走り込んでくる。

「緊急の事で失礼致いたします。リキュールの西側、ロテ国領土内にて偵てい察さつを行っていた騎馬隊の一部が奇き襲しゅうを受けました」

「ついに動いたか！　自警団か!?」

「……いえ、未み確かく認にんではありますが、魔ま獣じゅうのようです」

　アセトは憎にくらしげに舌打ちした。

　リキュールの北側には険しい山があり、そこには今時信じられぬ程の魔獣が跋ばつ扈こしているらしい。その内の一いつ匹ぴきがたまたま山を下ってきたか。

「人ならぬケダモノが闇やみ夜よの中から突とつ如じよとして現れ、騎き乗じようしていた兵が瞬しゅん時じにやられ、数人が拿だ捕ほされたとのことですが……」

「なっ!?　駆く逐ちくするどころか拿捕されたのか!?　……まさか、食料に……？」

「いえ、先程解放されたようです。それが、その……第一四番隊はどこにいると、カタコトの言葉で尋たずねられたそうで……」

　ほぉ、と従者が声を上げた。

「言葉を解かいする魔獣か、最近じゃ珍めずらしいな。捕つかまえ

れば高値で売れますね」

「バカかお前は！　俺の部隊が魔獣一匹如ごときにいいようにやられたのだぞ！　そもそも何故なぜそいつは第一四……第一四番隊だと？」

　ついさっきどこかでその名を見た気がした。

　アセトは一いつ瞬しゅん固まってから、視線を卓たくの上へと向ける。住民からの苦情の中に、大浴場へ踏ふみ込んだ者達を非難するものがあった。それが確か、第一四番隊だ。

　何だ、何が起こっている……？

　その疑問の結論が出るより前に、またも早馬の蹄ひづめの音が聞こえてくると、汗あせだくながら顔面蒼白の男が幕舎に走り込んできた。

「緊急です!!　第一四番隊が魔獣に奇襲を受け、壊かい滅めつです!!」

「壊滅!?　壊滅とは……どういうことだ!?」

「幕舎にて待機していた第一四番隊のもとに突如としてオーガらしき巨きょ大だいなケダモノがフライパンに似た鈍どん器きを手に現れ、次々に兵達を押し潰していったということで……その、援えん軍ぐんが駆かけつけた時には兵達は悉ことごとく叩き潰され、隊員全員が重傷で……」

「他の部隊に被ひ害がいは!?」

「それが、不思議なのですが……馬の被害が多少ありましたが、第一四番隊を襲おそった後は他に手を付けずに姿を消しています」

　何故一四番隊だけが？　何故フライパン？　何故、何故……。

　他に被害がないことを確認すると、警戒を強めさせるよう命令し、従者を含めて人を払はらった。あまりにわけがわからない状じよう況きようが続き、頭痛がする。

「何なんだ、この街は。……何故こうも……」

　あらゆる予定が狂くるっている。だが、意図的に狂わせたものでもあった。

　だからこそ、後こう悔かいはすまい、とアセトは一人、心に決めた。

「……よろしいですか？」

　幕舎の外から声をかけられた。現れたのは、腹に力でも入れているのか、らしくもなく背筋を伸のばして強こわばった顔をしたロンシュータンだ。

　その顔を見て逆にアセトは身も心も楽になる。

　そう……これだ、これが見たかったのだ。

　生気のない顔に、あからさまな不快感が表れているのが楽しくて仕方がなかった。

「第二独立近衛大隊長アセト・バクター殿どの……何故、こちらの提案を無視した捜そう索さくを行っているのか、それを問いに参りました」

「得意の先読みでこちらの回答を口にしないのか。今なら言ってやるぞ。その通りだと」

　ロンシュータンの眉み間けんの皺しわが深くなり、何かを言おうとしたが罵ば声せいの類たぐいになると察したのか、彼女は口を閉じて視線を卓の書類へと向けた。

「これは街からの苦情……私の予定にはこんなものは一つとしてなかったのに……」

「貴様の提案した街を味方につけての、というアレか。ヌストルテ帝国が、そして我々が辺境の民に謙へりくだれという、アレだな」

「謙るのではなく、友好という建前を用いて利用……そのために街に金品を渡わたしたのに……住民とてここが流通の中ちゅう継けい地点であり、物流こそが命であることを知っている、ならばこそ、包囲を解くために協力的にもなろうというもの……それが、このザマ」

　ロンシュータンは書類の山を人形の手で叩いてみせる。

　人間のヌイグルミだと思っていたが、もしかしたら魔獣のヌイグルミなのかもしれない。ボロボロでどちらにも見えた。

「予定では明日あしたにも解決の見通しが立つはずだったからこそ、南からの兵へい站たん線を用意せず、最低限の兵ひよう糧ろうだけで来たのです」

「兵糧は街から接収でもすればいい」

「それがいけない、民は押さえれば反発する、無駄な血が流れてしまう、何よりすでに今こ宵よい、山の方から脱だつ出しゆつを試みた者達がいると聞いております」

「あぁ、あの一五人ほどの若造共か。一通り捕ほ縛ばくしている」

「恐おそらく二〇はいたでしょう……私の部下が、闇夜の中で行われた光の通信を捉とらえました、それも北西と北東、両方向から」

　光の通信というと、魔光球を明めい滅めつさせて信号をやり取りするものだろう。狼煙のろしという原始的な手法と違ちがい、慣れた者同士ならば短時間で多くの情報をやり取りできるはずだ。

　住民達の中で本ほん腰ごしを入れて動き出している者達がいる、ということだった。

「街から出た以上、協約は適応されない。俺の部下が拷ごう問もんにかけている。情報は出る」

「どうせロテ国及およびオードビー国への救きゆう援えんでしょう……如何いかがなさるおつもりで？　遅おそくとも五日もすればロテ国に救援依い頼らいが届き、それから三日とかからず即そく応おうの部隊がこちらに派は遣けんされるはず、それまでに目的を果たした上で脱出できますか？」

「それをうまくやるのがお前達の仕事だろう、ロンシュータン。メチル大隊商組合、伝説となりし第六隊商キヤラバンの水先案内人よ。その力を見せてみろ」

「元、です。アセト殿、今はもう存在しない……しかしこうなった以上、もはや我々は責任が持てない、当初の予定からあまりに大き

く逸いつ脱だつしてしまっている」

「仕事だ、ロンシュータン。逃にげることは許さん。……なに、作戦を今いま更さらどうしろというわけではない。お前の部下を街に放って目標を探し出せ。それで約束の報ほう酬しゆうは払ってやる。……お前があくまでもこの街にこだわったのだ、最後まで責任を持て」

「……後ほどこの状況に至った経けい緯いを記した書類をお持ちしますので、それにサインを」

「構わん。責任はこちらが持つ。……明日からは兵達にもっと強く出るようにやらせる。それで向こうが協約に違い反はんしても良し、しなくとも結果として見つけられる」

　ロンシュータンは顔を歪ゆがめ、深く頭を下げると、その体勢のまま幕舎を出て行った。

　彼女の気落ちした姿を見ていると何とも良い気分だったが、単にいつもの猫ねこ背ぜに戻もどっただけかもしれない、と、しばらくしてから気が付いて、アセトはフンと鼻息を荒あらくした。

「そこそこ使える女だ。だが、不気味で、愚おろかだ。住民の心は考こう慮りよするくせに、雇やとい主の方を考慮せんとはな」

　当初の予定と大きく違えたのは、軍としてのプライド以上に、ロンシュータンへの嫌いやがらせが強かった。心を読むかのようにして思っていることを言い当て、それで得意になって主人より立ち位置を上に置きたがる……その性しよう根ねが気にくわない。

　主導権はこちらにある。それを教育するためにあえて穏おん便びんであった計画を変へん更こうし、住民を挑ちよう発はつしながら捜索するよう変更したのであって、多少の犠ぎ牲せいは覚かく悟ごの上だった。

　あの女を調子に乗せておく方がアセトの精神はすり減ったことだろう。

　アセトは良い気分のまま、今一度山積みの書類に目を向けた。

「……にしても犠牲が多すぎるがな……」

5

多大な犠牲を払いつつも、三名が包囲を抜ぬいた。街の東西南北に建つ見張り台に配置した者達よりその一報が送られてくるなり、議場は揺ゆれる程の歓かん声せいに沸わく。

―総勢二七名に及ぶ男達は皆みな、男の中の男だ！　―捕縛された者達は一五名……多大な犠牲だ。無駄にはできんぞ。―うむ、あからさまに九名が山で遭そう難なんしているが、気にする数ではないな。―捕縛者から情報が漏もれるのでは？　―案ずるな、この作戦に参加した者達は鉄よりも固い絆きずなで結ばれた者達だ。仲間を売り、計画を漏らすことはあるまい。―何故そう言えるのです？　包囲を突とつ破ぱしようとしたところを捕縛となれば、街の外だ、協約は適用されない。拷問は確実だ。―おぬしよ、若い頃ころを思い出せ。女性と目を合わせるだけで胸がときめき、手を握にぎる想像だけで頬ほおを赤らめる純真じゃった若き頃を。女の柔やわ肌はだが揺れ動うごくのを見るためであれば、どれほどの犠牲をも厭いとわなかったはずじゃ。……奴やつらは漏らさぬ。たとえ手を斬きり、足を斬られたとて、股またぐらにイチモツある限り……奴らは耐たえる!!　―懐なつかしいぜ、つい昨日のことのようだ。あの時、何故かわからねぇが自分と同じ非モテの連中は全員がライバルで、かつ、同志だった。―じゃから、漏らさぬ。奴らは耐える。この包囲が解かれるその時まで！

熱く、神しん妙みように語る年代様々な議員達をボンヤリと見つつ、クリミオは思った。政治家とはバカと悪人がなるものと言われているが、多分ダメ人間もそこに混じるのだろう、と。

夜に非常招集を掛かけてまで、何を話し合うというのだ。包囲を抜いたとする通達だけでいいではないか。クリミオはあくびとため息が止まらなかった。

―これでオードビー国、いや距きょ離りの近いロテ国への応おう援えん要よう請せいが先に届きますな。遅くとも八日後には解決だ。―いや、連れん絡らくによれば五日の道を二日未満で走り抜いてみせる、とあった。包囲突破した全員で見張りの騎馬を襲って二頭馬を奪うばっており、これらを潰つぶす気で走らせるとのこと。

それで捕縛者が多いらしい。━来たぞ、これは来た!!　我々の勝利は目前だ!!　━フハハハハ、ヌッちゃんの揺れ動く乳ち房ぶさが目に浮うかぶようだ!!

「街の誇りやら信用だかのために……とかいうのは、もうどうでもいいんですかね？」

　クリミオはやる気のない口調で一応言ってみた。

　━もはや状況はそれどころではない！　━過去に囚とらわれるより、未来に目を向けるべきだ!!　━一座を招き入れるためならば軟なん弱じやくと誹そしられたところで我らは構わぬ!!　信用は新たに作ればいい！　━そうだ、乙女おとめの美しさは短い、我々は今の彼女らを愛めでたいのだ!!　━そうだ、罵ののしればいい!!　我々は未来のため、若者達のために喜んで泥どろを被かぶろうではないか!!　それが年配者にして街の代表たる議員の務めよ!!

　軟弱でいい、という割に何とも力強く言われ、クリミオは首を振ふった。

　議員達が明るく未来への希望を語り出していると、ドンドンと議場をノックする音が響ひびく。議員達は、巨きよ乳にゆうは素す晴ばらしい、貧ひん乳にゆうは素晴らしい、若いおなごは素晴らしい……と取りつかれたようになっていたので、クリミオが仕方なく代わりに応対する。

　メモを差し出された。今し方再び光通信があったようだ。

「皆みなさん、盛り上がっている最中になんなのですが、その夢、叶かないそうにありませんよ。……一座は街に入れず、東一〇キロのポイントにて夜営中。残りの食料から、翌々日の昼まで待機しても封ふう鎖さが解けぬ場合はオードビー国へ引き返し、遠回りになるも別ルートを通ってロテ国へ向かう……とのこと」

　━なっ!?　━バ、バカな!?　━無理だ、二日で解決はできん!!　━では何か、我々は街の誇ほこりも信用も何もかもを投げ捨てたあげく、一座を見ることもできないというのか……!?　━このままでは全てを失うぞ!!　━な、何とかせねば!!

　女の裸はだかと誇りと信用しかないのか、この街は。

　クリミオは退たい廃はい的なものを見る目で議員達を眺ながめ

た。

●３章『動き出す者達』

　サシャの部屋にあった魔光球はどれも技術大国であったグリコゥ国の物のようだ。

　光は安定しているし、魔ま力りよくの収まる容量も多く、出力も高い。……無論、高級品である。

　これらも女に貢みつがせたものなのだろうか。そんなことを考えながらモルトはソファに座るディナの横で、二度目になる彼女の脱出劇を聞いていた。

「……なるほど。お話しいただき感謝いたします。……しかしモルト、こういう状じよう況きようだとすると、何故なぜ安あん美び亭ていに？　知らぬこととはいえ私も迂う闊かつだったが、不用心過ぎるぞ」

　サシャは窓辺に腰こし掛かけつつ、理解できないという顔でモルトを見つめてくる。

「ち、違うのです！　モルト殿は何も悪くありません！　悪いのは……その、あそこに行きたいと言ったわたしなのです……ご、ごめんなさい」

「あなたが謝ることはありません。護衛の依い頼らいを受けたのなら止めるのも仕事の内です」

「それより今度はこっちが質問だ。サシャ、何故ディナを見てヌストルテだと？」

「幼い頃に、エンガディナ様の母上にお会いしたことがある。……瞳ひとみだよ。そのヌストルテ家の血筋に伝わる特とく徴ちよう的な緑色グリーンは一度見たら忘れられるものじゃない」

　モルトと同じくサシャも流れ者だ。三年ほど前に居着いたが、その前についてはほとんど聞いたことがなかった。案外ヌストルテ帝てい国こくにいたことがあるのかもしれない。

「モルトがエンガディナ様と出会ったのは昨日の朝のアレだろう？　……あの時、私が察していれば包囲される前に脱出できたかもしれない。そこは悔くやまれます」

　さて、どうかな。モルトは思うものの、口にはしなかった。まともな軍であれば本隊到とう着ちやく前にロテ国、オードビー国双そう方ほうのルートへ早馬を走らせて探たん索さくしていないはずがない。

「失態を取り返すべく、私も一ひと肌はだ脱ぬぎましょう。モルトだけでは不安だ」

「そ、そんな、しかし、その……お支し払はらいできるものは何もなく……」

「必要ありませんよ。困っている女性を助けるのは当たり前のことです」

「……あ、ありがとうございます。では、祖国に戻り次し第だい何か褒ほう美びの品を……！」

　サシャはどこか切なげな顔をして、首を振った。

「姫ひめ、先さき程ほど仰おつしやっていたロテ国、そして個人的に交友の深いというシャルロッテ王おう妃ひに助けを求めようというのは良い考えだと思います。ですが……恐らく、祖国に戻るのは当面、難しいでしょう。今いま頃ごろクーデターが起こっているはずです」

「おい、サシャ。さすがにそれは飛ひ躍やくし過ぎているだろ。ディナが襲おそわれたってクーデターとは限らないはずだし、何より正当な跡あと継つぎが出てくれば……」

「ヌストルテ帝国は建国を成し遂とげたのが一人の女じよ傑けつであったことから、代々女じよ帝ていが国を治めるんだ。そして、そうであるからこそ親政に支障が出ぬよう、あまり子を為なさない。エンガディナ王女、あなたは確か一人娘むすめで、しかも近しい親族は誰だれもいないはずでは？」

　ディナは驚おどろいた顔のまま、頷うなずいた。何故そこまで知っているのか……モルトも驚いたものの、よくよく考えればディナがヌストルテの血族だと察し、さらにはエンガディナの名をこち

らが触ふれるより先にサシャは口にしていたのだ。サシャは、知識を持っている。

「驚くなよ、モルト。言っただろう。幼い頃にお会いしたことがある、と。そしてその際にいろいろ頭に入れたんだ。一〇年以上前の古いものだけどね」

「確かに、その通りです。母の子はわたしだけ、後こう継けい者しやたり得る血筋もほぼおらず……。数世代前から跡継ぎに関しては大きな問題となっていたために、母が健在である内にわたしに……できるだけ子を為させようと一六の身で友好国へ見合いの……その、あの……」

　ディナはまたおろおろとした顔でモルトを見上げ、そして手を強く握ってくる。

「で、ですが、ま、まだ指一本触れられておりません！」

「え？　あ、うん……おぅ……？」

　謎なぞの処女宣言にモルトはいささか面食らった。ともかくです、とサシャが続ける。

「別の血族が帝みかどの座を奪わんとして刺し客かくを差し向けたのなら、エンガディナ様の帰き還かんでいくらでもひっくり返すことができます。実際には権力、武力、財力、それらが物を言うにしても血の正当性を大義名分として掲かかげている以上は……です。が、血族が誰もいない以上、刺客を差し向けた者は別の要素フアクターを有することで権力を得ようとするはずです」

「……軍事権、ですか」

「ヌストルテ帝国本来の国土は貴石が少量採さい掘くつされるだけの痩やせた土地だったかと。故に、他国への侵しん略りやくにより富と文化を吸収し、発展してきた歴史をお持ちだ。そのために軍は常に精強かつ大規模。……ヌストルテの血が失われた後は軍を掌しよう握あくすることで、実質的な国の掌握を果たせると考えるのが普ふ通つうでは？」

「そして今、戦争にだってなりかねないのに、街を滅ほろぼすことも辞さないとする気配で取り囲んでるのは何か、と考えれば自ずと答えは出る……か」

「恐おそらく女帝崩ほう御ぎよと同時に軍による制圧が始まっているでしょうね。エンガディナ王女の生存が祖国に伝われば親王女派、つまり今回の首しゆ謀ぼう者しやにとっての対たい抗こう勢力に一気に火は着くものの……始まるのは内ない紛ふんです。帰国は時を要するでしょう」

　予想していたよりもはるかに状況が悪く、危険な立場にいたのだと今になってディナは自覚したのだろう。震ふるえながらモルトの手をさらに強く握った。

「で、では……まさか、母の崩ほう御ぎよも……？」

「崩御の報しらせで緊きん急きゆう帰国の最中に刺客が来たとなると、その方が自然ですね」

「……そんな……そんなことって……」

　モルトがディナの肩かたを抱だいて落ち着かせていると、サシャは戸と棚だなからブランデーとグラスを一つだけ取り出し、琥こ珀はく色を注いだ。

「さ、どうぞ。落ち着きますよ」

　モルトはグラスを手に取って一息に飲み干す。

「うん、悪くない」

「お前モルトが飲むな！　姫のに決まっているだろう!!」

「わかってるって、冗じよう談だん冗じよう談だん。毒味だよ毒味。……結構強かったな、今の。喉のどにきた」

「まったく。……姫、どうぞ。グラスがそれしかないのですが……洗ってきましょうか」

「いえ、いただきます」

　ディナはソファを立ってなみなみと酒の入ったグラスを受け取ると、サシャが止める間もなくモルトと同じように一気に飲み干し……そのまま後ろへ倒たおれていった。

「おい、お前……まさか睡すい眠みん薬やくでも入れてたのか？」

　モルトはディナの体を抱だき留めると、一応呼吸を確かく認にんした。

「毒味した張本人が言うのか。……ただのブランデーだよ。私のナイトキャップだ」

　連れて帰ろうかとも思ったが、意識のない女を抱かかえて自室に戻もどるモルトの姿などもはや犯罪行こう為い以外には見えず、帝国兵でなくとも住民達が捕ほ縛ばくに動くのは目に見えていた。

　仕方なく隣りん室しつのサシャのベッドにディナを寝ねかせることになった。

「朝まで目覚めないだろう。その時には多少でもスッキリしていると祈いのりたいものだな」

「サシャ、お前、随ずい分ぶんと優やさしいじゃないか」

「女性にはね。……祖国を失いつつある狙ねらわれたお姫様なら、尚なお更さらだ」

　サシャは寂さみしげにも哀かなしげにも見える目でディナの寝顔を見つめ、寝しん室しつの扉とびらを閉めた。

「さてと。リッツが安美亭で寝っぱなしだし、一度戻るか。……サシャ行くぞ」

「ん……？　何故私も？　それに誰か護衛を……」

「ディナとお前を二人っきりにできるわけないだろ。……ははーん、さては密ひそかに乳ちちを揉もんだりする気だな？　大きくなれ大きくなれと祈りを込めたりして……このド変態が！」

「それはお前だろう！」

「いいから行くぞ。戸と締じまりはしっかりな」

　念のために、ということでモルトとサシャは辺りに監かん視し者しやがいないことを確認してから、アパートを離はなれアルコ・ホールを進んだ。

　夕食時だけあって、まだ通りには人が多く、また兵達の姿も目に

付く。

「……モルト、お前はどこまでやる気だ」

「ロテ国に到着するまでの護衛、そういう契けい約やくなんだ」

「ふむ……。問題は包囲を抜ぬくというよりも、街が耐たえられるかどうか、だな」

　近い内にロテ国が軍を送り込むに違ちがいなく、そうなれば包囲は解け、その際にディナの保護を求めれば事は済むが……問題はそうなるのを帝国側とてわかっているはずである。

　つまり、それより前に必ず動く。武力的優位に立っている以上、やるべきことは一つだ。

「その時は俺が……何でも屋であるこのモルトが護衛としての仕事を果たせばいい」

「最悪、街ごと焼かれる。どこぞのチンピラ集団とはわけが違うぞ」

「じゃ、何か？　サシャ、お前……街のためにディナを差し出せと？　冗じよう談だんじゃない。リキュールは女の子を差し出さなきゃ守れないような街じゃない」

　サシャはモルトの発言をナンセンスだというように首を振ふる。

　反論してやろうとも思ったが、それより先に安美亭についてしまった。

　リッツはまだ眠ねむっているようだったので、仕方なくモルトは長なが柄え刀とうを横にして後ろに回し、そこにリッツの尻しりを載のせるようにして背負っていくことにしたのだが……人通りの多いアルコ・ホールではこれがなかなか顰ひん蹙しゆくを買う。

　何せ一八〇センチの横棒である。……割と邪じや魔まなのだ。

　とはいえ誰もが嫌いやそうな顔をするも、その背にあるリッツの寝顔を見ると、あぁそういうことね、と納なつ得とくし、言葉にこそしないが、視線で悪く思ったことを謝ってくるのだった。

　サシャが口に指先を当て、クスクスと少女のような笑い方をする。

「……何だよ」

「いやなに、気き性しようの荒あらいリキュールの人々も、天使の寝顔の前では形無しだと思ってね」

「女子供に優やさしいのも住民の特徴さ」

　モルトはため息をして、正面から来る人々にペコペコ頭を下げた。

「モルト、こうしないか。私がこの子を抱いていこう」

「嫌だ。……リッツまで貴様の毒どく牙がにかけられてたまるか」

「独ひとり占じめするなよ。こんなかわいいんだ、ズルいじゃないか」

　サシャはまるで少女が小動物に手を伸のばす時のように、恐る恐る、けれどこれから指先に感じるであろう柔やわらかさや温ぬくもりの予感に胸をときめかしているかのような……そんな顔でリッツに手を伸ばしてきたので、モルトは足を速めて彼の手から逃にげる。

「待てって、モルト」

　サシャが笑え顔がおで追い掛かけてくるので、モルトは少々強ごう引いんに走り出す。すると、丁度店から出て来た男と危うくぶつかりそうになって、二人して飛び退のいてしまった。

「おっと、モルトか。長柄刀をそんなにしてたら危ないぞ、何して……あぁ、リッツか」

「ライじゃないか。そっちこそ、どうした？　こんな……珍めずらしい」

　ライが出て来たのはオーダーメイドでどんなものでも作ってくれるケーキ屋である。

　三食に加えて夜食まで出る自警団寮りように暮らすライがこんな

ところに来るイメージがなかったので、モルトは少々驚いた。

「いやなに、活動自じ粛しゆくで仕事もねぇし、たまには姉ちゃん家ちにでも泊とまろうかと思って。それで土産みやげ買ってたんだ」

「……ライ、いや、相棒よ。俺達は何時いつ如何いかなる時とて一心同体だ。そうだな？　よし、ならば俺もオリービーさんの家に泊まろう！」

「はははは、タダ飯狙いか？　もうこの時間なら晩飯終わってるよ」

　少年のような笑みを浮うかべるライを見て、モルトは思う。

　本当に純じゆん朴ぼくな男だ。リキュールでは指折りの実力者のくせして、未いまだに女の裸はだかを見ようものなら全身を硬こう直ちよくさせて数日間使い物にならなくなるような、そんな奴やつ。母親代わりの姉を誰よりも大切にしていて、たかってくる悪い虫は実力で排はい除じよするような、そんな……。

　しかしながらそれ故ゆえだろう。身内という認識のあるモルトがオリービーを密かに狙い続けていることに気づきもしない。

「捕つかまえたぞぉ」

　サシャが嬉うれしそうな声でリッツはもちろん、モルトごと背後から抱き締しめてきた。

　その衝しよう撃げきでリッツが起きてしまったようだ。「ん、なにぃ……？」と、もぞもぞ動く。

「お、リッツ起きたか。気をつけろ、どこぞの変態がお前を抱こうと狙っているぞ」

　変態とは失敬だな、とサシャは不満げに言いつつ抱き上げようとするのだが、寝ぼけ眼まなこながらにリッツが拒きよ否ひったので、彼は仕方なく彼女を地面に下ろすだけにした。

　寝ね起おき直後でリッツはふらふらだ。彼女は少し迷う素そ振ぶりの後、モルトの手を握にぎった。

「……不服だな。私の何がダメだ？」

　女にサシャより自分が選ばれたことが嬉しいものの、それがまだお子ちゃまのリッツでは喜んで良いものかわからず、モルトは苦く笑しようし、ライは笑った。

　そんな四人で街を進んでいると、不意にライが立ち止まる。

「姉ちゃんの店、こんな時間に人が……随ずい分ぶん繁はん盛じようして……あれ？」

　花屋の前の人だかりから馬の首が二つ覗のぞいていた。帝てい国こくの騎き馬ばだ。

　人ひと混ごみみをかき分け、近づいてみれば帝国兵が四人。無論、客ではなさそうだった。

　リーダー格らしい十字傷を顔に持つ男がいやらしげな笑みを浮かべ、俯うつむくオリービーの肩を抱き、残りの三人は店内を踏ふみ荒あらしていた。

「おいっ、てめぇら何してる!!」

　ライが怒ど声せいを上げた。ハッとしてオリービーは「違うの、何でもないから」と身み振ぶり手て振ぶりで示すものの、ライは長柄刀を硬かたく握り締しめてズンズンと進んでいってしまった。

　モルトはさすがにリッツの手を放し、ライを止めんと追い掛ける。

「何だ、小こ僧ぞう？　その重そうなのからすると自警団か？　今は活動自粛中だろうが。こっちは不ふ審しん者しやがいないかこの花屋を探たん索さく中だ」

「汚きたねぇ靴くつで勝手に入るな！　覗けば誰だれもいないってことぐらいわかるだろうが！　そもそも姉ちゃんに触さわってんじゃねぇ!!」

「おぉ、そうか、こちらのご婦人はお前の姉上だったか。それはすまないことをした。ついつい話が盛り上がってしまってな」

　男は頬ほおにある十字傷をオリービーにこすりつけるように顔を

寄せる。

　さすがのそれにはオリービーも逃げようとするが、肩を抱かれているために避さけられず、瞼まぶたをギュッと閉じて耐えるだけだった。

　ライの体から殺気が溢あふれ、近づきゆく歩ほ幅はばが変わったのをモルトは見み逃のがさなかった。

　仕し掛かける気だ。

　モルトは慌あわててライに飛び付き、羽は交がい締じめにしてその動きを押さえ込む。

　だが、体格では一六〇台前半しかないはずのライは、モルトの全力をもってしてギリギリだ。踏ん張ばったモルトとライのブーツが石いし畳だたみを砕くだき、そして地面を抉えぐり始める。

「止めるなモルト!!」

「協約を思い出せ、バカ！　今ここでそいつらを殺せば街がどうなるか……!!」

「いい言い訳があって良かったな、小僧。我らの剣けんの錆さびにならずに済んだぞ」

　さらにライの体に力が入る。モルトは一度足を上げて体勢を直そうとしたのだが……その際、石畳ではない何かを踏んづける。

　ライが落としたケーキの箱だ──滑すべる。

　モルトの体から一気に力が抜け、ライが解き放たれた。

　地を猛もう烈れつに蹴けりつけ、放たれた矢の如ごとく、ライは長柄刀を突つき出し突とつ進しんした。

　帝国兵を串くし刺ざしにせんとするそれに傷顔は目を見張るも、あまりの速度に当人はもちろん、他の兵、サシャ、見物人の誰もが反応できなかった。……唯ゆい一いつ、オリービーを除いて。

　彼女は帝国兵の盾たてになるよう、前に出て腕うでを広げる。

「やめなさい、ライ!!」

　いつも柔らかな微笑ほほえみを浮かべているオリービーが、表情を厳しくし、叫さけんだ。

　長柄刀はオリービーに触ふれる寸前でピタリと止まるも、剣圧だけで彼女の髪かみを揺ゆらす。

「ライ、あなたは自警団団長としての立場を忘れています。あなたがするべきことは街を守ることです。率そつ先せんして協約を破り、問題を起こそうなんて……いけないことです！」

「……姉ちゃん、でも！　どいてくれ!!」

「ダメです！　退ひきなさい！」

　モルトもほとんど見たことがない姉弟きようだいの姿に何もできず、今いま更さらながら花屋の中で剣を抜き出した他の帝国兵達を警けい戒かいするだけだ。……ついでにどこぞから荒あら縄なわと武器を取り出し始めていた野次馬達にも余計な手出しをさせないよう、モルトは注意を払はらった。

　相手が帝国兵では、先日の朝のようにはいかないのだ。

　状じよう況きようを判っているのかいないのか、突き殺されかかった帝国兵が、笑い声を上げた。

「聡そう明めいな姉上だな！　街のことをよく分かってる！　……本気で惚ほれそうだ」

　傷顔は未いまだ手を広げているオリービーに背後から抱だきつくと、また頬を寄せる。

「……やめてください。あなたに興味ありません。それ以上するなら屈くつ辱じよくを受けたとして議会に訴うつたえます。協約違い反はんです」

「ただのスキンシップさ。気が向いたらいつでも西の幕舎まで来てくれ、待ってるぜ」

　ポンポンとオリービーの肩かたを叩たたくと、傷顔は仲間に声を掛け、去って行った。

　帝国兵が消えてもなお、オリービーは弟を真っ直ぐに見つめ続けていた。油断すれば、追い掛けるに違いないからだろう。

　そうして帝国兵達の姿も消え、野次馬達も荒縄はもちろん、各おの々おのが密かに取り出していた武器をしまう頃ころになって、ようやくオリービーの体から緊きん張ちようが抜けた。

　折れそうな程ほどに歯を喰くい縛しばったライもまた、長柄刀を下ろす。

「何でだよ!!　何で……姉ちゃんが危なかったんだぞ!!　何で止めるんだよ!!」

「あなたが守るのはわたしだけじゃありません。街全体です。わたしのために街を危険に晒さらすなど言語道断。……少し、頭を冷やしなさい」

　オリービーはライにそれ以上視線を向けることなく、モルトの前に来ると深々と頭を下げ、続けて野次馬達にも騒さわがせたとして頭を下げていく。

　頭を下げられた方が辛つらい、そんな謝罪だった。

　ライは俯き、動かず立ちすくんだまま。モルトはかつての相棒の肩を抱く。

　果たしてそれが慰なぐさめになるかどうかも、わからなかった。

　けれど、わかってる、同じ気持ちだというのは伝わるはずだった。

「何でだ、何でだよ。何が協約だよ。大切な家族が嫌なことされてんのにオレ達は何もできねぇのかよ!!　何のための自警団だ!?　いつまで耐えろってんだ!?　あのクソ議長!!」

　リキュール屈くつ指し、恐おそらく世界中の強つわ者もの達と戦わせたところで対等以上に戦える、そんな男が、叱しかられた子供のように、目め尻じりに涙なみだを溜ためていた。

「もうよせ。オリービーさんもその気持ちはわかってるさ。だから……」

　ライを黙だまらせないとまずいというのは、嫌でもわかった。

　今の彼の言葉は、リキュールの住民達に響きすぎる。

　──そうだ、あんな横暴はさせちゃダメだ。──セクハラだって協約の〝危害〟の内じゃないのか？　──店が荒らされたんだ。危害だろ。──でも具体的に決めてねぇっぽいし、やっぱり傷害とかじゃないと。──心に傷を負わされただろ！　──アタシだったら絶対我慢まんできない、訴える！　──だよな、自分の嫁よめや娘むすめがあんなんされてたら……。

　野次馬達の声が拡ひろがり、それがまた人を集め、同調の声を上げさせていく。

　モルトとて同じ気持ちなのだ。女の子一人、家族一人、大切な人たった一人……助けられない自分でいたくない。そんなのは悔くやしい。……けれど、今は協約の束そく縛ばくがあるのだ。

　──もう我慢できねぇ！　気合いのある連中集めて、殴なぐり込みにいっちまおうぜ！　──だよな、ちゃんと人数募つのれば戦えるに決まってる。──そうと決まれば……！

　嫌いやな方向で話がまとまり出した時、オリービーが両手一いつ杯ぱいに花を抱かかえて店から出て来た。

「お待ちください、皆みなさん。抗こう議ぎは自らの手で行うのではなく、あくまで議会を通してするべきことだと思います。……それに……今し方のは、わたしは一いつ切さい気にしておりません。ですから……大だい丈じよう夫ぶです」

　最後の言葉は弟にかけたのだろう。

　……ライには、それがわかっただろうか。

「お花、ダメになっちゃったのも多いので、良かったら皆さんお持ちになってくださいませんか。あ、リッツちゃん、ちょっと手伝って」

　オリービーは手にしていた色いろ鮮あざやかな花々を群れていた野次馬達に渡わたしていく。

　花にそういう力があるのか、それともこの場を押さえるために、

ダメになっていない売り物の花まで配りだしたオリービーに誰もが気け圧おされたのか……不思議なことにそれで皆みなの中にあった殺気があからさまに薄うすれていった。

「モルトさんも、良かったら是ぜ非ひ。……ライ、もう家に入ってなさい」

「……いい。ここにいる。見張りがいた方がいいだろ。今度来たらオレが応じる」

　本当に一晩中ここに立っているのだろう。ライは、そういう奴だ。

　モルトは花を受け取ると、配り続けているリッツ達と別れ、サシャのアパートへと戻もどることにした。

「……ライが時計の針を速めてしまったな。これは明日あした明後日あさつてには誰かしらが動く。我々も覚かく悟ごを決めた方がいいかもしれないぞ、モルト」

　そうだな、とサシャの言葉に曖あい昧まいに頷うなずきつつ、モルトは道に転がる潰つぶれたケーキの箱を拾い上げた。

1

「こう言うのは何だが、姫ひめの護衛には私一人いればいいと思うんだ。なぁ、モルト……」

「そんなわけにいくか。……何だよ、そんなに嫌か？」

　サシャの部屋は寝しん室しつと居間で二部屋あったので、ディナにはそのまま寝室を、そして何でも屋二人は居間で寝ねることにしたのだが……何故かサシャが異様に嫌がっていた。

　寝室を覗けばディナはベッドで丸くなっている。

　ウェイトレス仕事に母の死の真相、そして祖国の危機、酒……そのどれもが彼女を深い眠ねむりへと引き込んでいるのだろう。

　本当に朝まで起きそうもない。とりあえずは、大丈夫だろう。

　気になるとすれば、寝ぼけ眼でアパートに帰したリッツが今いま頃ごろ「エンガディナ様が帰ってこない！」とモルトの部屋で騒いでいそうな予感がしたが……仕方ない。さすがにパジャマ姿で夜の街へ捜さがしに出たりする程には無む謀ぼうではないだろう。

　心配するとすれば、次に顔を合わせた時の我が身である。

　モルトは絨じゆう毯たんの上に毛布を敷しき、革コートを脱ぬいで寝そべってみる。そこそこ良い絨毯なので、寝心地ごこちは悪くない。あの階段前の廊ろう下かに比べれば天国である。

「なぁモルト……こうしよう。交こう替たいで寝起きして、見張りをしよう」

「まぁ男二人で抱だき合って寝るのも嫌だしな。先に寝ろよ、俺は仮か眠みん取り過ぎでまだ眠くないんだ。……クラッツのお盆ぼんは本当よく眠れるぜ」

「ははは、仲がいいな。私はまだ叩かれたことがないんだ。……それが、少し寂さびしいよ」

　そりゃ顔が良く、セクハラもしないサシャを殴る理由はないだろう。

　それを口にすると、そうじゃない、と彼は首を振ふる。

「馴な染じみの相手にしかあの盆は飛んでこない。セクハラされかけても避けるだけ。……だから叩くのは心を許している証しよう拠こだ。本気で叩ける相手というのはそういうものだろう」

　互たがいの全てを理解しているから、ちょっとやそっとじゃ関係が崩くずれる心配がない……だから、遠えん慮りよなく叩ける。サシャはそう言いたいらしい。

　そういうもんか？　モルトは言いつつ街の住民達を思う。

　言われてみればマブダチだからこそグレーンもまたピンガに遠慮なく「ぶっ殺す」と声を上げて襲おそいかかれ━いや、少なくとも昨日のアレにはおぞましいほどの殺意が籠こもっていた……。

別の例は何かないだろうか。そうだ、確か数日前、嵐あらしが終わった直後に壁かべをぶち破って吹ふっ飛とばされた痩やせた旦だん那なとマッチョな嫁が──いや、あれはただの事件だ。

「うーん……なるほどな、と言える事例が思い当たらねぇ……」

「そうか？　身近にあるだろう。リッツちゃんがいい例じゃないか」

「……お前もあのアパートで家賃滞たい納のうしてみろよ。あの小さな姿が悪あく魔まに見えるぜ」

「リッツちゃん、今も体、弱いんだろう？　……なら、心許している証拠じゃないか。信用、いや、信しん頼らいできる相手の前でなきゃ全力なんて出せないよ。喚わめいて騒いだ後、倒たおれてしまうかもしれない。それでもその相手の前なら大丈夫だと思える。だから……」

「裸はだかの俺を三階の窓から蹴り落とせると？」

「何だそれは？」

説明する気もなかったので曖昧に誤ご魔ま化かしていると、サシャは出しっ放しになっていたブランデーの瓶びんを揺らして中身を確かく認にんする。あまり残っていないようだ。

「……羨うらやましいよ。モルトはもう完全にリキュールの人間だ。私は三年いるが……」

「一〇年もいればこうなるさ。それにお前には女がいるんだろ、大量に」

「女性は気を遣つかってくれるけどね。それは嬉うれしいさ。……でも、私がこのままここで暮らしても、モルトのようになれるとは思えない。今と変わらず、周りに壁がある気がする」

考えてみると、モルトが街に来て三年目には自警団寮りようでライ達と家族同然の付き合いをしていたし、その頃に起こった事件を切きっ掛かけに今のアパートに住すみ処かを移してもいた。

モルトとサシャ、共に余所者アウトサイダーではあったが、確かに違ちがうのかもしれない。

「着き飾かざるのをやめてダサくなればいい。ついでに図ずう々ずうしくなれば完かん璧ぺきだ。そうすれば望み通り誰だれもお前を気き遣づかったり遠慮したりしなくなるさ。向こうへ行けと唾つばだって吐はかれる」

　まるで野の良ら犬だな、とサシャは寂さみしげに微笑むと、寝ね酒ざけのつもりなのか、ブランデーを口にする。

　彼は簪かんざしを抜ぬいて思いの外ほか長い髪を解ほどくと、マフラーは巻いたままで毛布にくるまって床とこに就いた。

「しかし、私にはそこまでモルトのマネをできそうにない。……悩なやましいよ」

「……おい、誰がダサくて図々しい野良犬だよ、おい」

　モルトがブーツの先でサシャを突つつきまくると、よせよせ冗じょう談だんだ、と彼は楽しげに笑った。

「何だかんだで……私をそういう風に扱あつかってくれるのは、モルトだけだな」

　サシャは微笑み、そして、ため息混じりにそんなことを言うと、静かに瞼まぶたを閉じた。

　この街の住民なんてガサツでデリカシーのない連中ばかりだ。もし壁を感じるとすれば、それはきっとサシャの方にあるからだろう。とはいえ、今し方のもそうだが、モルトに対するサシャの当たり方を考えるに、そこに壁があるようにも思えないのだが……。

　リッツといい、サシャといい……なんなんだ、いったい。

　モルトは舌打ちをして、ソファに深く座り直す。

　瓶を片付けなかったところを見ると残りの酒は自由に飲んで良さそうなので、モルトは空いていたグラスに注いで、己おのれの口へ。

「ツマミでもあれば……花じゃなぁ……」

　オリービーから貰もらった花は花か瓶びんに挿さされ、部屋の装飾品となっていた。

　その花とオリービーを重ね、想おもいを馳はせていると、サシャの寝息が聞こえてくる。

　彼は寝返りを打ち、巻いたままでいたマフラーの端はしで目を隠かくした。

　魔ま光こう球の灯あかりが強いのだろう。モルトは卓たく上じょうの魔光球を擦こすり下げて、灯りを落とした。

　酒を楽しむには鼻と舌さえあればいい。

　とはいえ当ては欲ほしい。酒だけでは否が応にもペースが上がり、瓶に残っていたブランデーはあっという間に消え失うせてしまった。

　夜は長い。することもない。となれば酒が出てきた戸と棚だなの位置をモルトが思い出すのはある意味において必然である。

　気配を押し殺しつつ、戸棚を開けてみれば……嬉しいことに未み開かい封ふうのボトルがあるではないか。モルトは遠慮なくその封を解き、グラスに注いだ。

「フンフン。薬草酒か？　……あれ？　これ、どこかで……まぁいいか」

　結構強そうな気配だ。度数の強さは飲兵衛のんべえにとってこの上なく魅み力りょく的である。

　グイッと呷あおる。唇くちびるを湿しめらせ、舌を潤うるおし、喉のどを焼く。強きょう烈れつだ。鼻から抜ける薬草の香かおりにモルトの意識が危険信号を放った。

　……記き憶おくにあるわけだ。忘れるわけがない。

「ムリエルプルクラじゃねぇか!!」

「うゎ!?　……な、なんだ、どうした、モルト!?」

　サシャが跳はね起きて、刀を手にしつつモルトを見た。

「あ、クソ……モルト、戸棚を漁あさったな。……それは貰い物の酒だ、酒屋に行ったらあそこの大婆ばあさんが新商品だって言っ

て。薬草酒は好きじゃないんだ。だから飲んでも構わないが、せめて一言告げてからにしてくれ。……まったく」

「誰が飲むかよ……。クソ、吐いた方がいいかな。一口ぐらいなら大丈夫か……？　いや、怖こわいからサシャ、悪いが交替だ。
ちょっと寝て酒を分解しちまいたい」

「……構わないけど、どうした？」

「この酒はちょっと怖いんだよ……。嫌な二日酔よいになるし」

　声を上げたせいか体が火ほ照てってきていたが、多分先に飲んだブランデーのせいだと信じ、モルトはサシャの隣となりに横になった。

　サシャの温もり残る毛布と絨毯。男の体温だと考えるといささか気持ち悪いものがあったが……ちょっと良い匂においがして不思議と嫌けん悪お感は湧わいてこなかった。

　酒が回っている。それをはっきりと感じた。体が熱く、意識がボーっとしてくる。ムリエルプルクラのせいか。前回飲んだ時はどうだっただろう？

　何にせよ今回はさすがに大丈夫だろう。量は少なかったし、ディナも別室だ。男二人なら何も問題は……こいつ、綺き麗れいな顔してやがるな……。

　寝ね転ころがったモルトが見上げるのは、隣に座るサシャの姿。

　薄い金色の髪かみは差し込む月明かりを受けて白銀に輝かがやき、口に簪を咥くわえ、解いていた髪をまとめているのだが……その姿、その所作、どれを取っても綺麗としか形容できなかった。

　ほっそりとした顎あごもいい。やや俯うつむき加か減げんにして晒さらすうなじなどゾクリとくる程に妖よう艶えんだ。それに両りよう腕うでを上げているせいで無防備な脇わきのラインにも思わずため息が出そうだった。

　なぁ、サシャ。モルトは呼びかけながら半身を起こすと、隣のサシャの肩かたに手を置く。

「お前はさっき、自分の周りに壁がある、と言っていたが……そん

なもん、ねぇよ」

「お、おい、何だ、モルト。急に……あ、うっ」

　モルトは腕うでを肩からサシャの細い腰こしに下ろし、彼の体を強ごう引いんに抱き寄せる。

　数十キロに及およぶ長なが柄え刀とうを片手で扱える腕わん力りよくがあるのだ。サシャの体など、モルトにとって軽いものだった。

　いきなりの力強いそれにサシャは驚おどろき、目を見開きながら、されるがままに背を反らし、胸を張るようにして、モルトの膝ひざを跨またいで正面に……。

　簪が落ち、纏まとめられかけていたサシャの髪がサラリと月光の中で煌きらめき踊おどる。

　鼻先が触ふれ合いそうな距きよ離りで、モルトとサシャは見つめ合った。

「サシャ、よく見てくれ。……今、俺達の間に壁があるか？」

　仰のけ反ぞるサシャに覆おおい被かぶさるようにして、モルトはゆっくりと言葉を紡つむいだ。

「……壁はない、かな。確かに。けれど……それは……多分、お前だからだ、モルト。お前はいつだって見み栄えを張らず、呆あきれるほど図々しくて、暇ひまを持て余あました犬のように……入り込んで来る。だから……誰にでも……」

「誰にでも？　どうかな。お前だけ……そう思ったりはしてくれないのか？」

　え？　と、サシャの双そう瞳とうが困こん惑わくに震ふるえる。けれど、それでも見つめ合う視線は外れない。

「わ、私だけ……？」

　サシャの色白な肌はだが滲にじむように赤らんだ。湿った吐と息いきがモルトの頰ほおを撫なでる。

　腰に回した腕で、サシャの体温がじわりと上がるのをモルトははっきりと感じた。

　サシャの両足が内うち股またになるようにして、モルトの膝を挟はさむ。

「モルト……」

「壁があるというのなら……安心しろ。サシャ、俺が取り払はらってやる」

　モルトは顔を近づけ、サシャの唇に己のそれを……触れさせようとしたが、首をどれだけ伸のばしても等とう間かん隔かくのまま。……サシャが限界まで仰け反って、かわしていた。

「ちょっ……ちょっと待て、モル……モルト！　い、今のはさすがに流されそうになったが、私は、お、男で……いや、そうだ、そう、お、男だぞ？」

「性別の壁なんて、俺が取り払ってやる！」

「そういう意味の壁か!!」

　サシャがダンサーのように柔やわらかに仰け反りきったことで、モルトの前には彼の胸が突つき出されていた。そこには……膨ふくらみがあるように見える。

　刀を使うことで鍛きたえられた大胸筋……いや、鳩はと胸むねなんだ、と以前聞いた気がする。

　手を伸ばせば届くところにおっぱいがあれば、男は手を伸ばさずにはいられない生き物だ。だが、それがもし同性の鳩胸であれば果たしてどうなのだろう？

　自問自答の末、モルトは思う。──同性なんだから何も問題ねぇな！

「いいじゃねぇか、男同士だ、何したって問題ないだろ」

「だからだろ！　むしろだろ!!　……あっ!!」

　サシャの触さわってくださいと言わんばかりに突き出された胸

を、モルトは鷲わし摑づかみにする。

「ちょ、服の下にまで手を……あっ、ぁんっ!!」

　サシャが男であることを忘れてしまいそうになる、そんなかわいい喘あえぎ声。

　モルトは本能に従うようにしてサシャの上着の下に差し込んだ手で、彼の開発済みの乳頭へと指先を伸ばそうとするのだが……不思議なことに何故か包帯のようなものを胸に硬かたく巻いていた。怪け我がをしているのかもしれない。

　……優やさしくしてやろう。そう思ってモルトは包帯の上から彼の乳頭らしきポッチを見つけ、指先で転がし、そして……顔面に肘ひじ打ちを喰くらうのだった。

「放せ、バカ!!」

　肘打ちを喰らって仰け反るモルトの腕の中から、身を転がすようにしてサシャは逃にげ出す。

　彼は間かん髪はつ入れずにモルトの背後に素す早ばやく回り……強く、抱だき締しめてくる。

「何だ、攻せめる方が好きだったのか。それならそうと言ってくれれば……うぐっ！」

　喉に腕が差し込まれ一気に締め上げられた。あまりに見事なそれにモルトの意識はあっという間に飛びかかるものの、その後頭部にはサシャの胸の感かん触しよくがあって……これはこれで悪くない。そう、思った。

2

　サシャは全身の力をかけてモルトの首を締め上げ、彼の体から力抜けてなお、それを緩ゆるめなかった。

　……さすがにそろそろ死んだだろうか。

　サシャがそっと腕を解いてやれば、最初彼の呼吸は止まっていたものの……しばらくすると「ぐはっ」と呻うめき、文字通りに息を吹ふき返したので、そのまま放置することにした。

　乱れた服と髪のまま、サシャはモルトが口にした酒さか瓶びんを手に取り、臭においを嗅かぐ。

「……まさか、媚び薬やくの類たぐいだったのか……？」

　九〇歳にもなる酒屋の老ろう婆ばからの贈おくり物が媚薬……考えるにそれはそれで怖いものがあるが、ただの酒であってもサシャとしては困ってしまう。



サシャは部屋を出る。夜風に当たって火照って変な汗あせをかいてしまった肌を落ち着けた。

髪を直し、そして衣服も、と思ったが……胸に巻いていたサラシが緩んでしまっている。

「部屋にはモルト達がいるし……えぇい、仕方ないか」

サシャは辺りに人ひと気けがないのを確認してから、平屋であるアパートの物ものの陰かげに伏ふせ、上着を脱ぬぐ。そして緩んだサラシをも解けば、思わずホッとした息が出てしまった。

自らのものに触れてみれば、それも頷うなずける。

女のものがそこにある以上、やはりどうしたってサラシをキツく巻いてしまえば息苦しくなるものだ。

「……くそ、また少し大きくなったか」

もう二〇歳だ。いい加減成長が止まってもおかしくない年ねん齢れいのはずである。胸むな元もとを無理矢理にサラシで押さえているのが変な刺し激げきになって成長を促うながしているのかもしれない。

サシャはため息と共にサラシを巻く手を早めた。夜中に半はん裸らの女など痴ち女じよにも程ほどがある。

何より、サシャは男なのだ。少なくともそう信じて疑われないよう、うまくやってきた。

それでもこれを見られてしまえば、鳩胸だと言い張るのはさすがに無理があるだろう。

隠しておかねばならない。今は、まだ……。

彼女の国が滅めつしてから、まだ一〇年足らずなのだ。

衣服を直し終えると、サシャは自室に戻もどる。けれど、イビキをかいて寝ねているモルトを見ていられなくて、サシャは新しいワインの酒瓶と共に玄げん関かん前で月を見上げた。

「……らしくないな。女であることは捨てた、もう自分は男、そう思い定めてやって来たのに。……クソ、しかもよりにもよってその相手がモルトというのがまた……」

　サシャは酒瓶に口をつけ、ゴクリとやった。

　恥はずかしくも小こ娘むすめのようにときめいてしまった己の記憶を消すように。

　けれど、胸に浮うかぶのはさっきのモルトの言葉と、間近で見た彼の瞳ひとみばかり。

　胸がときめいたのは、根無し草となった自分を受け入れようとしてくれた……と勘かん違ちがいしたからなのか、それとも……男としての彼だったのか。サシャにはわからなかった。

３

　長い……。クリミオは議長代理として未いまだ議場に座っていた。

　━元々燃え上がりやすい性質タチのリキュールじゃ、自警団団長ライが姉の店で悶もん着ちやくを起こしたというのはさすがにマズイのぅ。感化される者が一気に増えてしもうた。━打って出ようとする連中が徒党を組み始めた、という情報も入ってきている。いくつかの少数グループがあって、その中で最大規模と思われるのが街のゴロツキ共だ。アイツら、今は五〇人ぐらいだが、声を上げれば他グループと合流し、現状の倍は一いつ瞬しゆんで集まるだろう。━任にん侠きよう者か。こういう時に頼たよりになるようで、危なっかしいのぅ。━こっちはもっとヤバイぜ。自警団の武器庫の鍵かぎをどこかの誰だれかがかけ忘れたとかで、一いつ般ぱん市民達が勝手に持ち出しているとかなんとか。……十中八九意図的だ。━意外な所からの情報も一つ。街の本屋です。先日から猛もう烈れつに売れ出した本というのがあるそうでして、それが……『楽しい罠わなの作り方　～野の鼠ねずみから政治家まで～』『ヤれる暗殺術!!』『学年ビリのチビが一年で敵兵を四〇人殺して正規軍に合格した話』『もし占せん領りようされた街の娘むすめがドラッグの

〝ヘロイン〟を手にしたら』『禁じられた遊び　親友の妻が女に戻る夜』といったラインナップです。──どれもヤる気満々じゃねぇか!!

　代理で出席している関係上、クリミオは一通りの内容についてメモを取っているのだが、さすがに最後の本のタイトルだけはスルーすることにした。

　延々とこんな酷ひどい会議に付き合わされるのに、クリミオはうんざりだった。

　肌にも良くない。今朝方、吹き出で物ものができているのを見つけていた。明日あしたには二つになっている可能性を考えると頭を抱かかえたくもなる。

　これならたとえろくでもない意志のもと、ろくでもない決定をするにせよ、スパッと竹を割ったように物事を判断して行動に移す彼がいた方が……。

「……何を考えているんでしょうね、わたしは。……愚おろかしい」

　クリミオはそっと胸ポケットに入れたままにしていた眼鏡めがねに触れた。

　──……限界だろ、もう。──食料を取り扱あつかう店に明日から接収を行うと言ってきた兵もいるらしい。そうなれば誰かしらが手を出すだろう。──抵てい抗こうし、仮に接収部隊の帝てい国こく兵を追い返したとて……。──その後は大隊一つを敵に回すことになる。街に立て籠こもるにしても大昔と違って堀ほりもなければ壁かべもない。あるのは見張り台だけ。──まずは火と矢が放たれ、逃げ惑まどう市民が狩られ、抵抗する自警団は騎き馬ば隊が蹂じゅう躙りん……。──ストリップ一座を見ることも叶かなわず、信用と誇ほこりを投げ捨ててもなお救きゅう援えんも間に合わず、物理的に住民も家々も……本当に全てを失う、か。──だが、向こうの言いなりになったところで救われるのか。街は、我々は!!　──人を探しているんだろう？　緑の瞳で指輪を持った奴やつ。それを住民全員で、一いつ斉せいに探し出して向こうに引き出せばあるいは……。

「忠犬の街、リキュールの誕生……といったところでしょうか」

一二人の男達が一斉にクリミオを見た。

「以前わたしの雇やとい主を袋ふくろ叩だたきにしていた際、誰だったかがそんなことを言っていませんでしたっけ？　勘違いでしたら、謝罪します」

言うだけ言ったが、間違いなく言っていた。あの時の出来事はもちろん、議場でのほぼ全すべてをメモに残しているので、証しよう拠ことして突き付けることも可能だった。

耳で聞いたこと、見たこと、経験したことの全てを記録として残すのはクリミオの自じ慢まんの技能なのだ。秘書として誘さそわれたのも、それあってである。

議員達全員があからさまに言葉を失い、見る見る内に顔を赤らめ始めた。

全員が憤ふん怒ぬを抱いだいている。けれどそれをぶつける矛ほこ先さきがないのだろう。

……いや、ある。しかもぶつけたところで〝悪態を吐つく〟という以上のものが何もない、非生産的な……そんな矛先が、一つだけ。

「こんな協約を結んだ奴が悪い、というのはこの際、やめにしましょう。時間の無む駄だです。過去を悔くいて責任を誰かに押しつけるのではなく、街の未来を決めるのが議会の役割であり、使命です。……言いたいことがあるのなら次の選挙でどうぞ」

無駄に議会が紛ふん糾きゅうするのを避さけるため、クリミオは髪かみを払いつつ先手を打った。

──忠犬の街、リキュール……だと？　ふざけるな。──あぁ、認められるか。──だが……だがだ！　──そう、他に手が……。

そんな時あの八〇を越こえる最さい高こう齢れいの議員が深い息と共に、重苦しく言葉を天てん井じようへ放った。

ある、と。恐おそらくだが、と付け加えて。

全員の注目を集めた彼は、静かな声で、そして有う無むを言わせぬ力でもって恐らく唯ゆい一いつにして、最後の結論を出す。

それは、クリミオが期待していた言葉でもあった。

―クリミオ、雇い主を……議長マドラーを呼び戻せ。奴の小こ賢ざかしい頭脳に未来を託たくす。

リキュールの牢ろうは自警団本部の地下に存在する。

お世辞にも衛生的とは言えない湿しつ度どの高さ、そしてそれがもたらす陰いん気きな雰ふん囲い気きの地ち下か牢ろうである。クリミオは大きな鞄かばんを手に階段を下りていった。

「お仕事の時間ですよ、マドラー議長」

「……そろそろ来る頃ころだと思っていた。クリミオ」

重じゆう厚こうな鉄てつ格ごう子しの向こう、石いし壁かべに背を預けるマドラーは、ボロボロの服装とは違って体はもう何ともないようだ。ひ弱に見えるが、やはり彼もまた、丈じよう夫ぶな体をしているのだろう。

リキュールがやたらとバイオレンスなのは恐らくこの耐たい久きゆう力及および回復力によるものだ。無茶苦茶やっても翌日にはケロリとしているから、誰も彼も遠えん慮りよがないのだろう。

クリミオが鞄から取り出した書類の束を鉄格子の間から差し込むと、彼は眉み間けんに皺しわを寄せ、鼻先をくっつけるようにしながらパラパラと流し読んでいく。

「リキュール議会より……というか、あの長老みたいなジジイから伝言です。〝解任動議を取り下げる。状じよう況きようをかき回せ、マドラー〟だそうですよ」

「フンッ、足りんな。こう言い直させろ。『状況をかき回せ、リキュール代表マドラー議長』とな。……だが時が惜おしい。今回は許してやるとしよう。牢から出せ。ここの名物マメ料理にも飽あきてきたところだ」

控ひかえていた自警団員が牢の鍵を開ければ、マドラーは書類の束をクリミオに突つき返して歩き出す。もう全て頭に叩たたき込んだということなのだろう。

「まずは代わりの眼鏡を。それから人前に出られる格好が必要だ」

「どちらも用意してあります」

「ならば何も問題はない。状況をかき回し、問題を解決しよう。それも完かん璧ぺきにだ。街の誰もが望む形で、この問題、終わらせてみせよう」

　クリミオが差し出した眼鏡を歩きながら装着し、真まっ新さらな白いコートを羽織る。

「できますか？　議会は匙さじを投げたのですよ」

「それが僕の仕事だ。それにできると踏ふんだから議会、いや、君はここへ来たのだろう」

　その通りだった。だが、それに同意するのは面おも白しろくないので、クリミオは話を逸そらす。

「どっかのバカが結んでしまった協約によって交こう渉しようは難しいでしょう。かといって反ほ故ごにしようにも騎馬隊二五〇を含ふくむ正規軍一個大隊と対たい抗こうする戦力がありません」

「クリミオ、僕は言ったぞ、完璧に解決すると。我々は反故になどしない。そして……」

　マドラーは鼻で笑うと堂々たる足取りで地上へ昇のぼり、自警団本部を後にした。

　真まっ直すぐに議場へ向かうのかと思いきや、彼は自警団本部横にある小高い丘おかへと向かっていく。

　まだ顔も出していない太陽の気配を帯びて、薄うす暗ぐらい闇やみの中からゆっくりと家々がその輪りん郭かくを浮かび上げつつあった。

　三〇〇〇の住民と一〇〇〇の旅人達が集つどいし、物流の中間地点にして不落の街、リキュール。その夜明けの光景である。

「……戦力はある」

　いつものように自信たっぷりにマドラーは言うと、彼はクリミオ

へ振ふり返った。

「街中の宿に対し、業務停止命令を出せ」

　全ては僕の予定通りに進んでいる。マドラーはそう小さく付け加えたのだった。

４

　朝起きてみると、何故か鼻が痛い。手をやってみれば乾かわいてパリパリになった血が……。

「なぁサシャ……俺は昨夜、酔よっ払ぱらってどこかに顔面でもぶつけたんだろうか」

　モルトはソファに座ったまま夜を明かしたらしいサシャを見た。

　彼は何かを探さぐるような目で見返してくる。

「記き憶おくが……ないのか？」

「いや、ないわけじゃないんだが、ムリエルプルクラを飲んだ後のが……ハッ!?」

　モルトの脳裏におぞましい可能性が浮かび、青ざめた。

　もしや自分は昨夜、ムリエルプルクラを飲んだことで再びトリップし、男のサシャを美女に見み間ま違ちがえて……。それで抵抗にあって、一いち撃げき喰くらったのか。

　一撃ぐらいどうでもいい。問題は……どこまでヤってしまったのかだ。

「そうか！　記憶がないのなら気にするな、何もなかったんだ。それでいいじゃないか」

　サシャはどこかホッとするように微笑ほほえむのだが、それがモルトをさらなる不安に陥おとしいれる。

　これは……アレではないのか。一夜の過ちを犯してしまった翌朝、お互たがいに何もなかったことにしよう、と約束し合う時の笑顔ではないのか？

　とすると……やはり……。

「どうしたモルト、まだ痛むのか？」

　まだ痛む？　ということは、痛いことをしたということか？　つまりそれは……。

　モルトは恐る恐る己おのれのケツに手をやった。

　よりにもよって自分が受け入れたのか……？

　確かに痛くはない、痛くはないが……。いや、きっと鼻血のことだ。きっと顔面に一撃放ったからそれをサシャは気にしたに違いない。……違いない……はず……である。

　モルトは震ふるえる指先で長なが柄え刀とうを引き寄せると、それを支えにして立ち上がった。

「……ちょっ、ちょっと外の風を浴びてくる」

　モルトはアパートを飛び出し、街へと逃にげ出した。

「この俺が……？　い、いや、そんなわけが……。そうだ。そんなわけあるか！　本当に何もなかったんだ、そうに違いない！　だから気にするのはやめ……あっ、すまん」

　人と肩かたがぶつかった。気が付くとアルコ・ホールに入っていたようだ。

「……何だか今朝はやけに人が多いな」

　朝方、アルコ・ホールに人が多いのは日常的な光景ではあったが、それは旅支じ度たくのためだ。街の外に出られない今、旅人は宿に引き籠もるしかなく、そうなれば露ろ天てん商しようの類たぐいも鳴なりを潜ひそめているはずなのだが……今は不自然なほど、まるでいつもの朝だった。

「宿を追い出されたんだよ、みんな。急に出ていけって」

　モルトにぶつかった男もまた背中には大きなリュックを背負っているので、追い出された旅人の一人なのだろう。

「これから今夜の寝ね床どこ捜さがしだ。金も残り少ないし……参ったよ、本当」

　男は肩をすくめて去って行く。その背を見ていると、モルトは肩を叩かれた。ライだ。

「ようやく見つけた。探したぜ。……来てくれ、モルト。ようやく動くぞ」

「動くって誰だれが？　……状況か？　何にせよ、俺はちょっと別件が」

「これより街の包囲を解く。そう言ってもそっちが大事か？　今朝方マドラーが牢を出て、秘ひ密みつ裏りに指定した人物を集めるよう指示があった。その中にオレとお前の名前もあったんだ。特にモルト、お前は最重要人物だそうだぜ」

　顔をしかめたモルトとは違い、ライは昨夜の哀かなしみに暮れた顔ではなく、迷いのないすっきりとした顔をしていた。……ということは、本気で包囲を解こうというのか。

　いいから行こうぜ。そんなライに半ば強ごう引いんに連れて行かれたのは、街の外れにある公民館ホールだ。そこにはリキュールに暮らす人々が一〇〇人程度、集まっていた。

　グレーン、クラッツはもちろんとして、ピンガやオリービー、さらには……。

「あっ、モルト！　アンタ昨夜どこに行って……！」

　タックルしてきたのはリッツ。案の定ないがしろにされたことで怒おこっているようだ。

「ディナは大だい丈じよう夫ぶだ。サシャといるよ。……それよりこれ、どういうことなんだ。こんなに店の人間が集まってちゃアルコ・ホールも閑かん散さんと……してなかったな？　あれ？」

　カモフラージュだ。そう言って最後にホールに現れたのは秘書を連れたマドラーだった。

　モルトがどういうことかを視線で問うものの、マドラーは眼鏡めがねの位置を直すだけで答えてはくれず、そのままホールの壇だん上じようへと上がっていった。

「だいたいの人員は揃そろっているな。いいだろう。ではこれより『リキュール解放作戦』を皆みなに伝える……が、まずその前にやることがある。すでに担当責任者には準備に入ってもらっているため、すぐにでも行動を開始したい。わかるか？　急ぎだ」

　マドラーは男女に分かれるように言い、さらに女性陣じんの中から若い娘達だけを選び抜ぬいていった。

「ふむ、やや数は少ないが質は悪くない。いいだろう。では全員……服を脱ぬげ!!」

　ドロップキックでマドラーが吹ふっ飛とばされるまで、一秒とかからなかった。

● ４章『これぞ我が街、我が命』

　街の様子が何やらおかしい。それがどこからきているのかわからなかったために、ロンシュータンは勇気を出して自らアルコ・ホールを歩いてみることにした。

　いつも以上に猫ねこ背ぜに、いつも以上にヌイグルミを強く抱だき締しめ、日ひ傘がさでとにかく隠かくれるだけ体を隠して……そうして街を歩いてみれば、段々と違い和わ感の正体がわかってきた。

　地元民がやけに少ないのだ。人は多いが、格好からするに大半は旅人のようである。

「どうやら街中の宿が操業を停止し、客を追い出しているようです」

　人ひと混ごみの中で、住民に変装した部下がすれ違ちがい様ざまに言葉を投げてくる。

「人混み？　そう、うん、人混みを作りたかった？　……ううん、違う違う、絶対違う、でもある意味であってる、うん……人混みを作って隠したかった、そう、それ、でも何故なぜ何故？　わかるわかる、動く、そう動く気だ、動くための準備を悟さとらせない気だ……」

　ただでさえ人混みで日傘を差して目立ち、かつ、お辞じ儀ぎをするような猫背をしているために、すれ違う人々はかなりの距きょ離りを置いていたが、そこにロンシュータンの普ふ通つうの声量による独り言が混じり出したので、誰もが奇き異いなものを見る目で、距離を空けていく。

「何を隠してる？　もちろん住民、少ないの、それ隠してる、じゃぁ住民が動く？　違う違うよ、一いつ般ぱん人には宿を抑おさえられない、だから上、まとめ役がいる？　判らない、何をしたいのかな、でも何にせよ自警団は来る、総出で、でも人数が少ないよ、負けちゃうね、そうか、だから……ひょっとして、もしかし

て、準備してる、してた？　ずっと……？」

　ロンシュータンは歩くにつれて息が切れてきて、嫌いやな汗あせも出てきた。

　昼とはいえそれほど暑い季節ではないし、ひ弱そうに見えるが実はそれなりの鍛きたえ方をしている彼女だったが、それでも心までは鍛えられていなかった。

　……周りからの奇異の目が酷ひどく痛い。酷く苦しい。

　どこに行ってもそうだ。どうしようもなかった。

　一流のドレスを着て、しっかり化け粧しようをして、高級なトリートメントを使って、日焼けに注意もしているのに、どうしてそんな変な物を見る目を向けられるのかわからない。

　他人の心を読み解く技能を持ってはいたが、自分に向けられる人の気持ちだけは何故か彼女にはわからなかった。

　……ロンシュータンにわかったのは、そしてロンシュータンをわかってくれたのは、今も昔も一人しかいないのだ。

「ロンシュータン様、そろそろ街を出た方が……」

　今度はすれ違い様ではなく、部下は後ろから追いついてきた。

　奇異の目で見られて憔しよう悴すいしている、このままではどこでまた反吐へどをこぼして目立つかわからないという不安……そんなところ。部下の心だって読める。けれど、やっぱり……。

　ロンシュータンは周りを見回すも、人と目が合うとすぐに石いし畳だたみへと視線を落とした。

　汗が顎あご先から滴したたる。一国の王の前でも平然としていられる膝ひざが震えていた。

「アセトへ街の異常を伝えた方が……。兵達は相変わらずですし……」

　昨夜アセトが言ったように、帝てい国こく兵達は朝から強引な捜そう索さくを始めつつあった。

室内の捜索を嫌がる者がいても構わず、応じない家は扉とびらを破は壊かいし、中に入れば雑に探すだけ。しかも食料品店からは穀物類を極きわめて安値で買い叩たたいてもいるらしい。

近この衛え大隊は特とく殊しゅ工作を想定した部隊ではない。お飾かざりではないが、それでもただ力で押さえるだけでどうとでもなると思い込む辺り、山さん賊ぞくの類たぐいとさほど変わらなかった。

本来はそんなバカ達を導くのがロンシュータンの仕事である。

実際には軍事力という背景を利用した脅きよう迫はく以外の何物でもないのだが……包囲を解きたい街と、王女を探し出したい軍、それら互いの利益が重なっているかのように調整・交こう渉しようしていく予定だった。そうすれば無む駄だな被ひ害がいなく、作戦は遂すい行こうされ、また王女がこの街に潜せん伏ぷくしていたという明確な印象と証しよう拠こを住民達に残せたはずである。

あとはロテ国の使者が彼女を亡命させようとしていたとする虚きよ構こうの真相及および女じよ帝ていの暗殺犯を用意すれば、ロテ国との開戦まで続くシナリオが幕を開けるはずだった。

だが、アセトが勝手な事をしだしてしまうと、彼女にはもはやどうしようもない。

ロンシュータンは所しよ詮せん作戦顧問コンサルタントである以上、軍の指揮権がないのはともかくとしても、雇やとい主がこちらの提案に従わないバカであることは致ち命めい的だった。

彼らを慮おもんぱかって行動する理由は、もはやない。

アセトがやりたいようにやるのなら、自分もまたやりたいようにやるだけだ。

船上で毒でも盛ればケリがついた王女の暗殺をわざと逃がしてリキュールまで来させたのは……五年未満を目め途どに、豊富な資源を持つロテ国と開戦したいとするヌストルテ帝国──バクター家の意向を汲くんであえて……という、まどろっこしい言い訳があったものの、本当はどうしてもロンシュータン個人がこの街を訪おとずれたかったからに他ならない。

ロテ国と戦争をしたいのなら実はもっと簡単な方法がいくつも

あったのだ。だが、ロンシュータンがここに来るには今回の作戦が必要だった。ロテ国でもオードビー国でも指名手配されているとはいえ、何故かどこに行ってもすぐに見つけられてしまうために、二つの国の境目にあるこの地に来るには大規模な護衛が必要だったのだ。

　いつもどこでもあっという間に見つけられてしまうのは、自分が目立つからなのだろうか、そんなに自分は変なのだろうか……それがやっぱりわからない。

　部下達はロンシュータンに庶しよ民みんの服を着ろ、化粧をするなと言ってくるが、ただでさえ目立っているのにそんなダサい格好をしたら余計に目立ってしまう。

　みんな愚おろかだ。だから、拒きよ否ひした。だから、別案を考えた。

　ヌストルテ帝国に入り込み、わざわざ軍を利用してここまで来たのだ。

　たとえ作戦がグダグダになるとしても、自分の目的だけは果たしておかねばならない。ロンシュータンは今一度吐はき気けを覚えつつそう強く思う。でも、今にも心が折れそうだ。

「ダメ、ダメダメまだ……この先にもう一軒けん、武器屋があるって……報告が……」

　リキュールには流れの露天商を除けば三軒の武器屋と呼べる店があったが、数年前まで四軒あったという。そしてその廃はい業ぎようした武器屋の店主は業界では名の知れた武器オタクだったというのを、先さき程ほど部下の一人が報告してきたのだ。

　それを確かく認にんせねば、この地を離はなれられない。

　それは、アルコ・ホールから少し外れた所にある、看板もない建物だった。

　ロンシュータンはノックし、応答前に扉を開け、一人、中へと足を踏ふみ入れる。

　店の名残なごりであるカウンターで新聞を読んでいた老人が「ん？」という様子で顔を上げた。

「探し物をしております、お兄タンの……。何年か前、この街にあったという噂うわさを……」

「……ほぉ、その若さで、アレを追ってきたか。なかなかだな」

　やっぱりあった。はるか彼方かなたの武器オタク達にまで届いていた噂は、本当だったのだ。

「妙みようなお嬢じようちゃん、時間はあるかい？　……話せば長い。というか俺の話は長い」

「はい、いくらでも、もう仕事なんて……構わない、もうどうでもいい、このために世界中を渡わたって来たんだから……」

　恐おそらくこの話が終わるまでの間に、誰かしらが動き出すに違いない。

　決着がつくまではいかなくとも、状じよう況きようは大きく変わることだろう。

　だが、それでもいい。どうでもいい。ここでの話が期待したものであるのなら。

　彼が、生きていると確信できるのなら。そして、もし、居場所がわかるのなら──。

1

　頭がもげるのではないかという程見事なドロップキックを女性陣より喰くらったマドラーから、頭痛がするような解放作戦案を聞かされて、すでに一刻ほどが経過していた。

　一度サシャの部屋に戻もどり、ディナに手を出されていないのを確認すると、しばらく家を空けると告げてからモルトは再び公民館ホールへと戻った。

　最初に大きく行動を開始することになったのは、女性陣である。

　マドラーに選別された女性に加え、後から集まってきた同年代の女性、合わせて四〇人弱が公民館ホールの床ゆか一いつ杯ぱいにパズルのような布の切れ端はしを並べていた。

　壇上には指導員リーダーが水着同然の格好で昇のぼるなり、声を張り上げる。

　いつぞや見かけたあの鋼はがねのボディを持つ女、裁さい縫ほう屋のマッチョ嫁よめだ。

　糸を通した針を咥くわえた彼女は綺き麗れいな布の切れ端を空中へと放ほうり投げる。

「はいみんな!!　裁縫は根こん性じようと筋力ッ!!　繊せん細さいかつダイナミックにテンポ良くッ!!」

　モルトが知る限り裁縫には一いつ切さい必要ないであろう要素ファクターを並べ立てた後、彼女の太い腕うでが空中で幾いく度ども交差する。

「ココをこうっ!!　コレはこうっ!!　ハイッハイッハイッハイッもう完成よ!!　ねっ、簡単でしょう!?　サイズの調整は最後にココで!!　さぁみんなもやって!!」

　マッチョ嫁が叫さけび終わると、空中を漂ただよっていた切れ端がいつの間にか一つに集まり、奇き跡せきのように女性物と思おぼしき服へと生まれ変わっていた。

　あの、これってここに繫つなげばいいんですか？　そんな声が上がるとマッチョ嫁は壇上から無意味に三メートル近くも飛び上がり、質問した女の子達の元へ文字通りに飛来した。

「そこじゃない!!　ココはこうっ！　コレはこうっ!!　ねっ簡単でしょう!?」

　──早すぎてわからないですよー！　──え、この布ってこんなに薄うすいけど……。

「私がチョイスした生き地じを信じなさい！　それより縫ぬいが甘い！」

　マッチョ嫁はいちいち指導して回っていたが、傍はたから見てい

るとぶっちゃけ彼女が一人で作業した方が速そうな気がした。

　そんな中、いつの間にか新たに壇だん上じように上っていた、丸々と太った肉団子のようなオバチャンがパンパンッと手を叩く。何故かこちらもまた水着同然の格好だ。胸むな元もとには『リキュールダンススクール　師し範はん代だい』の刺し繍しゅう。

「衣い装しようが出来た人から練習に入るわヨッ。女のエロスは乳ち房ぶさと股またぐらにあるわけじゃないの。真の妖よう艶えんさは指先と足先、そして視線から溢あふれ出るものヨ。……本来であれば半年掛かけるコースだけれど今回は特別サービス……二時間でマスターさせてあげるワッ!!」

　二時間の内容を普ふ段だんは半年間も引き延ばし、授業料をがっぽり稼かせいでいるのだとあざとき商売を暴ばく露ろした師範代は、女性達の前で腰こしをくねらせながら、歩いてみせる。

「基本ステップに入る前に、まずはウォークから！　一〇〇〇人の飢うえた男達に見つめられる中を全ぜん裸らで歩いていると思い込みなさい！　その上で堂々と、見られているのではなく、見せてやっている……その気持ちヨ！」

　背筋をピンと伸のばしつつ尻しりを振ふるかのような歩きは確かに美しい……気がしないでもないが、いかんせん球体のレベルにまで太っているので、肉団子にくっついている手足がチョコチョコ動いているだけのようにも見えて滑こつ稽けいな印象だった。

「相手に恋こいをするかのようにして初心うぶに魅みせるテクもあるけれど、今回は大人の色気で行くワ。みんな、男に惚ほれるんじゃないの、男を惚れさせるのヨ!!　さぁ、これからやる動きをマネてみなさい!!　ワン、ツー、スリー!!」

　ダンスなんてしたこともないであろうリキュールの若い女性陣じんが見み様よう見み真似まねで踊おどり出すものの、傍から見ているとさすがにちょっと不安になってくる低レベルさだった。

「はーい、どいてどいてー。あ、モルト、ちょっとそこ邪じや魔まだから！」

　ホールに現れたのはリッツとオリービー、そして台車に載のせられた大量の花々だ。

「オリービーちゃん、お花お疲つかれ様！　でもそれは後にして、まずはダンスの練習ヨ！」

「え、わ、わたしも……ですか？　いえ、ダンスとかそういうのは全然やったことなくて……お裁縫でしたら昔から習ってて得意なのでそっちを頑がん張ば……」

　フンッ、という声と共に上空から筋肉の塊かたまりがオリービーの前へ降りてきた。

「きゃっ！　……あ、先生……」

「オリービー、アンタの分は今さっきアタシが作っておいたわ。スリーサイズ、先月から変わってないでしょうね!?　……よしっ、完成時の参考モデルにするから着なさい」

「じゃアンタの目の前でお手本ダンスを見せるから、着き替がえながら覚えるようにネ！」

　鋼のボディの人妻と、あこぎな商売をする師範代の二人……というか、筋肉と脂し肪ぼうの塊に押しやられるようにしてオリービーは強制的に裏へと拉ら致ちられていった。

　━あの二人から教えを受けるって最初ビックリしたけど、思ってたよりまともかな。━業界では神って言われてるらしいじゃない。例の一座がわざわざリキュールに来るのも新しい衣装作ったり、踊りを学ぶためだっていうし、タダで教えて貰もらえるならお得お得。━あ、その神って呼ばれてるの、ボディビルと大喰い業界の話らしいよ？　━えッ!?

「……で、モルトは何してんの？　……エンガディナ様の護衛は？」

　途と中ちゆうから小声になったリッツに、モルトもまた小声で応じた。

「まだサシャの家で寝ねてたよ。それで実は……リッツがディナの側そばにいてくれないかな、と思ってさ。ほら、俺……アレの準備やらで側にいられなくなるだろうから」

「あー、そうだね。でも、あたし一人でどうにかなるのかな。兵隊に来られたら……」

それはサシャがいるから問題なかった。問題なのはイケメンのサシャと傷心のディナを二人っきりにさせておくことである。……大きな間ま違ちがいが起きかねない。

ちなみにリッツは安あん美び亭ていにいれば俺やディナが来るだろうと予想していたら例の招集があって、クラッツにくっついて公民館ホールまで来た、というだけのようだ。

つまり、作戦参加メンバーではなかったのでこれといった任務はなく、正体もわかっているし、ミーハー気分でディナを好いてもいるしで、横に置いておくには絶ぜつ妙みようだろう。

話を聞くと一応オリービーの手伝いをして、これから花飾かざりを作ったりする予定だったらしいが、どれも簡単なものらしいので、あまり時間はかからないようだ。

「これをこうして、コレを着けてっと。これで髪かみ飾りになるの」

なかなか器用なもので、雑貨店で買ってきたと思しきチープなバレッタにあっという間に生花が取り付けられて、非常に華はなやかな代しろ物ものが出来上がった。

他にも生花のブローチ等も作るそうだが、どれも簡単なものらしい。

「じゃ、終わり次し第だい頼たのむわ。サシャの家、わかるよな？　よし、それじゃ俺は──」

モルトは思わず手にしていた長なが柄え刀とうを落とし、公民館ホールに盛せい大だいな音と衝しよう撃げきを発した。

「ちょっ!?　モルト、なに!?」

「──お、俺は……今、心、奪うばわれた……」

はぁ？　とリッツは眉まゆ根ねを寄せるも、モルトの視線がどこか一点を見つめているのに気づき、彼女もまたそちらに視線を移し……納なつ得とくしたようだった。

モルトが見つめ、心奪われたのは……裏から戻ってきたオリービーだ。彼女はその表情を恥はじらいに震ふるわせつつも口に

キュッと力を入れて堪こらえ、背筋を伸ばして胸を張り、そのボディが持つポテンシャルを最大限に発揮する優美な歩みでホールへと足を踏み入れる。

　モルトは絶句し、女性陣は「おー！」という歓かん声せいと「えぇ!?」という驚おどろきに二に分ぶんした。

　オリービーの自由気ままに揺ゆれる胸と尻がモルトの目を引きつけて放さない。

　それもそのはずである。衣装の下半身は薄いというより強い光を受けると透すけてほぼシースルー状態になるもので、尻もそのほとんどを透かせていた。しかもヘソから下に女性の拳こぶし一つ分ほども空いているという、いろいろ心配になるようなローライズだ。

　これだけでもすでにたまらないが、モルトが愛刀にして命を託たくす長柄刀を落としたのは、やはりオリービーの胸だった。

　ほとんど隠かくれてない上に、丈たけの短い布を上から被かぶせただけのようなそれは、まるで暖簾のれんだ。風が吹ふけばもちろん、ちょっとでもジャンプしようものなら簡単に捲めくれ上がって絶景が広がるのは間違いなかった。

　当然、そんな小さくて頼たよりない代物なので、暖簾胸当ての下からは収まりきらない乳房が剝むき出しに……いわゆる下乳が盛大にはみ出しているのだった。

　普段はゆったりとしたセーターで体のラインを隠し、良い匂においのする髪かみを揺らして柔やわらかに微笑ほほえむオリービー……そんな彼女があまりに大だい胆たんな格好でモルトのもとへ歩いてくる。

　途中、リッツが手にしていた生花のバレッタを受け取り、髪をまとめ……そして、モルトの前でステップを踏ふむ。……髪が揺れる。胸が揺れる。暖簾胸当てが際きわどく頑がん張ばる。

　そしてモルトの心は、オリービーのステップよりも激しく弾はずんだ。

「……お、お粗そ末まつでした。……こ、こんな感じでいいでしょうか……先生？」

「いいワ！　男を落とす気持ちも入ってた！　虜とりこよ、虜にさせてた！　あぁ、もういい、最高ヨ！　貢みつぎたい！　貢いででも振り向かせたい!!　明らかにそう思わせてた!!　天性の才能を持ってたアンタの勝ちヨ!!」

「オリービー、あなたまた少し大きくなってたでしょ!?　胸当て、その丈じゃギリギリ過ぎじゃない！　ほぼ痴ち女じよね!!」

　オリービーはモルトを見つめ……そして一気に顔面を真っ赤にさせると、己おのれを抱だくようにしてその場にしゃがみ込んだ。

「モルトさん、ごめんなさい、先生達が丁度いい男の人がいるからって試ためせって……。最後まで笑わないでくれて……ありがとうございました」

　目め尻じりにうっすらと涙なみだを溜ためつつ、モルトを見上げて微笑むオリービーを見ていると、モルトは今にも己の心臓が止まってしまうのではないかと心配になるほどだった。

「お、俺……今すぐライに兄貴って呼ばせてくるわ!!」



　長柄刀を放置したまま踵きびすを返すモルトの顔面に、リッツのドロップキックが炸さく裂れつする。

「商売道具忘れるまで心奪われんな!!」

　ぶっ飛ばされたモルトの意識もまた、鮮あざやかに飛んだ。

　―オリービー、綺麗じゃない！　―うん予想以上にエロス凄すごいじゃん！　―でも、その……綺麗だとは思うんですけど……これ、着るんですよね、私達も。―大だい丈じよう夫ぶよ、アンタらの胸のサイズならここまで酷ひどくならないから。―先生それは酷い！　―っていうか、これローライズ過ぎじゃないですか？　下はスケスケだし……。―夜になればほとんど見えないわ。―あの～無む駄だ毛げ的な問題が……。―この私がそんなミスをすると思って？　手配済みヨ。……ホラ、噂うわさをすれば。―へいへい、ちょいとお邪魔しますよっと。リキュール一の刃は物もの屋でござぃ。最高級無駄毛処理用カミソリお待ちでさぁ！　―これヨこれ、肌はだにダメージないの！　あら、まだ誰だれか来るわネ。あぁ香こう水すい屋ネ。―よろしいですかな？　おぉこれはオリービーちゃん、随ずい分ぶんと素す敵てきじゃないか。うちの嫁の次ぐらいだけど。―そんなのいいからお願いしていたものは？　―古今東西のいろんなものをご用意しましたよ。これとこれ辺りが男心を擽くすぐるいいものですが……実はとっておきのが。―アンタの嫁の体たい臭しゆうはいらわないわヨ。―何故なぜそれが!?　―昔それで一度潰つぶれかかってんだから学習しなさいヨ！　バカなの!?　―あれは時期が……いや、俺の妻に嫉しつ妬とした女共が……。―ダメネ、コイツ。『愛妻家』という名の病気ヨ。―最高の褒ほめ言葉ですな!!　―あれ、何かいい臭においがしてきてるわネ……。―あ、クラッツちゃんと安美亭の店長よ。―みなさん、頼まれてたお昼ご飯、持って……うわぁっ、モルトじゃない！　何で床ゆかに倒たおれて……死んでる？　あ、このサンダルの跡あとは……。―あたしの。別に死んでないよ。―帰りに、持って、帰る、か。木箱空くし、な。―あーいい匂い。何持って来てくれたの？　―昨夜鮮せん度どのいい、馬肉が、大量に手に、入ったから、馬肉の、ソーセージだ。ピンガの、クルミパンも、ある。―それじゃ先に食事に……けれど時間は無む駄だにはできないワ。ワタシのダンスを見ながらお食べなさい！　―先生の分は？　―一秒で終わるワ！　セイッ!!　―うわっ、すご!!　―うん良い味

ネ！　さぁ、腹ごしらえ終わり！　みんな見なさい！　これが女の魅み力りよくヨ!!　──……さっきから思ってたんだけど、先生のダンスって、何て言うか……よくわからないよね、手足が短過ぎて……。──それ言っちゃダメだって。傷ついちゃう。──しかし、妙みようなもん、だな、若い女が、先せん陣じんを切る、か。──そうね。あ、叔父おじさん、アタシもこの後ここに残るから、夜、お願いね。──何!?　クラッツ、まさか、お前……。──うん、アタシも行く。大丈夫よ。協約あるし。それに指一本触さわらせない自信があるしね。──クラッツの回かい避ひ技術、凄いよね。あれ、どうやってるの？　──安美亭で毎日働いてれば嫌いやでも覚えるわよ？　働く？　──やめときなさい、触られすぎてお尻の肉をこすり取られるのがオチよ。──言えてる、あははは！　──何か妙な感じ。最初、議長の奴やつ、頭おかしいんじゃないかって思ったけど……。──うん、敵防衛ライン突とつ破ぱのためにはスリーサイズが必要だからって一発目に脱ぬげとか、わけわかんなかったよね、最初。──話飛ばし過ぎなんだよ、アイツ。──頑張りましょう。私達が開戦の狼煙のろしになるのよ。──悪くないわ。リキュールを救う最初の切きっ掛かけを女が作るのって。この街は男が無意味に強いから。──ま、本当はすでに始まってるみたいだけど。あのやたらと胡う散さん臭くさい爺じいさん連中の部隊、さっき決起集会始めてたみたいだったしね。──議長の馴な染じみの職人達なんだっけ？　──うん、何か過去に因いん縁ねんがあるとかなんとか……。

「……おい、起きろ。起きろと言っている。……おい、何でも屋モルト！」

　長いような、短いような、意識混こん濁だくの時間。ずっとモルトの耳には女性達の会話が聞こえていたような気もしたが、肩かたを揺さぶられて目を開くと、男の顔があった。

　議長のマドラーだ。そして見回してみれば夜の安美亭である。

　客はあまりおらず、初老の男達が少しとカウンターでマドラーの秘書クリミオがハンバーガーを頬ほお張ばっているだけだ。

「あれ？　いつの間に夜に……マドラー、どうした？」

　顔と首が少々痛む。このダメージの残り具合……リッツの蹴けりだろうか。

　そこまで思い至った時、曖あい昧まいだった記き憶おくがようやくはっきりしてきた。

　リッツにぶっ飛ばされた後、恐おそらくグレーン辺りに回収されて連れて来られたのだろう。

「お前の所在がわからなくて捜さがしていた。ようやく見つけたぞ」

「……あぁ、やっぱ俺が行かなきゃダメか。このまま気を失っていれば良かったよ」

「モルト、お前は公民館ホールへ行け。そこでお前の部隊の決起集会だ」

　マドラーは一度間を置いてから、再びモルトの目を見つめた。

「結果としてお前には苦しいポジションに入ってもらうことになった。……やめたいなら無む理り強じいはしない。元々この部隊だけは、僕の予定にはなかったものだ」

　マドラーらしからぬ物言いに、秘書がチラリと視線を送ってくる。

　彼は普ふ段だん、こういう言い方はしない男だ。大たい抵ていは高圧的かつ挑ちよう発はつ的に命令だけをしてくる。そしてその後に大抵ドロップキックを喰くらっている。

　そんなマドラーがあえて言ってきた、ということはそれだけリスクの高い役割がモルトに割り当てられている証しよう拠こだった。

　もしかしたらモルトがリキュールの生まれでないことを気にしているのかもしれない。

　この街のために多大な犠ぎ牲せいを払はらえるかどうか、最後の確かく認にんのつもりか。

　恐らくそれだ。解放作戦のために声を掛けられたのはリキュールで生まれたか、人生の大半を過ごした者。モルトだけが例外だった。……そんな心配自体が、クソ喰らえだ。

「俺もリキュールの男だぜ？　バカにするな。やりたくはねぇけ

ど……やってやるさ」

　生まれは違ちがえどモルトとてリキュールの人間、その身、その心を犠牲にすることに躊躇ためらいはない。心配されること自体が腹立たしい。

　そう、己はリキュールの男なのだ。モルトはそう今一度胸に強く思う。

　──街のため、住民の誇ほこりのため……そしてストリップ一座を迎え入れるため、何としてでも明日あすの昼までに包囲をぶち破らねばならない。

　そう聞かされて断るのは、リキュールの男ではない。

　そして何よりディナの件もある。包囲をぶち破るのは、やはり自分の仕事なのだ。

　カウベルが鳴る。店内に入ってきたのは、サシャ、そして……ディナだった。

　彼女はモルトへと駆かけ寄ってくると、いきなり抱きついてくる。

「よくここが……って、おい、どうしたんだ？　ハッ、まさかサシャにイタズラを!?」

「誰が何をするって？　まったく、リッツちゃんから聞いてようやく見つけたぞ。……モルト、街の様子が妙だ。兵が消え、代わりに旅人……おっと、これはマドラー議長……」

「何でも屋のサシャか。フンッ、大人しくしていてもらわないと困る。兵の格好をした者がいなくとも密みつ偵ていはそこいらに紛まぎれているだろう。今、彼女を見つけられると計画がパーだ。あくまで自力解決したとする結末が欲ほしい」

「あぁ、これはすみません。一応注意はして……え？」

　サシャとディナが慌あわててモルトを見、モルトも訳が分からず首を振ふった。

　ディナのことは知られていないはず。だが、今のマドラーの言葉

は完全に──。

「結構知られていますよ。何でも屋モルトが連れている女性が、恐らくそれだ、と」

　秘書が口をナプキンで拭ぬぐいながら、視線を向けもせずに淡たん々たんと述べた。

　店内にいた初老の男達が突とつ如じよ笑い出す。それで気付いたが、その男達は皆みな、マドラーに招集をかけられた者達だ。

　……仕事前の一いつ杯ぱい、といったところだったのだろう。

　──まぁ、少なくともあの時、安美亭ていにいた常連客は察するわな。────女おんなッ気けはリッツちゃんばかりのモルトの連れとなりゃ、ただでさえ目立つしなぁ。

「で、では……皆みなさんはわたしをこの包囲の原因だと知りながら……。どうして……？」

　客達は笑い声を上げ……それから、モルトとディナを柔らかな視線で見つめた。

　──何せモルトが連れてんだ。──あぁ、なら悪人じゃねぇんだろうなって誰でも思うわな。──しかもクラッツにグレーン、リッツちゃんまで仲良くしてたら、そりゃ……なぁ？　──理由があんだろ、ってぐらいはわかる。少なくとも街の疫やく病びよう神がみではないってな。

　店内に笑いが漏もれるが、ディナはわけがわからずにおろおろとし、モルトに助けを求めるように視線を向けてくる。

「……俺も、随分信用されるようになったもんだなぁ」

　──何度一いつ緒しよに飲んだと思ってんだよ。──どんな人間かはそれでわかる。そうだろ？

　思わず照れてしまうのをモルトは堪こらえきれなかった。恥はずかしさから逃にげるように彼らから視線を逸そらすと……どこか羨うらやましげにこちらを見ているサシャの瞳ひとみがあった。

「フンッ、その女など正直どうでもいい。強ごう引いんな手段をと

らねばならぬほどの何かを盗ぬすんだか、殺したか、それとも逃とう走そうしたお偉えら方がたの娘むすめなのか……僕は気にもならんな。議会の連中も、もはやこれはリキュールとヌストルテ帝てい国こく軍の戦いだと正式に認定した。……そしてこの僕の生まれ故郷たるリキュールは、どんな理由があろうと何ものにも屈くつしない」

　──おぉ、そうだ！　その通りだ!!　──誰に喧けん嘩かを売ったのか、それを教えてやるぜ!!　──ここはリキュール、今も昔も不落の英えい雄ゆう都市だ!!

　客達がグラスを掲かかげ、盛せい大だいな乾かん杯ぱいの声を上げた。そこにグレーンが顔を出す。

「ディナ、暇ひまなら、働け。クラッツいないから、手が足りん。飯の客、断ってるんだ」

　どうりで安美亭らしくなく閑かん散さんとしていたわけだ。

　モルトは納なつ得とくしつつ、困こん惑わくするディナの背を厨ちゆう房ぼうへ押しやった。

「あの小こ娘むすめの瞳……ヌストルテか。フンッ、どうでもいいな。……そろそろ始めるぞ」

　マドラーのその言葉を待っていたかのように、店の外から馬の嘶いななきが聞こえた。

　サシャが頷うなずくようにして唾つばを飲み込むと、緊きん張ちようした面おも持もちで一歩マドラーへと近づいた。

「マドラー議長、これから何が始まるんです？　私は流れ者だが、ないがしろにされるのは面おも白しろくないな。……これでも三年、ここで暮らしている。協力できると思う」

「時間がなく、目立ちたくもなく、内ない偵ていへの警けい戒かいのためにリキュールで生まれ育った者を主しゆ軸じくに、他は作戦に必要な最低人数に声をかけることにした。……まぁバカでなければ次し第だいにわかるだろう。協力の申し出は感謝する。ならば、ヌストルテの娘を守れ、兵に見つけられるな。……僕も街も、あくまで自力解決に事を持って行きたい」

「おい、モルト。先陣に、これも、持たせてやれ」

　グレーンが厨房から持って来た箱からはチップのいい匂におい。馬肉の燻くん製せいらしい。

　話し込むサシャ達を残し、モルトは木箱を手にして店を出た。

　大通りには三台の空馬車が並び、最さい後こう尾びには酒屋の店主おつさんとケーキ屋の看板娘が大量の不ふ審しんな荷物を載のせていた。

　──よぉ、モルトちゃん！　お、グレーンの燻製肉か、ツマミにいいねぇ！　──あの、ケーキは安定した所に置きたいので、そのお肉の箱、もうちょっと奥に置いて欲しいな。

「わかったわか……って、おい、酒屋。こっちの酒さか瓶びんは、これ、まさか……」

　──おぅ、マドラーからは強い酒であればいいっつわれたんだが……これをありったけ持ち込んだら面白そうだろ！　──ちなみにケーキにも混入させてみたんですよ♪　結構おいしい気がするので、お腹なかに入るまでに勘かんづかれることはないです！

「……おぞましい荷だなこれ。死の商人でもビビるぞ……。お、メインが来たか」

　大浴場の方から響ひびいてきた大だい歓かん声せいによって、アルコ・ホールが揺ゆれた。

　作戦の全容を聞かされていたモルトでも、初めて見た時は驚きよう嘆たんしたのだ。

　まだ作戦内容を何も聞かされていない街の者達は全員度ど肝ぎもを抜ぬかれることだろう。

　何百という視線、そして耳を震ふるわせる大歓声をかき分け、女性が持つ魅力を際限なく解き放ちながら現れたのは、ひらひらとしたあの扇せん情じよう的な踊おどり子衣い装しようを纏まとった……そう、マッチョ嫁よめとダンススクール師し範はん代だいである。

「あの二人いらねぇだろ!!　──ぐほぉぉあっ!!」

モルトの叫さけび声はマッチョ嫁と師範代のタックルによって物理的に跳はね飛ばされた。

―リキュールで一、二を争う美の巨きよ人じんであるアタシらがいないで、どうするんだい!?　―そうヨそうヨ、もちろんそうヨ！　―アタシらは!!　―美しい!!

「モルト、うちの、壁かべ、壊こわすなよ？　……お、クラッツ……あんな格好……大だい丈じよう夫ぶか？」

モルトが体をぶつけた安美亭からグレーンが心配して顔を出すものの、彼はすぐにマッチョと肉団子の後ろに続いて歩いていた女性陣じん達に困惑の視線を向けていた。

それは、夜の闇やみすら跳ね飛ばす華はなゝばなしい街娘達の姿だった。あの強い光を浴びると透すけるような生き地じに、暖簾のれんのような胸当て、そして手首や髪かみに生花の飾かざりを着けた若き娘達がその柔やわ肌はだを晒さらしながらも、誰だれもが恥じらいなく、堂々たる美しき足取りで歩み来る。

その数、四〇を幾いくらか上回る。彼女らが馬車の前にて美しいポージングで整列すると、アルコ・ホール中の男達の誰もが目を釘くぎ付づけにした。

秘書を連れてマドラーは安美亭から出ると、彼女らを見回す。

「フン、急きゆう拵ごしらえではまずまずだ。ギリギリ及きゆう第だい点をくれてやってもいい」

ドフッと、マドラーの後頭部に秘書の書類アタックが入ったが、彼はズレた眼鏡めがねを直すだけで気にもせずに続ける。

「おまえ達の仕事はわかっているな？　そうだ、ヌストルテの連中に存分に飲ませ、喰わせ……そして、ご機き嫌げんを取って来い！」

―なっ……!?　―ふざけるな!!　―街の宝である娘達を差し出すというのか!?　―そんなのは敗戦国がすることだぞ!?　―お前、何やらかそうってんだ!?

作戦を知らない野次馬は度肝を抜かれたような声を上げるが、踊り子隊はわかっていたことなので誰もが平然と整列し、どこか誇ら

しげにさえ見えるように胸を張っていた。

「フンッ、落ち着けバカ共が。……では聞くが、街を包囲され、その治安維い持じすら彼らに委任した今の状じよう況きようは何だ？　傍はたから見れば今の状況など……わかるな？　そう、敗戦国も同然の有様だ。これは誰のせいだ？　そう、不ふ甲が斐いない街の男達のせ──」

「　「　「　「　「　「「「「「「「「「「お前のせいだろ!!」」」」」」」」」」　」　」　」　」　」

　怒ど声せいがビリビリと大気を震わせたが、マドラーは気にもしていないようだ。

　作戦の全容を知っているのは踊り子隊、そして今し方安美亭で飲んでいた男やモルトを含ふくめたリスクの高い役割を担になうようマドラーから要よう請せいされた民間人、計一五〇人程度だけ。

　街の娘達というトラップ、そこから始まる常識的に考えてやってはいけない壮大かつシンプルなトリック、そして倫りん理り的に気分が重くなるエサ……。

　極きわめてリキュールらしい……否いな、リキュールで生まれ育った者にしか思いつかず、この街でしか成し得ない大だい胆たん不ふ敵てきかつ周しゆう到とうな計画を聞かされれば、このマドラーの無茶苦茶な言い分もしっかりとした意味があるのだと理解できる。

　だが、当然ながらエロい格好した娘達を見に集まった住民達はマドラーの真意を知る由よしもなく、責任を街の男達に押しつけるかのような彼の言い分に怒声を響かせ続ける。

　暴動になりかねない雰ふん囲い気きが通りを包む。しかしなおもマドラーは作戦の説明をしない。

　……情報漏ろう洩えいを防ぐために、彼らには作戦の全容を知ることなく、自主的にアドリブ最後まで動いてもらわねばならないのだ。

「ともかくだ！　ここにいる女達は自らの意志で行くと決意したのだ！　街のため、ここの住民のために!!　……それを踏ふまえた上で問う。この二日間、不満を並べ立てていただけのお前達はこれか

ら何をする!?」

　マドラーの後ろで控ひかえていたクリミオがため息。そして、大きく息を吸って声を上げる。

「皆さん、そこここで荒あら縄なわと暗器の準備を始めないでください。この男は議長としてこれからいろいろ働かないといけませんので、殺すのは明日の昼以降にお願いします」

「フンッ。……よし、聞け女共！　向こうへの通達は終わっている。大隊長のアセト・バクターはこの上ない程ほどに嬉うれしそうな顔をしていたから、手ぐすね引いて待っていることだろう。では全員、馬車に乗り込め！　以後は随ずい伴はんするクリミオに従え！」

「随ずいは……は？」

「衣装は用意させてある。安美亭で急ぎ着き替がえてこい、クリミオ」

「……は？」

「男は警戒される。そして僕の考えを理解している女は君しかいない。当然の帰き結けつだ」

「……は？」

「案ずるな、君なら良く似合う」

「まさか……初めから数に入れてました？」

「最初期の段階からな。君は使える女だというのを僕は知っている」

「……そのままそこでちょっと立っていてください。いいですね？　そのままですよ？」

　クリミオは手にしていた書類を近くにいたケーキ屋の娘に持たせると、一〇メートルほど離はなれ、そこでヒールを脱ぬいだ。そして、猛もう烈れつな助走から鮮あざやかなドロップキックをマドラーの側頭部に決めると、彼女は怒いかりに身を焼きながら安美亭へと入って行ったのだった。

　モルト同様、安美亭の外がい壁へきに叩たたき付けられたマドラーは伏ふしたままで眼鏡を掛かけ直す。

「フ、フンッ。クリミオも……最近は、リキュールの人間らしくなってきたな……」

「お前といるからだろ。……しっかし、バイオレンスが過ぎるぞ、この街……」

　モルトは呟つぶやきながら立ち上がり、マドラーに手を差しのばすが、彼はそれをつかむことなく自力で立ち上がった。

「クリミオが合流次第、出しゆつ陣じんだ」

　マドラーの声を背に受けながら、モルトはグレーンやサシャ共々安美亭のエントランスから青い顔で外を見ていたディナの元へと戻もどった。

「こ、これは……いったい……モルト殿どの！　これはどういうことなんです!?」

「マドラーが言ったろ。帝国の皆みな様さまに献けん上じようなさるんだよ。ツマミと酒と、そして女達を」

　ディナは唇くちびるをわなわなと震ふるえさせる。サシャは顎あごに手をやって上うわ目め遣づかいでモルトを見た。

「奪うばわれる前に自ら差し出す、というわけか。……負け犬のように？　このリキュールが？　さては、違うな？」

　サシャの瞳を見る限り、多少は察したことだろう。……だが、女関係以外ではマジメなサシャだ、この計画の真相にはたどりつけるわけがなかった。

　だがここで全すべてを話さねばならない理由はない。安美亭の外で騒さわいでいる男達と同じように、あとで帝てい国こく兵共々度肝を抜かれればいい。

「ディナ、そんな顔をするな。大丈夫だ、問題ない。気にするな」

「で、ですが、そんな……だって……クラッツさんやリッツちゃんまで」

　リッツ？　と、モルトは振ふり返って目を凝こらした。そしてよくよく見るとオリービーとクラッツのくびれた腰こしの隙すき間まに見覚えのある少女の姿が隠かくれるようにして、あった。

　……紛まぎれもなく、踊り子衣装を着たリッツである。

「あれ!?　おい、リッツ、いないと思ったら……お前まで行くのか!?」

　リッツがちょこちょこと……女の色気を出すはずが、平均台の上を歩いているようにしか見えない歩みで列から出てくると、モルトの前に立った。

　顔は真っ赤だが、師範代の教えを守っているのか、堂々とない胸を張る。

　暖簾のような胸当てが、本当に暖簾のように微び風ふうに揺れており……哀あわれさが漂ただよっていた。

「みんな行くって言うし、だったら、あたしも……。それにエンガディナ様のためになるなら頑がん張ばろうかなって」

「ダ、ダメです!!　絶対ダメです!!　そんな年とし端はもいかないあなたがこんな……いえ、街の皆みなさんがこんな……こんなこと……許されるはずがありません!!」

　ディナは声を張り上げると、その目から大おお粒つぶの涙なみだをこぼしながら、まるで行かせまいとするかのように、リッツを抱だき締しめた。

「大丈夫だよ、エンガディナ様。クラッツから身のかわし方の講義もあったし……」

「わかってないんです！　女性が身を差し出すということがどういうことか……!!」

　ディナはどうやら勘かん違ちがい……いや、状況からすると勘違いしない方がおかしいかも知れない。占せん領りようされた街で行われるのは略りやく奪だつだと相場が決まっており、金品の次に求められるのが女である。そこでどれほど酷ひどい目に遭あわされるかは歴史が嫌いやというほど伝えている。

—みんな、馬車に乗り込んで！　—無論一番美しいワタシ達が一番前ヨ!!

「あ、行かなきゃ。……それじゃ、エンガディナ様、行ってきます」

　リッツはディナの腕うでを強ごう引いんに解くと、背を向け、そしてまた平均台の上を歩き出す。

　途と中ちゆう、モルトをチラリと振り返るので、モルトは微笑ほほえんで手を振ってやったのだが……何故かちょっと怒おこった顔をして彼女は足を速めたのだった。

「なぁ、モルト。今のリッツちゃん、きっと綺き麗れいだとか、似合ってるって言って欲しかったんじゃないのか」

「あ、そうなの？　いや、でも、あの衣装はどう見たって胸がないと貧ひん相そうだしなぁ。嘘うそは良くないと思うんだ。下乳がはみ出てようやく衣装の本当の力ポテンシヤルが……あっ……すまん、サシャ、俺が間ま違ちがっていた。胸はなくても問題なかったわ」

　胸はないよりあった方がいい。そう思っていたが、しかし、胸が邪じや魔まになるものもあるのだと、モルトは彼女を見た瞬しゆん間かんに初めて理解した。

　安美亭より現れた、踊おどり子衣装のクリミオである。

　彼女は整列していた娘むすめ達とは方向性こそ違うが、完かん璧ぺきに衣装の力ポテンシヤルを引き出していた。その細く長い手足、引き締まったウェストはもちろん、胸むな板いたも薄うすい。だが、彼女の体に大きな胸は必要なかった。

　豊かさよりも引き締まりとしなやかさを感じさせるボディラインは扇せん情じよう的というよりも、ただただ美しい。長くサラリとした髪を払はらう様すら絵になっていた。

　目が据すわったクリミオの歩みは、師し範はん代だいのそれと似ているようでどこか違う。

　男に阿おもねる可愛かわいげのあるものではないし、誘さそうような色気のそれとも違う。

ふてぶてしくも、ひたすらに美しく、我が道を行く……そんな力強くも鮮やかな歩み。

触さわりたい、抱だきたい、揉もみたい……オリービーに感じるその欲求とは別種の魅み力りよく。少し離れたところから眺ながめていたくなる、そんな活いけ花のような〝美〟を象かたどった姿だった。

「フンッ、僕の見立て通りだな。ペンとメモを持って行け。敵の配置を記してこい」

「……この恨うらみは必ず報復させて頂きますよ、マドラー……」

驚おどろきの声で大通りに迎むかえられる中、クリミオは怒りを抱かかえたまま馬車に乗り込んだ。

そして鞭むちが打たれ、女性陣じんを乗せた大型馬車二台と、酒や肉や果てはケーキまでを大量に詰つめ込んだ荷馬車一台が動き出す。

大通りの誰だれもが様々な感情を込こめた声で見送る中、モルトは二台目の馬車に乗り込んだ女性達に向けて声を上げる。

「クラッツ……は、大だい丈じよう夫ぶか。オリービーさん気をつけて！　男は皆みな飢うえた狼おおかみですよ！」

クラッツが苦く笑しようで、オリービーがにこやかに手を振り返してくれるのだが、二人の間から顔を赤らめたリッツが飛び出すようにして身を乗り出す。

「あたしの心配は!?」

さすがに飢うえた狼とて一二歳の貧相な体のリッツは狙ねらうまい。

なのでモルトは「体調に注意な！」と至し極ごくまともなことを言ってみたのだが、リッツの喚わめき声はさらに跳はね上がり、馬車から落ちそうになっていた。何か不満があったらしい。

「……どうして……どうして、こんな酷いことを皆さんは平然と行えるんですか!!」

野次馬達が赤と青の顔色のまま、馬車を見送っている中……ディナが声を張り上げた。

さすがに目立つのはまずいとして、モルトは強引に彼女を安美亭の奥へ押し込む。

「大丈夫だ、ディナ。落ち着け。多分君が考えている程にはシリアスじゃない」

「で、ですが、ですが!!　あの方の奥様まで献上したのでしょう!?」

ディナが指さした先は店の窓……そこから見えるのは、ハンカチを噛かみ締め、号ごう泣きゆうしている痩やせた男。彼は路上に膝ひざを突つき、去って行った馬車へ向かって声を張り上げていた。

「マイ・ハニー!!　あぁ、我が妻よ、君はどうして……どうしてこんな非道な作戦に身を費やさねばならぬのだ!!　美し過ぎるからなのか!!　あぁ、美しさは罪なのか!!　……ボクは待つよ、君が帰ってくるその時まで!!　そして、なお愛してみせる!!」

裁さい縫ほう屋の痩せた店主は舞ぶ台たい役者のように声を張り上げていたが、モルトの記き憶おくが正しければ数日前に、彼はそのマイ・ハニーに重装そう甲こうとロングソードでもって戦いを挑いどんだ上でボコボコにされていたはずなのだが……。状じよう況きようが変われば男とは愛をこうも語るのか。

「モルト殿、何でなんですか！　愛する人を差し出さなければならないなんて……!!」

「……少なくともあの人の奥さんに手を出す剛ごうの者ものはそうそういないし、いたとしてもうまくやるだろうさ。それにあんなに愛を語ってる男だけど、もう少ししたら店を質に入れてでもストリップ一座を見に行くような奴やつだぞ」

「……ス、ストリップ……一座……？」

「二年に一度ぐらいの頻ひん度どでリキュールに来るんだよ。誰もが心待ちにしているんだけど、入場料が高くてさ。それで今時期の男達は必死こいて働くんだ。みんな、誰もかね」

「……そ、それは………………………………まさか…………モル

ト……殿どの、も？」

「いや、まぁ、その……ね」

「で、では、ひょっとして……指輪を、報ほう酬しゅうにしたのは……その、入場料のため……？」

　極きょく端たんな話を言えば、まったくもってその通りだったが、よくよく考えてみると『踊る女の裸はだかが見たいので君の指輪が欲ほしい』とするモルトの状況はなかなかにクズだった。

　とはいえ、カッコイイ言い訳も思いつかず、モルトは渋しぶ々しぶ視線を逸そらしながら頷うなずく。

　何故かリアクションがなかったので、そっとディナを見やれば彼女は、またも愕がく然ぜんとした表情で固まり、乾かわいた唇だけが「……そんな……」と声にならない言葉を紡つむいでいた。

「そこまで軽けい蔑べつされるとは……。その、男はそういう生き物なんだと思って欲しいというか……。ともかく、安美亭の手伝いをしててくれ。いいな、約束できるな？」

　モルトの胸をディナの手が押しやった。彼女の双そう瞳とうから溢あふれる涙が止まらない。

「……わ、わかりました。……わかり……ました……っ」

　ディナはモルトから逃にげるようにして、厨ちゅう房ぼうへと走って行った。

　しばらくすると彼女は赤い目のまま、エプロン姿に銀のお盆ぼんを手に戻って来て注文を取るようになったが、モルトと視線を合わせてはくれなかったのだった。

　ここまで軽蔑されると、さすがにモルトもちょっとショックである。

　──おい、みんな、そろそろ行かねぇと。──あぁ残念、美人ウェイトレスが入ったってのに、これから仕事だもんなぁ。──よっしゃ、行こうぜ、みんな。師匠のもとへ！

　客達の中でも特にガタイの良い初老の男達が席を立った。

「……皆さんも、行かれるのですか……？　女性陣だけでなく……」

　ディナがまた愕然とした表情で彼らを見る。その青い顔には、わたしのせいで……と書かれているかのようだった。

　━お嬢じょうちゃん、アンタが誰かは知らねぇし何があったのかも知らねぇ。だが、あの帝国軍はリキュールを甘く見た。その代だい償しようを払わせにゃならん。━何かの責任を感じてるようだが、どうでもいい。これはもう我々の問題だ。奴らは我々の敵だ。我々の手で叩く。

　男達はドアを開いてカウベルを鳴らすと、それにな、とディナを微笑みで振り返った。

　━酒を注ついでくれた娘一人笑え顔がおにできない男は、この街にはいないのさ。

　男達がその筋骨隆りゆう々りゆうの体を揺ゆらし、夜の闇やみへと消えていく。

　彼らは、その鍛きたえられた技能で今作戦の肝キモを為なす、最重要の存在であった。

「どうして……皆みな、自らを危険に晒さらしたがるのです。わたしを軍の前に突き出せば……」

　サシャにディナのことを頼たのむと、モルトもまた長なが柄え刀とうを担かつぎ、店のカウベルを鳴らした。

　先に行った男達とは別の隊だが、モルトもまた準備に入らねばならない。

「どうしてと問われれば……ここがリキュールだからさ」

　次に会う時は包囲が解けた時かな。モルトは最後にそう付け加え、店を後にした。

　街から酒と余興の提供をしたいと聞かされた時、二つの可能性をアセトは考えた。

　一つは奪われるぐらいならば自ら差し出し、少しでも穏おん便びんに済まそうという判断。

　もう一つは、奇き襲しゅうである。とはいえ、女だけで行くこと、そしてそうであるがために街で、つまり、見張り台を直線で結んだラインの内側、協約適用の中で平和的に提供したい、という議会からの達しにより、恐おそらく前者だとアセトは判断した。

　だが、万が一もある。街中に誘い込まれて逆に包囲されれば、さすがに分ぶが悪い。

　議会はその辺りにも機き微びを効かせてくれ、街の東側であるロテ国とオードビー国の国境線の傍そば──つまり軍の幕舎近くを提案してくれたので、面めん倒どうがなくて助かった。

「初めから強く出ていれば良かったのだ。そうであればこの光景は昨日見られただろう」

　日はとうに落ちて、世界は闇やみ夜よが支配していたが、それでもアセトの目の前には煌こう々こうたる光が溢れていた。

　国境周辺はかつて城じよう壁へきがあった関係で、瓦が礫れきが所々にあるばかりで何もない広場となっている。今はそこのあらゆる場所で盛せい大だいに火が熾おこされ、昼間のように明るかった。

　それらの中で、あられもない格好の踊り子達が楽器を演奏し、そして精せい一いつ杯ぱいな舞まいをし、またある踊り子達は酒を注ぎに回っている。

　これがなかなかに悪くない。舞いはうまいのもいればヘタなのもいるという玉ぎよく石せき混こん淆こうではあるのだが、女の質は粒つぶぞろいだ。そして衣い装しようもまた隠し持った武器を警けい戒かいする必要がない程ほどに布が少なく、そして焚たき火を背にした時など裸と見間違える程に透すけるのだ。

　しかも、中には魔ま獣じゆうの類たぐいかと警戒する程の球体ボ

ディの女や、筋肉の固まりのような二メートル級の化け物染じみた女がいたりと、珍ちん獣じゅう染みた者達もおり、飽あきさせない。

「……お酒、お代わりいります？」

　衣装こそ皆と同じだが、あからさまに幼い子供が酒さか瓶びんを持ってアセトの元まで回ってきた。大隊長たる自分に恐きよう怖ふを抱いているのか、顔はかなり強こわばっていて……どことなく不満げなそれにも見える。

　何もこんな子供まで裸同然の格好をさせなくとも良かろうに。さすがにアセトは気の毒に思いつつもグラスを差し出し、酒を注がせるとその子の頭を撫なでてやった。

「……何で……何でみんなして、あたしの頭ばっかり……。そりゃ別に、お尻しりとか触られたいわけじゃないけど……何で……」

　よくわからない愚ぐ痴ちらしき言葉を吐はきつつ少女は他の兵に酒を注ぎに行く。

　その姿を見ていて気付いたが……恐らく相当な人数に頭を撫でられたのだろう。頭頂部の髪かみだけボサボサになっていた。

　グラスに注がれたワインはそこそこにいいものだ。

　本来であれば毒を警戒すべきなのだろうが、今回の催もよおしでは一晩で一〇〇人程度ずつを順次交こう替たいさせ、全軍の半分以下である合計三〇〇人の歩兵を楽しませてもらう、と事前に通達しているので、そんな愚おろかなことはしてこないと予想していた。

　毒を盛られたとて、その時は騎き馬ば隊を含ふくむ残りの全兵力で街を焼きに動く……そのぐらいの想像はつくはずである。

　また、ここの自警団が、長ちよう距きよ離り移動及および荷物運うん搬ぱん用以外の馬を有していないことも確かく認にんが取れているので、火を放つまでもなく、残りの兵だけでも街は制圧できるはずだった。

　エンガディナ・ヌストルテの遺体はできるだけそれとわかる、明確な死の証しよう拠こになるような状態の良さが理想的だ。そのため、街を焼くのは最後の手段であった。

　しかし何よりアセトを安心させるのが、彼の隣となりの椅い子すでふんぞり返ってアセトと同じ酒を飲みまくっている女の存在である。

　議長の秘書を務めていたクリミオなる女だったはずだが、彼女はやってくるなり、アセトの従者が用意した副官用の椅子に当たり前に座って、足を組み、酒を飲み続けていた。

　議場で最初に見た時は議長の影かげかと見間違う程に希き薄はくな存在だったが、なかなかどうして、改めてみると美しい女だと知れた。

　彼女はアセトに阿おもねる様子もなく、それどころか隣にいるのに完全に無視を決め込み、苛いら立だちを押さえるかのように時折髪を払い、そしてひたすらに杯さかずきを呷あおり続けていた。

　その美しい手足を使った舞いを見てみたいと思ったりもするが、この今の姿を横目で眺めるだけでも悪くない。

　長い黒くろ髪かみを持ち、色白で細長い体をしている女……そこだけ取ればクリミオもロンシュータンもあまり差はないが、こうも印象が違ちがうものか。

　女の奥深さにアセトは思いを馳はせた。

「しかしながらあの役立たずの水先案内人はどこに行ったのだ、ろくに仕事もせずに……これで報酬を受け取ろうというのだから、恥はじ知しらずもいいところだ……と、お考えで？」

　アセトの背後からあの不気味な女の声が聞こえてきたが、今いま更さら驚おどろきもしなかった。

「申し訳ないのですが、ちょっと急用ができてしまいまして、外しておりました」

「……ほぉ？　我が君でも見つけてきたのか？」

「もっといいものを見つけました、えぇ、えぇ……えぇ……ですが、それはこちらの話で、さらに新たな急用ができてしまいまして……お暇いとまをいただきたく」

　アセトはようやく振ふり返ってロンシュータンの顔を見る。何と

も楽しそうな笑えみを不気味に浮うかべながら、手に書類とペンを持っていた。目を通せば今回の作戦について途と中ちゆうから作戦顧問コンサルタントの意見を無視しアセトの独断で行動を為した、とする証明書のようなものだ。また、払はらうと言っていた報酬の代わりに馬車と南の港に停てい泊はくしている船団の一隻せきを先に帰国するために好きに使わせて欲しいのでその受じゆ諾だくを願う旨むねがあった。

　戦線を離はなれる、いや腹を立てて状況を投げ出す気か。そしてヌストルテ帝てい国こくに戻もどって兄のグルコノに、自分ならもっとうまくやれたと言い訳を並べ立てる気なのだろう。

　その必死に言い訳をしているロンシュータンの姿を想像するに笑えてくる。

　兄は自分を強く信しん頼らいしているからこそこの作戦を任せているのだ。こんな女の言葉など聞きもしないだろう。だから……と、アセトは躊躇ためらうこともなくサインしてやった。

「ありがとうございます、ところでこちらの女性に一つ訊ききたいことが……モルトというとても素す敵てきな男性をご存じで？　家族とか……恋こい人びととか……妹とか……いたりとか？」

　クリミオは「は？」という苛立った顔で背後のロンシュータンを振り返った。

　普ふ通つう、この不気味な女を最初に見ると息を呑のんで言葉を失うものだが、クリミオはくだらないものを見るような目のまま「さぁ？」と述べてまた酒を飲む。

「モルトの名は知っている、けれどどんな人間かまでは知らない……何故なぜあの男をこの女は尋たずねてきた？　それも人間関係など……いったい何を調べている……と、お考えで？」

　クリミオが今一度振り返り、ケタケタと笑い出したロンシュータンを鋭するどい目で見つめた。

「女同士のやり取りはわからん。……好きにしていろ。幕舎に戻る、後は副官に任せた」

　アセトは席を立つと、女達に背を向ける。そこに声をかけてきた者が一人。

「よろしかったらケーキはいかがでしょう？　有名な職人が作った特別製なんですよ」

　歩むだけで大きく揺れる程の胸を有し、息を呑むほどに柔やわらかな笑顔を見せる美しい女だった。そのせいか、甘い物などほとんど好まないはずなのに、アセトは思わず彼女が差し出していたケーキの皿を受け取ってしまった。

　妙みような街だ。初めて街に入った時もそう感じたが、今もまたそう思う。

　酒を差し出すというのはわかる。女もわかる。しかしながら酒が飲めない者、または酒を飲んではならない者のためにとケーキまで用意するなど、聞いたこともない。

　酒を飲む人間は甘味を苦手とし、飲めない人間は甘味を好む場合が多いので、もてなしとしてはその両方を用意するというのは実に理に適かなってはいるのだが……。

　アセトは幕舎に入ると、報告書に目を通させていた従者にケーキをくれてやって、自分は早めに床とこに就つくことにした。

「やった！　オレ、甘い物には目がなくて。ありがとうございます」

「喰くい終わったら幕舎の灯あかりを落としておけ」

　アセトは横になって瞼まぶたを閉じる。寝ねようとも思えばすぐに寝られるよう訓練を積んでいるためにあっという間に意識は薄うすれていくのだが……深みに入る前に、呼び戻される。

　誰だれかが自分を呼んでいる気がしたのだ。

「アセト大隊長、あぁ、大隊長……あぁ、苦しい……苦しいです……」

　その声に跳はね起きたアセトは、暗い幕舎の中で胸を掻かきむしるようにして、床の上を転がっている従者を見つけた。

　まさか、愚かにも毒を盛ってきたか。酒ではなくケーキの方が本命だったのか。

「大だい丈じよう夫ぶか！　おい、気を確かに持て!!　クソ、あのケーキに何か入っていたのだな。誰かこの者を……お？」

　抱だき起こした時、従者の潤うるむ瞳ひとみがアセトを見つめているのに気が付いた。

「そ、そうか、ようやく、わかった。この胸の苦しみは間違いない。……これは〝恋こい〟だ。大隊長、本当はこんなに綺き麗れいだったんですね。知らなかったな」

「……は？　お、おい、よせ、何だ、貴様、な、何を……何をする!?」

「今までずっと一いつ緒しよだったんです。……もっと一緒になっても……いいじゃないですか」

「よ、よせ、あっ、お、お前……お前そういう趣しゅ味みで……あっあぁ、あぁ―――!!」

　今までに感じたことのない衝しよう撃げきと恐怖に、アセトは腹の底から叫さけびを上げた。

　周囲の幕舎でもくぐもったわめき声や騒そう乱らんの気配もあったが、今のアセトにはそれらを気にしている余よ裕ゆうなど、微み塵じんもなかった。

3

　安美亭でディナは渋しぶ々しぶ仕事を続けていたが、とても以前のようには笑えなかった。

　あの踊おどり子隊を見送った後、店内には殺気立った男達が流れ込んでおり、中には自分達だけでも騒そう動どうを起こせば必然的に街全体も戦わざるを得ないのではないか、街のゴロツキ達が共に立ち上がる男を集めているらしい、俺達も参加を……と、小声で話しているのだ。

　火の点ついた蠟ろう燭そくを油が満ちた椀わんに立たせてい

る……街はもはやそんな状じよう況きようだ。

　燃え上がるのは時間の問題だろう。

　全すべて、自分のせいだ。自分がこの街に来てしまったから……この街の人々は犠ぎ牲せいを払うことになってしまった。しかも、その犠牲を払わせているのが祖国──自分の国の者達だという事実が、ディナの頭と胃を重くし、俯うつむかせる。

　自分は甘い。ずっと、甘かったのだ。

　母は強く、聡そう明めいな人だった。だから、その言葉に間違いなどない、言う通りにしていればいい。ずっとそう思い、友好国の王子だという見知らぬ男のもとへ抱だかれるための旅にも出た。それが国のため、母のため、自分のためなのだと疑いもせず、抵てい抗こうもせず……。

　けれど、本当にそれで良かったのか。それで何を得られたというのだ。

　自分を導く人を全て失った時、自分には何も残ってはいなかったではないか。

　何をしようとする気力もなく、死にたくないからと本能に従い、あの侍じ女じよの言葉通りに脱だつ出しゆつ船に乗り込み、波に任せて港まで辿たどり着いただけではないか。

　風にそよぐ葦あしのように。秋風に舞まう枯かれ葉のように。そうする意味も結果も考えもせず。

　自分の甘さが、このリキュールという街を窮きゆう地ちに陥おちいらせてしまったのだ。

　ディナは、銀のお盆ぼんを胸に抱いた。

　あんなに楽しかった安美亭ここでの時間が、今は、逆に辛つらい。

　あんなに笑顔で満ちた場所に身を置いたことなど、生まれて初めてだった。次はどうしよう、どうすればみんなのためになるのだろう、どうすればみんなもっと笑顔になってくれるのだろう……そんなふうに頭と体を使い、心をときめかせたことは、初めてだった。

──酒を注いでくれた小こ娘むすめ一人笑顔にできない男は、この街にはいないのさ。

そんな言葉を残して男達は店を出て行った。きっと、何かをしでかすために。

……モルトも、また。

己おのれの身を捧ささげようと決めた相手。最初、抵抗がなかったといえば嘘うそになる。

けれど、共に過ごしたわずかな時間だけで、彼となら……と、そう思えた。

恋だとするには受け身で、稚ち拙せつで、必要に迫せまられた決断だったかもしれない。

けれど、彼の部屋に行った時には、はっきりとした好意が自分の中にあった。

胸は今も熱を持っている。たとえ、切きっ掛かけが自分の勘違いから始まったものであったにせよ、それだけは変えようのない事実だった。

心のどこかで、頭の片かた隅すみで、期待していた気がする。

かつて夢見たように普通の娘むすめとして人生を歩めるのではないか。彼──モルトの隣で。

でも、結局、全て……。

自分はエンガディナ・ヌストルテ。帝国の正当なる後こう継けい者しや。血の定めには逆らえない。

おぉ、と野太い声と共に、立ちすくんでいたディナの肩かたをグレーンが叩たたいた。

「ディナ、疲つかれてるだろ、もうド深夜だ、上で休め。クラッツの部屋、使え。店もそろそろ閉める。……オレも、この後、用事があるんだ」

ディナは返事をすることもなく、お盆を置いて店の奥の階段へと

向かった。

「……姫ひめ。このサシャ、今こ宵よいあなたのお側そばに控ひかえておりましょうか？」

「いいえ、大丈夫なのです。一人で、いろいろ考えたいのです……」

　階段下から見上げていたサシャは騎き士しのように胸に手を当てながら頭こうべを垂れ、下がっていく。恐おそらく彼は一晩中店で護衛を務める気なのだろう。

　兵を防ぐというより、ディナの行動を押さえるためだというのは考えるまでもなかった。

　誰も彼もが優やさしくて、自分はどこまでも甘くて……。

　けれど、それももう終わりだ。

　ディナはクラッツの勉強机の上にあったノートの一枚を拝借し、ペンを走らせる。

　多くの街の人々に多大な迷めい惑わくをかけ、犠牲を払わせてしまったことへの謝罪。そして、自分の勘違いだったとはいえ、モルトに甘えてしまっていたことへの謝罪と後こう悔かい。最後に、ヌストルテ家の女として、この事態の責任を取る……その覚かく悟ごを記し、胸に下げていた指輪を重しとして、そしてまたモルトへの報ほう酬しゅうとして机の上に置いた。

「初めからこうしていれば良かったのです。……本当に、そうしていれば……」

　こんな嫌いやな気持ちを抱くことなく、きっと、淡たん々たんと死を迎むかえられたはずだ。

　死にたくはないけれど仕方ない、これも血の定め……きっと、そんな気持ちで。

　そして彼を、この街を好きになることなどもなく……たった一人で……。

　ディナは部屋の窓を開けると、店の裏手を見み渡わたした。

　店が遅おそくまでやっていたせいもあってか、すでに東の空は明るく、やけに静かである。

　……人ひと気けはない。行けそうだった。

　一度静かに部屋から出ると、何に使うものなのかわからないが、二階の廊ろう下かの片隅に置いてあった荒あら縄なわの束を手に取り、部屋に戻る。これの端はしをベッドに縛しばり付け、窓の外に垂らすと、十分に地上まで届いてくれた。

　彼女は窓から体を外へ出すと、荒縄を強く握にぎり締しめ、降りていく。

　手の皮が抉えぐられ、血が流れ出たが気にしない。それより地上に落ちて足を折ったりしたらそれこそ目も当てられないので、ディナは荒縄を強く握って、ゆっくりと降りていった。

「さようならなのです、街のみなさん。……楽しい時間をありがとうございました」

　安美亭へ深々と頭を下げるとディナは目元の涙なみだを拭ぬぐい、そして血の滲にじんだ手でもって前まえ髪がみを分け、ヌストルテの証明たる瞳を夜風に晒さらした。

　ふと、どこからか視線を感じて振ふり返ったが、そこには誰もおらず、リキュールで一番高い建造物だという教会の鐘しよう楼ろうが家々の向こうに見えるだけ。

　きっと街を監かん視ししている者がいるのだ。街の人間か、それとも帝てい国こくの密みつ偵ていか。……どちらにせよ、もう構わなかった。

　ディナは夜の街を東へ──死地へと向かって歩み出す。

　一歩一歩が、自分の決断、自分の意志。

　俯き加か減げんだった己おのれの背が、真まっ直すぐに伸のびていくのを彼女は感じた。



4

　公民館ホールでは男達が群れており、度数の高い気付の酒を飲み交かわしていた。

　その老ろう若にやくの男達六〇人ほどの中に自警団員は含ふくまれてはいなかったが、いろんな意味で図太い男達が半数を占しめているせいか、場は何故なぜだかわからない威い圧あつ感に溢あふれている。

　ホールの舞ぶ台たいにマドラーと共にモルトが立ってみると、それが如によ実じつに感じられた。

「フンッ、まさか指定した男全員どころか、それを上回る人数が誘さそい合わせて参加するとはな。しかもそれが『漢おとこ祭り』の覇は者しやたる二人を含むとは、さすがに僕の予想を超こえたぞ」

　マドラーが言っているのは、男達の中でも際きわだったガタイを持つグレーンとピンガだ。

　壇だん上じようから眺ながめているとわかるのだが、二人だけ男というより……獣ケモノ感が漂ただよっている。

　━━クラッツが、行った。モルトも、行く。なら、オレが、行かないわけには、いかねぇ。━━グレーンが行くってんなら、おれも行くさ。宿敵ダチだからよ。

　二人の周りにいる男達がうずうずしている。こういう男おとこ臭くさいやり取りは街の誰もが大好きだ。自らの身を犠牲にせんとここに集まった、男性ホルモン垂れ流しのような連中ならば、なおのことだろう。

「諸君、聞け。これより実行されるのは、解放作戦最大の要かなめにして決定打である。だが、これを成すためには諸君らの犠牲が必要だ。流血、果ては死をも強しいられるだろう」

「……実際にはそれ以前に大切なものを失うと思うけどな……」

　モルトはこれから行われる作戦に、思わずため息を吐ついた。

　必要なことだというのはわかるが、正直やりたくはない。

　しかも自分が先せん陣じんを切らなくてはならないのだから、尚なお更さら気が重かった。

「これも……リキュールの男としての務め……か」

　男達を見ていると意識が遠くなっていくので、モルトはホールの一番後ろの扉とびらをボーッと眺めていたのだが……突とつ如じよそこがガチャリと開いて、大きな眼鏡めがねをかけた娘が顔を出す。

「あ、マドラーさん！　お父ちゃんから緊きん急きゆう連れん絡らくです！」

　眼鏡屋の父娘おやこはその尋じん常じようではない視力を活用し、教会の鐘楼の上にて監かん視し及および偵てい察さつの任務に当たっていたはずだ。連れん絡らく要員を通さずに直接来たということは、相当に急ぎだ。

「あの、例の女性が安美亭を抜ぬけ出て一人で敵てき陣じんに……」

　なんだと!?　モルトとマドラーは声をハモらせると、壇上を飛び下り、ホールを走り出た。そのまま安美亭まで流れ込めば、サシャが抜き身で迎える。

「おい、バカ、俺だ！　ディナは!?　ディナはどうした!?」

「モルトか。彼女はずっと上で……敵陣へ？　そんな、この店に裏口は……窓か!?」

　モルト達は慌あわてて二階に走り込むと、ベッドに縛り付けられた荒縄と彼女からの置き手紙、そして指輪を見つけた。

　……目を通せば、案の定である。

「クソ、何思い詰つめてんだよ。責任なんて……。ん……何だ、この勘違いってのは？」

　モルトは手紙をマドラーに渡わたし、マドラーはチラリと目をやるだけで全てを読み取ったのか、すぐにサシャへと回した。彼の目が、見開かれる。

「お、おい、モルト。お前……まさかと思うんだが、報酬に彼女の指輪を指定したのか？」

「あぁ、他に金目のもんはないっていうし、体で払はらえとも言えないだろ」

「そ、それを彼女は……ヌストルテの姫は了りよう承しようしたというのか!?」

「あぁ、そうだ。……何だよ、サシャ、何を驚おどろいてんだ？」

「帝国の姫に指輪を寄こせと言うのは……プ、プロポーズの意味だぞ!?」

　モルトが「……は？」と眉まゆ根ねを寄せて固まる中、サシャが慌てた口調で教えてくれる。

　ヌストルテ帝国は元々わずかばかりに貴石の採れる痩やせた土地の国だったのだという。それが建国の母、つまりヌストルテ家の先祖が軍事的に優すぐれた才能を発揮し、次々に周辺の小国を支配下に置いていったことで発展した歴史を持っているらしい。

「ヌストルテの本来の土地で採れる貴石だけで造られる指輪は国そのものを表している。だからこそ、国の後継者たる娘が生まれれば指輪を新たに造って持たせ、結けつ婚こんの際にはそれを旦だん那なに渡す。これには女が権力を握るヌストルテ帝国の特とく殊しゆ性せいに、他国からやって来た男が不満を抱いだかぬようにという意味がある」

「形だけでも男が国を持てるように、という古いしきたりだったかな」

　サシャの説明をマドラーが継ついで締しめた。彼は、やれやれだ、と眼鏡を掛け直す。

「夫に渡すまで、決して肌はだ身み離はなさない指輪を置いていったということは、あの小娘、本気で死ぬつもりだな。……クソッ、今帝国兵に捕ほ縛ばくされると最悪だぞ」

「追い掛けて止めるしかない」

　サシャが言うも、マドラーは忌いま々いましげに首を振る。

　モルトにもわかった。急いだとはいえ監視していた眼鏡屋の娘が公民館ホールまで走り、モルト達がここへ来るまでの時間を考えると、今からディナを追い掛けたとて敵陣に到とう達たつ前に止められるとは思えない。

「マドラー、作戦を早めよう。踊おどり子はもう帰き還かんしたよな？　ホールの男おつさん達を動かそう」

「踊り子隊は大浴場でひとっ風ぷ呂ろ浴びてから解散する、とさっき通達があった。……後は、あのジジイ共が仕事を終えるだけではある。だが、刻限は夜明けとしているんだ。早く終われば連絡が来る手て筈はずだが、まだ来ていない。故ゆえに動くわけにはいかない」

　完敗だとでも言うかのように、マドラーは髪かみを掻かき上げた。

「迷惑を持ち込んだ張本人のくせに、自己犠ぎ牲せいで解決か。僕からすると何ともはた迷惑な話だ。……あぁ、素す晴ばらしいさ。置き手紙にあるように、責任を取りに行ったのだろうさ。王女が縁えんもゆかりもない街のために、自分のせいだからと……クソが！」

　モルトは指輪を摘つまみ上げると、窓からの薄うすい月明かりに照らしてみた。

　思えば、報酬を指輪だとした時、彼女は顔を真っ赤にしてパニックになっていた。

　それでも彼女はモルトの依い頼らい料請せい求きゆうに同意したのだ。

　それはつまり、モルトを夫にすると了承したことに他ならない。

　そうか、とモルトは今になってわかった。だから、あの夜、彼女は自ら服を脱ぬごうとしたのだ。妻となる以上、当然の務めだとして……。

あの時、自分はどれだけ愚おろかであったのか。まるで盛さかった犬じゃないか。

モルトは強い恥はずかしさを覚えるものの……何故か、笑えた。自じ嘲ちようだった。

サシャとマドラーが不ふ審しんなものを見る目で、モルトを見つめる。

「いやなに、俺はバカだなと思ったからさ。そう、バカなんだ。……バカなんだよ」

「安心しろモルト、みんなわかってるぞ」

モルトはサシャの足を踏ふみ付け、甲かん高だかい小こ娘むすめのような悲鳴を上げさせた。

「ディナは生きるために俺なんかの妻になる覚悟をした。全部を差し出してでも死にたくないと思ったんだ。それなのに、俺は……あの夜……何バカやってたんだ……」

手紙にある〝甘え〟とは何だ。ディナがモルトにお願いしたことなんてほとんどない。

あるとすれば……リッツと共に街を見て回り、安美亭で働きたがっただけ。

そんな当たり前のことを、ディナは〝甘え〟と呼ぶのか。

それだけで、彼女がどんな人生を歩んできたのか、モルトにもわかった。

モルトは歯は噛がみしてしまうのを、どうしても堪こらえられなかった。

「自分で持ち込んだから、確実に死ぬとわかった上ででも、責任を取る、か。随ずい分ぶんと立派だ。悲劇的だ、感動的だ。……だが――」

徒歩ならば半月以上はかかる旅路の中間地点、疲つかれを癒いやし、そして馴な染じむにつれてここが目的地、ここが帰る場所になっていく……そんな不思議なところ。

　バカやって、酒を飲み、飯を喰くらって、たまに痛い目を見るも、クスリと笑える思い出が生まれるところ……それが、リキュールだ。

　そこに大層ご立派な悲劇や感動など──。

「そんなもの……この街には必要ない」

　モルトは翳かざしていた指輪を握り絞めた。硬かたいリング。仕事の報酬。

　……故ゆえに、受け取るわけにはいかなかった。まだ、仕事は終わっていないのだ。

　モルトは窓の外へと飛んだ。着地と同時に甲高い音を立て、石いし畳だたみにヒビが入る。

「お、おい、モルト、何をする気だ⁉」

　サシャが言った。けれど彼もわかっているはずだ。これからすることなど一つしかない。

「何でも屋モルト、聞け！　把は握あくしているだけで街の西側を中心に南北に二〇〇が分散配置、東の本ほん陣じんには六〇〇の兵が駐ちゆう留りゆうし、この内五〇〇が今なお戦せん闘とう可能だ、一人では到とう底てい無理だ！」

「生あい憎にく、この街と同様、何でも屋も信用でもっているんだ。……受けた護衛の仕事はきっちり最後までやる。必ずだ！」

「だから、言っている！　何とかしてあの小娘を守れ、夜明けはそう遠くない。かつて僕の家族を一夜にして悪夢に陥れたジジイ共を良くも悪くも僕は評価している。だから……耐えろ！　ひたすらに耐えろ!!　耐えきれば、こちらの……街の勝ちが見えてくる!!　僕がわざわざ締結した協約を忘れるな!!」

　街では住民と兵は互たがいに危害を加えない、もしそれを破られた場合は実力行使による抗こう議ぎを行うものとする……そんな、よく考えるといささか妙な協約。忘れるわけがなかった。

　東の空は確かにわずかな明るみをその空に滲にじませていた。

夜明けは、近い。

「公民館のおやっさん達に伝えてくれ。作戦変へん更こう、口火は俺とディナで切る、と」

それだけ言い残し、モルトは暁あかつきの空へと走り行く。

街を守るため、ディナを守るため……そして、彼女に伝えるために。

「ディナ、君はわかっちゃいないんだ。この街は——!!」

5

夜よ這ばいを仕し掛かけてきた従者と簡易ベッドの上で激しくも情熱的に縺もつれ合い、何とか叩たたきのめして縛しばり上げた頃ころには、わけのわからない報告が次々に上がってきていた。

「何だ、その大量の夜這い事件は!?」

アセトは全身に嫌いやな汗あせを浮うかべつつ、怒ど声せいを響ひびかせた。

注進に来た兵も青い顔をして、汗だくであり、瞳ひとみには色いろ濃こい怯おびえがある。

「そ、それが、アセト大隊長が女には手を出すな、協約を遵じゅん守しゅするようにと厳しくお達しをしたことで……その、ムラムラきた兵達が〝女がダメでも同性ならば良いではないか。良く見たらコイツ、綺き麗れいな顔してやがるし〟と、欲望をぶちまけたようでして……」

「おぞましいぞ!?　何だその超ちよう理論は!?　……街の奴やつらめ、毒を盛ったかと思ったが媚び薬やくを盛ったな、嫌がらせか!!」

だが、たかだか媚び薬やく如ごときで性別を無視するところまで行くものだろうか。

性欲が増すことはあっても、何でもいい、とはならないだろう。

すでにボコボコにした上で縛り上げている従者をアセトは見つめる。この男はかなりの女好きだ。だからこそ、手を出しかねないと判断して幕舎にて報告書を読ませていたのだ。

性欲が暴走しても、自分に手を出して来るとは到底思えなかった。

「恐おそらく原因と思われるのが、ケーキと『ムリエルプルクラ』なる薬草酒かと。どこかの言葉で美女を表す言葉です。口にしたほぼ全員が覚醒しました」

「クソ、協約違い反はんとはなりにくい絶ぜつ妙みようなラインを攻せめてきたな。……被ひ害がいを報告しろ！」

「はっ！　現在捕縛した〝覚醒した兵〟が三九人、彼らに襲おそわれ身も心も損そん耗もうを受け、しばらく使い物にならなそうな被ひ害がい者しやの兵が五三人の計九二人であります！」

「一〇〇人近い被害……いや、ちょっと待て。覚醒した兵より被害者の方が多いのか!?」

「はぁ。どうも絶ぜつ倫りんがいたようで……」

女達が来てからまだ五時間、去って行ってからは一時間程度である。その短時間で戦力の一割以上を損耗する事件が起こったことに、アセトは恐きよう怖ふを禁じ得なかった。

嫌な沈ちん黙もくが幕舎内に流れた時、新たな報告をするために兵が入って来る。

「アセト大隊長殿どの、女です！　女が一人、向かって来ます！」

忘れ物でも取りに来たのか？　動どう揺ようしているのか、そんなありえないことを口にするも「姫ひめのようです」との言葉に、アセトは目を見張った。

幕舎を飛び出してみれば、未だ夜に支配される街からゆっくりゆっくり、地を踏みしめるようにして歩んで来る女の姿がある。

……間ま違ちがいない。彼女だ。かがり火に照らされる、その、

この世のものとは思えぬ美しき緑の瞳はどれだけ離はなれていてもはっきりとわかる。

「エンガディナ・ヌストルテなのです！　大隊長アセト・バクター、前へ!!」

　アセトも初めて聞くエンガディナの大だい音おん声じようだった。

　か細いひ弱な少女の声しか出せないものとばかり思っていたが、今の声には有う無むを言わせずに人を従わせる力が込こめられていた。

「小娘め、ここに来てヌストルテの血に目覚めたか。……おい、兵を誰だれも近づけるな。自身の足で俺の前に来させろ」

　出向いた方が格下だ。どちらが優位であるのかを示す必要があった。

　エンガディナにもその意図は伝わったようで、彼女は忌々しげな顔付きで、止めていた歩みを再開させた。そして近づいて来るに、以前には見られなかった強い光をその双そう瞳とうに宿していることに、アセトは気付く。

　……やはり目覚めたのだ。女じよ帝ていとしての何かに。

　騒さわぎに気付いて幕舎から出て来た兵、数百の視線の中、エンガディナは腕うでを組んで待ち構えたアセトの前に、ついに立つ。

「アセト・バクター。即そく時じ包囲を解くのです。この身は好きにするといいです」

「今回の脱だつ出しゆつ劇で大層成長なされたようで。しかしながらそれは拒きよ否ひいたしましょう。我々はあなたの命令に従うつもりはない。……そう、命令にはね」

　エンガディナは訝いぶかしげな顔をするが、しばらくしてその意味を理解したようだった。

「……一つ、聞かせて欲しいのです。ここに街の女性達が来たはずです。彼女らは？」

「もう帰った。事前の約束通り生き真ま面じ目めに対応してやったら、とんでもない置き土産みやげをされてこっちは大おお騒さわぎだ。大損害だ、やってくれた」

　エンガディナは彼女らの心配をしてここまで来ていたのか、特に何もされずに帰したことを知って、表情から硬さを抜ぬいた。

　すると、彼女は何ら躊躇ためらいなくその場で膝ひざと血だらけの手の平を地に押しつける。

「……どうか、軍をお退きください。アセト殿。この街には何の関係もないのです」

　兵が見ていた。軍全体は事前に掌しよう握あくはしているし、近この衛え大隊はより強固に結ばれてもいるが、それでも念には念を入れた。

　アセトはディナの頭を踏み付け、もう一度懇こん願がんを口にさせる。そして、足を下ろして今度は剣けんの切っ先を顎あごに当て、顔、地面に着いていた手をも上げさせ、膝立ちにした。

　エンガディナが瞼まぶたを閉じて首を伸のばし、唇くちびるを横一文字に結ぶ。わずかに震ふるえてはいたが、その心構えに迷いはないようだ。……それが、まずい。

　ヌストルテ家は政治と侵しん略りやくに勤いそしむあまりに断絶目前、しかも後継者エンガデイナは老おいた母の操あやつり人形。彼女が友好国とはいえ、他国の王族との間に子を生なしてしまえば、強い影えい響きようを受けるのはもちろんのこと、最悪帝てい国こくが乗っ取られる可能性も懸け念ねんされる。

　それ故に、帝国が帝国のままであり続けるために、今回のクーデターは計画された……そういう設定シナリオになっている。実際には将軍である父、そして兄達の画策によるバクター家の謀む反ほん以外の何物でもでなかったが、軍を乗っ取るためには綺麗な言葉が必要なのだ。

　だからこそ、今の状態はまずかった。使い物にならないとされたエンガディナに、女帝としての素質を兵達が見てしまうと後々で面めん倒どうが生まれかねない。

　アセトは一計を案じ、剣を振ふるう。彼女の胸むな元もとを抑お

さえていた革かわ紐ひもを切っ先で斬きり裂さいた。

　悲鳴の一つでも上げればかわい気もあるが……エンガディナは、唇を噛かんで声を堪こらえ、両の手を拳こぶしに固め、乳ち房ぶさを零こぼれるに任せた。

　そして襟えり首くびというにはあまりに大きく開かれていた上着は彼女の肌はだの上を滑すべり落ち、夜明け前の薄うす暗くら闇やみの中でも、それとわかる程ほどに白い上半身を露あらわにしたのだった。

「首を斬るのに、服が……お邪じゃ魔まだったのです……？」

　声は震えていた。だが、数百に及およぶ男達の視線の中で肌を晒さらしておきながら、その言葉選びは大したものだった。……やはり、面おも白しろくはない。

「おい、今こ宵よいの事件で身も心も傷ついた男連中を連れてこい。この女を宛あてがう」

　周りにいた兵達は「……しかし」と一いっ斉せいにざわついた。

「お前でも、他の連中でもいいぞ！　どんな無茶な使い方をしてもいいんだ！」

　尊いものは、穢けがしてしまえばいい。人は、一度穢れたものを崇あがめるのを嫌きらう。神聖さを打ち消し、血筋だ何だと言っても所しょ詮せんはただの雌めすでしかない、そう植え付ければいい。

「どうした、これだけ男がいて、誰もやる気がないのか!?」

　大勢の人間がいるのに、場は不自然な程に静まり返った。

　もう一押し必要か。そうアセトが考えるも……ゆっくりと兵達がざわつき始める。

　じわりじわりと空が明るくなるにつれて、エンガディナの柔やわ肌はだがはっきりと見えてきている。それが、昨夜に欲情をため込んだ者達の目を引きつけているようだ。

　─どうする。─やるか。─やるなら早い方がいいよな。─壊こ

わされる前に……。

　声が漏もれ聞こえてくる。アセトに聞こえるならばエンガディナにも聞こえているだろう。

　彼女は瞼を閉じ、目め尻じりに雫しずくを湛たたえたまま、斬ざん首しゅを待つように首を伸ばし、その顔を空へ。全すべてを受け入れる覚かく悟ごを決めたように、唇を噛み締しめ、全身を震わせながら。

　ざわつきが大きくなってきた。あと少し。最初に誰かが名乗りを上げれば、その瞬しゅん間かん、彼らのタガが外れ、我も我も……と。それはまさに、ヌストルテ家が終わる瞬間だ。

　さぁ、誰だ？

　誰が最初に名乗りを上げる？

　全てを打ち砕くだく者は━。

「俺が立候補する!!」

　その大音声は、五〇〇の兵達の間に、そして明け方の空に、轟とどろいた。

　アセトに笑えみが浮かぶ。そして、ハッとしたようにエンガディナの目が見開かれた。

「ほぅ、随ずい分ぶんと威い勢せいがいい奴だな。どれ、どいつだ、所属を言え」

　アセトは剣を収めつつ、辺りを見回して声の主を捜さがすのだが……いない。

　ざわつく兵達の視線が、自然と街の方へと向けられていく。

　その先にいたのは、歩み来る一人の革コートの男。肩かたに巨きょ大だいな得え物もの━長なが柄え刀とう。

「通りすがりの、何でも屋だ」

「モ、モルト殿!?　ど、どうして……いえ、来てはダメです!!　戻

もどってください!!」

　エンガディィナが乳房を揺ゆらして振り返り、そして彼の方へ駆かけて行こうとしたので、アセトはその足を払はらって転てん倒とうさせた。

　彼女に縄なわを打つように兵に命じ、続けて誰も動くなと伝える。

　明るくなりつつあるとはいえ、まだ夜明け前なので見え辛づらいが、アセトは目を凝こらして北と南の見張り台の位置を確かく認にんする。……やはり、何でも屋はまだ街の中だ。

　エンガディィナ同様、幕舎近くまで――国境線の外に出てくるまで、アセトは待った。

「そこの女性……ディナの護衛をやっている。悪いが俺の依い頼らい人を返してもらおう」

「モルト、とか言ったか。今し方、そう、たった今だ。君は南北の見張り台を繋つないだラインを出た。つまり今歩いている場所は街の外、国境線の外だ。君がリキュールの住民だとしても協約は適用されない。……その辺りのこと、理解できているのか？」

「協約がないとお宅らは怖こわくて身動きとれないか。まぁ当然だ、腕うで利ききだからな、俺は」

　もしかしたら本当にバカなのかもしれない。しかし、使える。

　エンガディィナが彼に向かって泣き喚わめいているのだ。よほど大切な男らしい。

「四人、勇ゆう敢かんな何でも屋をもてなせ。……嬲なぶれよ」

　先の時とは違い、すぐに声が上がった。四人の兵は剣を抜くとモルトを囲む。

　しかし、モルトはそれでもなお、平然と足を前に出し続けた。

　一人が左ひだり肩かたを狙ねらい、上からの一いち撃げきを放つ。まずは腕を一本……そうアセトは思った。だが、その思おも惑わくは次の瞬間に驚おどろきへと変わる。

　モルトは左手で受け止め、刃はを握り締めたのだ。当たり前に、わずかな血と共に。……無論、手てっ甲こうなどない。素す手ででである。

　驚きよう愕がくする兵をよそに、モルトは歩みを止めない。斬り込んだ兵は剣を手放すわけにもいかず、体に力を入れるのだが……ズリ、ズリリとその両足で地面に二本の溝みぞを掘ほっていく。

「毎日鋼鉄製の長柄刀を握っているんだ。これぐらいはな」

　モルトが腕に力を込こめたのが革コート越ごしにもわかった。すると、冗じよう談だんのように剣が甲かん高だかい音を上げて、へし折れる。

　その剣を握っていた兵はもちろん、アセトも周りの兵も、エンガディナでさえ目を見開き、言葉を失った。

　その異様さに、兵達に怯おびえが宿り始めたのをアセトは感じ、叱しつ咤たを飛ばす。

「何をしている!!　四人、全員で行け!!」

　剣を折られた兵も仲間から新しい剣を投げ渡わたされ、四人で同時に斬り込んだ。

　内、二人は掲かかげられた長柄刀で受けられ、そのあまりの硬かたさに逆に弾はじき飛ばされるも、残りの二人はモルトの体にその刃を送り込んだ。

　……そのはずなのだが、モルトはなおも平然と歩き続け、アセト達へと向かってくる。

　それが、どうした。そう言わんばかりの堂々たる足取り。

　刃が肉に達したようにも見えたが、どうやら革コート表面を斬り裂いただけのようだ。血も出ていない。もしかしたら裏地に金属繊せん維いを縫ぬい込み、防ぼう刃じん性能を持たせた特とく殊しゆなものなのかもしれない。

　アセトだけでなく兵達も気付いたようで、より鋭するどい斬ざん撃げきをモルトに送り込み始めた。それまでは即そく死しさせぬよう気き遣づかいがあったが、どうせ斬れまいとして遠えん慮りよを

消したのだ。

　剣は斬れなくともその重く長い刃は肉を激しく叩たたき、骨を砕く。特に軍用の剣はまさに打だ撃げき兵器としての側面を強く持つのだ。

　肉モルトを叩く鈍にぶい音が夜明け前の空に止めどなく響ひびいた。

　そして、それは、酷ひどく不気味な光景だった。

「……あの男、何故なぜ歩ける……？」

　モルトは歩み続けていた。剝むき出しの頭を長柄刀で守るばかりで、体への攻こう撃げきは一いつ切さい抵てい抗こうせずに受け入れている。それでなお体をわずかに震わせるばかりで、膝をつきもしない。

　重装そう甲こう兵ならわかる。だが、いくら斬れなかろうと所詮はコート……打撃は体に喰くい込んでいる。それでなお平然と……彼は、歩む。

　馬。そうアセトは漏らすように言い、騎き馬ばを一騎けしかけた。その手には巨大なモーニングスターが握られており、馬の突とつ進しん力と合わさったそれは岩をもたやすく砕く代しろ物ものだ。

　四人の兵が散り、モルト一人になったそこに、騎き兵へいが下から掬すくい上げる強力な一撃。

　さすがのそれにはモルトも数メートル近くを吹ふっ飛とばされた。

　当たり前の結果なのに、思わずアセトの口から「よしっ」の声が漏れる。

　飛ばされ、転がり、倒たおれたモルトだが、すぐ地に手をつき、また立ち上がらんとする。

　そこに四人の兵が群がった。

　立ち上がろうとする腕うで、足、その関節を狙い、叩きに叩く。

蹴けりに蹴る。

　モルトは呻うめきと共にすぐに地を転がった。しかし、すぐにまた膝を、手をつき、立ち上がろうとするも、囲まれて攻撃を受ければ、またすぐに……。

「モルト殿!!　もういいのです、逃にげて、街へ戻ってください!!　お願いです!!」

「……生あい憎にくと、何でも屋も信用が大事でね。仕事は必ず、最後まで……グッ」

　すでに数十発。それだけやられておきながら、なおもモルトは立ち上がり、斬撃を長柄刀と体で受け止め、また呻き、地を転がるを繰くり返す。

　アセトは再度、南北の見張り台の位置を確認する。徐じよ々じよに下がって国境線内側まで引き込み、協約違い反はんだとしたいのかとも思ったが……モルトは、むしろ前へ出ようとしている。

「ディナ、すまない。君を守る、そのはずだったのに……そんな、傷だらけに──」

　雄お叫たけび上げる兵の横よこ殴なぐりの一撃がモルトの肋あばらに入る。彼の体を吹き飛ばす程の強きよう烈れつなもの。地に手をついたモルトの口から血が噴ふき出た。そこをさらに四人がかりで蹴りつけ、薪まきでも割るかのように剣を雑に叩き付ける。もはやタコ殴なぐりだった。

「アセト・バクター!!　わ、わたしを殺しなさい!!　それが望みのはず……早く!!」

「エンガディィナ、あなたの命令は聞かないと、先程お伝えしましたが？」

　涙なみだを流して叫さけんでいたエンガディナがハッとする。そして顔をくしゃくしゃにして歯を喰い縛しばり、縛られた体のまま、アセトの足先に頬ほおを寄せた。

「こ、殺してください……お願いなのです。どうか、殺して欲しいのです！」

　兵達が十分に見ているのを確認し、アセトは彼女の顔面を蹴りつける。兵に猿さるぐつわを命じて、舌を噛み斬れぬようにし、モルトが嬲られるのを最後まで見せることにした。

　彼女の心が折れる姿を兵達に存分に見せつけてやるのだ。

　肉を叩く音が響き続けた。なかなかにしぶとい。いい加減倒れたままでいればいいものを、終わりかと思えばすぐにまた立ち上がる。長柄刀も手放さない。血ち反吐へどはすでに複数回吐はき出していたが、それでもなお、彼は立ち上がる。兵達の方が息を切らし始めていた。

「……アセト大隊長、新手です」

　目を凝らせば、街からまた一人何者かが歩いてくる。腰こしに刀、長いマフラーを風に靡なびかせながら来るのは、白にも見える金きん髪ぱつを簪かんざしでまとめた女……いや、美び丈じよう夫ぶかもしれない。

　モルトが血まみれの頭を上げ、声を出す。

「……なっ!?　おい、何でサシャ……お前来てんだよ!!　お呼びじゃねぇぞ!!」

「お前の無様な姿が見るに堪たえなかったのさ。やられすぎだ、モルト。見ている方が心配してしまったぞ。……それに、だ……」

　サシャはどこか自じ嘲ちようするように、そしてどこか恥はずかしそうに、口元に笑えみを作った。

「私も仲間に入れてもらおうかと思ってね。たまには勇気を出して、図ずう々ずうしく……な」

　困こん惑わくするモルトへ向かって、サシャと呼ばれた男はずんずんと歩みを進めてくる。

「通りすがりの何でも屋、サシャだ。この男への執しつ拗ような攻撃はもちろん、女性に対し、あまりに礼を失する様を見て、いてもたってもいられず参上仕つかまつった」

　また何でも屋か。アセトは「先にやれ」と兵に命じる。

　モルトを取り囲んでいた四人の兵が、剣けんを構えて取り囲むのだが……サシャは足を止めることなく平然と彼らの間を抜ぬけて行く。

　なに？　とアセトが目を凝らしてみれば、いつの間にかサシャの手には抜き身の刀。そして、取り囲んだはずの兵は驚愕に固まり、その手にしていた剣は鍔つば元もとから先が何故か地面を転がった。

　━━この美丈夫、やり手だ。

「どうした、遠慮はしなくていい。そもそも私はそこで血反吐を吐き散らかしている男と違って住民登録をしていない流れ者だ。ここがどこだろうと、好きにしていいんだぞ」

　サシャはモルトの元へ。しかし彼は足を止めずに地に手と膝ひざをついていたモルトを無視して進み来る。まるで選手交代、ここからは自分が……と、言わんばかりである。

「……重装甲歩兵、今準備が出来ている者だけでいい。前へ」

　アセトの命に応じ、五名が重い足音を響かせサシャの前へ。全身を覆おおう厚い装甲に、巨大な盾たてを装備し、横一列に隊列を組んで身を固め、盾の隙すき間まから槍やりを突き出した彼ら。

　これを剣で斬きることは、如何いかにやり手といえど不可能である。

　かなりアセトに近づかれていたが、さすがにサシャの足もそこで止まった。

　あとはモルト共々弓矢で終わらせればいい。律りち儀ぎに剣で相手をしてやることもない。

　副官はすでに三名の弓兵の配置を終えさせており、号令を待つだけとしていた。

　奴やつらの処理が終われば、遠くからも見えるよう日が昇のぼるのを待ち、エンガディナの首を落とす。それを塩しお漬づけにして持ち帰るだけ。

　もうすぐだ。もうすぐ終わる。もう夜明けだ。

「……アレ？」

　近くにいた兵の一人が、モルト達とは逆の、東側を見やりつつそんな声を上げた。

「何か、変……というか……何だ……アレ？」

　アセトもまた彼の視線に倣ならう。別におかしなものは何もない。

　暁あかつきの空、そして明るくなってきたことで、どこまでも続くなだらかな荒こう野やと見張り台が見えるだけ……。

　それなのに、何故か、違い和わ感がある。

　久々に戻もどった自宅で、家具がなくなっていたり、位置が微び妙みようにずらされていたりした時のような、そんな……些さ細さいな、しかし決定的な違和感である。

　南北の見晴らし台の上に、街のマークが描えがかれた旗が靡いているが……それだろうか。

　いや、この妙みような違和感はそんな些細なものではないはずだ。

　その正体が何であるのか判る前に、妙な音が聞こえてきて、アセトは街へと向き直る。

　鐘かねだ。リキュールの教会、その鐘しよう楼ろうの鐘がけたたましく鳴っていた。

　夜明けに鳴らすものではない……。再びの違和感にアセトは街を見ながら頭を巡めぐらせる。

　その視界の隅すみに、地に顔をこすりつけて猿ぐつわを外したエンガディナの姿が映る。

「モルト殿どのサシャ殿、逃げて!!　わたしはもういいのです!!　これで、もう……!!」

　エンガディナが口を大きく開け、そして舌を出す。噛かみ切る気だ。

　しかし、そうはさせなかった。アセトは彼女の腹を激しく蹴りつけ、悶もん絶ぜつさせせた。

「てめぇ!?　俺の……俺の女に何をする!!」

　先さき程ほどまで這はい蹲つくばっていたモルトが長なが柄え刀とうを杖つえにして立ち上がり、怒ど声せいを轟とどろかせる。

　何だ、あの男は。一度か二度抱だいたから自分のものだとでも言いたいのか。子供のような独どく占せん欲よくか。アセトは呆あきれて思わず笑ってしまった。

「何をしたかわかってんのか、てめぇ……協約違反だぞ!!」

「何を言ってる？　この女は街の人間ではない。何より、ここは協約適用外領域エリアだぞ」

「いいや、ディナは街の住民だ。……俺の女だからな!!」

　そう言ってモルトは左手を掲げた。その瞬しゆん間かん、反射的にアセトも目を見開く。

　彼の薬指が、朝日を受けて輝かがやいていた。

　ヌストルテ家の後こう継けい者しやが生まれる度たびに造られ、その全すべてが国宝、そして旦だん那なとすべき相手のみ指に嵌はめることを許されし指輪が、今、何でも屋の薬指にあるのだ。



　それは王女の夫……つまり、ヌストルテの王。その証あかしであった。

　兵にどよめきが起こるが、それはモルト本人によって打ち消された。

「そこの同業のサシャはもちろん、街からもこちらを見ている者は今も大勢いる、疑いようはない!!　百歩譲ゆずって俺への生ぬるい斬撃はお遊びとしても、ディナへの攻撃は看過できねぇ!!　故ゆえに協約違反により街は……リキュールは実力をもって抗こう議ぎを行う!!」

「勢いで押し切りたいのか知らんが、落ち着け。婚こん姻いんには驚おどろいたが、お前や我々が、そしてこの半はん裸らの娘むすめがいるここは街の外、オードビー国だ。協約は適用──」

「されるんだよ、ここは……もう!!」

　彼は長柄刀を握にぎるなり、アセト達へ向かって走り出す。サシャの横を抜け、迫せまり来る。

　重装甲歩兵が盾を前にし、槍を構える隊列の中に、モルトは何ら躊躇ためらいなく踏ふみ込んだ。

　一いつ斉せいに突き出される五本の槍。が、横殴りの長柄刀がそれらを容易たやすく斬り飛ばした。

　まるで雑草を払はらう鎌かまのように、鮮あざやかに、軽かろやかに。その超ちよう重量級の得え物もので──。

　そして返す刀かたなによって、爆ばく音おんのような衝しよう撃げきが一帯に轟いた。

　肉厚の巨きよ大だい盾たて五枚全て、そして一人一五〇キロをはるかに超こえる重量級の兵の体ごと、まとめて、たった一撃で、モルトは全てを弾き飛ばしたのだ。

　慌あわてた副官の声が上がり、弓兵の攻撃が始まった。しかし、飛来するその全ては空中に飛び上がったサシャの目にも留まらぬ斬撃によって斬り飛ばされてしまう。

「行け、モルト！　矢は私が受け持つ！」

　数人の兵が一斉にモルトへ向かうが、その全てが長柄刀で紙切れが如ごとく弾はじき飛ばされた。

　得物を掲かかげたモルトが、アセトへと肉にく薄はく。遮さえぎる者は、もはや誰だれもいなかった。

　アセトもまた剣を抜く。頭上から迫る極ごく厚あつの刃を有した長柄刀。それを目にした瞬間、アセトは察した。━これをまともには受けきれない。

　力を逸そらすしかない。アセトは頭上で剣を寝ねかせて受けの体勢を作るものの、同時に刃に傾けい斜しやをつけて長柄刀の剣圧を少しでも逃がさんとした。

　だが、わかった。剣に長柄刀が触ふれた瞬間に━これは無理だ、と。

　剣が菓か子しのように、叩っ斬られた。

　アセトは身を捩ひねって迫り来る刃をかわそうと試みたが、それでも右のショルダーアーマーにわずかに触れた。装甲が、弾ける。そしてその衝撃だけで骨まで砕くだけたのがわかった。

　だが、かわせ━追撃が来る。蹴り。モルトのやたらとゴツく、肉厚な靴くつ底ぞこがアセトの腹部に打ち込まれた。鎧よろいが砕け、全身におぞましいほどの衝撃が走り、足の裏から地面の感かん触しよくが消える。━飛ひ翔しよう感。そして、荒野の地面に落ちる衝撃がアセトを蹂じゆう躙りんした。

　飛びかかった意識を気き迫はくで繋つなぎ止め、立ち上がろうと地に手をつくが、体は勝手に血反吐をぶちまけ、手を滑すべらせた。

　何とか顔を上げて見れば、十数メートル以上もぶっ飛ばされていたようだ。

　そして、自分を守るようにして十数名の兵達が剣を手に壁かべを作る。

　副官がアセトの代わりに敵てき襲しゆうだ、戦せん闘とう態勢を

取れ、と声を張り上げていた。

「襲しゅう撃げきじゃない。協約違い反はんによる抗議だ。……実力行使による、な」

　何が協約違反か。エンガディナを妻とした、故に住民だとするのは百歩譲ってわかるとしても、街の外でいたぶっても協約違反ではない。何を言っているのか。

　まるでモルトの言い分は、この場が街の内側であるかのような──。

「街の、内側……だと？　……ま、まさか……」

　アセトの脳裏に、先程見た光景の違和感が蘇よみがえった。

　何もおかしくない。けれど、何かがおかしかった。どれもこれもが当たり前のもの。当たり前なのだが……ただ、あるはずの場所になく、ないはずの場所にある。

　街のすぐ横に設置した幕舎から見み渡わたす荒野は、あんなにもなだらかだっただろうか？

　駐ちゆう屯とんのため、幕舎を張るため、馬や荷馬車を入れるため……国境沿いエリア一帯の瓦が礫れきを集めておいた山はどこにいったのだろうか。そして何より──。

　アセトは顔を今一度東へと向けた。

　夜明けの太陽が顔を出す荒野の中に、ありえないものが存在している。

「な、何故なぜ……幕舎の東側に、見張り台が建っている……？」

　街の北東・南東に建っている見張り台は、東の国境線の外にある幕舎から見れば当然、北西・南西に建っていたはず。

　何よりエンガディナやモルトが現れた時に、念のためにと位置を確認し、そこから十分にはみ出たと確認したからこそ、何の不安もなくいたぶったのだ。

　では、今アセトが見ている東側にある二本の塔とうは何だ？　自

分達の幕舎が知らぬ間に街側に移動していたのか？

　疑問を解くため、アセトが西側──街へと顔を向ける。

「バ……バカな、そんな、バカな……そんなバカなことが!!」

　街の北側と南側には、そこにも見み間ま違ちがいようなく、見張り台があった。

　そう、あったのだ。アセトが見るその瞬間まで。

　見張り台の下で数十人もの男達が、幾いく本もの荒あら縄なわを引いているのがかすかに見える。

　そして一〇〇〇年もの間立ち続けた二つの見張り台は今まさにアセトの視界の中で轟ごう音おんと共に崩くずれ落ち、猛もう烈れつな粉ふん塵じんを巻き上げ、その姿を永久にこの世から消し去ったのだった。

　まるで……初めからそこには何もなかったと言うかのように。

「まさか……まさか、ここの連中は……!?」

　ありえない。不可能だ。そう思いながらもアセトには一つしか可能性が思い浮うかばない。

　……建てたのだ。

　酒と女と夜よ這ばいで兵が騒さわいでいた昨夜──たった一夜で、辺り一帯に散っていたかつての城じよう壁へきの瓦礫を集め、同じ外見の、四階建てにも及およぶ高さの見張り台を……。

　一〇〇〇年前からそこにありました、と言わんばかりに、堂々と……おっ建てたのだ。

　全ては包囲した軍を攻こう撃げきする正当な理由を得るため、物流を命いのち綱づなとする街の信用を守るため──アセト達に協約違反をさせるため……ハメるために。

　だが、それが何を意味するのか、わかっているのか。

　見張り台の位置を変えるということは、即すなわち──。

「や、奴やつら……国境線を書き換かえたというのか!?」

　アセトの頭にロンシュータンの言葉が蘇よみがえる。ロテ国とオードビー国の国境線は、その歴史からリキュールの東とう端たんを基準としている、と。

　つまり、街が東に広がれば国境線ごと書き換えられることになる。

　いくら友好国とはいえ、戦争に発展したとしても何らおかしくはないとんでもない行こう為い……それを三〇〇〇人程度の辺境の街が、独断で、独力で、やったというのか。

　街の鐘が、鳴っている。けたたましい音で鳴り続けている。

　夜明けを報しらせるように。人々に目を覚ませ、仕事の時間だと……そう告げるかのように。

「アセト大隊長、敵に増ぞう援えんです！　街から来る数は五、六〇人程度……ですが……ですが、なっ、何だ、あれは!?」

　兵の声にアセトは今一度街を見ようとするが、その増援を見つける前に、倒とう壊かいした見張り台が生み出した、津つ波なみの如き猛烈な粉塵が全てを覆おおい尽つくしてしまう。

　──何デェ!!　もう本格的に始まってるじゃねぇか!!　──モルトの奴、先走り過ぎだろ!?　──これだから我らが英雄様は!!

　わけがわからなかった。何が起こっているのか、わからない。状じよう況きようを掌しよう握あくできない。

　周囲を取り囲まれてなお平然とするサシャが、慌てふためき出した兵達を鼻で笑った。

「このサシャ、議長マドラーからアセト大隊長に伝言を預かっている。……我らを辺境の田舎者と甘く見たその代だい償しよう、高くつくと知れ。我らは恐おそれぬ、たとえ隣りん国ごくにヌストルテ帝てい国こく、そして世界の全てを敵に回そうとも絶対に屈くつしはしない。……だ、そうだ」

　裸はだか同然のエンガディナに革コートを掛かけると、自分はネクタイも上着をも脱ぬぎ捨てて肌はだを晒さらし、何でも屋モルト

は長柄刀を担かつぐ。彼はアセトを見つめていた。

「誰に喧けん嘩かを売ったかを教えてやるぜ。……この街は一〇〇〇年の昔から不ふ可か侵しんたる不落の英雄都市。わかるか？　これが、俺達だ。これが……リキュールだ!!」

　モルトの大音声に押しのけられるように、風が吹ふき、街を覆っていた粉塵が飛ばされていく。そうして見えてきた敵の増援部隊に、アセトはまたも度ど肝ぎもを抜ぬかれた。

　現れたのは、強大な威い圧あつ感を放ちて歩む……群れを成した全裸フリチンの男達。

「こ、これが、リキュール……だと……？」

　アセトは、わけのわからない圧迫感に、震ふるえた。

6

　鐘かねが、鳴っていた。

　解放作戦最終段階開始を報せる音が、街中に響ひびき渡わたっている。

「作戦における懸け念ねんは一つだけだった。かつて僕の父が念願の我が家マイホームを建てた時、その夢の成じよう就じゆをたった一夜で打ち壊こわした、かの詐さ欺ぎ師し……いや、神速の石積み師ヤナギタデとその弟で子し達を如何いかにして街の外に送り出すか。……見張り台には下水が通っているからそこまでは行ける。だが、そこから如何にして敵てき陣じんの東側に抜けるか、これが勝負だった」

「だから、あの踊おどり子隊が必要だった……というわけですね。わかります。……で、わたしが行く必要はどこにあったんですか？　裏方仕事以外はやらないとあなたに雇やとわれる時に言いましたよね？」

　大浴場で汗あせとストレス、そして大量摂せつ取しゆしたアル

コールを流しきってきたつもりだったが、マドラーの顔を見るなり、やっぱり沸ふつ々ふつと怒いかりがクリミオの中で湧わいてきていた。

　それをマドラーも察したのか、それともクリミオ自身も気付かぬ内にいつの間にかに手にしていた荒縄に身の危険を感じたのか、彼は早口で言葉を重ねていく。

「光あるところには影かげがある。光が強ければ強い程その影は色いろ濃こく、闇やみは深くなる。……つまり、踊り子こ共が華はなやかであればあるほど、兵達は意識を引きつけられ、ジジイヤナギタデ共が包囲を抜けられる可能性が上がるのだ」

　大浴場前で合流してから、マドラーは振ふり返りもせずにズンズンと歩き続ける。

　その姿に、クリミオは正直腹が立っていた。

「だからって別にわたしは必要なかったですよね？　何故あんなハメてまで送り込んだんですか？　マドラー、聞いてますか？」

　マドラーは足を速める。

　状況と作戦は伝えているものの、詳しよう細さいまで理解していない議員達に説明をする必要があった。しかし彼はその急いでいた足を、議場の扉とびらに手をかけた段階でピタリと止める。

「繰くり返すが、華やかであればあるほど効果的だった。……僕の知る限り、このリキュールで最も華がある女は……クリミオ、君だ。……それでいいか」

　振り返りもせず、扉に手を掛け、額を押しつけるように俯うつむいたまま、マドラーは言った。

　それがプライドの高い彼の精せい一いつ杯ぱいだというのは、クリミオも、わかっている。

　赦ゆるしはしないが、納なつ得とくはできた。ちょっとした満足と共に。

「ふむ。……なら、仕方ないです。次は、初めからちゃんと言うようにしてください」

「先に言うと、君は断る」

　当然です。クリミオは言葉と共に荒縄を放ほうり投げ、マドラーの代わりに議場の扉を開けて彼を中へ送り込んだ。

　議員達の視線が刺さるも、マドラーは堂々とした所作で卓たくに着いた。

「……フンッ。事態は大凡おおよそ予定通りに進んでいる。帝国軍の協約違反、実力による抗こう議ぎという名の抗こう戦せん、そしてそれに伴ともなう包ほう囲い網もうの打破……ストリップ一座退たい陣じんの時間までには十分に間に合うだろう。全すべては僕のおかげだな。感謝するといい」

　──マドラー、訊ききたいことは多いが……とりあえず、一つ。先さき程ほど窓の外をグレーンとピンガを中心とした全裸集団が駆かけ抜けていったが、アレは何だ？

「当初の予定では見張り台の移動、即ち、自分達のいる場所が協約適用領域エリア内であると敵が気付く前に、裸はだか英えい雄ゆうモルトとそのシンパをけしかける手て筈はずだった。無む駄だに威圧感のある全裸のオッサン共が走ってきたら誰だれもがビビるだろう。混乱は必至。剣けんは抜かれ、流血は確実だった。その犠ぎ牲せいでもって彼らには戦闘の口火を切ってもらう予定だったのだ」

　──代わりにモルトとヌストルテ帝国の姫ひめが出向くことで協約違反を起こさせる、と先程予定変へん更こうの連れん絡らくがあったはずだが……何故、彼らはそれでもなお、全裸で行ったのだ？

「知るか。趣しゅ味みだろう。他には？」

　本当に趣味かもしれない、とクリミオはちょっと思った。

　──口火は切られた、戦せん闘とう開始、というわけだが……。
──戦力差はどうなっている？　──酒屋とケーキ屋の独断でムリエルプルクラなるおぞましき酒を混入したことで、数十人が拘こう束そく及および衛生兵の元に運ばれたと眼鏡めがね屋の親父おやじから報告は入っているが……。

「僕の予想ではもうしばらくすると、劣れつ勢せいになりつつある状況を取り返そうと帝国軍は街に火を放ち始めるだろう。……だが、燃えはしない。こちらから何を言うでもなく、鐘に起こされた

住民はもちろん、居場所を失ってリキュールの道みち端ばたをうろついている旅人連中がすぐに見つけ出し、街中に張り巡めぐらされた上下水道のありがたみを証明するだろう」

　──対症療りよう法ほうだな。──抜ばつ本ぽん的な解決……敵の殲せん滅めつにはならないのでは？

　クリミオが書類を手に今のマドラーの言葉を補足する。

「任にん俠きよう者が昨日から音おん頭どを取っている自じ称しようリキュール解放軍なる組織、約一八〇名が街を徘はい徊かいしています。またそれとは別に小規模集団もおりますので、諸もろ々もろ合わせて戦力は四〇〇を超こえるかと。素人しろうと集団ですが、組織戦が難しい街中ならば十分な戦力です」

「この街にはどれだけ人がいる？　一〇〇〇か、二〇〇〇か、三〇〇〇か。それとも旅人を含めた四〇〇〇か。包囲するということはその内に押さえた全てを敵に回すということだ。連隊規模を上回る人間がいて、言ってみればその全すべてが戦力だ。ならば、敵はたかだか大隊、しかも包囲のために一部が分ぶん離りしているそれなど、何ほどのものでもない」

　マドラーはさも当たり前のように言ったが、実際はそうではない。

　どう考えても戦えない女子供はもちろんいる。そして街の男でさえ装備と決意など素人は持ち合わせてなどいないのだ。しかしながらヤナギタデ一派の情報が漏ろう洩えいすれば失敗となってしまう特性上、彼らに「準備せよ、覚かく悟ごせよ」と作戦を伝えるわけにもいかない。

　それ故ゆえに、当人達にすら気付かれることなく、極ごく自然に準備と覚悟を促うながす必要があった。

　……あの踊り子隊こそが、まさにそれである。

　あれには二重の意味があったのだ。

　ヌストルテの姫が勘かん違ちがいして暴走したように、街の住民達にも勘違いさせるためにアルコ・ホールで、彼らには何の説明もしないまま娘むすめ達を馬車に乗せて見せたのだ。

実際には手を出さないよう帝国軍に了りよう承しようさせていたが、あえてそれを伏ふせた。

女達は自らの体を犠牲にしてまで街のために働くのに、男達は何もしないのか？

その問い掛けはあまりにえげつなく、しかしこの上なく効果的なやり口であり、ある意味において最もマドラーらしいところでもあった。

あの瞬しゆん間かん、街の男達は義ぎ憤ふんに震える戦士へと作り替かえられたのだ。

そして、義憤に突つき動かされた時ほど、建前が立派な任侠者の言葉は心に響くものである。自然と集団は大きくなり、組織としての力を持つことだろう。

マドラーの予想によれば、この時点で恐らく自警団員を含めて七〇〇＋ $\alpha$ 程度の兵力には到とう達たつするはずであり、数字の上では拮きつ抗こうする。いや、酒屋とケーキ屋のおぞましきアドリブを含めると上回ったと言ってもいい。指揮系統が曖あい昧まいで、素人混じりとはいえ、個人戦ならば敵無しである自警団員二〇〇を含む以上、十分に対たい抗こう可能だと言えた。

ここまで来ると、あとの問題は一つしかない。

──騎き馬ば隊二五〇は、どう対処する？　街にいる馬はそれほど多くなく、加えて馬上で戦える技術を持つ者はさらに少ない。

「僕の秘書が残したメモによれば、勘かんのいい奴がいたな。……そう、確かに騎馬隊相手に歩兵は耐たえることはできても決定打を与あたえられない。だが、守るものがあり、それ故に危険だとわかった上で自ら敵兵に向かわねばならない何らかの理由があれば話は違ちがう。そうだな？　では……実は彼らはそれを潜在的に有しているとしたら？」

──何だ、それは？　──そんなものがあるのか？

「彼らが兵である以上、何があっても守らねばならないもの……命令だよ」

7

　鐘が鳴り続けていた。それに加え、先程見張り台の倒とう壊かいと思おぼしき地じ響ひびきがあったので、作戦はマドラーの予定通りに進行しているのだろう。

　──限界まで街の不満を溜ため込ませ、誰もが自らの意志で立ち上がらんとする時まで堪たえ凌しのげ。あとはうまくやる。そのための協約だ。

　荒あら縄なわで引きずり回しながら聞き出したように、彼は本当にうまくやってのけたのだ。

　あの協約は、よくよく考えるとかなりおかしかった。

　問題が発生した場合、通常は金品等で贖あがなうとするべきなのだが、あえて実力で抗議するとした。

　本来、軍を持たぬ街側に実力で抗議のしようなどないというのに。

　故に協約は降こう伏ふくの意味に等しいものとしてヌストルテは受け取ったことだろう。しかし、だからこそ彼らはリキュールを支配下に置いたと勘違いし、積極的な破は壊かい活動をしなかったのだ。

　街の戦闘準備が整う、今、この瞬間まで。

　あの男マドラーは、最初から包囲の軍をぶち抜く算段をしていたのだ。不平等な協約で興奮する街を押さえ、ヌストルテを調子に乗せて……その後に全てをひっくり返す気だったのだ。

「あいつもオレも……同じリキュールの男、違うのはやり方か」

自警団団長のライは、生なま臭ぐさい布に老人と二人で包まれながら、これから街全域で行われる戦闘……特に、東側で展開されているであろう敵本ほん陣じんとの戦いに思いを馳はせた。

そこでの激戦は必至だろう。だから自分もそちらで打って出たかった。だが、可能な限り体重が軽く、身軽な者をこっちの作戦に宛あてがいたいと言われれば致いたし方ない。

「そろそろアルコ・ホールを抜ぬける！　本番だ、行きますよ!!」

御ぎよ者しや台だいに座る若い魚売りは馬車を引く二頭の馬に激しく鞭むちを打つ。生マグロの鮮せん度どを落とさぬよう南の漁港からリキュール経由でロテ国やオードビー国の首都まで超ちよう高速で突つっ走ぱしるために用意された馬は、なるほど、街にいる馬とは確かに質が違う。

ライと老人が隠かくれている屋根付きの荷台を支える大型荷車の車輪も軽快である。

馬車が火の玉が如ごとくに大通りを抜け、そしてリキュールの街を飛び出し、西の荒こう野やへ。

未いまだ夜の気配が強いせいもあって、街から数百メートル離はなれた場所には盛せい大だいにかがり火が焚たかれており、その明かりにわざと照らされるようにして馬車は走り行く。

その猛もう烈れつな走りに、街の外がい縁えんに待機していた騎馬隊が一いつ斉せいに反応した。

足の速い一騎きが止まるよう声を上げながら馬を寄せてくるが、若い魚売りは鞭打つ手を止めなかった。その騎兵は隊長格なのか、手にしていた槍やりと声で指示を出し、四騎を前に、残り四騎をやや離して馬車の後ろに付ける。そして、その様子に、離れた場所で待機していた兵達も一斉に馬に乗り、援えん護ごに回るためか追い掛かけてくる。合計で一五騎である。

彼らはなおも威い圧あつしてくるが、それでも若い魚売りは構わず走りに走る。

馬車を借りる際、理由も訊かずに自ら御ぎよ者しやに志願しただけはある。胆たん力りよくがあった。

「一五匹か、まぁ余よ裕ゆうじゃのぅ。どれ、そろそろ働くか。……しかし腰こしが痛むのぅ」

　老人が魚臭くさい布を剝はぎ取って、その枯かれ木の如き体で立ち上がる。強い風と激しく揺ゆれる荷台なのに、迷めい彩さい柄がらのマントを靡なびかせる以外、弓を手にした老人はぴくりとも動かない。

　動いた。そう見えた時にはすでに馬車の前を走っていた四騎の馬体、その後ろ脚あしに矢が突き刺さっていた。馬が甲かん高だかいいななきを上げて、腰が抜けたようにして尻しりを落とし、その身を地面とこすり、そして、四騎全てが騎手諸もろ共ともの大転てん倒とうを見せた。

　若い魚売りは呻うめきつつもかろうじてそれを避さけ、左へ大きくターン。街へと進路を取る。

「馬は走ることに特化しすぎて無駄がなさ過ぎるのぅ。ちょいと矢を射られただけですぐこれじゃ。魔ま獣じゅうと違って何とも脆もろいのぅ」

　リキュールの北、魔獣が跋ばつ扈こする山を仕事場として数十年の魔獣猟師ハンターの老人は平然と言ってのけ、すれ違う馬群に横手から猛烈な速度で矢を放っていく。

　全て馬の前脚後ろ、急所バイタルポイントだった。

　馬が声を上げることなく力を抜かし、騎手を地面に叩たたき付けるようにして崩くずれていった。

「すげぇ、やるじゃん！」

「獲え物ものの方から集まってくるんじゃから、難しいことはないぞ。それより腰が……」

　ライはマドラーから聞かされた通りに事が運んでいくことに、苦笑いが浮うかんだ。

　──何なん人びとも街から出すなという命令を彼らが守る以上、これを叩くのは容易たやすい。……街の外へ走ればいいんだ。彼らは必ず群れてくる。

　まさに、その通りだった。それも馬車であれば帝てい国こく軍が捜さがしている人物が潜ひそんでいる可能性がある以上、反応せざるを得ないのだ。そこに魔獣猟師ハンターの弓があろうとも、馬車を止めるために彼らは危険リスクを承知で接近する。

　予定では他に数グループが同様の手法で街を包囲する騎馬隊を叩いているはずだった。

「このまま適当に撃うち落としていってくれ。後の処理は、オレだ」

　馬車の左に四騎、右に三騎が来る。左を猟りよう師しが、右は長なが柄え刀とうを持ったライが自ら彼らの中に飛び込むことで受け持った。

　突き出された槍を斬きり飛ばし、騎手の一人を蹴けり飛ばして地面へ。そして残りの二騎が走り去る前に、長柄刀を低く、そして長く振ふって二頭の蹄ひづめを斬り飛ばした。

　転倒。転げ落ちて慌あわてる兵を、ライは長柄刀で薙なぎ払はらっていく。

　それが終われば、先程矢を射られて転倒した騎兵達のもとへとライは走る。愛馬を失ってすぐに立ち直れるとも思えなかったが、それでもなお密集隊形を組まれると一人で相手をするにはさすがに面めん倒どうだった。転倒の衝しよう撃げきから復帰する前に各個撃げき破は……それをする。

　そのために自警団の中でも精せい鋭えいで、かつ、身軽な者が選ばれたのだ。

「クソッ!!　あぁっ、クソがあぁあぁぁああああぁあぁああぁ!!」

　倒たおれた馬の横で兜かぶとを脱ぬぎ捨てた兵士が雄お叫たけびを上げていた。その顔には、十字傷。

　思いがけず、ライの長柄刀は冴さえ渡わたった。

「誰だれもが街を愛し、信じ、そして誇ほこりに思っている。だからこそ彼らは来た。ここが如何いかなる場所であるかを示すために、自らが如何なる存在であるかを証明するために、ここへ来た。誰もが戦士というわけじゃない。けれど、何もせずにはいられない……そんなバカな男達さ。……そう、これがリキュールだ。そして、そこに住まう者達なんだ!!」

　モルトは街から──背後から近づいて来る仲間達の圧あつ倒とう的な力強さを背中で感じながら、驚きよう愕がくして震ふるえているアセト達に言ってやった。彼らの目はモルトの背後に釘くぎ付づけだ。

「モ、モモモルト殿どの!!　ほ、本当に、こ、これがリキュールの、その……あの!!」

「あぁ、そうだ、ディナ。これが……俺達さ。……かわいそうに、こんなに震えて。もう大だい丈じよう夫ぶだ。安心してくれ。怖こわいものは何もない」

「い、いえ、な、何だか大量に、その、大変なモノが近づいてきているのですけども!?」

「錯さく乱らんしているな、ディナ。……大丈夫。落ち着いて。今街から来たのは援えん軍ぐんだ。みんな街と、そして君のために──」

「モ、モルト!!　何か違う、私が議長から聞いた作戦と何かが違うぞ!!」

「……おい、何だよ、サシャ。邪じや魔まするなよ、今いいところなんだぞ」

「バカなのか!?　モルト、お前、本当にアレでいいのか!?　アレがリキュールだと、自分達だと宣言してしまっていいのか!?　本当に!?」

「あぁ、構わんさ。剣けんだけが武器なんじゃない。街を、そして誇りを守りたいとする、その心こそ俺達リキュール住民が持つ真の武器だ!!　それを握にぎりし時、誰もがかつてこの地で戦った英えい雄ゆうと同じ姿になると言っても過言ではない!!」

「モルト、お前が今一番リキュールを侮ぶ辱じよくしていると思うぞ!!」

「おいサシャ、失礼だな。そりゃ軍属でもないし、普ふ段だんから鍛きたえていない人も多いが、みんな本気だぞ。よく見ろ、あんなに誇らしげな男達が他にいるか。あんなに堂々と……」

　モルトはサシャに苛いら立だちを感じながら振り返り……そして、アセト達と同じ顔になった。

「堂々と……フリ、チン……だと……!?」

　モルトの視界に飛び込んできたのは六〇人あまりの、全ぜん裸らの男達。

　裸はだか英雄モルトと共に、かつてアルコ・ホールで服を脱ぎ捨て非暴力・不服従に身を捧ささげた英えい傑けつ、そして『漢おとこ祭り』の覇は者しやであるピンガとグレーンという、力強くも倫りん理り面に重大な欠けつ陥かんを抱いだきし男達が、素す足あしを大地に突つき刺さすが如き勇ゆう猛もうな歩みによって、吹ふきすさぶ粉ふん塵じんの中を進み来ていた。……ほろ酔よい気分で。

　━おいグレーン、見ろよ。帝国の連中、ビビってやがるぜ。━あぁ、どいつもこいつも、弱そうだ。━自警団の連中が来る前に全員蹴け散ちらしちまうか！　━いいな。一人、一〇人、ヤればいいだけだ。

　モルトは思った。……そりゃビビるよ、と。

「いや、ちょっと待てって!!　何で裸で来ちゃってんだよ!?　作戦変へん更こうだって、俺がうまくやるから、もう挑ちよう発はつの必要ねぇから服着てフル装備で、ってマドラーから聞かされただろ!?　何でわざわざ脱いじゃったんだよ!!　っていうか少しは隠せよ!!」

　━何言ってんだ、隊長!!　━ヘヘッ、オイラ達全員、最高の武器を持ってますよ!!　━そう、隊長が仰おつしやった……郷土愛という名の武器をね!!　━加えておれはバゲット、グレーンはフライパン……最強の装備だ、忘れ物は何もないぜ!!

「忘れちゃいけないものから順に忘れてきてるっての!!　どうすんだよこれがリキュールだって俺すげぇドヤ顔で言っちまったんだ

ぞ!!　こ、これが……こんなんがリキュールなわけねぇだろ!!」

　モルトは恐おそる恐るディナを見やった。彼女はわけがわからないというような顔で、男達とモルトとを壊こわれたオモチャのように交こう互ごに見やりながら、震えていた。

　サシャはサシャで刀を収めて、顔に両手を当てて……呆あきれているんだと思われたが、リアクションは初心うぶな少女が恥はずかしがっているように見えるのは何故なぜだろう。

　そして、帝国兵は散り散りのまま誰もが固まっていた。

　何せ、常軌を逸した状況に、命令を出すはずのアセトが震えたまま動かないのだ。

　……これはもう、このままやるしかないのか。いくしかないのか。

　人々の記き憶おくを書き換かえることが出来ない以上……これはもう、開き直るしかない。

　モルトは口元に苦く笑しようが湧わくのを感じつつ、肺一いつ杯ぱいに空気を吸い、魂たましいの叫さけびを解き放った。

「どうだ!?　おぞましいだろ!?　こ、これが……これこそがリキュールだあぁあぁあ!!」

　モルトの悲痛な叫びが、木霊こだました。空に、大地に、そしてその場にいる数百人の心に。

　恐らくは一いつ瞬しゅんなのだろう。

　だが、不思議とモルトには永遠にも近いだけの、長い長い沈ちん黙もくを感じたのだった。

　それを最初に破ったのは、アセト・バクターである。

「……こっ……こいつら……………………………………………全員ぶっ壊れてんのか!?」

　悲鳴のような甲高い声でアセトは叫び、総攻こう撃げきの命めいを放つ。場は、一気に動いた。

　怒ど声せいを上げる全裸隊が密集隊形を取らんとする帝国兵に何ら躊躇ためらいなく、散り散りにぶつかっていくのである。一部の者達を除けば何の武器も、何の策も、パンツすらないままで、股こ間かんをダバダバさせながら突っ込んでいく。

　そのおぞましさに、帝国兵達にあからさまに動どう揺ようが走る。

　──怯ひるむな、訓練通りにまずは密集隊形で陣じん形けいを整え……そこ、もう間あいだに入られているぞ!!　──奴やつら、何て速さだ!?　──あらゆる装備を捨てたからこその機動力か!!　──クソ、どんな攻撃が来るか見当もつかねぇ!!　──落ち着け、よく考えろ！　奴らには恥はじと防ぼう御ぎょ力がないんだ、一いち撃げきで勝てる!!　──ぐおぉぉ!!　我が家に伝わりし名めい剣けんがバゲットに打ち負けただと!?　──このフライパンは一四番隊を襲おそったという、あの……ぐはあぁはあぁあぁ!!　──弓隊はどうし……後ろから攻撃だと!?

　街に対して密集隊形で陣形を整え出していた帝国兵の部隊、その背後に喰くらいついたのはヤナギタデとその仲間達、二〇名余りだ。二つの見張り台を一夜でおっ建てた逞たくましき者達が、師し匠しょうたるヤナギタデを先頭に鬨ときの声を上げ、手にした瓦が礫れきで猛もう攻こうを仕し掛かけていく。

　そしてさらに、未いまだ粉塵が消えぬ本来見張り台があった南と北から、それを破は壊かいして証しょう拠こを消し去った男達の部隊……即すなわちリキュール解放作戦における主要戦力、自警団員各八五人、南北合わせて一七〇人が混乱する戦場へと流れ込んだ。

　つまり西から裸の男六〇、南北からの自警団一七〇、東からの石工集団二〇……敵五〇〇に対して合計二五〇による前後左右からの同時攻撃にして、軍という組織の利を打ち砕くだく、常識外れの大乱戦である。

　もはや、グチャグチャだった。敵がいる。仲間がいる。変態がいる。バカがいる。だが、誰も彼もが本気だった。本気で叫び、本気で戦い、そして本気で喚わめいている。

　──ぐはぁ!!　すげぇ、コケただけで血だらけだぜ、俺!!　全裸すげぇ全裸すげぇよ!!　──弓は使うな、味方にあたる!!　──人が集まりだしたところから切り崩せ!!　バラけていれば自警団われらの方

が上だ!!　━━街に兵を送れ！　火を放って、混乱させろ!!　━━本当にうまいパンってのは作り手の全すべてが入っているんだ……感じるだろ？　このおれを感じるだろぉっ!!　━━大隊長、指示を！　指示をくださいぃ!!　━━ぬわぁあぁ生温かい何かが顔にぃいぃいぃ!?　━━モルト、私はもう嫌いやだ！　限界だ!!　私の美的感覚ではこんなの認められない!!　何で誰も隠かくさないどころか誇らしげに見せてくるんだ!?

　混戦というにはあまりに稚ち拙せつで、喧けん嘩かというにはあまりに大規模で……悪夢というには滑こつ稽けいで、喜劇というには命いのち懸がけ。……そんなわけのわからない状じよう況きようだった。

　もはや敵も味方も誰しもが、状況など掌しよう握あくできるわけもなかった。

　……いい。ある意味で、これはこれで、十分じゃないか。

　ある意味で、〝リキュールらしい〟じゃないか。

　モルトは苦笑と共に夜明けの空を見上げた。

「……なぁ、ディナ。実は、君に伝えたいことがあってここまで来たんだ」

「な、なんですか、モルト殿……」

　ディナは迷子の子供のように、どこか怯おびえた顔をしてモルトを見た。

「君の置かれた状況は酷ひどく重く、苦しい。それは確かだろう。そして世界の至るところでも辛つらいことは起こり、酷いことが繰くり返されているんだろう。……けれど、だからって、君の人生の全てが、そして、この世界の全部が、それだけってことはないはずだ」

　ディナはどういう意味かわからないというように、小首を傾かしげた。

　モルトは彼女に笑え顔がおを向ける。

「たとえ世界がどんなに地じ獄ごくでも、このリキュールだけはそ

こまでシリアスには染まらない。そして、君の人生がどれほど辛くとも、街にいれば必ず笑顔でいられる。俺が保証する。……だから、これだけは覚えておいてくれ」

　激しい乱戦の中、まとな陣形を組めた歩兵はついに現れなかったが、バラけながら戦場を離り脱だつした騎き兵へいが、離はなれた場所で徐じよ々じよにまとまりつつあった。

　彼らは間ま違ちがいなく来るだろう。当然、その狙ねらいは……ディナだ。

「街を好きだと言ってくれる人間をリキュールは拒こばみはしない。そして街の一員になったのなら、住民達なかまは何があっても君を助ける。……だから、遠えん慮りよなく街ここにいればいい」

　モルトはサシャの肩かたを叩たたくと、顎あごで騎馬隊を示す。

　彼は顔を覆おおっていた指の隙すき間まから恐る恐る騎馬隊それを見ると、「あ、あぁ……あぁいうまともなのなら大丈夫だ」と安心した様子で手を腰こしの刀へと持っていった。

「もし、それでもなお、どうしようもなく困ったことがあるのなら……その時は、俺達のような『何でも屋』がいるさ」

　騎馬隊が動いた。一いつ匹ぴきの巨きよ大だいな蛇へびのように、細長い隊列を組み、乱戦の場をうねりながら駆かけ抜ぬけてくる。その数、八〇。先頭にはアセト・バクター。砕けた右みぎ腕うでを揺ゆらしながらも、左手一本で手た綱づなを操あやつる。

　それで十分なのだ。馬は、武器を持たずともその走り自体が凶きよう器きなのだ。

　そして、隊列を為なすことで生まれる圧倒的な突とつ貫かん力は凄すさまじかった。

　大地を揺らし、立ち塞ふさがる者達全てを次々に薙なぎ払はらっていく。

「だから、ディナ、大丈夫だ。安心してくれ。……君のしたいようにすればいい」

　地じ響ひびき轟とどろかせ、迫せまり来る大だい蛇じやが如ごと

き騎馬隊。

　大口開いて牙きばを見せるそれに、二人の何でも屋が当たり前のように立ち向かっていく。

「それを許されるのが……リキュールなんだ」

●エピローグ『リキュールの夜』

　アルコ・ホールの古道具屋で見かけ、装そう飾しょくが気に入ったので部下に買わせておいた天体望遠鏡が、思いがけないところで役に立った。

　リキュールから南へ数キロの荒こう野や。やや丘おかのように迫せり上がっていたので、そこで三さん脚きゃくを立て、ロンシュータンは街の東側━━帝てい国こく軍の幕舎があった一帯を見やっていた。

　二人の男がアセト率いる騎馬隊の前に立ち塞がり、これを物の見事に打ち崩くずしていく。一人は長なが柄え刀とうで次々に馬の脚あしを斬きり払い、もう一人は馬を奪うばうと、これに跨またがり対たい抗こうした。

　二人はまったく違う動きをしていながら、それでいてぴったりと息の合った動きで、着実に騎馬隊の力を削そいでいく。

　エンガディィナという目標がある以上騎馬隊の動きは読みやすいのだろうが、それにしても二人は見事だった。

　一人は泥どろ臭くさく力溢あふれる大おお技わざで。もう一人は英えい雄ゆう譚たんで謳うたわれる勇者のように鮮あざやかな技。そんな違う二人だからこそ、干かん渉しょうし合わずに騎馬を倒たおしていけるのか。

　もし今エンガディィナを逃にがそうものなら、アセトに……いや、バクター家に待ち受けているのは長く続く内ない紛ふんだ。

　無数の国をその腹に収めてきた帝国故ゆえに、政治だけで決着はつかず、国は激しく乱れるだろう。……それだけは絶対に避さけたいはずである。

　だからこそ巧たくみな二人によって兵を削けずられ、裸の男達や長柄刀を持った自警団員の妨ぼう害がいを受け、体勢を立て直す余よ裕ゆうすら失っても……なお、アセトは突とつ撃げきをやめない

でいた。

「ロンシュータン様、西側から迫るものがあります」

　部下に言われてロンシュータンがそちらに望遠鏡を向ければ、白馬を先頭に一五〇騎きほどの一団がとんでもない速度で東に進んでいた。

　掲かかげられた旗には、幻げん獣じゆうコアラのマーク。

「あらすごい、ロテ国シャルロッテ王おう妃ひ直属ドレス隊……早い、まさか、もう……？」

　女だてらに馬に跨がりランスを突つき出し、最前線を駆け抜ける……その時、王妃が纏まとうドレス。それこそ意のままに操ることを可能としたロテ国精せい鋭えい中の精鋭、一五〇騎だ。

　一報を受けたと同時に動いたか……しかし、それにしてもあまりに早いのは何故なぜだ。

　荒野で調練していたところに街からの使者が現れ、最低限の装備で駆け抜けてきたか。

　ドレス隊のほとんどは武器以外、何も持っていないので恐おそらくそんなところだろう。

　兵へい站たんも防具も何もかも、あらゆるものを捨てて荒野をぶっ通しで走り抜けてきたのだ。

「けれど、少し遅おそいかな、もう、お兄タンともう一人に……あ、アセトの奴、退く気だ、うん、逃にげるタイミング、見計らってる、全部捨てる気、捨てる捨てる、ほら、ほら、騎馬だけで逃げる、あ、逃げる、ほら、今、逃げ出した逃げ出した……あははははははははははははははははははははははははははははははははははははははははははははははははははははははははははははエッホ、ゲホ！　……笑い過ぎた……」

　アセトを先頭にした騎馬隊は、その数を半数以下に減らしながら南に向かって走り出すも、すぐにドレス隊に捕ほ捉そくされた。とにかく早く逃げるためにと長く伸のびてしまったアセトの騎馬隊、その横っ腹に突っ込まれ、一瞬にして隊列を崩されてしまう。

アセト達は散り散りになるも、ドレス隊は身をくねらせる蛇のようにしながら次々に馬から兵を突き落としていく。

その様子が愉ゆ快かいで愉快でロンシュータンにはたまらなかった。

「ロンシュータン様、よろしいのですか。一〇年もの間、捜さがしてきたお相手だと……」

騎き馬ば戦で巻き上がった濛もう々もうとした土つち煙けむりの向こう、未だ散発的にとはいえ全ぜん裸らの男と帝国軍の歩兵と自警団が入り交じって戦い続けているエリアに望遠鏡を向け直す。

狙うはその中の一人、長柄刀を握る何でも屋、モルト。

かなり遠い。でもわかる。あれだ。名も姿も違えど間違いなく、探し続けたお兄タンだ。

「いいの、うん、いい、だって今着古したドレスしか手持ちないし、お化け粧しようももっといいのでしないとだし、それにそれにお兄タンと久々に話すなら面おも白しろいお話の練習しなきゃだし、それにそれに……今、会ったらきっと心臓が、うん、絶対心臓がおかしくなっちゃうから、だから、少し、ちょっと、しばらくは妄もう想そうで練習して、それで、うん、そう、あっそうだ！　お兄タンのお友達、連れて来る？　いいね、いいよ、きっと喜ぶ、だってあの人達もお兄タンに会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい殺したい会いたい会いたい会いたいぶっ殺したいって言ってたし、うん、みんなで同窓会をしよう！」

ロンシュータンは青白い肌はだを赤らめながら、スキップするように馬車へと乗り込んだ。

「また来るよ、お兄タン……次は、ちゃんとお話……しよう、ね、うん、そうしよう」

●

ロテ国からシャルロッテ王妃が騎兵を引き連れて参上したことに

衝しよう撃げきが走ったものの、それは議長マドラーだけだったらしい。このあまりに早い救きゅう援えんの登場は彼の予想外だったようだ。

　議長はあくまで、自力で解決した、という形が欲ほしかったのだろう。

　しかしながらシャルロッテは街の自力解決を認め、自分は逃とう走そうしていたアセト・バクターとその一味を街の外である荒野で突いたに過ぎず、このリキュールは一〇〇〇年の時を経てなお、かつてと変わらぬ英えい傑けつが集つどいし絶対不落の地であると正式に賛美したらしい。

　シャルロッテがあの全裸集団を見てはいなかったのが街にとっての幸運である。

　彼女は、俘ふ虜りょを街の西側にてまとめると、足手まといだとして置いてきた本隊と合流するため、明日あしたの朝まではそこで駐ちゅう在ざいするのだという。

　つまり……一晩の猶ゆう予よが生まれていた。

　怪け我がの治ち療りょうの後、シャルロッテに挨あい拶さつと説明、そして今後の保護を求めると、エンガディナ・ヌストルテ――ディナは警護の者を断り、一人、リキュールへと戻もどった。

　シャルロッテとの話が思いの外ほか長くなってしまい、時刻はすっかり夜になっていた。

　星空の下、アルコ・ホールはまるで祭りの気配。

　今まで溜たまっていた鬱うつ憤ぷんを吐はき出すかのように、大通りには無数の屋台が建ち並び、店員達が大声を張り上げる。そこに群れるのは包帯を巻いた男達。

　誰だれも彼もが己おのれの武勇伝を語っては笑い、語っては呑のんでいた。

　この街の人間はお祭り好きだ。だから多少の怪我など話のタネでしかない……らしい。

　石いし畳だたみの道と靴くつ底ぞこが奏でる雑ざつ踏とうのリズ

ムに、商人達のかけ声と人々の話し声、笑い声が幾いく重えにも重なり合って耳を埋うめ、炭火で焼かれる肉や湯気立つスープ、そして煙草たばこに酒に香こう水すい……そんな人々と、その営いとなみの匂においが鼻を占しめ、老ろう若にやく男なん女によの喜き怒ど哀あい楽らくの様々な表情が視界を彩いろどり、賑にぎやかさを作っている。

　これがリキュールという街なのだろう。歩いているだけで自分もまたこの街の、そして人々が作り出す日常という名のパズル、そのワンピースであるかのような、そんな気にさせてくれる……それが、嬉うれしいのだ。滲にじむように笑みが浮うかぶ。

　どこかで噂うわさを聞いたらしい人達が笑いながら声をかけてくる。

　ディナをエンガディナ・ヌストルテであり、そして、今回の騒そう動どうの原因たる存在だとわかっているのに……誰も彼もが、笑顔を向けてくる。そして、酒を奢おごろうとしたり、食事を奢ろうとしたり、ナンパしてきたり……中には、これからどこに住むんだい？　と訊きいてくる人までいた。

　ディナはその都度、驚おどろき、慌あわて、そして何より……疑問を抱いだく。

　何故、どうして……こんな大事件の原因なのに、誰も責めないのです？　と。

　すると彼らは決まって笑い、決まって同じ言葉を述べるのだ。

　━リキュールではよくあることさ。

　それが冗じよう談だんだというのは、さすがにわかる。でも本当かもしれない、そうも思えた。

　何故なら彼らはそれ以外の理由を言ってくれないのだ。

　よくあることだから、気にするな。そんなふうにしか……。

　ディナは人ひと混ごみをかき分け、アルコ・ホールを西から東へと歩いて行く。

　その先ではリキュールの解放を信じて待ち続けたという例の一座

の公演が無料で行われているのだという。酒すらタダだというが、喰くい物まではさすがに手配されていないらしく、大たい抵ていの見物客はアルコ・ホールで肴さかなを買ってから向かっているようだった。

　──しっかし、何で今年の一座はストリップじゃないんだ？　俺はさぁヌッちゃんのおっぱいが楽しみで楽しみで……。そりゃあの暖簾のれんみたいな胸当てだから楽しめるといえば楽しめるけど……なぁ？　──いや、ホラ、今年はテントじゃなくて、オープン会場だからじゃね？　──だから何でなんだよ……。──この騒動を共に戦った住民達への礼、そして足止めしてしまった旅人達への謝罪だとかなんだかで、全額議会持ちらしいからその関係だろ。──余計なことを。女の肌を見ることこそ男の最高の癒いやしだってのを理解してねぇな。……議員に女いたっけか？　──いねぇよ。というか、住民全員への慰い労ろうなんだから大人の男しか入れないストリップはまずいってことだろう。

　……やはり、街の東の外れ、一座の公演会場に彼はいるのだろうか。

　ディナは足を速める。けれどあまりに多い人混みはなかなか先へ進ませてはくれない。

　急ごうとして、つい人とぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさいなのです。……あの……？」

　白いコートにパーマをかけた髪かみ、薄うすいレンズの眼鏡めがねをかけた小こ柄がらなその男は、死体のような表情で何一つ反応はせず、青白い顔でトボトボとどこかへと歩いて行った。

　──あ、マドラーだ。何だアイツ、もう二日酔よいか？　それとも恨うらみから毒でも盛られたか？　──それがさ、議長室の秘密金庫が開けられてて、例のクソみたいな協約を結ぶ見返りに受け取った帝国軍からの賄わい賂ろが丸ごとなくなってたんだと。──わぁお。人間悪いことはできねぇな。──まったくだ。その金庫、本人と秘書しか開けられないよう厳重に保管してたらしいんだけど、まぁ、自じ業ごう自得だな。──あぁ、何となく犯人の目星がついた気もするが、多分気のせいだな！

　ディナは道中、安あん美び亭ていにも寄ろうとしたが、店はク

ローズのドアプレート。とはいえ明かりが点ついていたので窓から店内を覗のぞいてみると、カウンターを挟はさんで包帯を巻いた男が二人……グレーンとピンガが静かにグラスを傾かたむけているのが見えた。

　さすがに二人だけの世界そこに入っていくのは悪い気がして、ディナは先を急ぐことにした。

　……それに、二人の全裸すべてを見た後では、正直どんな顔をしていいかもわからない。

　人混みの中に異様に目立つ球体状のボディが見えてくる。そこはオリービーの花屋だ。

　その球体ボディの女性が何をしているのかと思えば、どうやら才能があるからスクールうちで世界を目指さない？　と店主のオリービーを勧かん誘ゆうしているようだ。

　オリービーが何とか断ろうとしていると、長なが柄え刀とうを肩かたに担かついだ小柄な少年が間に入る。髪色や顔付きからして、どうやら弟さんのようだ。

　彼がきっぱりと断ってみせると「また来るワ！」と捨て台詞ぜりふを吐き捨てていき、姉弟きようだいは二人して同じ顔で苦く笑しようしていた。

　そんな時、ガラスの砕くだける音がして大通りの隅すみで怒ど声せいが上がる。

　喧けん嘩かだ！　その声に長柄刀を持った少年が表情を厳しくし、人混みをかき分けていった。

「騒さわがしくて、忙いそがしい街……そう、まるでこれは……」

　ディナは大通りをなおも東へ。

　すると二メートルを優に超こえる三つ編み女性と手を繫つなぐ瘦やせた男を見つけた。

　どこかで見た気がしたと思ったら、あの踊おどり子隊出しゆつ陣じんの際にハンカチを嚙かんでいた男である。

　──今夜は寝ねかさないぞ、マイ・ハニー。──いいのかい？　アンタが大好きな一座、来てるんだよ？　──いいさ。気付いたんだ。一番大切なのは……ハニー、君だ。──まったくすぐこれだ。……軽いねぇ、軽い男だよ、アンタはさ。……顔がニヤけちまうよ。

　そんな二人を見ていると、何だかディナまで顔がニヤけてきてしまう。

　足が速まる。鼓こ動どうが高鳴る。

　そうして街を抜ぬければ見えてくる煌こう々こうと焚たかれる巨きよ大だいな焚き火。

　そしてその周りを見事に舞まう乙女おとめ達。ストリップ一座のはずだが、あの踊り子隊の衣い装しようを彼女らはまとい、可か憐れんで大だい胆たんな動きを見せ、男達の心を鷲わし摑づかみにしているようだ。

　特に最前列、特等席の二十数人の純じゆん朴ぼくそうな顔をした男達はまさに恍こう惚こつの表情である。

「ひょっとして私をお捜しかな。お姫ひめ様さま」

　軽かろやかな声が聞こえた。サシャだ。彼はディナの前で片かた膝ひざをついて頭こうべを垂れた。

「いえ……あ、いえというわけでもないのですが、その、あの……」

「わかってます。モルトなら、ほら、あそこですよ」

　サシャはニッコリと笑って会場となっている広場の片かた隅すみを指さした。

　そこに、彼はいた。

　長なが椅い子すの客席、その真ん中で長柄刀を脇わきに置き、空カラのグラスをションボリ顔で持ちながら……そして、リッツに膝ひざ枕まくらをしながら。

　会場を見み渡わたすと即そく席せきのカウンターバーが作られており、そこではクラッツが酒を無数のグラスに注いで人々に振ふる

舞っていた。

　ディナは礼を言うと、先にクラッツの所へ向かおうとするのだが、サシャが呼び止める。

「姫、一つだけ私から。……本当に、街に残ったっていいと思いますよ」

「どういう……ことです？」

「この街は人と物の流れが多く、油断も隙すきもない。けれど、あなたが見たように、いざという時の謎なぞの結束力というか……ノリの良さは半はん端ぱではない。街のため、住民のため、楽しみのためとなれば、ガサツな彼らは笑いながら自ら危険に飛び込む。そんな人間ばかりだ。……うんざりすることも多いが、それ以上に……孤こ独どくな身にはこの上ない」

　サシャの微笑ほほえみは、同情のそれに見える。けれど、何かが違ちがう。

「もし、隠かくれ住むというのならいい手段を教えましょう。案外盲もう点てんだっていう、ね」

「……そのお気持ちだけ、いただくのです」

「あなたはお姫様である前に、女の子なんだ。ちょっとした我わが儘ままぐらい罰ばちは当たらない。赦ゆるされる。少なくとも私はそう信じている。……それだけは、覚えていてくださいね」

　その時、ディナは気付いた。サシャの微笑みは同情ではなく……理解なのだと。

　何故なぜ、どうして？　まるであなたにもそんな経験があるかのような……？　そんな疑問を投げかける前に、サシャは執しつ事じのようにクラッツへの道を手で指し示し、頭を下げた。

　ディナはクラッツのもとへ行くとお任せで注文。何故かブランデーが二杯出てきた。

「足りなくなったらいつでも言ってね。優先的に注いであげるわ」

　そして弾はじけるような笑え顔がおにウィンク一つ。

　ディナは礼を言って、自分が雇やとっている何でも屋モルトのもとへ。

「モルト殿どの、お酒、いります？」

「お？　いいねぇ、救世主の登場だ」

　やっぱりリッツの眠ねむりを邪じゃ魔ましないようにと、モルトは酒がなくなっても席を立てなかったのだろう。そして、クラッツはそれに気付いていたのだろう。だから……二杯なのだ。

　ディナは少し緊きん張ちようしながらも、モルトのすぐ隣となりに腰こし掛かけ、そっと酒を口にする。

　話したいことがいっぱいあったはずなのに、いざこうしてみると言葉が出てこない。

　だから酒を飲む。二人の沈ちん黙もくを埋めてくれる魔ま法ほうの水。

　軽やかな楽器の音色に合わせ、炎ほのおの周りを乙女達が舞い踊る。何とも幻げん想そう的……。

　ゆっくりと酔いが回ってくるのをディナは感じた。

　……これなら、言えるかもしれない。

「あ、あの、モルト殿。どうして……指輪、受け取ってくれないのです？」

　報ほう酬しゆうとして渡わたしたはずの指輪は、ディナがシャルロッテと会う際に返されていた。

　理由は言わず、モルトはただ微笑んでいただけだった。

「これで受け取ったら契けい約やく違い反はんだ。……覚えてるだろう。君をロテ国の首都まで護衛したら、っていう契約だった。でも、君はすでに身の安全を確保し、シャルロッテ王おう妃ひと共に明日あした、この街を出る。俺の任務不達成は確実だ。受け取れないよ」

「ですが、それでは……その……タダ働きというか……」

「言ったろ。俺は入場料ストリップと酒のために働いていたクズだぜ？　それが結果としてタダで見られてタダで飲める……なら、タダ働きじゃない。十分さ。それに……」

　モルトは膝ひざの上で寝ね息いきを立てているリッツを優やさしげに見つめ、頭を撫なでた。

「リッツがさ、早く家賃払はらえって。明日からまた仕事探しだ。忙しくて、首都までついていく余よ裕ゆうもない」

　まるで天使のような寝顔を見せているリッツ。

　けれど……ちょっとだけ、今のディナにはそれが小こ悪あく魔まの寝顔に見えてしまう。

　モルトの言葉は少しおかしい。きっとそれは本人もわかっているだろう。

　しかしそれがどんな理由であれ、彼は指輪を受け取る気がないようだった。

「ごめんな、指輪。勝手に嵌はめて、俺の女だなんて言っちゃって」

　ディナは首を振った。あれは開戦の口火を切るのに必要なことだったのだ。

　何より彼は、街のため……そして、ディナのためにあの場に来てくれたのだ。

　最初はお金のためだったのだろう。けれど、彼は……少なくとも、あの時の彼は……。

　ディナは気合いを入れる意味でブランデーを一気に呷あおる。今度は倒たおれない。

　酒が回るにつれて、二人の何でも屋が口にした言葉が、ふと、脳のう裏りを過よぎる。

　──君のしたいようにすればいい。

　──あなたはお姫様である前に、女の子なんだ。ちょっとした我が

儘ぐらい罰は当たらない。赦される。

「……モルト殿、一つ、我が儘を言っても？」

「もちろん」

　鼓動が高鳴る。痛いぐらい。でも……。

　ディナは、モルトに懇こん願がんの眼まな差ざしを向けた。

「せめて、今夜だけは……あなたの女でいさせて欲しいのです」

　モルトの女、そして……リキュールの一員に、今夜だけでも。

　モルトはそっとディナの肩を抱だいた。

「今夜だけでなくてもいい。ずっとだって、構わないさ」

　……それは無理だ。少なくともディナには耐たえられない。

　たとえ女じよ帝ていの座に興味はないと公言したとて、存在そのものが抵てい抗こう勢力にとっての希望になる以上、バクター家支配下の帝てい国こくは必ずこの街に刺し客かくを放ってくることだろう。

　そうでなくとも、国を取り返さんとする母の臣下達がエンガディナ・ヌストルテを担ぐために現れるのは間違いなかった。

　そんなゴタゴタにまた街を、そしてモルトを巻き込みたくはなかった。

　だって、大好きだから。大切だから。だから──。

　国取りが成功しても失敗しても、自分はここでは暮らしてはいけないのだ。

　失敗すれば刺客が来る、成功すれば女帝として責務を負う。

　だから、無理。

　だから……今夜だけ。

　そんなディナのしたいこと。

　女の子の精せいーいつ杯ぱいの我が儘だった。

　肩を抱くモルトの手に少しだけ、力が入る。

　見つめ合えば、彼は全すべてを察してくれているのだとわかった。

「いつだって帰ってくればいい。俺は、そしてこの街は……必ず君を受け入れる」

　優やさしい言葉。

　帰れる場所がある。

　たとえそれが無理だとわかっていても……その言葉、その存在はどれだけ心を穏おだやかにさせてくれることか。

　モルトの膝の上で寝息を立てる可愛かわいらしい少女の瞼まぶたの上に、ディナはそっと手の平を載のせ……そして、モルトにその唇くちびるを預けた。

　酒と踊りによる祭りのような一夜が、更ふけていく。

　誰だれも彼もが、何もかもが、この数日の全てが、まるで祭りの出し物イベントだったのではないか。

　そんなおかしな錯さつ覚かくを起こす、リキュールの夜だった。

〈了〉



# あとがき

　みなさん、どうも、アサウラという者です。

　初めましての方、多いかもしれませんね。ではまず、軽く自己紹しよう介かいでも。

　私は普ふ段だん、街を歩く犬にハァハァしたり、幸せそうなカップルに舌打ちしたり、汗あせまみれの男達と共にサバイバルゲームで走り回ったり、半額弁当を買うために夜の街を駆かけ抜ぬけたり、映画を見て、本を読んで、ゲームしたり、非電源アナログゲームしたり、海外のメタボなオジ様が銃じゆうを撃うつ動画を探し出してはムフゥ♡と鼻息荒あらくしたり、周りの目が気になってシャレオツな店に入るのを躊躇ためらったり、たまに外国へ銃を撃ちに行ったり……と、まぁ没ぼつ個こ性せいで健全な北海道人（現在東京在住）です。

　さて、こんな流れなんですが、本作について触ふれてみたいと思います。

　本作は『ファンタジアBeyond』というＷＥＢサイトにて連れん載さいさせていただいております『アルコ・ホール三番街の何でも屋』（現在タイトルは『英えい雄ゆう都市のバカども　～アルコ・ホール三番街の何でも屋～』に変へん更こうされております）という作品の書き下ろし長ちよう篇へんとなっております。

　そもそも本作のお話をいただいた際には『サイトは隔かく月げつ更こう新しん、つまり二ヶ月に一話で』ということでしたので、そいつはのんびり書けるぞ！　と余よ裕ゆうぶっこいていたんですが、気が付くと『やっぱり毎月更こう新しんします』と言われ、果てには『ではそろそろ本に。えぇ、書き下ろしので』と極めて滑なめらかかつ怒ど濤とうの展開を経た結果、本作は生まれました。もちろん、書かせて頂けることは大変ありがたいことなんですけどね！

　のんべんだらりとやっていく私の思おも惑わくが、街頭で政治家が宣のたまい散らす公約の如ごときモロさで崩くずれ去ったのは、

来年の今ぐらいにはきっと良い思い出になっていることでしょう。

　では、そろそろ謝辞の方をば。

　素晴らしいイラストを描かいていただきました、だぶ竜りゆうさん、本当にありがとうございます。どのキャラクター達も素晴らしくて大好きなのですが、一番のお気に入りは見た瞬しゆん間かんに「おぉ、これは!!」となったモルトです。最高です。

　担当編集の萩はぎ原わらさん、そして途と中ちゆうからサブ担当として入られて、原げん稿こうもイラストも完成した最後の最後になってページ数の計算を間ま違ちがえ、このままでは一六ページに及およぶ空白ができてしまうという前ぜん人じん未み踏とうの荒あら業わざをやってのけると、「もう本の仕様は変えられない段階でして、原稿も校正が終わっている以上大きく手を入れるのは……ですので、このままでいくしか……広告を六作品ぐらい入れるとかして……」と、その手があったかと全米が「オゥー、ファンタスティックッ！」と声を上げんばかりの狂きよう気きの沙さ汰たを口にし出した時に、富ふ士じ見み書しよ房ぼうもついにここまでの逸いつ材ざいを発はつ掘くつしたかと驚きよう愕がくさせていただいたものの、それで冒ぼう頭とうにある簡易マップを追加できたりしたので……良かったんだか良くなかったんだかよくわからない仕事を成し遂とげられ、あとがきのネタをダイナミックに供給してくださったファンタジスタ桑くわ水ず流るさん……Beyondにお誘さそいいただきました上、本作を出させていただき、まことにありがとうございます。あえて今の時代にオーソドックス（？）なファンタジーを書くことができて、楽しかったです。

　また校正さんや印刷所の皆みな様さまに、書店員の皆様……本書に関わってくださった全ての方々にも深く感謝を。

　そして、最後になりましたが、この本を最後までお読みいただきました読者の皆みな々みな様さま、本当にありがとうございます！

　皆様に少しでも本作を楽しんで頂けたのでしたら、これほど嬉うれしいことはありません。もしよろしければ今後とも、どうぞ末長いお付き合いをお願いいたします。

　ではでは、次があることを祈いのりつつこの辺で。それではまた！

アサウラ

英えい雄ゆう都と市しのバカども

～王おう女じよと封ふう鎖さされた英えい雄ゆう都と市し～

アサウラ

平成27年11月20日　発行

発行者　三坂泰二

発行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8521（カスタマーサポート）

http://www.kadokawa.co.jp/



本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

富士見ファンタジア文庫『英雄都市のバカども　～王女と封鎖された英雄都市～』

平成27年11月25日初版発行